

福岡市

有田・小田部

第4集

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第96集

1983

福岡市教育委員会

有田・小田部

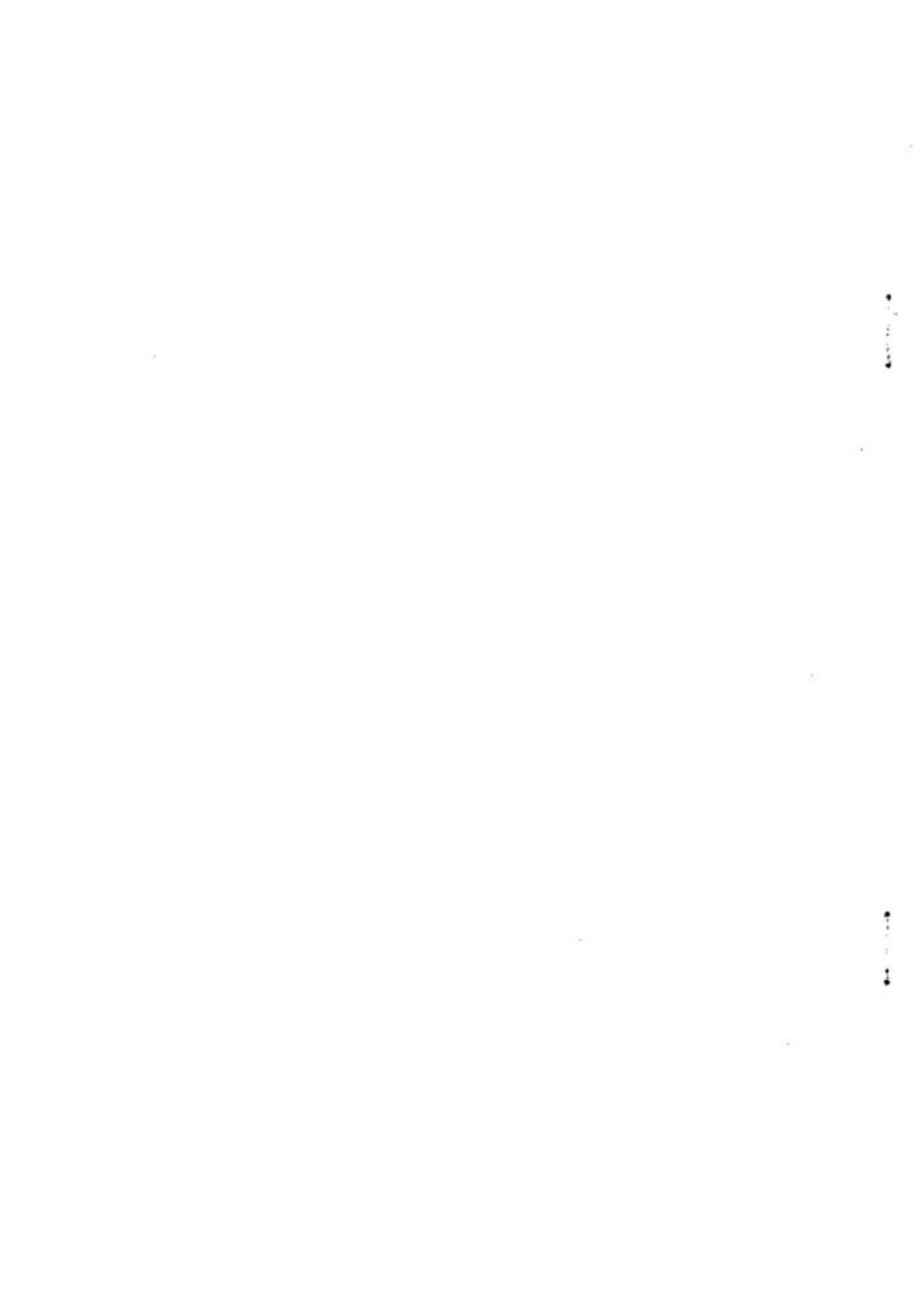
〈福岡市早良区有田、小田部における遺跡群の発掘調査報告〉

第 4 集



昭和58年3月

福岡市教育委員会



序 文

有田・小田部の丘陵一帯は原始・古代・中世にわたる濃密度な埋蔵文化財の宝庫として、広く学会に知られている地帶であります。

学術的メスが当地にはじめて加えられたのが、昭和41年～43年の有田地区区画整理事業に伴った、九州大学考古学研究室の調査であります。本年度で第61次の発掘調査を數えます。検出された遺構・遺物は学術的資料として高い評価を受けているところです。

さて、今回の報告書は主に古墳時代初期集落跡と中世末期、言い換えれば戦国時代の終り頃の濠をもった館跡の報告を内容とするものです。中世の有田・小田部は良好な立地環境が故に支配権力の抗争の場でもありました。館跡は戦国武将の夢の一端が窺われ、興味深いものと言えましょう。

このように、有田・小田部の地中に眠る人々の足跡は徐々にではありますが解明されつつあります。これもひとえに、同地区のみなさまの御協力、御理解の賜であります。記して、心より深く感謝申し上げますと共に、今後なお一層の御協力、御鞭撻をいただきん事を切にお願い申し上げます。

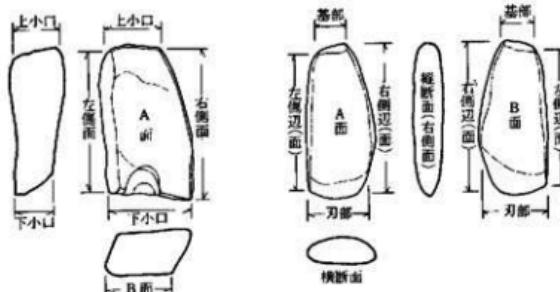
昭和58年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 西津茂美

例　　言

- (1) 本書は福岡市早良区有田・小田部地域内における住宅開発に伴い、福岡市教育委員会が国庫補助を得て実施した緊急発掘調査報告書である。
- (2) 本書には昭和54年度事業の第19次、第32次の2ヶ所、昭和55年度事業の第36～38次、第40～41次の5ヶ所、昭和56年度事業の第42次、第45次調査迄の2ヶ所、計9ヶ所の調査報告を収録するものである。
- (3) 本書では、有田・小田部台地上の遺跡を一連のものと見做し、広義の有田遺跡と呼称する。
- (4) 本書に収録した発掘調査は井沢洋一、山崎龍雄が担当した。
- (5) 本書掲載の遺構写真の撮影は井沢、山崎が行ない、遺物写真の撮影は山崎、宮嶋成昭氏が行なった。
- (6) 本書掲載の陶磁器については、一部を九州陶磁資料館の大橋康二氏に御教授を得た。
- (7) 本書掲載の遺構の実測は主に井沢、山崎、常松幹雄、児玉健一郎、石橋千恵、渡辺武子、清原百合子が行なった。遺物の実測については以下の通りである。第19次・中世雜器一井沢、住居跡出土遺物一谷沢仁、溝出土瓦一山崎、谷沢、辻哲也、第30次一井沢、第32次一井沢、児玉、谷沢、第36～38次、第40～41次一井沢、第42次、45次一松尾正直、山崎。整図は遺構を原秋代、平井彩子、落合弥生が行ない、遺物を井沢、山崎が行なった。その他、実測、整図にあたっては、池田季弘、花山早苗の協力を得た。又、拓本は花山、堀内都子、青柳米子、久保順子が担当した。
- (8) 本書の執筆は以下の通りである。第Ⅰ～Ⅲ章第19次、第32次、第36～38次、第40次～41次一井沢、第42、第45次(遺構・遺物・小結)一山崎、第42次(調査の概要、小結)、第45次(調査の概要)一井沢。
- (9) 本文中で使用する石器の部分名稱は下の図のようとする。
- (10) 本書の編集は井沢、山崎、原が行なった。



本文目次

本文頁

第Ⅰ章 はじめに.....	1
1. 調査に至る経過.....	1
2. 発掘調査の組織.....	2
第Ⅱ章 遺跡の立地と調査の概要.....	4
第Ⅲ章 調査経過.....	12
1. 第19次調査.....	12
調査の概要.....	12
検出の遺構.....	15
出土遺物.....	18
小 結.....	55
2. 第32次調査.....	59
調査の概要.....	59
検出遺構.....	61
出土遺物.....	67
小 結.....	98
3. 第36次調査.....	103
調査の概要.....	103
検出遺構.....	103
出土遺物.....	111
小 結.....	120
4. 第37次調査.....	122
調査の概要.....	122
検出遺構.....	122
出土遺物.....	124
小 結.....	124
5. 第38次調査.....	126
調査の概要.....	126
検出遺構.....	128
出土遺物.....	129
小 結.....	129
6. 第40次調査.....	130

調査の概要	130
検出遺構	130
出土遺物	135
小 結	147
7. 第41次調査	149
調査の概要	149
検出遺構	149
出土遺物	154
小 結	164
8. 第42次調査	166
調査の概要	166
検出遺構	166
出土遺物	171
小 結	178
9. 第45次調査	179
調査の概要	179
検出遺構	180
出土遺物	183
小 結	184

挿 図 目 次

Fig. 1 有田・小田部周辺の遺跡	(1/25000)	3
Fig. 2 有田・小田部台地と発掘調査地点	(1/5000)	5, 6
Fig. 3 有田・小田部台地の旧地形図	(1/5000)	7, 8
Fig. 4 第19次調査位置図	(1/2500)	12
Fig. 5 遺構配置図	(1/100)	13
Fig. 6 東壁、南壁、溝土層図	(1/60)	14
Fig. 7 住居跡	(1/60)	16
Fig. 8 井戸跡	(1/40)	17
Fig. 9 表土、包含層出土遺物	(1/3)	19
Fig. 10 集石遺構出土遺物	(1/3)	21
Fig. 11 集石遺構出土遺物	(1/3)	22
Fig. 12 集石遺構、表土出土遺物(石器)	(1/3)	23

Fig. 13 住居跡出土遺物	(1/3)	25
Fig. 14 住居跡出土遺物	(1/3)	26
Fig. 15 2号溝出土遺物	(1/3)	29
Fig. 16 2号溝出土遺物	(1/3)	30
Fig. 17 2号溝出土遺物	(1/3)	33
Fig. 18 2号溝出土遺物(石器、鐵器)	(1/3)	35
Fig. 19 2号溝出土遺物(板碑)	(1/3)	36
Fig. 20 2号溝出土遺物(宝慶印塔)	(1/3)	37
Fig. 21 2号溝出土遺物(石塔片)	(1/3)	38
Fig. 22 2号溝出土遺物(軒丸瓦)	(1/3)	40
Fig. 23 2号溝出土遺物(軒平瓦)	(1/3)	41
Fig. 24 2号溝出土遺物(平瓦)	(1/4)	43
Fig. 25 2号溝出土遺物(平瓦)	(1/4)	44
Fig. 26 2号溝出土遺物(丸瓦)	(1/4)	46
Fig. 27 2号溝出土遺物(丸瓦)	(1/4)	47
Fig. 28 2号溝出土遺物(瓦拓本)	(1/4)	48
Fig. 29 2号溝出土遺物(鬼瓦)	(1/3)	50
Fig. 30 2号溝出土遺物(鬼瓦)	(1/3)	51
Fig. 31 2号溝出土遺物(瓦埠)	(1/4)	52
Fig. 32 2号溝出土遺物(道具瓦)	(1/4)	53
Fig. 33 16~17世紀の瓦	(1/60), (1/30)	58
Fig. 34 第32次調査地位置図	(1/2500)	59
Fig. 35 造構配置図	(1/100)	60
Fig. 36 住居跡、1号・2号土壤	(1/30), (1/60)	62
Fig. 37 4号土壤	(1/30)	63
Fig. 38 井戸跡	(1/40)	64
Fig. 39 挖立柱建物	(1/40)	65
Fig. 40 1号・2号溝土層図	(1/60)	66
Fig. 41 表土出土遺物	(1/3)	67
Fig. 42 住居跡出土遺物	(1/3)	68
Fig. 43 住居跡出土遺物	(1/3)	70
Fig. 44 1号・2号土壤, Pit. 9 18出土遺物	(1/3)	71
Fig. 45 井戸跡出土遺物	(1/3)	72

Fig. 46 井戸跡出土遺物（土師皿）	(1/3)	74
Fig. 47 井戸跡出土遺物（土師杯）	(1/3)	75
Fig. 48 井戸跡出土遺物（瓦 器）	(1/3)	77
Fig. 49 井戸跡出土遺物（白磁碗）	(1/3)	78
Fig. 50 井戸跡出土遺物（白磁碗）	(1/3)	80
Fig. 51 井戸跡出土遺物（白磁皿、青白磁合子）	(1/3)	82
Fig. 52 井戸跡出土遺物（青磁碗）	(1/3)	83
Fig. 53 井戸跡出土遺物（青磁碗、皿）	(1/3)	85
Fig. 54 井戸跡出土遺物（陶磁器、壺、瓶、鉢）	(1/3)	87
Fig. 55 井戸跡出土遺物（陶器、須恵質土器）	(1/3)	88
Fig. 56 井戸跡出土遺物（陶器土師質土器）	(1/3)	90
Fig. 57 井戸跡出土遺物（滑石製品）	(1/3)	91
Fig. 58 井戸跡出土遺物（石 器）	(1/3)	93
Fig. 59 井戸跡出土遺物（石 器）	(1/3)	94
Fig. 60 1号溝出土遺物	(1/3)	96
Fig. 61 2号溝出土遺物	(1/3)	97
Fig. 62 3号溝出土遺物	(1/3)	98
Fig. 63 井戸出土土師皿拓本	(1/3)	101
Fig. 64 第36次調査地位置図	(1/2500)	103
Fig. 65 遺構配置図	(1/100)	104
Fig. 66 1・2号甕棺墓	(1/30)	105
Fig. 67 2・4号土壙	(1/30)	106
Fig. 68 3・5号土壙, Pit. 6 31	(1/30), (1/20)	107
Fig. 69 1号溝土層図	(1/40)	108
Fig. 70 1号槽状遺構	(1/80)	110
Fig. 71 表土出土遺物	(1/2, 1/3)	111
Fig. 72 甕棺実測図	(1/10)	113
Fig. 73 玉実測図	(1/1)	114
Fig. 74 1号溝、2号上塙出土遺物	(1/3)	115
Fig. 75 Pit出土遺物	(1/3)	117
Fig. 76 1号甕棺, Pit出土遺物（板碑）	(1/3)	119
Fig. 77 第36次・第46次調査中世遺構配置図	(1/300)	121
Fig. 78 第37次調査地位置図	(1/2500)	122

Fig. 79	遺構配置図	(1/100)	123
Fig. 80	出土遺物	(1/3)	123
Fig. 81	第25次・第37次遺構配置図	(1/300)	125
Fig. 82	第38次調査現況図	(1/450)	126
Fig. 83	遺構配置図、及び上層図	(1/100) (1/80)	127
Fig. 84	試掘調査土層略測図		128
Fig. 85	出土遺物	(1/3)	128
Fig. 86	調査区配置図	(1/400)	130
Fig. 87	第40次遺構配置図	(1/150)	131
Fig. 88	漆状遺構土層図、及び断面図	(1/80)	132
Fig. 89	掘立柱建物	(1/60)	134
Fig. 90	1・2・3号土壤墓	(1/30)	135
Fig. 91	1号漆状遺構出土遺物	(1/30)	136
Fig. 92	1号漆状遺構出土遺物	(1/3)	138
Fig. 93	1号漆状遺構出土遺物	(1/3)	141
Fig. 94	1号漆状遺構出土遺物（石器）	(1/3)	142
Fig. 95	1号漆状遺構出土遺物（石器）	(1/3)	144
Fig. 96	2号漆状遺構出土遺物	(1/3)	145
Fig. 97	1号土壤出土遺物（小刀）	(1/3)	146
Fig. 98	調査区配置図	(1/400)	149
Fig. 99	第41次遺構配置図	(1/100)	150
Fig. 100	1・2号土壤	(1/30)	151
Fig. 101	井戸状遺構	(1/40)	152
Fig. 102	2号・3号溝、及び土層図	(1/60)	153
Fig. 103	1・2号土壤出土遺物	(1/3)	155
Fig. 104	1号溝出土遺物	(1/3)	157
Fig. 105	1号溝出土遺物	(1/4)	158
Fig. 106	1号溝出土遺物	(1/3)	159
Fig. 107	2号溝出土遺物	(1/3)	162
Fig. 108	2号溝出土遺物	(1/3)	163
Fig. 109	第42次調査地位置図	(1/2500)	166
Fig. 110	遺構配置図	(1/100)	167
Fig. 111	1・2号溝、土層図	(1/60)	169

Fig. 112 1号掘立柱建物	(1/80)	170
Fig. 113 Pit. 47, 60	(1/20)	170
Fig. 114 表土、Pit内出土遺物	(1/3, 1/4)	172
Fig. 115 Pit. 47, 60内出土遺物	(1/4)	173
Fig. 116 表土出土遺物（石器、鐵器）	(1/3)	174
Fig. 117 土壌出土遺物	(1/3)	175
Fig. 118 1号溝出土遺物	(1/3)	176
Fig. 119 第45次調査地現況図	(1/400)	179
Fig. 120 1・2号溝土層図	(1/60)	178
Fig. 121 造構配置図	(1/60)	179
Fig. 122 井戸跡	(1/40)	180
Fig. 123 出土遺物	(1/3)	181

図版目次

- PL. 1 有田・小田部周辺航空写真（昭和50年撮影）
- PL. 2 有田・小田部周辺航空写真（昭和21年米軍撮影）
- PL. 3 (1) 第19次調査南側遺構 (2) 集石群出土状態（北から）
- PL. 4 (1) 住居跡（北から） (2) 住居跡床面遺物出土状態（西から）
- PL. 5 (1) 集石群内遺物出土状態 (2) 住居跡遺物出土状態
- (3) 住居跡遺物出土状態 (4) 住居跡遺物出土状態
- PL. 6 (1) 井戸跡（北から） (2) 1号溝北側部分（南から）
- PL. 7 (1) 1号溝南側部分（北から） (2) 1号溝上面礫出土状態（西から）
- PL. 8 (1) 2号溝（西から） (2) 2号溝（東から）
- PL. 9 (1) 2号溝隅角部分（南から） (2) 2号溝遺物出土状態（西から）
- PL. 10 (1) 2号溝遺物出土状態（南から） (2) 3・4号溝（西から）
- PL. 11 (1) 2号溝西側土層状態 (2) 1号溝南側土層状態 (3) 3・4号溝土層状態
- PL. 12 表土、集石遺構出土遺物
- PL. 13 表土、集石遺構出土遺物
- PL. 14 住居跡出土遺物
- PL. 15 2号溝出土遺物
- PL. 16 2号溝出土遺物
- PL. 17 2号溝出土遺物

- PL. 18 2号溝出土遺物
- PL. 19 2号溝出土遺物
- PL. 20 (1) 第32次調査全景（西から） (2) 第32次調査東側遺構（北から）
- PL. 21 (1) 住居跡（西から） (2) 住居跡内P I, P II（北から）
- PL. 22 (1) 1号土壙（北から） (2) 2号土壙（西から）
- PL. 23 (1) 4号土壙（西から） (2) 掘立柱建物（北から）
- PL. 24 (1) 井戸跡（南から） (2) 井戸内壁、遺物出土状態
- PL. 25 (1) 井戸縦断面（南北方向） (2) 遺物出土状態 (3) 遺物出土状態
- PL. 26 (1) 1号溝（北から） (2) 2・3号溝（西から）
- PL. 27 住居跡出土遺物
- PL. 28 井戸出土遺物
- PL. 29 井戸出土遺物
- PL. 30 井戸出土遺物
- PL. 31 井戸出土遺物
- PL. 32 井戸出土遺物
- PL. 33 井戸出戸遺物
- PL. 34 井戸出土遺物
- PL. 35 出土遺物
- PL. 36 (1) 第36次調査全景（南から） (2) 1・2号櫛列（南から）
- PL. 37 (1) 1号櫛列付属建物（東から） (2) 1・2号甕棺
- PL. 38 (1) 1号甕棺（北から） (2) 1号甕棺内板碑出土状態（南から）
- PL. 39 (1) 2号甕棺（北から） (2) 2号甕棺埋置状態（西から）
- PL. 40 (1) 2号土壙（東から） (2) 2号土壙遺物出土状態 (3) 土層状態（南北方向）
- PL. 41 (1) 3号土壙（南から） (2) 5号土壙（西から）
- PL. 42 (1) Pit. 6の状態（南から） (2) Pit. 31の状態（北から） (3) Pit. 1の状態 (4) Pit. 32の状態（西から）
- PL. 43 (1) 1・2号溝（東から） (2) 1号溝西側土層 (3) 1号溝中央部土層
- PL. 44 出土遺物
- PL. 45 1号甕棺（1, 2), 2号甕棺（3, 4)
- PL. 46 Pit内出土遺物
- PL. 47 (1) 第37次調査全景（東から） (2) 遺構面東側（東から）
- PL. 48 (1) 第38次調査全景（東から） (2) 出土遺物
- PL. 49 (1) 第40次調査I区全景（東から） (2) 1号濠状遺構土層状態（東から）
- PL. 50 (1) 1号濠状遺構（東から） (2) 1号濠状遺構先端部（西から） (3)(4) 1号濠状遺構先端部遺物出土状態

- PL. 51 (1) 1号土壙墓（東から） (2) 1号土壙墓内小刀出土状態（東から）
 PL. 52 (1) 2・3号土壙墓（西から） (2) 捜立柱建物（南から）
 PL. 53 (1) 第40次調査Ⅱ区全景（西から） (2) 2号濠状遺構（南から）
 PL. 54 1号濠出土遺物
 PL. 55 1号濠出土遺物
 PL. 56 出土遺物
 PL. 57 (1) 第41次調査Ⅰ区全景（北から） (2) 第41次調査Ⅰ区全景（西から）
 PL. 58 (1) 1号溝南北側隅角（西から） (2) 1号溝南北方向（西から）
 PL. 59 (1) 井戸状遺構（西から） (2) 1号土壙（北から）
 PL. 60 (1) 第41次調査Ⅱ区全景（東から） (2) 2号溝（西から）
 PL. 61 (1) 1号溝土層Ⅱ (2) 1号溝土層Ⅲ
 (3) 3号溝上層 (4) 3号溝上層
 PL. 62 出土遺物
 PL. 63 出土遺物
 PL. 64 (1) 第42次調査全景（南から） (2) 1号溝（南から）
 (3) 1号溝陸橋部分
 PL. 65 (1) 1号掘立柱建物（北から） (2) 2号溝試掘状態
 PL. 66 (1) Pit47（西から） (2) Pit60（西から）
 PL. 67 (1) 1号溝土層Ⅰ (2) 1号溝土層Ⅱ
 (3) 1号溝土層Ⅲ
 PL. 68 出土遺物
 PL. 69 出土遺物
 PL. 70 (1) 第45次調査全景（北から） (2) 1号溝北側土層（南から）
 (3) 1・2号溝南北側土層（北から）
 PL. 71 (1) 井戸跡（西から） (2) 出土遺物

表 目 次

Tab. 1 有田・小田部発掘調査一覧表	10, 11
Tab. 2 片戸出土 土師器皿・杯・瓦器統計測表	102

付 図

付図 1 有田・小田部地区調査地点配置図 No. IV (1/1,000)

付図 2 第18・29・32・55・56調査地点遺構配置図 (1/200)

第一章 はじめに

1. 調査に至る経過

有田遺跡の位置する福岡市早良区有田・小田部の台地は福岡市街の西への伸長と共に、農村地帯から住宅地域へと急速な変貌をとげている。昭和41年～43年の区画整理時には、九州大学考古学研究室によって予備調査、第1・2次の発掘調査が実施されており、その後の調査の指針となっている。近年の著しい住宅化に対処して、福岡市教育委員会は昭和50年度から国庫補助を得て、鋭意、有田遺跡の記録保存に努めている。近年、関係各課との協議、連絡も密となり、或いは地元の協力も充分に得られ、現在迄の踏査、試掘件数は約200件に達している。その内、発掘調査は昭和56年度を含めて、61ヶ所の発掘調査件数を数えている。

今年度も前年度に引き続き、専用住宅の新・改築の「確認申請」、或いは「開発申請」によって検出した遺跡の内、緊急性の高いものから順次、福岡市教育委員会が昭和50年度の国庫補助事業として発掘調査を実施した。尚、報告書については、昭和54年度事業の第19次、第32次、昭和55年度事業の第36～38次、第40次、第41次、昭和56年度の第42次、第45次迄の計9ヶ所を報告する。

昭和54年度発掘調査地（頭の数字は調査順位を示す）

1 第19次 福岡市早良区有田1丁目20-9	面積136m ²	申請者	江藤 一己
13 第32次 福岡市早良区有田1丁目29-9	面積237m ²	申請者	青柳喜代太

昭和55年度発掘調査地

4 第36次 福岡市早良区小田部5丁目143	面積247m ²	申請者	井上 恒
5 第37次 福岡市早良区小田部1丁目237-3	面積347m ²	申請者	古館 雄
6 第38次 福岡市早良区小田部1丁目198	面積430m ²	申請者	日野 佳弘
8 第40次 福岡市早良区有田1丁目26-2	面積376m ²	申請者	坂口 崇一
9 第41次 福岡市早良区小田部3丁目307	面積325m ²	申請者	増田 吉久

昭和56年度発掘調査地

1 第42次 福岡市早良区有田2丁目85	面積150m ²	申請者	古賀 龍雄
2 第43次 福岡市早良区有田2丁目7-88	面積403m ²	申請者	蒲地 茂尚
3 第44次 福岡市早良区有田2丁目14-9	面積1,028m ²	申請者	坂口 英治
4 第45次 福岡市早良区有田2丁目22-15	面積111m ²	申請者	森 朝充
5 第46次 福岡市早良区小田部5丁目143-1	面積264m ²	申請者	安恒 秀生
6 第47次 福岡市早良区有田1丁目28-7-8	面積372m ²	申請者	坂口 武登
7 第48次 福岡市早良区小田部2丁目140	面積600m ²	申請者	毛利 清海

8	第49次	福岡市早良区小田部1丁目20-21	面積655m ²	申請者	高野 勝郎
9	第50次	福岡市早良区小田部3丁目6-2-11-2	面積182m ²	申請者	早川 茂人
10	第51次	福岡市早良区有田1丁目23-6	面積314m ²	申請者	毛利 俊武
11	第52次	福岡市早良区小田部2丁目110-2	面積561m ²	申請者	毛利 四郎
12	第53次	福岡市早良区有田2丁目28-3-28-4	面積417m ²	申請者	坂口 義助
13	第54次	福岡市早良区有田2丁目16-1	面積1,224m ²	申請者	西 応 寺
14	第55次	福岡市早良区有田1丁目33-3	面積317m ²	申請者	大賀 清美
15	第56次	福岡市早良区有田1丁目32-9	面積513m ²	申請者	尾崎 圭一
16	第57次	福岡市早良区有田1丁目241-2	面積275m ²	申請者	添田 トヨ
17	第58次	福岡市早良区南庄3丁目185-186	面積333m ²	申請者	山下 実
19	第60次	福岡市早良区小田部3丁目178-2	面積 26m ²	申請者	伊佐茂太郎
20	第61次	福岡市早良区有田2丁目21-2	面積187m ²	申請者	倉園 侃

※第59次は昭和56年度の公事事業である。

2. 発掘調査の組織

〈第19次、第32次調査〉

—有田・小田部 第1集参照—

〈第36～41次調査〉

—有田・小田部 第2集参照—

〈第42～61次調査〉

調査主体 福岡市教育委員会

調査担当 福岡市教育委員会文化部文化課埋蔵文化財第2係

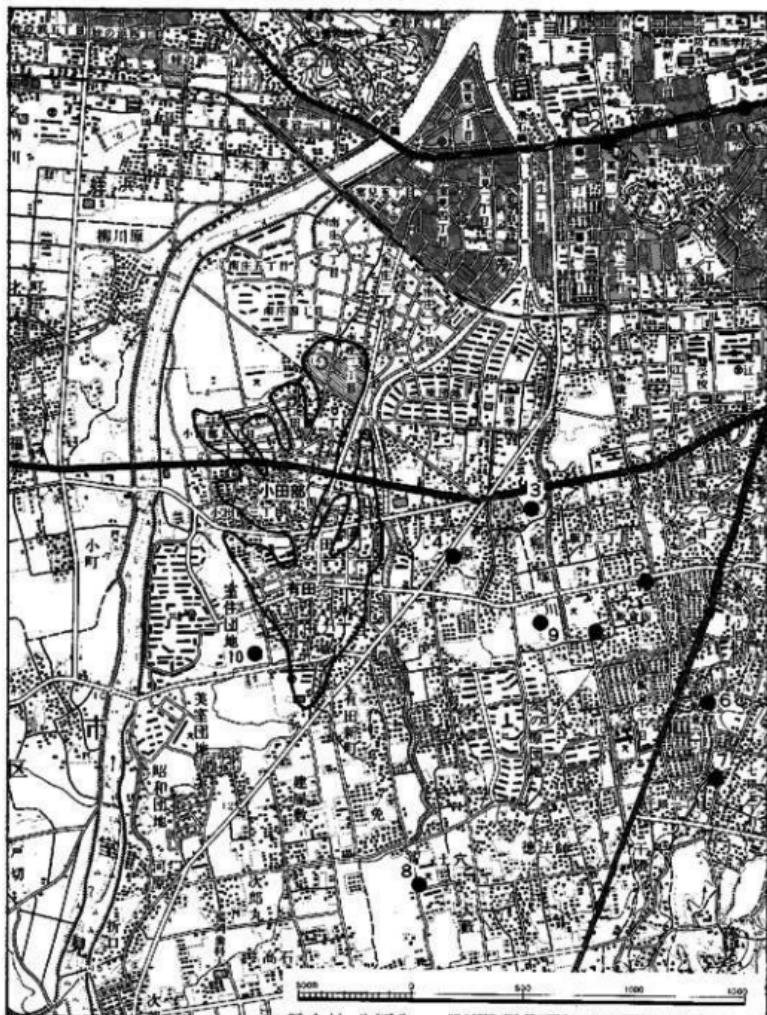
庶務担当 関島洋一

調査担当 井沢洋一、山崎龍雄、杉山富雄

調査協力者 〈発掘調査に際して〉 松尾和雄、岩城庄助、山下敏、結城茂巳、高浜謙一
 池田孝弘、山口勝己、安岡洋二、安達昌利、前田次郎、松井フユ子、坂口フミ子、佐藤テル子、金子由理子、清原百合子、渡辺武子、西尾たつよ、松尾玲子、柴田幸子、土斐崎初菜、庄野崎ヒデ子、庄野崎チタカ、内尾トミ子、真子昌子、真鍋町代、佐谷静枝、尾園佳枝、末松信子、砥綿チエ子、堀川ヒロ子、中村千里、伊庭秀子、坂田まさ子

〈資料整理に際して〉 児玉健一郎、谷沢仁、松尾正直、辻哲也、堀内郁子、花田早苗、原秋代、仲前智江子、青柳米子、平井彩子、落合弥生、永井和子、久保順子

以上の他、早良区の石津司氏には荒平城の採集瓦の提供をいただき、松尾スミ氏には数々の援助をいただいた。



1. 西新町遺跡 2. 標崎遺跡 3. 原遺跡 4. 原談機遺跡 5. 飯倉遺跡
 6. 飯倉原遺跡 7. 干瀬遺跡 8. 鶴町遺跡 9. 原深町遺跡 10. 有田七田前遺跡

Fig. 1 有田・小田部周辺の遺跡 (1/25,000)

第Ⅱ章 遺跡の立地と概要

立 地 福岡市早良区有田・小田部の位置する台地は、室見川の開析によって形成された早良平野のほぼ真中に位置し、長軸を南北方向に向けた標高15m前後を示す独立中位段丘である。台地の形成は、洪積世に位置づけられ、八女粘土、鳥栖、新期ロームの層位をなしている。旧地形は、有田1～2丁目を最高所にて標高約15mを測り、周辺の水田面との比高差は10m前後を測る。現在の比高差は5～7mで、沖積化の著しさを示している。この丘陵は南北の長さ約1km、最大幅0.7kmを測り、北へ緩やかに傾斜している。台地の東側には金屑川が、台地の西には室見川が流下しているところから、台地の縁辺は浸蝕を受け、小断崖を形成している。また、台地内に深く切り込んだ比較的浅く、緩やかな谷も幾つか存在し、これらの谷が、北方向から切り込むことによって、台地は八ツ手状に分岐する。有田・小田部両地区共に昭和40年代の初めに区画整理事業によって著しい現状変更が行なわれている。

概 要 昭和56年度は前年度に引きつづき、専用住宅等の新・改築に伴う緊急調査、或いは試掘調査を実施した。又、地域に限っては分布調査を実施し、その状況については報告の末尾に記している。発掘調査対象件数は前年度の繰り越し分15件を含めて計42件で、この内、緊急を要する19件について発掘調査を実施した。対象面積は7,932m²である。昭和56年度の申請件数57件、試掘調査件数43件、要発掘調査件数27件、その内、発掘調査終了件数13件を数えた。

発掘調査は昭和56年4月10日～12月13日迄実施した。調査対象は小規模開発が多く、緊急性が強いため前年度同様に、複数件数を併行して調査を行ない、期間の省力化を計った。

検出した遺構は弥生時代前期から18世紀代に至る時期である。以下に各地点の概要を述べたい。

第42次調査は弥生時代から中世迄の遺構を検出したが、当該地は16世紀後半に存在したと云われる小田部城伝承地の東側に位置しており、検出した東西方向の大溝はこの城跡に関連するものと思われる。周辺では宝鏡印塔、板碑など多数が寄せ集められている。第43次調査は第42次調査に隣接し、18世紀の屋敷地内に於ける雨落ち溝を検出した。この溝からは近世の陶磁器多数を検出した。第44次調査は中世後半から近世初期の遺構で、検出した井戸は玉石による石組み構造である。有田・小田部地区の検出井戸は一般に素掘りであり、珍しい構造である。内部より中世末の雑器に混って、唐津系の陶器が出土している。又、石組みの一部には板碑片、石臼片を利用してある。第45次調査は有田地区の西側傾斜地に位置し、弥生時代前期の溝及び中世の溝、井戸を検出した。弥生時代前期前半の溝で、有田遺跡では初例である。又、井戸底からは竹籠片が出土している。第46次調査は中世の遺構を主体とする。中世末の井戸他、櫛列、溝を検出した。櫛列は上柱と支柱を組み合せた3本柱で、南北方向に設けられている。この櫛状遺構は第36次調査検出の櫛状遺構と平行しており、二重構造の櫛をもった屋敷地が考

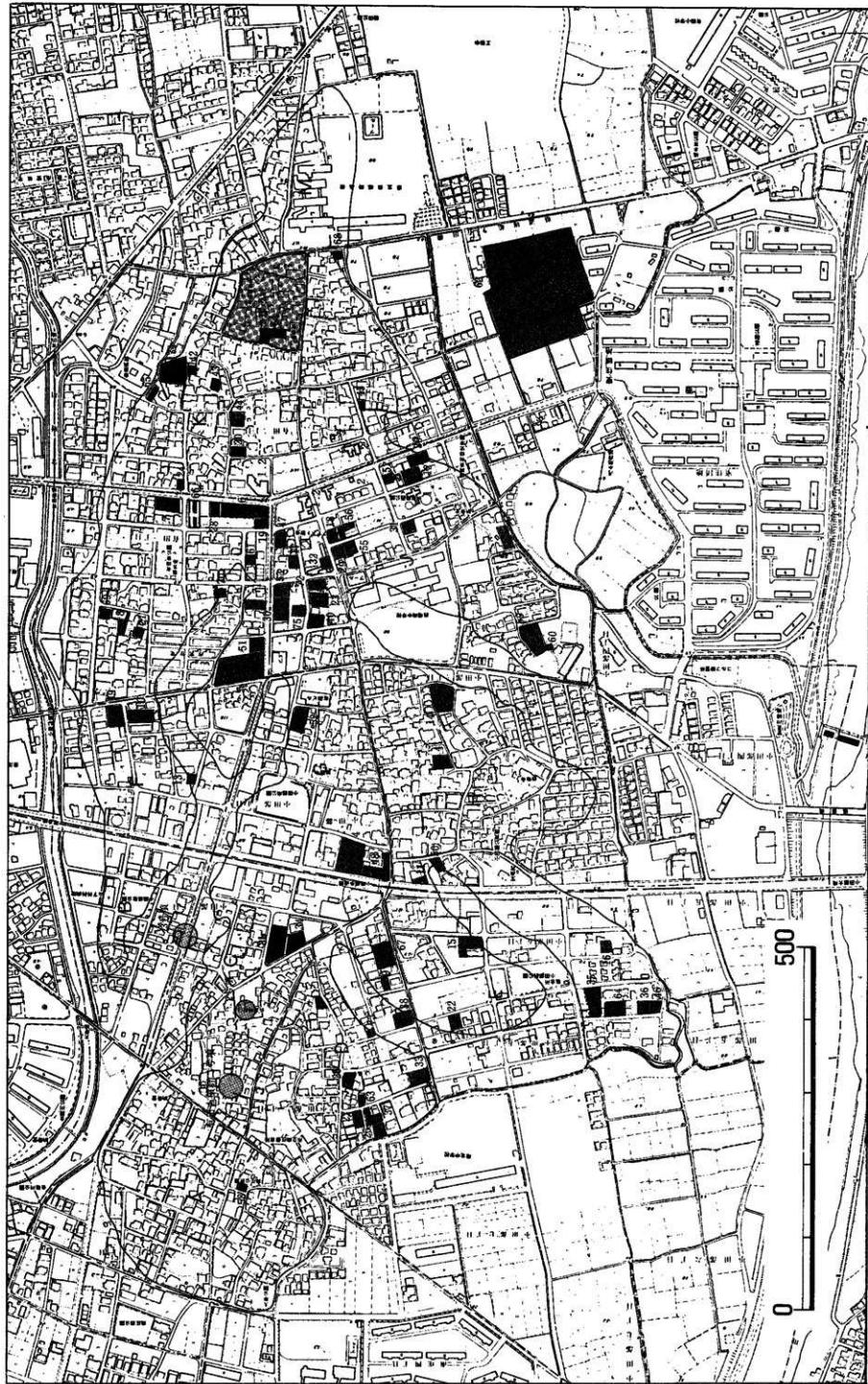


Fig. 2 有田・小田・古戸地と空港敷地(1/5,000) ●数字は測量点を示す。

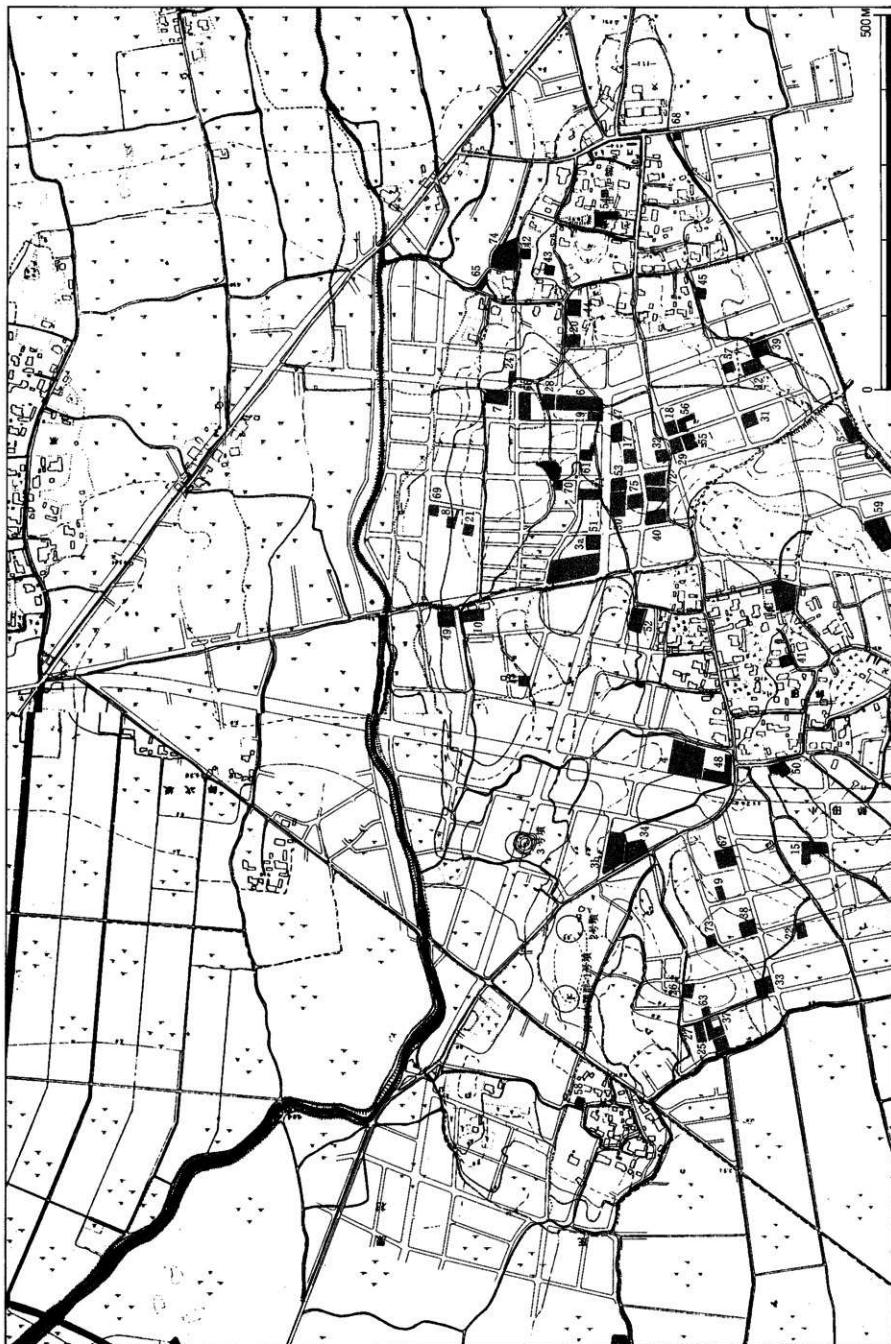


図3 矢田・小畠部台地の地形図(1/5,000) ■赤りは調査地を示す。

⑤

4

えられる。第47次調査は中世の濠状造構、上塙、溝を検出した。濠状造構は北側約50mの第53次調査の濠に接続するもので、屋敷地の区画を形成している。第48次では弥生時代前期の要棺、同中期の住居跡、掘立柱建物、古墳時代住居跡、中世の掘立柱建物等を検出した。前期豪棺墓地は、有出遺跡では西福岡高校敷地内豪棺墓地に次ぐ2例目である。又、住居跡の1例には炉の上部方向に一对の小柱穴が存在する。これは朝鮮に於ける松葉里遺跡検出の住居跡に共通する構造である。又、古墳時代の住居跡は隣接の第4次調査では検出していないなど隔絶しており、単位集団を形成している可能性がある。第49次調査は著しい削平のため造構の残存状態は悪く、白磁碗を伴った上塙器等を検出したにとどまった。第50次調査は谷地に面しており、中世の溝、井戸、土塙を検出した。削平は著しく、造構は傾斜地にて検出した。第51次調査は第3次調査に隣接しており、弥生時代中期の住居跡、古墳時代以降の掘立柱建物を検出している。この住居跡は、第3次調査で検出した5軒の住居跡と共に2つの井戸を中心にして環状に巡る集落形態を形成している。掘立柱建物は古墳時代が考えられ、倉庫と居住的な建物がある。竪穴式住居から掘立柱建物へ移行する時期の良好な資料である。第52次調査では古墳時代の住居跡、及び、掘立柱建物、奈良時代の土壤を検出した。特に、6世紀後半の住居跡はカマドを住居跡の隅角に設けており、興味ある例である。第53次調査は、第30次調査の南に接するが、削平が著しいため、第30次調査で検出した建物群は検出できなかった。造構は建物1棟と中世末の濠である。この濠はコーナー部を形成し、南北方向は第47次調査の濠に接続すると思われる。濠幅は5m前後を測るので大規模な屋敷地を考えねばならないだろう。第54次調査は工事の関係から2回に分けて調査した。第Ⅰ次では近世の溝を、第Ⅱ次では中世後半の溝、縄文時代晚期、弥生時代前期の溝を各1条検出した。縄文晚期の溝は九州大学による第1・2次調査で検出しており、この時期に既に台地の広い範囲に集落が営まれていた事を示している。第55次調査は有田地区の台地中央部分に位置し、第29次調査の西隣りである。掘立柱建物2棟、古墳時代住居跡、古墳時代～中世の溝2条を検出した。掘立柱建物は第29次調査より連続するもので切合い関係にある。いずれも3間×4間の建物で、掘方径1～1.5m、柱根径30～40cmを測り、柱間は梁行7尺、桁行9尺を測る大規模な建物である。建替えの行なわれた建物で、新しい南北方向の建物はほぼ南北方向である。当該地の北側に谷が接してあり、この建物の西側には幅1m前後の南北溝が存在する。第18次調査検出の東西溝と接続することが確実で、建物群の境界地を表わす溝であろう。律令時代の所産と考えたい。中世の溝からは明の染付碗、基筒底の皿などが出土している。第56次調査は第55次調査と道路を挟んで南側に隣接している。縄文時代晩期末～中世の造構が検出された。第55次調査と同規模の掘立柱建物も2棟検出され、その柱筋はほぼ第55次調査の建物に通っており、同時期に建物群が存在した事を示している。境界地にあるため建物規模は不明。他に白磁碗を副葬した土塙墓1基がある。第57次調査では5世紀中頃の住居跡を検出した。平面形は方形を呈し、ベットを持たない。主柱4本を有している。この住居跡の

検出によって、有田遺跡に於いては4世紀から6世紀代の住居跡の構造の変遷を知る事ができる。住居跡の半分が境界地にあるためカマドの有無は不明である。第58次調査は有田・小田部台地の北端部に位置している。弥生時代中頃の住居跡及び中世の遺構を検出した。住居跡の残存状態は悪いが、Pit群等から2~3軒の存在が考えられる。この有田・小田部台地において共同体を形成した単位集団を把握する意味で重要である。第60次調査は、第59次調査の西側に接する。第59次調査では弥生時代から中世の遺構を検出した。中世は15世紀代の溝に囲まれた集落を形成している。当該調査では集落を囲む溝の延長部分を検出した。第61次調査は、有田地区の中央部分に位置する。倉庫建設の工事を中止させて調査を行なったので、基礎等の関係で充分な調査ができなかった。南北方向から東西方向へ曲る中世の溝を検出した。この溝は当該地南側の第19次調査で検出した2号溝と接続するものと思われる。

以上、昭和56年度の各調査の成果について概括したが、今回の報告書では、整理の関係からわずかに第42次、第45次調査を本報告するにとどまった。尚、有田地区の調査分については、未報告の調査地点も含めて配図(付図1)として集成しているので参考にしていただきたい。

Tab. 1. 有田・小田部発掘調査一覧表

調査次数	地点名	調査地域(測量)	調査面積	調査期間	備考
第1次	Sヶ所		500m ²	42年2月20日~3月11日	弥生時代住居跡V下溝1、古墳時代住居跡2、後期住居跡1、古墳時代後期住居跡1
* 2 *	7ヶ所		900m ²	43年2月20日~3月11日	後期住居跡V(火窓跡)、後期住居跡、中世時代住居跡1、古墳時代後期住居跡1、古墳時代後期住居跡1、後期住居跡1、中世時代
* 3a *	C-d-1	平良区小田部1丁目427-39-1, 490-2	1,082m ²	50年12月8日~2月10日	後期住居跡6、中期住居跡4、井戸2、後期住居跡1、古墳時代住居跡4、鐵製土器物1、平安時代2
* 3b *	I-a-1	有田1丁目28-1	1,836m ²	51年2月16日~6月16日	後期住居跡V(火窓跡)、後期住居跡、中世時代2
* 4 *	G-a-1	小田部2丁目130	1,691m ²	52年6月9日~8月19日	奈良時代以降の墓石建物40軒、軋轍跡
* 5 *	J-c-1	*	704	900m ²	6月20日~11月23日
* 6 *	I-u-1	有田1丁目20-3	1,289m ²	8月18日~10月20日	奈良時代以降の墓石建物22軒、古墳時代2
* 7 *	I-v-1	*	8-10	573m ²	53年3月8日~4月30日
* 8 *	I-d-1	*	13-12	191m ²	3月17日~5月15日
* 9 *	D-i-1	小田部1丁目174-2	211m ²	5月29日~6月9日	古墳時代住居跡2、土壤1
* 10 *	F-g-1	*	2丁目57	436m ²	6月15日~6月20日
* 11 *	H-d-1	*	168-3-4	186m ²	5月27日~6月2日
* 12 *	J-g-1	有田1丁目137-11	360m ²	6月6日~6月29日	後期住居跡1、古墳時代後期住居跡2、中世時代2
* 13 *	F-d-1	小田部2丁目73-2	152m ²	7月17日~7月21日	-----
* 14 *	H-j-1	*	3丁目281-2	539m ²	8月21日~8月21日
* 15 *	E-p-1	*	5丁目54-11	275m ²	8月29日~10月2日
* 16 *	I-n-1	*	3丁目312	107m ²	8月21日~8月21日
* 17 *	J-p-1	有田1丁目20-9	136m ²	54年3月9日~3月20日	中世2
* 18 *	J-n-1	*	32-1	248m ²	4月16日~21日27日
* 19 *	I-u-2	*	24-4	250m ²	6月16日~7月8日
* 20 *	K-e-1	*	2丁目14-20	250m ²	6月3日

測定次数	地点名	調査地図(地番)	測定面積	調査期間	備考
第21次	I-d-2	平良区右田2丁目13-16	442m ²	54年7月13日～7月18日	古墳時代・柱立柱建物1、獨立柱建物1。
+ 22 +	E-j-1	* 小田部5丁目25	385m ²	* 7月13日～7月26日	独立柱建物12。
+ 23 +	J-g-1	* 有田1丁目27-2	485m ²	* 7月22日～8月23日	中世城2。
+ 24 +	K-e-1	* 2丁目10-7	143m ²	* 8月3日～9月10日	中世建物遺構1、井戸跡2。
+ 25 +	D-a-1	* 小田部5丁目237-1	296m ²	* 8月8日～8月11日	中世獨立柱建物4。
+ 26 +	D-c-1	* * * 219	245m ²	* 8月23日～9月10日	獨立柱建物2、平安時代土壙墓1。
+ 27 +	D-a-2	* * * 241	244m ²	* 9月10日～9月17日	弥生時代中期住居跡？1。
+ 28 +	I-u-3	* 右田1丁目20-2	179m ²	* 9月14日～10月2日	弥生時代前期V字造1、中世溝1、道路跡1。
+ 29 +	J-e-1	* * * 33-2	280m ²	* 10月5日～11月12日	古墳時代住居跡3、奈良時代柱立柱建物1。
+ 30 +	J-k-1	* 小田部3丁目288	586m ²	* 10月16日～12月3日	弥生時代・中世獨立柱建物10數棟 吉野時代後期跡2、火葬塚1。
+ 31 +	J-h-1	* 有田1丁目34-2	580m ²	* 11月12日～12月1日	古墳時代・中世獨立柱建物2。
+ 32 +	J-o-1	* * * 29-9	237m ²	55年12月14日～2月10日 2月25日～3月17日	古墳時代・中世獨立柱建物1、獨立柱建物1、 中世溝2、中世井戸1。
+ 33 +	D-c-2	* 小田部1丁目239～241	491m ²	* 5月20日～6月7日	古墳時代・柱立柱建物3、獨立柱建物2、隕石跡3。
+ 34 +	C-d-2	* * * 157	612m ²	* 5月9日～5月19日	古墳時代独立居跡1、獨立柱跡4。
+ 35 +	E-b-1	* * * 57丁目150	843m ²	* 6月19日～11月7日	古墳時代・柱立柱建物1、獨立柱建物1、 中世溝2、中世井戸1。
+ 36 +	E-b-2	* * * 143	247m ²	* 6月23日～8月20日	弥生時代中期復元・木質板塗2、中世築跡跡、中世溝1。
+ 37 +	D-a-3	* * 1丁目237-3	347m ²	* 7月24日～8月20日	獨立柱建物
+ 38 +	D-h-1	* * * 198	430m ²	* 8月5日～8月19日	中世溝2。
+ 39 +	J-q-2	* 有田1丁目37-7	527m ²	* 9月26日～10月29日	古墳時代・中世 獨立柱建物10數棟 土壙墓2。
+ 40 +	J-q-2	* * * 26-2	376m ²	* 10月2日～10月31日	中世城2、独立柱建物、土壙墓2。
+ 41 +	H-k-1	* 小田部3丁目207	325m ²	* 11月4日～11月19日	中世溝3、中世井戸1。
+ 42 +	K-m-1	* 有田2丁目85	150m ²	56年4月10日～4月25日	弥生時代・古墳時代柱立柱建物1、平安時代の上塗、 中世柱立柱建物1、溝2。
+ 43 +	K-m-2	* * * 7-88	405m ²	* 4月10日～4月17日	近畿奈良溝1。
+ 44 +	K-c-2	* * * 14-9	1,028m ²	* 4月17日～4月30日	中世築跡跡3、中世井戸1、土壙2。
+ 45 +	L-d-1	* * * 22-15	111m ²	* 4月23日～4月26日	弥生時代前期第1、中世溝1、古墳時代井戸1。
+ 46 +	E-h-3	* 小田部5丁目143-1	264m ²	* 5月6日～5月21日	中世築跡跡1、溝2、中世井戸1、中世土壤1。
+ 47 +	J-p-2	* 有田1丁目28-2	372m ²	* 5月8日～5月26日	中世土壤2、溝1、溝状堆积1。
+ 48 +	G-a-2	* 小田部2丁目140	456m ²	* 5月18日～6月10日	弥生時代・前期壁塗2、圓筒形住居跡2、独立柱建物1、 独立柱建物1、土壙2、中世築跡跡2、中世井戸1、溝1、 中世土壤1。
+ 49 +	F-h-1	* * 1丁目20-21	655m ²	* 6月9日～6月11日	古墳時代溝1、土壙2、中世土壤1。
+ 50 +	H-d-2	* * 3丁目6-2	182m ²	* 6月10日～6月17日	中世城2、井戸1、その他土塗1。
+ 51 +	I-a-2	* 有田1丁目23-6	314m ²	* 6月15H～7月17日	弥生時代柱立柱建物2、 古墳時代・古墳時代独立柱立柱建物3、古墳時代独立柱建物1、 古墳時代柱立柱建物1、その他の土塗1。
+ 52 +	G-i-1	* 小田部2丁目110-2	561m ²	* 6月24日～8月5日	古墳時代柱立柱建物1、その他の土塗1。
+ 53 +	J-k-2	* 有田1丁目28-3	417m ²	* 7月21日～8月7日	古墳時代・平安時代溝1、獨立柱建物1、 古墳時代柱立柱建物1、中世溝1、土壙2。
+ 54 +	K-n-1	* * 2丁目16-1	1,224m ²	* 7月22日～7月29日	開式時代溝1、弥生時代柱立柱建物1、中世城1、 中世城1。
+ 55 +	J-e-2	* * 1丁目33-3外	317m ²	* 8月7日～9月29日	古墳時代・柱立柱建物1、 律令時代柱立柱建物2、中世土壤1。
+ 56 +	J-n-2	* * * 32-9	513m ²	* 8月25日～10月28日	律令時代柱立柱建物2、中世土壤1。
+ 57 +	J-q-3	* 下須原1丁目241-2	275m ²	* 10月1日～10月14日	古墳時代・柱立柱建物1、中世溝1。
+ 58 +	A-u-1	* 南庄3丁目185-186	333m ²	* 10月2日～10月20日	弥生時代柱立柱建物2、中世・近世土壤1。
+ 59 +	J-a-1	* 小田部3丁目177	938m ²	* 10月6日～11月21日	弥生時代・中世柱立柱建物2、古墳時代柱立柱建物1、 中世溝10、井戸1、中世井戸1。
+ 60 +	J-a-2	* * * 178-2	26m ²	* 11月21日～11月24日	中世溝1、近世地割り溝1。
+ 61 +	I-cn-1	* 有田2丁目21-2	187m ²	* 11月23日～12月13日	中世城1。

* ①は第1集、②は第2集、③は第3集、④は第4集にて報告済を表わす。

第Ⅲ章 調査経過

1. 第19次調査

調査の概要

調査対象地は福岡市早良区有田1丁目24-4番地に所在する。発掘対象面積は250m²である。有田地区での台地の標高は12~14mを測り、平坦部を形成する。しかし、この平坦部は北東、北西方向から狭長な谷が入り込むため約200m四方に限られている。当該地は、この平坦部のほぼ中央に位置しており、標高12.6mを測る。この地域は昭和40~43年の区画整理に伴って第1・2次調査が実施されている。又、近年では、当該地周辺に17ヶ所の発掘調査が終了しており、とりわけ隣接した第6次調査、第28次調査では、弥生時代前期後半の溝、中世末から近世の道路状遺構を検出している。^{註1} 遺物では、旧石器、弥生時代の壺形土器、4世紀中頃の古式土器の一括資料、或いは陶質土器、古墳時代のタコ壺、李朝の硯、中~近世の雜器などを出土している。試掘調査では柱穴及び北側の段落ち状遺構しか検出されなかったが、第6次調査の西端で検出した弥生時代後半の溝と中世の溝が連続して検出されるものと推測された。

発掘調査は昭和54年6月16日~7月8日迄の間実施した。店舗付住宅建設に伴うため、調査期間に制約があり、更に梅雨期に相当していたため、充分な発掘調査を果たすことは不可能であった。当該地は、昭和43年の第2次発掘調査報告書では31街区と云う地点に相当する。前述のように昭和52年度には南に接して第6次調査が実施されており、陶質土器の検出など多大な成果を得ている。表土は約25cmを測り、^{註2} 第2層の包含層は茶褐色土層を呈し、深さ30cmを測る。この第2層より集石群が検出された。この第2層は2号溝の西側には存在せず、西側は黒褐色粘質土の包含層で、第2層が切った状態を呈している。遺構面の標高は13mを測る。調査範囲については当初、期間的な制約のため、試掘結果にそって南半部分に限定した。しかし、調査の進行と共に、北半部分との境に存在する段落ち状部分が東西方

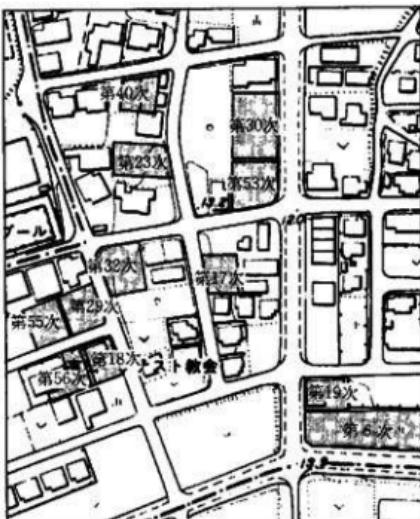


Fig. 4 第19次調査地位置図(1/2,500)

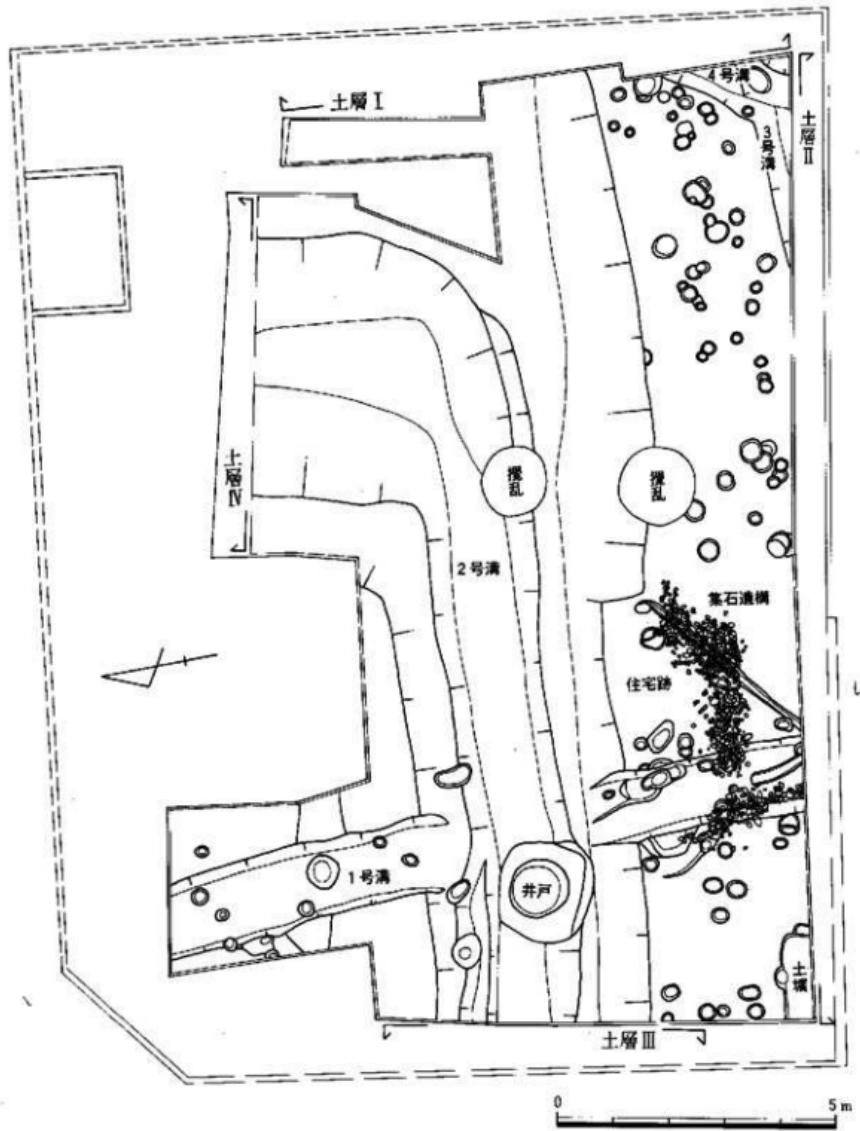


Fig. 5 造構配置図 (1/100)

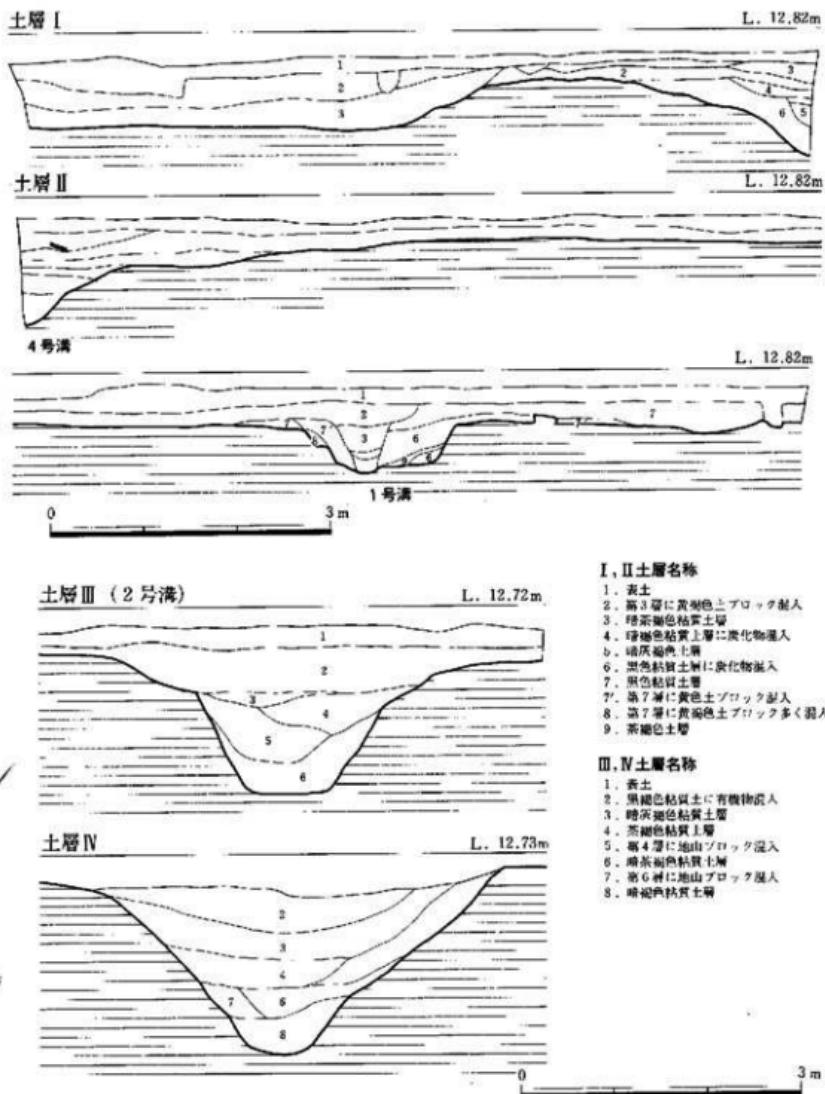


Fig. 6 東壁、南壁、溝土層図 (1/60)

向の中世の濠状遺構であることが判明したため、急遽調査期間の延長等を含めて、原因者及び工事請負者との間に協議を行なった。北半部分については濠の方向、規模の確認にとどめる事とし、又、地鎮祭に際しては、一組、埋戻しを行なう事などで原因者の協力を得た。その結果、対象地を三分割の方法で行なうという変則的な調査に終始したため、充分な記録を残すことができなかった。

遺構は集石群、古墳時代の住居跡1軒、第6次調査より延長する弥生時代から中世の溝3条、中世末の濠状遺構1条、井戸1基を検出した。遺物は弥生時代から近世に及び住居跡からは4世紀代の土師器の良好な資料を得た。濠状遺構からは14世紀から16世紀の瓦片が多量に出土し、県内では数少ない報告例になると思われる。その他、中国明代の陶磁器、土師質の鍋、鉢などの雜器類、石塔類、人骨片などを得た。集石群及び包含層より近世に属するものが出土している。

検出遺構

集石遺構 (Fig. 5, PL. 3, 5)

2号溝の南側、第II層の暗茶褐色粘質土内に存在する。礫は3~25cm大で材質は花崗岩の転石、砂岩の角礫、及び玄武岩の板石である。最も多いのは10cm前後の花崗岩の転石である。礫群は南北方向と東西方向の2つのグループに分けられる。東西グループは幅約80~150cm、長さ約3.6mを測る。南北グループは幅約30~80cm、長さ約2.5mを測る。いずれも平面形はやや蛇行し、それぞれの主軸が直交する形態を呈している。標高12.6~12.3mの間隔に2~3段の割合で構成されるが、不規則な積み方である。又、南北礫群の最下段は3~4段目を数える。その一部分は1号溝内に重複した中世の再利用溝の上層内に埋没しているので、1号溝内の再利用溝の埋没時期は集石の時期とほとんど変わらないと思われる。礫群の大部分は二次的に火を受けている。又、礫群中には多くの遺物を含んでおり、土師器、陶磁器、土師質土器、須恵器、須恵質土器、瓦質土器、鐵削、タコ殻、砥石、瓦片、鐵滓などを検出した。

住居跡

1号住居跡 (Fig. 7, PL. 4, 5)

南側境界に一部接しており、北側を2号溝にて削平されている。又、1号溝が住居跡のはば中央を南北方向に通るため、住居跡の形状をほとんど残していない。現状では、東壁が長さ約3.5m、西壁が長さ約1.6mを残している。壁高は東側で約30cm、西側で約8cmを測る。1号溝を境にして、東側と西側の床面の比高差は約18cmを測るところから、西側部分についてはベッド状遺構が存在した可能性が強い。周溝は東壁下のみに検出され、幅10~15cm、深さ約8cmを測る。炉はほぼ中央に検出され、長さ約60cm、最大幅34cmを測る長楕円形を呈する。内

部には焼土、炭化物が充満しており、壁は真赤に焼けている。柱穴を多数検出したが、床面の柱穴は比較的浅い。切合関係にある1号溝内の柱穴は床面からの比高差30~60cmの深さを測るが、住居跡に伴うと思われるものは少ない。又、住居跡の構造からみて主柱穴として考えられるものは、位置関係からわずかにP1が想定されるにすぎない。P1は床面からの比高差約30cm、径約33cmを測る。

遺物は、土器片、石器などが覆土中より出土したが、特に床面において原位置を保った變形

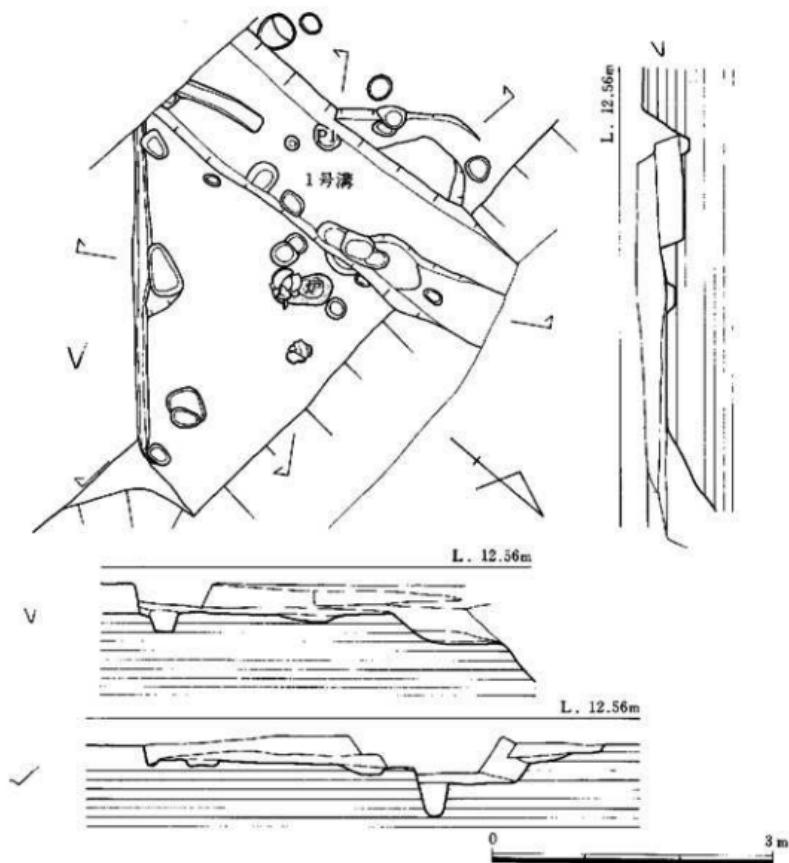


Fig. 7 住居跡 (1/60)

上器、壺形土器、器台、高杯など古式土師器（特に4世紀中頃）のセットとして良好な資料が検出できた。

井戸 (Fig. 8, PL. 6)

2号溝の溝底にて検出されたもので、上位には溝の第6層、或いは瓦片が堆積しており、2号溝によつて破壊されたものである。現状の井戸形態は平面は不整円形を、断面は2段掘りで、井戸部分と井戸底から成っている。井戸の現存高は1.66m、井戸最下部での径は1.72m×1.80m、井戸底径1.06m×1.00m、深さ36cmを測る。覆土は黒色粘質土であったが遺物はほとんど検出されなかった。覆土構成からみて中世の古い段階、或いは律令時代に属する井戸であろう。

溝

1号溝 (Fig. 5, 6, PL. 6, 7)

この溝は第6次調査にてわずかに境界部分にて検出されている。南北方向へ延びる溝、総延長約11.5mを検出している。幅は1.35m、深さ0.55mを測り、断面は逆台形状を呈している。溝底は北から南へ傾斜する傾向にある。覆土はFig. 6に示す通り、真黒色粘質土を主体としており、各層は褐色土の混入度合による相違にすぎない。遺物は細片が多く、年代を決定すべきものは見当らない。尚、この溝は最終的には中世に水路として利用されており、幅1.35m、深さ1.1mを測る断面箱渠研掘りの溝が重複した状態で検出されている。この新しい溝の覆土は茶褐色粘質土であり、その上層から、礫・瓦片が多数出土した。溝底は南から北へ傾斜しているところから2号溝へ流れ込むものと考えられる。時期的には2号溝と一緒に存在したものであろう。

2号溝 (Fig. 5, 6, PL. 8~10)

対象地のほぼ中央にて検出された。溝は西側で幅3.9m、深さ約1.4mを、隅角部分で幅4.4m、深さ約2mを測る。断面は一段掘りによるもので、一段目は浅い階鉢状を呈し、二段目は箱渠研掘形である。隅角部分は溝幅も広くなり、断面の形状も他の部分に比べ、掘り方は不定形で明確ではない。現存長は東西方向で約12.7m、南北方向は約3mを測る。溝底は北から西方向へ徐々に傾斜している。覆土は暗茶褐色粘質土を主体とし、湧水のある溝底付近を除いては褐色土や灰白色の混入具合によって層位を分けることが可能である。土層図I-5層、II-6層のように褐色土のブロックが多量に存在することや、溝の西側部分では、I-5層に多量の

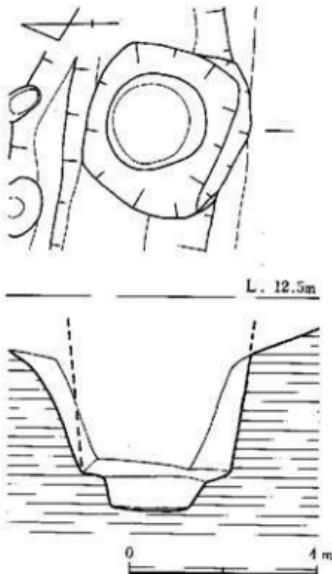


Fig. 8 井戸跡 (1/40)

瓦、礎が投棄された状況からみて、この溝が中世の或る時期に人为的に埋められたものと考えられる。この溝の西方向の延長は、西側道路の幅8mを挟んで、昭和54年末の側溝工事の際に確認をしている。又、約40m北側の第61次調査では、やはり、幅4m前後を測る南北方向の溝を検出している。規模や方向、或いは出土遺物の年代からみても2号溝に近似しており、接続する可能性を充分にもっている。遺物は、各層からまんべんなく出土するが、特にI-3～5層は多量に出土し、その多くが瓦であった。列記すると土師器一皿・杯、土師質土器一鍋、須恵器一火舍、瓦質土器一鉢・火舍、磁器一白磁碗・壺、青磁一碗・杯・染付碗、陶器一摺鉢・甕片、瓦一軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦・瓦埠、石製品一石塔片・板碑片、鐵器一釘・鐵洋、人骨片などを出土している。

3号・4号溝 (Fig. 5, PL. 10)

いずれも第6次調査地から延長しているが、東南隅に一部分を検出したのみにとどまった。年代は3号溝が弥生時代前期末で、4号溝は中世の時代といわれる。詳しくは第6次調査報告書にて述べられることと思われる。^{注1}

出土遺物

表土出土遺物 (Fig. 9, PL. 12)

青磁

碗(1・2) いずれも龍泉窯系である。1は底径6.5cmを測る。釉は全体に厚目で、濃緑灰色を呈し、外底部迄一部付着する。内底には刻印されるが、字体は不明である。2は口径17cmを測り、口縁部がわずかに端反りする。釉は厚目で、濃黄緑色を呈する。

皿(3) 底径4cmを測る皿の破片である。釉は内外共に厚目で、淡い灰緑色を呈す。外底面の釉は丁寧に搔き取られている。内底はヘラによる線彫りが施されるが、何の文様かは不明である。内外面共に粗い貫入がある。

陶器

椀(4) 高台径4.5cmを測る。底部は厚く、高台は細く、やや内傾する。体部は丸味をもって立ち上がる。釉は淡黄褐色を呈し、薄く外底部迄施されるが、疊付は搔き取られている。胎土は黄土色を呈し、砂粒を含む。国産の陶器と思われる。焼成は軟質である。

その他、石鍋片が1点出土している。

包含層出土遺物 (Fig. 9, PL. 12)

須恵器

器台(7) 器台の脚部の破片である。内面はヨコナタ調整を、外面はナタ後に波状文を一段に施している。上段は12本、下段は14本である。内外青灰色を呈し、焼成は良好である。

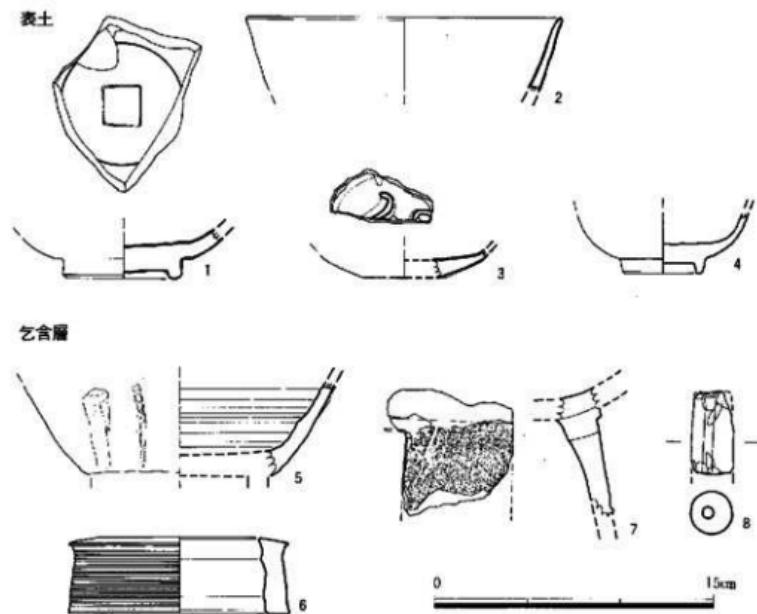


Fig. 9 表土、包含層出土遺物 (1/3)

陶器

壺 (5) 底部に近い破片で、瓶の可能性がある。外面はくすんだ緑灰色の釉が施され、部分的に釉が厚くかかり、垂れ下がっている。底部は露胎である。内面は水引き痕が残る。胎土は精良で、淡茶褐色を呈する。焼成は甘いため釉が完全に溶けていない。国産品の可能性がある。

窯道具 (6) 11径、底径共に 9.8 cm、器高 4.1 cm を測る円筒状の器形を呈す。外面は粗目のヨコハケを施す。内面は水引き痕が残る。上下の口縁平坦部はナデ仕上げである。窯道具の一種の焼成台と思われる。

土製品

土錐 (8) 下半部を欠損している。現存長 4.5 cm、最大径 2.3 cm、孔径 0.5 cm を測る。暗灰黄色を呈し、胎土に砂粒を少し含み、焼成はやや軟らかい。

石器

くぼみ石 (25) B面を欠損している。最大径 14.6 cm、最大幅 6.8 cm、残存厚 3.5 cm を測る。

花崗岩の自然石を転用したもので、A面の凹みは長さ約6cm、最大幅約3cmを測り、凹み周辺には敲打痕が残る。又、敲打器としても利用されたようで、上半の縁辺には敲打痕が多く残っている。

集石造構出土遺物 (Fig.10~12, PL. 12, 13)

須恵器

甕 (1) 口縁端部は外面に粘土を貼付けて肥厚させ、3条の段を設ける。又、中位に2条の沈線を巡らし、口縁端部との間に5条の波状文を施す。内外ヨコナデ調整で、色調は黒灰色を呈する。焼成は良好。

土師器

甕 (10) 口縁部と底部を欠いている。現存高6.5cm、孔径0.9cmを測る。推定高は約9cmであろう。手づくねのため内外に指圧痕を残す。淡黄褐色を呈している。

白磁

碗 (3) 大きな玉縁をもった碗である。内外に細かい貫入と気泡がある。

皿 (9) 低い高台で径5cmを測る。外底面の削りは浅い。外面は露胎で、胎土は黄灰色を呈する。内面の釉は黄味を帯びた灰色である。内底には約1cm幅を測る帯状の目痕がある。器形から中国陶磁では無く、朝鮮の李朝、もしくは国産品と思われる。

青磁

碗 (7・8) 2種に分けられる。7は高台径5.5cmを測る。同安窯系の碗で、釉は淡緑色を呈する。8は高台径6.1cmを測る。龍泉窯系の碗で、釉は淡緑色を呈し、外底面迄かけられる。外底面と疊付は搔き取っている。

陶器

瓶 (4) 底径5.1cmを測る上げ底で、底部の器壁は薄い。外面はタテ方向の削りを施す。釉は風化し、黄土色を呈す。釉は外底の一部迄かかるが、疊付は搔き取っている。

鉢 (5) 高台径6.5cmを測る。高台の内側を斜めに深く削り込む。大きく開いた器形で、外面は淡黒褐色を、内面は明茶褐色を呈する。

甕 (2, 6, 17) 2は肩部に2条の突帯を貼付け、竹管を押えつけて刻みを施す。内面は格子目のタタキの後、ヨコナデを施している。外面は暗茶褐色を、内面は茶褐色を呈し、胎土は精選されている。6は口縁部が直口に近く縁部を玉縁に形成している。内外共に茶褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。17は底径22cmを測る平底で、体部外面はヨコナデである。外底には微砂粒が多い量に付着している。色調は外面茶褐色を呈する。いずれも国内産の陶器で、6は備前系であろう。その他、陶器片は9片出土した。

須恵質土器

鉢 (14, 15) 14は口縁部を肥厚させ、端部外面を斜めに落とし、丸味をもたせている。内外

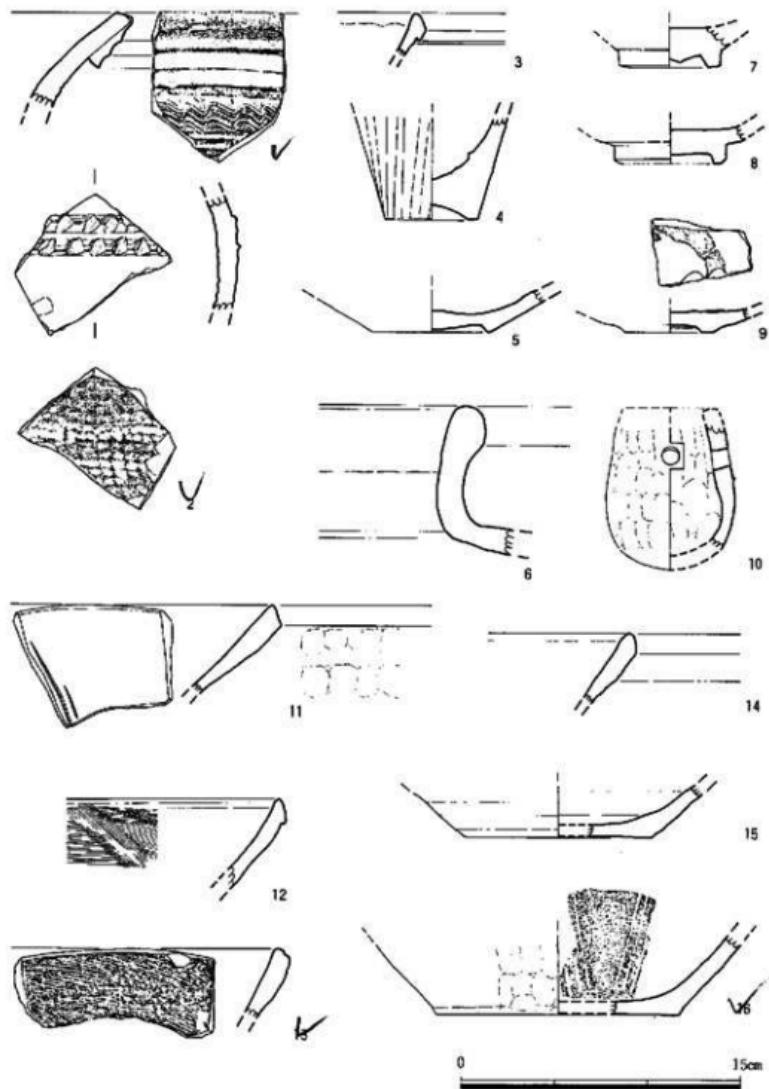


Fig. 10 集石造構出土遺物 (1/3)

面ヨコナデを施し、口縁端部は青灰色を、他は灰色を呈す。胎土に砂粒を多く含む。15は底径10.1cmを測る系切り底である。内外面ヨコナデ調整で、灰色を呈す。胎土に砂粒を含む。この種の須恵質土器は、近年、兵庫県魚住窯系の鉢の搬入が考えられているが、有田遺跡では器形に相違があるものの数多く出土しているので产地を含めて再検討の必要がある。^{註3}

瓦質土器

鉢 (12, 13) 12は玉縁の口縁部をもった軟質の捏鉢である。内面にはヨコ、ナナメの粗いハケを施す。外面も部分的にタテハケ後、ヨコハケが施されるが、全体に指圧痕が残る。内面と口縁外面は黒色を、外面は灰色を呈す。この種の鉢は、五十川高木遺跡などに出土例があるので13世紀前半を下る土器ではない。13は片口の捏鉢である。色調黄灰色であるが、外面は淡く黒灰色を呈す。内面ヨコハケ、外面は部分的にヨコハケである。12と13は、胎土、焼成とも異にする。

土師質土器

鉢 (11, 16) いずれも片口の捏鉢で、11は口縁部が肥厚し、色調は黄橙色である。胎土は精選されている。16は底径13.1cmを測り、黄褐色を呈す。内面は二次的に火を受け変色する。内面の条痕は3本以上である。胎土に1~2mmの砂粒を多く含む。

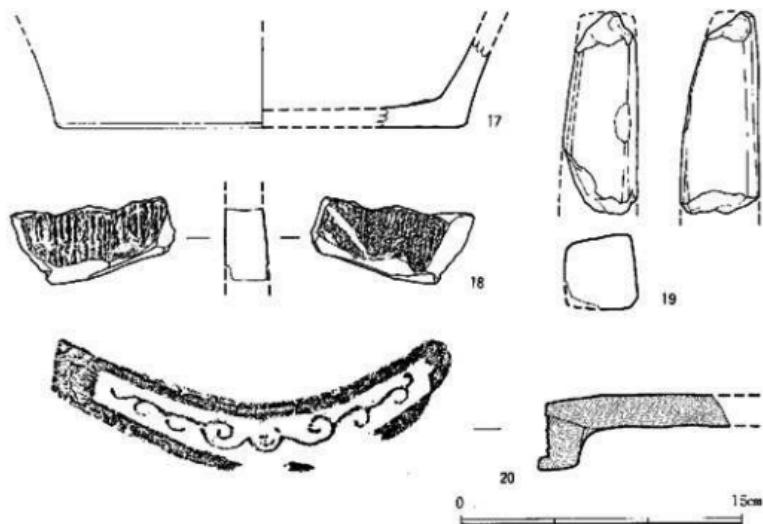


Fig. 11 集石遺構出土遺物 (1/3)

五徳 (19) 下半を欠損している。現存長9.8cm、最大幅4.1cm、最大厚4.0cmを測り、方柱状を呈す。胎土に砂粒を多く含み、表面は暗灰色を、胎土は褐色を呈す。砂粒を多く含む。

瓦類

軒平瓦 (20) 中心飾りは宝珠形で、左右に1本の唐草を4回転させる。瓦当幅3.6cm、平瓦部分の厚さ1.7cmを測る。頭部はナデ調整で、平瓦谷面と瓦当上面はヘラケズリし、他はナデ調整である。瓦当面と谷面はいぶしのため黒色を呈する。大宰府史跡第67次金光寺跡調査で同一型が出土しており、14世紀前半代が推定されている。

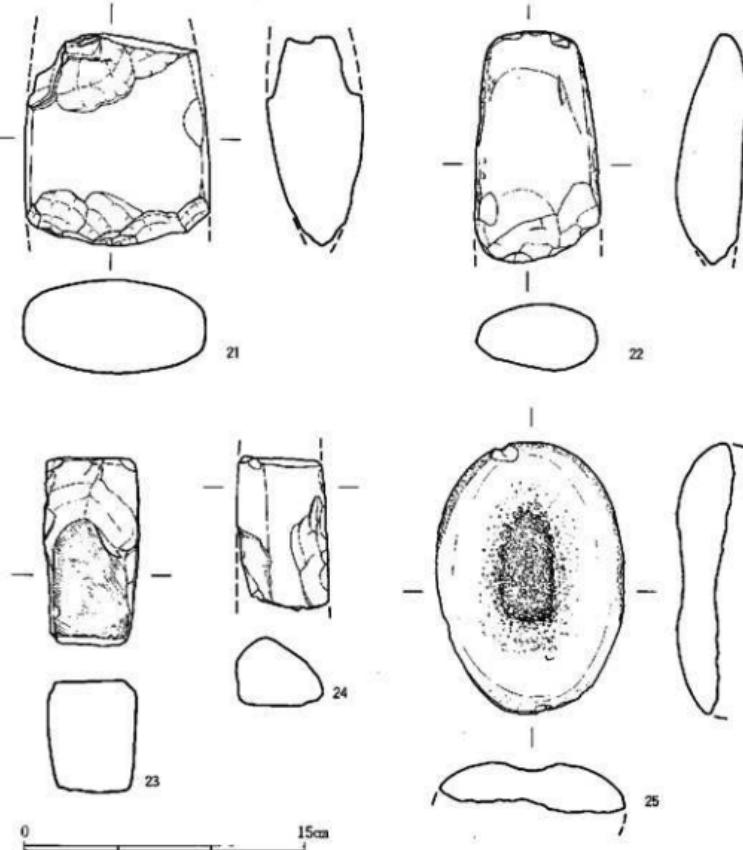


Fig. 12 集石造構、表土出土遺物 (1/3)

平瓦 (18) 厚さ 2.2 cm を測る。谷面は布目と桶巻の縦状痕が残る。背面は繩目のタタキが施される。谷面は灰色を呈する。

石器

石斧 (21, 22, 24) 21, 22はいずれも玄武岩製の蛤刃石斧で、特に21は大型である。21は基部と刃部の一部を破損しており、現存長11.3cm、最大幅9.7cm、最大厚5.0cmを測る。両側辺は調整の敲打痕がわずかに残る。全体に風化している。22は刃部を破損しており、現存長12.3cm、最大幅6.8cm、最大厚3.5cmを測る。A面は研磨されており、わずかに剝離痕を残す。B面は研磨が終了していない。基部、及び側辺は剝離痕、敲打痕を残している。24は両小口を欠損している。断面形が不定形のため未完成の可能性がある。右側辺は剝離調整、及び敲打痕を残している。玄武岩である。全体に風化している。

砥石 (23) 長さ10cm、最大幅5.1cm、最大厚5.9cmを測る。A面は紙面として利用。部分的に欠けている。上・下小口は研磨による面取りを行ない、B面及び両側面は敲打面取りを行なう。右側辺は部分的に研磨を、B面は荒い研磨を施す。中粒砂岩である。

住居跡出土遺物 (Fig.13, 14 PL. 14)

土師器

変形土器 (1~6, 8) 1は完形品である。口径17.4cm、器高27.1cm、胴部最大径21.3cmを測る。底部は丸底で、最大胴径が中位にある。口縁部は緩く外反し、端部は平坦にする。口縁部内外はヨコナデ、胴部上位は左下りで6~7本単位の平行叩きが施される。頸部はヨコナデが施され、又、胴部下半は底部から上方へ板状工具によるハケを施し、叩きを部分的にナデ消している。胴部内上面はヨコハケ、下部はタテ、ナナメハケが施される。淡黄褐色を呈し焼成は良好。胴部の一部に煤が付着し、底部から胴部にかけて火を二次的に受けている。2は1と作り、胎土が近似している。口径20.8cm、現存高20cmを測る。最大径が胴部の中位にある。口縁部はやや内弯気味に外反し、端部は平坦にする。頸部内面に棱を有す。胴部外面上位に6本前後の平行叩きを施し、下位は板状の工具にてタテナデを施している。胴部上位には、部分的にタテハケが認められる。口縁外面はヨコナデ、内面はヨコ、ナナメハケを、胴部内面は目の粗いヨコハケを施す。淡黄褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。焼成は良好。4は口径7.8cmを測る。口縁部は緩く外反するが、やや内弯気味である。端部は丸味をもつ。胴部内面はナデ調整。茶褐色を呈し、焼成はやや軟質である。胎土に砂粒を含む。5は口径17.3cmを測る。頸部が縮まり、口縁が強く外反する。内面は内弯気味である。外面にタテハケが残っている。他はヨコナデである。胎土に細かい砂粒を多く含み、黄灰色を呈する。1, 2と作りが同一である。6は口縁部径14.0cmを測る。直口する口縁部で、端部を欠損している。口縁部内面は細かいハケを、胴部外面はタタキ、内面はタテ、ヨコハケである。砂粒を含み、焼成良好。茶灰色を呈す。

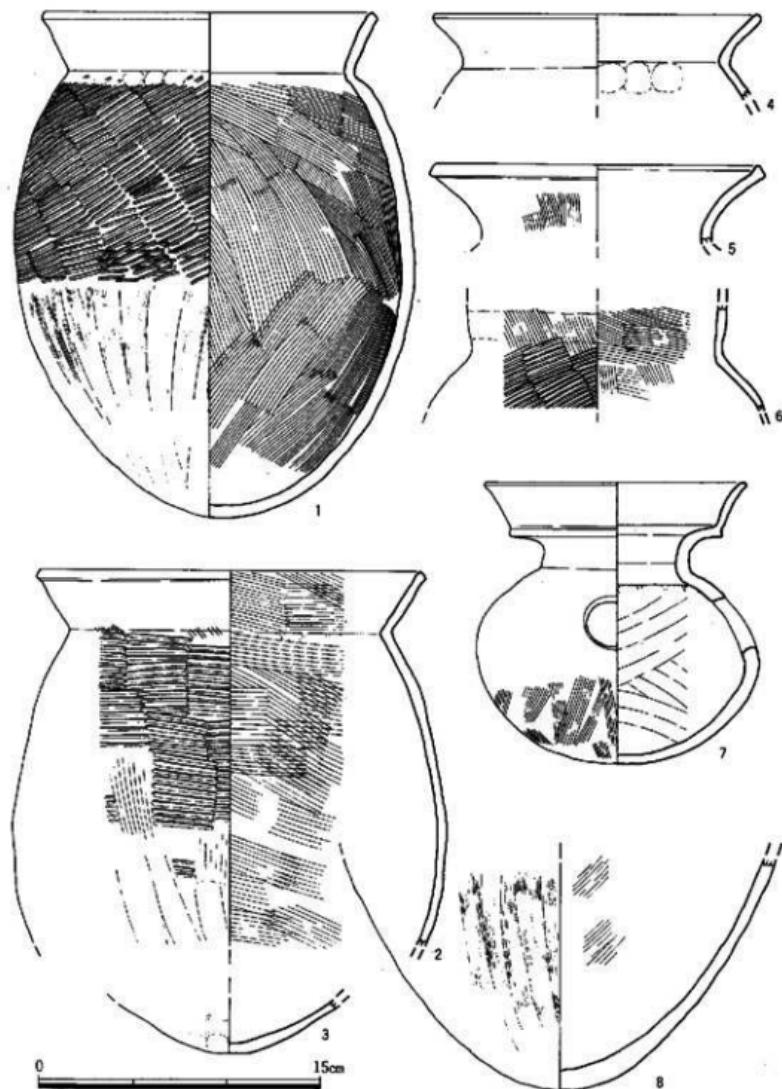


Fig. 13 住居跡出土遺物 (1/3)

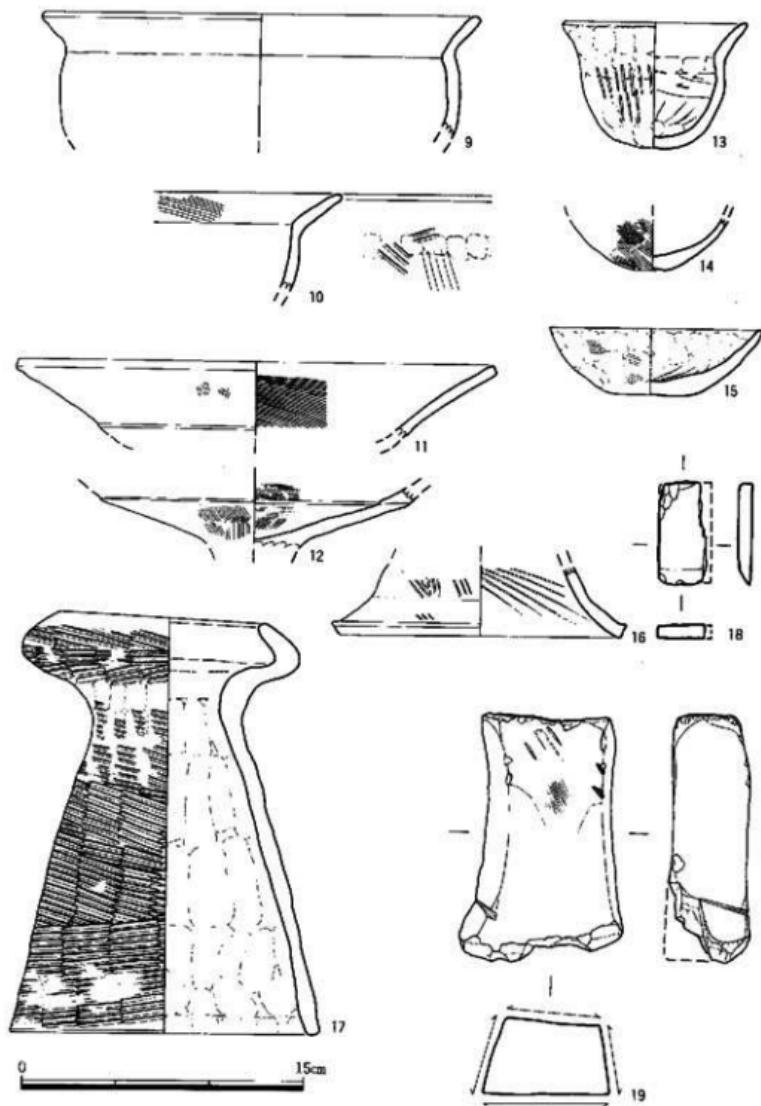


Fig. 14 住居跡出土遺物 (1/3)

3, 8は壺の底部で、3は小さく平底を残している。8の内面はハケ調整である。外面はタテナデを施す。いずれも1, 2の器形と思われる。

鉢形土器（9, 10） 9は口径23.0cmを測る。口縁部は外反し、端部は丸味をもつ。胴部は余り張らない。内外ナデ調整で、口縁外面にはヨコハケが残る。砂粒を多く含み、淡茶褐色を呈する。10は胴部が張らず、外面には右下がりのタタキを施す。淡黄灰色を呈する。

壺形土器（7） 口径14.2cm、器高15.0cmを測る。二重口縁を有し、口縁部の折り返しは内外に明瞭な稜を有す。口縁内面と外面は丁寧なナデを施す。外面下位にタテハケが残る。胴部内面はヘラケズリである。又、胴部中位には、径3.2cmの孔が焼成前に穿けられる。胎土には細かい砂を含み、焼成は良好。淡黄灰色を呈す。

小型丸底壺（13, 14） 13は口径9.9cm、器高6.7cmを測る。体部は丸味をもち外反する。口縁部は端部を丸く成形している。外面は粗いタテハケを施す。胎土は精選され、焼成は良好である。黄灰色を呈す。胎土は7の壺に近似する。14は杯の可能性もある。底部は小さく、上げ底である。体部は丸味があり、薄手である。外面はタテハケ、内面はタテナデ調整。胎土は精選され、淡褐色を呈する。

杯（15） 手づくり土器で、口径11.4cm、器高3.5cmを測る。底部は平底に近く、体部はわずかに丸味をもつ。外面はヨコハケを、内面はナデ調整である。砂粒を少し含み、焼成は良好。色調は淡褐色を呈する。

高杯（11, 12） いずれも杯部のみだが、11は下平を、12は口縁部を欠損している。11は口径25.1cmを測る。口縁部と体部との境は明瞭な段を持ち、口縁部は緩やかに外反する。内外面タテ方向のハケ調整後ヨコナデを施す。12は口縁部との境に明瞭な段をもつ。この部分が口縁接合部である。11縁部は11と同様な器形と思われる。内外面にハケ調整が残る。11は褐色を、12は茶灰色を呈する。いずれも胎土は精選されている。

器台（16, 17） 17は完形品である。口径10.5cm、脚部底径16.5cm、器高22.6cmを測る。口縁部は袋状を形成し、端部は丸味をもつ。外面は6～7本単位のタタキを施した後、口縁部、頸部、脚部部分はヨコナデを施す。口縁内面はヨコナデ、脚部内面は指によるタテナデを施す。胎土、焼成とも良好で、色調は淡黄褐色を呈する。壺の1, 2と作りは同一である。16は二重口縁の一部とも考えたが、口径が小さく、又、外面に荒いタテハケが顕著に認められるところから、器台の脚部として一応報告する。底径15.0cmを測る。外面はハケの他、タタキが施された後ヨコナデを施す。内面にはしばり状の痕跡が認められる。胎土は精良で、焼成良好。色調は黄灰色を呈する。壺形土器（7）と小型丸底壺（13）の胎土が同一である。

石器

石斧（18） 備半片刀石斧で、右側刃を破損している。長さ5.6cm、最大幅2.2cm、最大厚0.8cmを測る。刃部はB面からの研ぎ出しをおこなっている。基部の一部と小口は自然面を残してお

り、又、B面も研磨は荒い。材質は頁岩である。

砥石 (19) 長さ13.3cm、最大幅8.7cm、厚さ4.1cmを測る。A、B面及び両側面の4面を砥面として利用。上小口は敲打面取りのままで、下小口は粗削成形の状態で、部分的に敲打整形を行なう。材質は中粒砂岩である。

2号溝出土遺物 (Fig.15~32 PL. 15~19)

土器

器形、法量から皿は4種類、杯は2種類に分けることができる。全て糸切り底である。

皿A類 (1~5) 体部の立ち上りが強く、腰部が丸味をもち、口縁端部も丸くおきめる。口径5.5~6.9cm、器高1.2~1.5cm、底径4.4~5.2cmを測る。1、3、4は体部の内外ヨコナデ調整である。

皿B類 (6~10) 体部の立上りはシャープで、口縁端部は尖り気味である。皿A類の4もこのグループに入るかもしれない。口径6.5~8.4cm、器高1.1~1.8cm、底径5.4~7.3cmを測る。口径が7cm未満と口径が8cm前後の大、小に分けることができる。

皿C類 (11~15) 口径に対して器高の低いグループで、体部の立上りは緩やかで、丸味をもっている。口径7.4~9.3cm、器高1.1~1.4cm、底径5.7~7.2cmを測る。口径7.5cm前後と、口径9cm前後の大、小に分けることができる。

皿D類 (16, 17) 口径に対して底径の小さい器形で、立ち上りは低く、やや丸味をもっており、口縁端部はシャープである。口径8.2~9.1cm、器高1.5~1.8cm、底径6.1~6.5cmを測る。C類の12もこのグループに入るかもしれない。

皿の内、1、3、4、6、9、11、15、16、17は体部の内外面はヨコナデ調整である。15,17は内底部ヨコナデ調整である。

杯A類 (18) 口径10.4cm、器高1.7cm、底径8.4cmを測る。体部は外弯して立ち上り、端部は丸味をもつ。

杯B類 (19) 口径10.7cm、器高2.2cm、底径7.2cmを測る。いずれも体部内外面と19の内底部はヨコナデ調整である。

白磁

碗 (20~25) 5種類に分けられる。大宰府史跡分類でA類は碗Ⅲ類、B類は碗Ⅳ類、C類は碗Ⅴ類、D類は碗Ⅵ類に相当する。
註6

碗A類 (21) 蛇目高台を有し高台径5.0cmを測る。口縁部は小さな玉縁を形成する器形である。釉は青味をもった灰白色を呈する。

碗B類 (20) 大きな玉縁の口縁を有する器形で、口径16.0cmを測る。釉は体部外面上位に施されない。釉は灰白色を呈する。

碗C類 (22) 底径5.7cmを測る。外底面の削りは浅く、高台内側を直に削る。体部外面、高

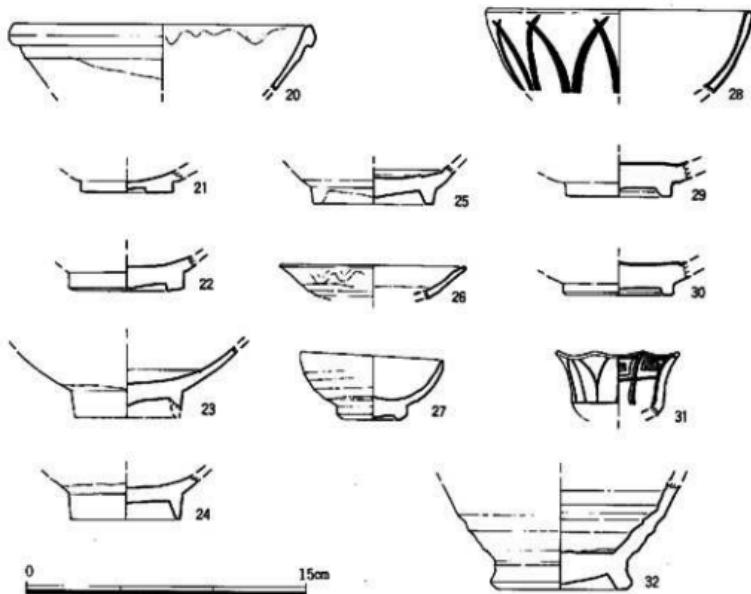
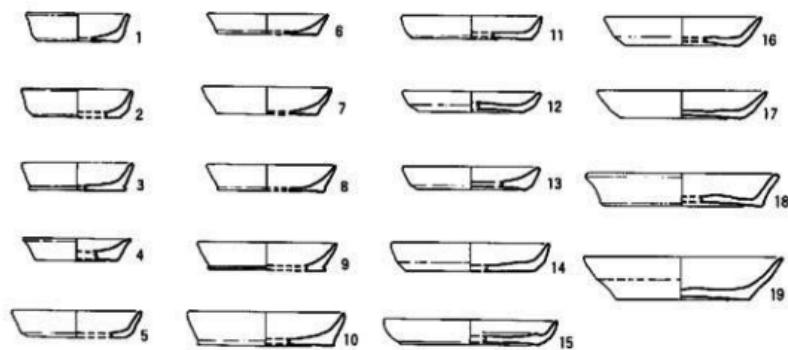


Fig. 15 2号溝出土遺物 (1/3)

台には輪が施されていない。

柄D類 (23, 24) 細く高い高台を有する器形で、23は見込みに沈線を施す。底径は23が5.7

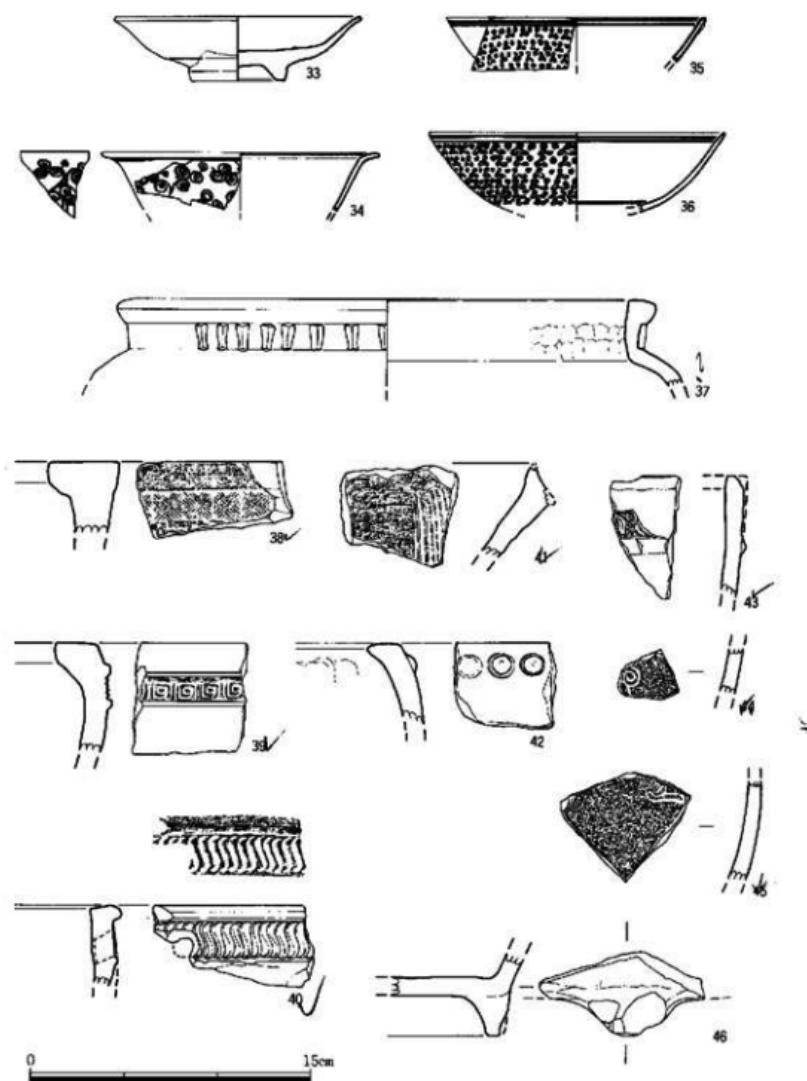


Fig. 16 2号墓出土遗物 (1/3)

cm, 24が6.0 cmを測る。軸は高台に施されない。いずれも乳白色を呈する。口縁端部は先端が外方へ折れ曲った器形であろう。

楕E類 (25) 底径6.5 cmを測る。体部は丸味をもって立ち上がり、口縁端部をこのまま丸くおさめる器形である。軸は灰白色を呈し、高台には軸を施さない。内底は環状に搔き取っている。

皿 (26) 口径10cmを測る。体部内外面に軸が施され、口縁外面は厚い。内面見込みは軸を環状に搔き取った痕跡が認められる。

杯A類 (27) 口径7.7 cm, 器高3.5 cm, 底径3.7 cmを測る。外面は丁寧なケズリを施し、軸は体部外面の下半迄施している。軸は乳白色を呈し、やや緑味をもつ。胎土は精選され、乳白色を呈し、焼成は軟質である。陶器の要素も強い。

杯B類 (33) 口径13.3cm, 器高3.5 cm, 底径5.2 cmを測る。高台内面は斜めに深く削り込む。口縁部は薄手で、腰部より強く外方へ開いている。内底には目痕が4ヶ所残っている。粘土粒を置いたもので、分離時に器表面を欠いている。軸は灰青色を呈し、一部分高台外面までかかる。朝鮮の李朝期が考えられる。

壺 (32) 四耳壺の底部と思われる。底径7.7 cmを測る。高台は外へ強く張り、底部の器肉は厚い。軸は不透明で灰色を呈し、内底と高台外面までかかる。

青磁

楕 (28~31) 2種に分けることができる。

楕A類 (28) 口径14.4cmを測る。体部外面にヘラ彫りによる幅広い蓮弁、いわゆるラマ式蓮弁を施す。内外面共に軸は厚く、うすい緑色を呈している。

楕B類 (29~30) 高台径は29が5.8 cm, 30が6.0 cmを測る。体部内外には紋様は施さない。断面コ字形の高台は低く、底部は厚みがある。軸は29が暗緑色を、30が緑灰色を呈し、いずれも薄目で、高台迄施される。30の量付の軸は搔き取られる。30の外底には目痕が1ヶ所認められる。

杯 (31) 口径6.7 cm, 現存高3.4 cmを測る。口縁は六角形の稜花に成形する。腰が張っており、体部は直立立ち上る。口縁は強く外反する。外面は腰部にヘラによる沈線を設けて、その上位に蓮弁を施す。内面は六角形の角より各々内底見込み迄継ぎの区画線を入れ、更に体部の中程に横方向の沈線を巡らし、沈線上位の区画内に雷紋を施す。軸は厚く緑色を呈する。

染付

楕 (34~36) 2種類に分けられる。

楕A類 (34) 口径15.0cmを測る。端反りの楕である。体部外面に唐草文を描く。口縁内面には2条の横線を、外面は螺旋状に2回り半描かれている。軸は灰青色で、やや厚目である。

楕B類 (35, 36) 蓮子楕で、口徑は38が14.0cm, 39が16.0cmを測る。38は小破片のため若干、口径に誤差があるかもしれない。口縁部内外には、2条の横線を施し、体部に鳥形紋様を施す。

ている。38の紋様は39に比べて小振りである。39の見込には2条の横線を巡らし、内底には体部外面同様の紋様を施す。釉は38が灰青色を、39は淡灰青色を呈し、38はやや厚目である。

陶器

壺鉢 (41) 破片のため法量は不明、口縁断面は三角形状を呈す。内外面ヨコナデを施し、内面には7本以上の条痕を下から上に施す。色調は茶褐色を呈し、非常に硬質である。壺前系の壺鉢と思われる。

その他、破片のため図示し得ないが、甕片、瓶片などもあるようだ。全て硬質である。茶褐色、或いは灰褐色を呈する。計12片である。

瓦質土器

鉢 (37, 38, 40, 42, 46~48) 37は口径29.0cmを測る。口縁部は厚く、端部は平坦である。外面頸部に長さ1.5cm、幅0.8cmの刻みを縱に施す。内外丁寧なヨコナデ仕上げであり、硬質土器である。38・40・42は軟質で、38、40の胎土は黄灰色、42は灰色を呈する。38、42は外面を、40は外面と口縁部内面にいぶしを施している。38の外面上位には、4直進文のスタンプを施す。40は玉縁の口縁部を有し、口縁直下3cmに突帯を貼付け、その間にヘラによるS字形の紋様を施す。又、後に耳としての転用であろうか、径1.5cmの穿孔がみられる。45は外面口縁直下に1.3cmの珠を貼付けている。いぶしによる銀化現象がみられる。46~48は火舎の脚で、46は外面を、47は内外面をいぶされている。46の胎土は精良だが、48は砂粒が多く含む。47は46と胎土、器形が近似し、胎土は灰色を呈し、内面は丁寧なナデ仕上げである。底径24.6cmを測る。外面は二次的に火を受け、黄灰色、又は赤褐色に変色している。

湯釜 (50) 10数片の破片を岡上にて復元したため、器形にひずみがあると思われる。復元口径約11cm、現存高約13cm、胴部最大径約25cmを測る。直口の口縁で端部は丸味をもつ。肩の張った肩部には長さ約4cm、高さ約2cmの耳を一对貼付けている。穿孔径は0.7cmを測る。一方の耳は破損しており、そのため耳の貼付部から直接肩部に穿孔し、耳の代用としている。鉢は断面コの字形を呈し、体部下半に貼付けている。口縁部外面と胴部にタテ方向の粗いハケ調整後にナデ調整を施す。内面はヨコナデ調整である。鉢下半は煤が多量に付着している。非常に薄手の土器で、摩滅のため暗黄褐色を呈するが、本来いぶしが施されていたようである。胎土は良好で、焼成はやや軟質である。

土師質土器

鉢 (39, 43~45) いずれも火舎の一種と思われる。39は口縁端部を平坦にし、外面の口縁直下に二条突帯を巡らす。突帯間に雷文をスタンプする。体部内面は粗いヨコハケを施す。黄褐色、或いは褐色を呈すが、一部の表面が淡黒色を呈しており、いぶしが施されていたことも考えられる。43~45は同一個体と思われ、背の高い鉢の一部であろう。暗黄色を呈し、砂粒を含む。体部外面に唐草状の紋様が認められる。43は突帯の位置から底部の可能性がある。

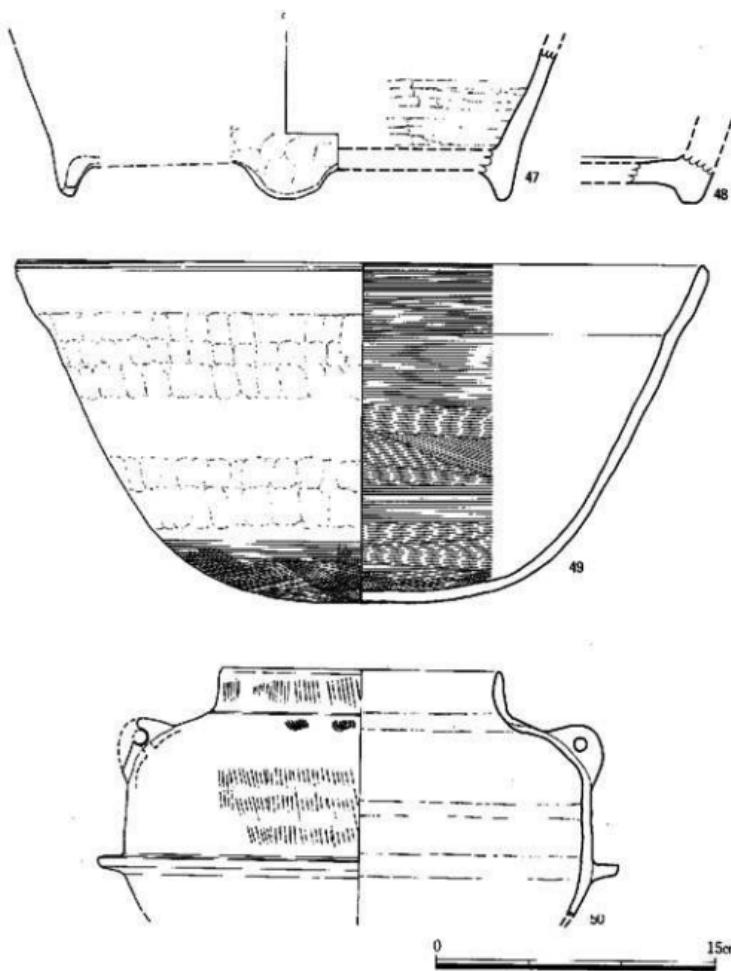


Fig. 17 2号溝出土遺物 (1/3)

鍋 (49) 口径37.2cm、器高18.0cmを測る。底部は偏平な丸底で、体部は緩く外反する。口縁部は内寄し、体部との境は内面に稜を有している。口縁端部はヨコナアによる浅い螺旋状の沈線が巡る。体部外面はヨコナデ、底部外面は粗いヨコ、タテハケ調整で、内面は底部を除いて細

かいヨコハケである。内外面は褐色を呈し、砂粒を多く含み、焼成良好。外面は口縁部を除き、煤が付着している。

以上の他、須恵質土器の甕の底部で、器壁が厚く、丸底を呈する軟質の土器が1点出土している。

石製品

石錠3点出土。底部片及び体部片が、いずれも細片のため図示しえない。1片の厚みは1.5cmを測り、内外丁寧な整形で、削り痕を残していない。底部片は外面煤が付着している。

石斧(51) 小型石斧の未製品で長さ9.8cm、最大幅4.8cm、最大厚2.4cmを測る。偏平で長方形を呈している。A、B面共に剥離痕を残し、縁辺から打撃調整を加えている。又、両面共に部分的に研磨が施されている。石質は玄武岩である。

擦り石(55) 長さ7.6cm、最大幅5.5cm、最大厚3.1cmを測る。断面は偏平で、平面形は卵形を呈する。縁辺を擦り石として利用しているが、特に上下の先端が利用される。側辺は先端に比べ、敲打痕が多く残っている。A面は摩滅しているが、B面には敲打痕が著しく、中心はやや凹みをもつ。石質は玄武岩である。

砥石(52・53) 53は長さ80cm、最大幅6.6cm、最大厚1.4cmを測る。荒削りした偏平礫を利用するもので、A面を使用するが、大部分剥落している。B面は荒い研磨を施しているだけで、側辺、小口については自然面の状態である。材質は中粒砂岩である。55は長さ11.0cm、最大幅6.4cm、最大厚6.5cmを測る。下部を欠損している他、全体に研磨が施されている。砥面として右側面が利用され、中凹みの状態を示しているが、本来はこの面とB面は平坦に形成され、他の2面は緩やかに弧形を呈していたものと思われる。宝鏡印塔の方立を転用したものと思われる。石質は砂岩である。

石鍤(54) 下半部を欠損している。現存長7.3cm、現存最大幅6.2cm、最大厚2.3cmを測る。両側辺、及び上下小口の中央に各1ヶ所づつ幅約2cm、深さ0.3cmの抉りを打撃によって設けている。石質は玄武岩で偏平な転石を用いたものであろう。

ナイフ型石器(56) 旧石器で、長さ3.7cm、最大幅1.3cm、厚さ0.8cmを測る。縦長の厚味のある剥片を利用して、A面の両側縁辺のみ調整を加えている。成形は粗い、黒曜石である。

鉄製品

釘(57・58) いずれも釘、もしくは一部と思われる。57は長さ4.2cm、頭部の幅0.8cm、厚さ0.5cmを測る。断面は先端で方形、基部で長方形を呈する。58は先端を欠損している。現存長は3.5cm、厚さ0.8cmを測る。頭部は丸味をもっている。

石塔類

板碑(59~62) 碑伝の可能性もあるが、いずれも小規模であり、ここでは板碑として扱う。いずれも石質は砂岩である。59は板碑の頭部で、現存長15.6cm、最大幅15.7cm、厚さ7.6cmを測

る。A面は平坦をなし、頭部は山形に成形する。更にその下に1~1.2cm幅の横線を二条彫り込む。碑身との境は約0.7cmの有段によって区切っている。B面は荒成形のままで、両側辺は削り調整が丁寧ではない。額の作り出しから碑伝の可能性がある。60は碑身で、上位に梵字の一部が認められる。左側辺は削りが残っている。梵字は風化のため角が取れて読みづらいが、恐らくキリーケ（阿弥陀）を表現したものと思われる。62は現存長15.3cm、最大幅14.5cm、最大厚5.7cmを測る。A面は碑身であるが梵字、或いは銘は認められない。器面にノミによる整形痕が認められる。B面は荒成形の状態である。61は板碑残片である。

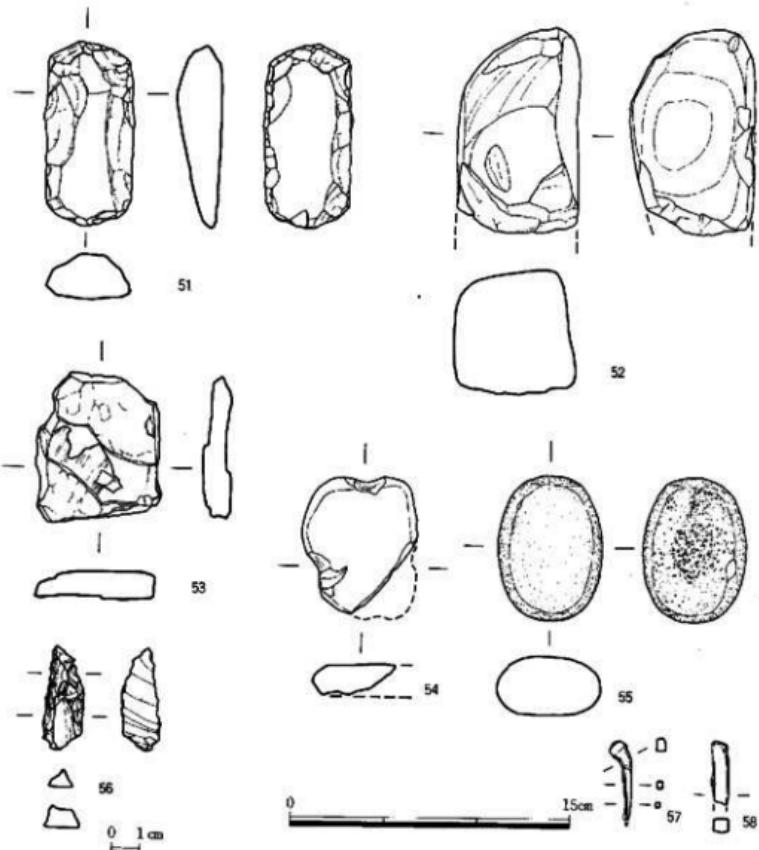


Fig. 18 2号溝出土遺物（石器、鐵器）(1/3)

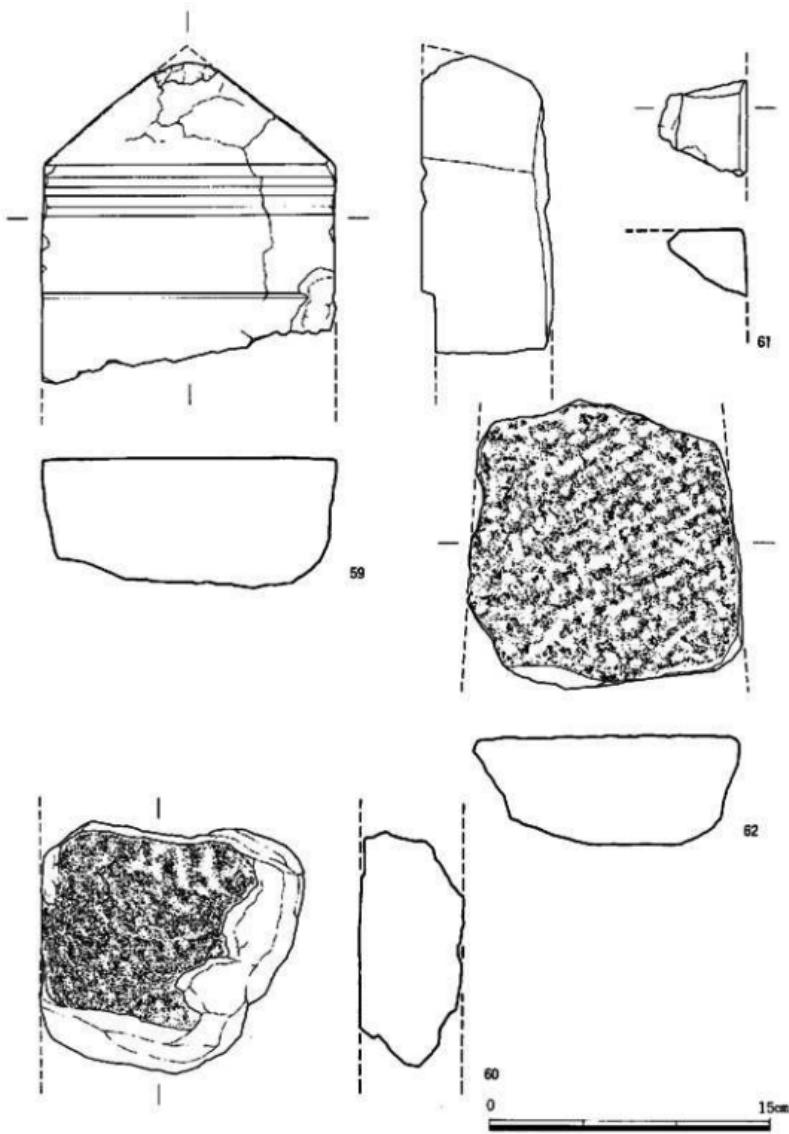


Fig. 19 2号溝出土遺物（板磚）(1/3)

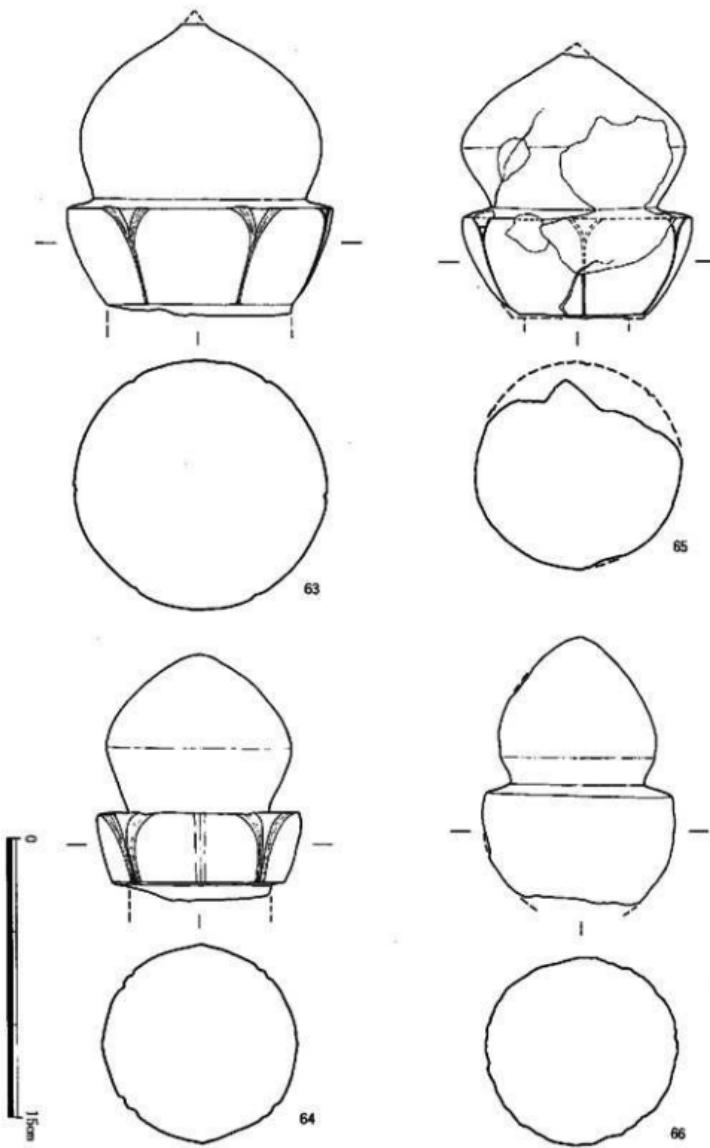


Fig. 20 2号沟出土遗物 (宝瓶印塔) (1/3)

宝瓶印塔（63～67） いずれも砂岩質である。相輪の宝珠と花台部分である。63～65の花台は上開きで、側面に蓮弁を彫刻しており、63、65は6弁を、64は8弁である。63は現存高16cm、宝珠はムクリ形という三角形を呈している。宝珠の現存高9.5cm、最大径12.9cm、花台の高さ5.6cm、最大幅14.2cmを測る。64は宝珠が菱形に近い。最大径部分に棱がつく。又、断面形は隅丸方形に近い丸味をもっている。現存高13.1cm、宝珠高8.4cm、最大径10cm、花台高3.8cm、最大径

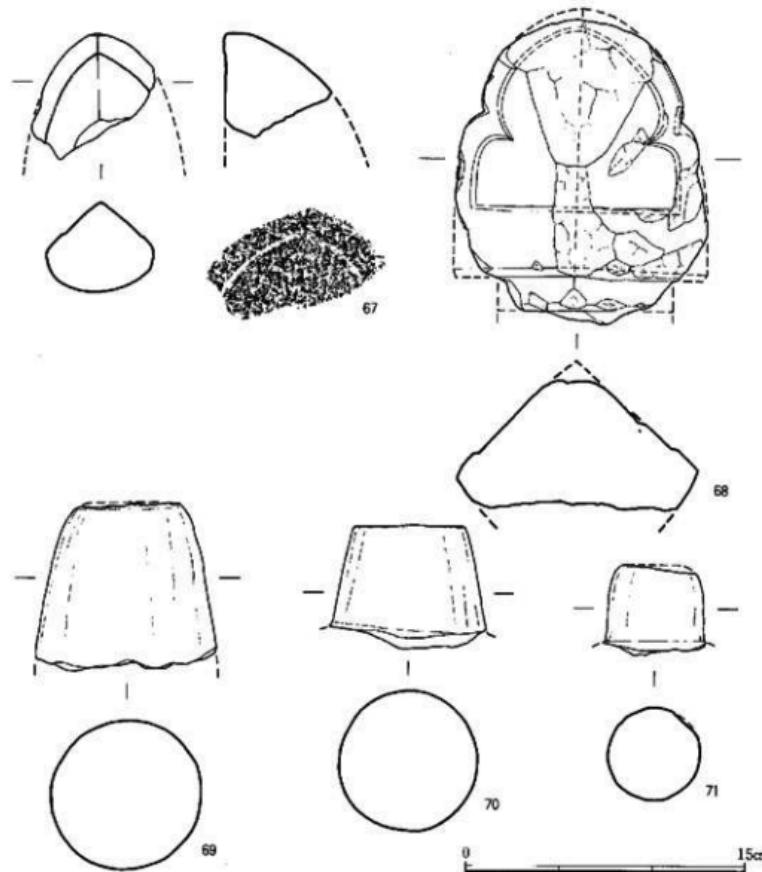


Fig. 21 2号溝出土物（石塔片）(1/3)

10.8cmを測る。65の宝珠形は64と同じく最大径が張って縫をもつ。現存高14.2cm、宝珠の現存高8.5cm、最大径12.0cm、花台の高さ5.6cm、最大径12.3cmを測る。66は現存長14.2cmを測る。宝珠形は細く尖っているが、花台は蓮弁が無く、シャープさに欠ける。宝珠の高さ7.9cm、最大幅8.5cm、花台の高さ6.5cm、最大幅10.5cmを測る。67、68は隔壁飾りの馬耳形突起である。52の砥石は方立を転用したものと思われる。67は現存長5.5cm、最大幅5.8cmを測る。二弧式で外側には約1.2cmの縁取りが施される。68は現存長15.5cm、最大幅13.5cm、最大厚7.1cmを測る。下部には茎子を作り出しており、長さ2.6cmを測る。二弧式馬耳形で、側線は直立すると思われる。二弧と下位には縁取りが施され、二弧側は幅1.5cm、下位は幅3.3cmを測る。石質は砂岩質である。その他(69~71) いずれも砂岩である。截頭円錐形を呈し、断面形は円形である。69は現存長8.8cm、最大径8.5cm、70は現存高6.6cm、最大径8.2cm、71は現存高4.7cm、最大径5.2cmを測る。全体の形状は丁寧な作りであるが、多宝塔や宝瓶印塔などの相輪の一部とは考えがたい。これらの頭頂部は平坦形をなすが、69、71は破損しており、70は器面が荒れていることから、塔の組み合わせに用いられた茎子ではないかと思われる。いずれの塔の茎子なのか現状では不明である。71については相輪の茎子と思われる。

瓦類 (Fig. 22~32, PL. 17~19)

軒丸瓦

接合後の丸瓦の総点数は339点である。その内10点が軒丸瓦で全体の約3%の割合である。軒丸瓦は3種類に分けられる。

I類(1, 2, 3) 三巴文を配する。1, 2は瓦当径13.2cm、内径7.9cmを測る。外縁は高い。巴文は左回りで、尾は長く他の巴の邊あたりに接続している。珠文は径0.7cmで、29個を数える。瓦当裏面はヘラケズリ後、ナデ調整である。1は黄褐色を呈し、2は瓦当及び背面はいぶしのため淡黒色を呈する。胎土に砂粒を含む。出土点数は多い。

II類(4) 右回りの巴文を配しているが、珠文の外側に内外を分ける囲線を設けている。珠文は径約0.8cmを測る。

III類(5) 1, 2に比べて瓦当が小振りで、復元径約10.6cmを計る。三巴文と珠文との間に囲線を設けている。巴文は左回りで長いが、囲線や他の巴文に接続しない。珠文は20個を数えるが、1ヶ所型くずれのため珠文が明瞭に表現されていない。丸瓦背面は繩目のタタキ後、タナ方向にヘラナデを丁寧に施す。谷面は側辺をヘラ削りするが、布目と布袋模が明瞭に残っている。瓦当の接合部分はナデである。

その他(6, 7, 8) 丸瓦と瓦当との接合部分で、丸瓦の先端に残されたヘラによる刻み目である。8は丸瓦の小口に、6, 7は小口と背面先端に施している。

軒平瓦

接合後の平瓦の総点数は607点である。その内14点が軒平瓦であり、全体の約2.3%の割合である。

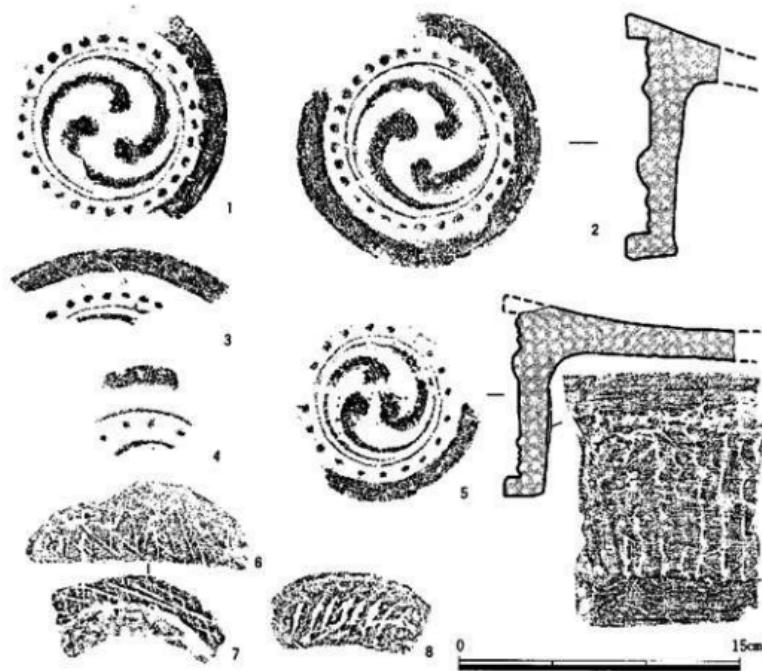


Fig. 22 2号溝出土遺物(軒丸瓦)(1/3)

瓦当の作り、瓦当面の文様から6種類に分けることができる。

I類(9) 瓦当復元幅は約23cm、瓦当厚約5cmを測る。外縁は深い。中心飾りは宝珠形で、左右に3回転の唐草文を配す。唐草の先端は下向きで巻き込みは深い。2転目の蔓草は中心飾りから派生する。額はいずれも曲線額で、ヘラケズリを施す。

II類(10) 瓦当の復元幅は約20cm、瓦当厚は4cmを測る。外縁の上弦は浅く、下弦は深い。中心飾りは宝珠形で、左右に3回転の均正唐草文を配している。額は曲線額で、ヘラケズリを施す。焼成窓く灰色を呈する。

III類(11, 12) 同一范によるもので、11の瓦当復元幅は20.8cm、瓦当厚4.2cmを測る。外縁の上弦は低く、下弦は高い。中心飾りは退化した宝珠形で、左右の唐草は6回転させるが、2転目は中心飾りから始まる。唐草は退化しており、蔓草の波は無く、蔓の先端は錐形に曲っているだけである。3転目と6転目は独立している。額は曲線額で、ヘラ削りを施している。いずれも焼成

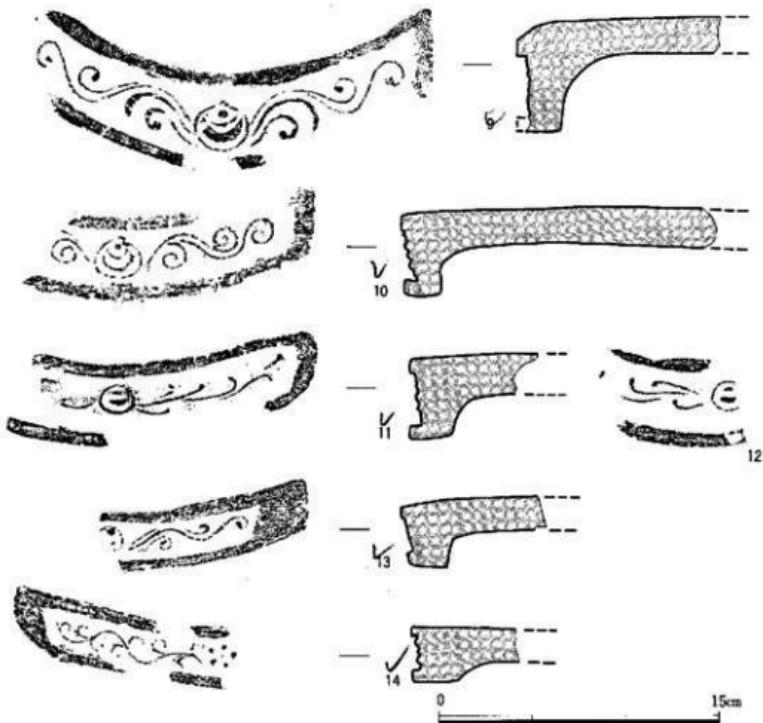


Fig. 23 2号溝出土遺物(軒平瓦)(1/3)

は弱く、11は黄褐色と灰色を呈する。12は淡褐色を呈する。

IV類(13) 瓦当復元幅20.8cm、瓦当厚3.2cmを測る。外縁の上弦は浅く、下弦は深い。脇区は幅広く2.6cmを測る。中心飾りは宝珠形で、左右に3回転の唐草文を配している。中心飾りの左側に丸くずれが認められるが、そのためいずれの蔓草も中心飾りに接していない。又、いずれも一本の蔓から派生するものではなく、各々独立して中心飾りから派生するものである。蔓の波は緩やかで、先端は下向きで深く巻き込んでいる。最上段の蔓は途中が切れている。平瓦部の両面には細かい砂が多量に付着しており、離れ砂と思われる。頸は段頸と思われ、ヘラによる調整が施される。焼成は良好で灰青色を呈する。須恵質の焼きである。

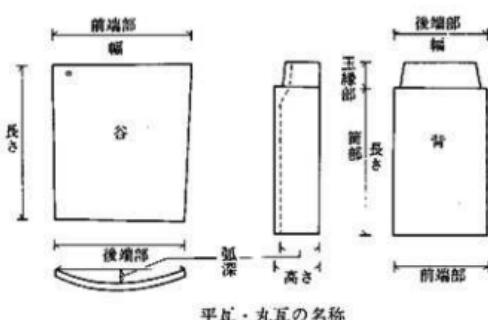
V類(14) 瓦当復元幅22.4cm、瓦当厚3cmを測る。外縁は深く、脇区の幅は1.7cmを測る。中心飾りは梅花文で、左右に均正唐草文を配す。蔓は中心飾りから独立して派生する。頸は曲線頸

でヘラによる削りが施される。谷面には離れ砂の痕跡が残っており。やや暗い灰色を呈し、焼成は良好である。

平瓦

総数約593点出土。その内、長さ、幅の明瞭な個体について図示した。

全長の明確な瓦は2点で、長さ約29.8~29.9cmを測る。幅の明確



平瓦・丸瓦の名称

な瓦は11点ある。後端幅は18.7~19.4cmを、前端幅は21.2~21.5cmを測り、平均値は後端幅約19.0cm、前端幅約21.5cmである。厚みは後端部で1.2~1.8cm、前端部で1.4~2.0cmを、谷の深さは2.9~3.0cmを測る。成形、調整手法はすべてに共通している。両側辺及び小口はヘラによる面取り整形を行ない、背、谷面は丁寧なタテ方向のヘラケズリを施す。後端部はヘラで幅1.8~5.4cmに斜目に削り落としている。離れ砂は18, 20, 22は両面に、24は谷面に、21は背面に付着している。又、15, 16, 17の谷面には、中心線に対し、ほぼヨコ方向に數本の紐状の痕跡がある。これは型を用いて作る際についたものと思われる。谷面に糸切痕の残った瓦もある。19は前端部左隅角を切り落として面取りしており、16は後端部から約4.5cmの中心線上に径1.8cmの釘穴を穿孔している。同例は4個体認められる。釘穴には鉄錆の付着した例も存在する。胎土に1~3mmの砂粒を多く含み、焼成は良好である。色調は17, 19, 20, 22, 23は黄灰色、もしくはやや暗い黄褐色を呈し、15は灰青色を呈する。その他はいぶしを施されるため黒灰色もしくは淡墨色を呈する。

丸瓦

総個体数319個体を数える。その内、長さ、幅の明瞭な丸瓦について図示する。

丸瓦の成形手法、大きさから見て、3種に分けられる。

A類(25)個体数は非常に少ない。下部を欠損しており全長は不明だが、筒部前端部は16.4cm、玉縁長3.8cm、玉縁尻部推定長6.8cm、筒部厚3.5~3.9cmを測る。筒部背面は繩目のタタキ痕が残っており、縱方向のヘラ削り調整が施される。一部に離れ砂の痕跡が残る。谷面には細かい右目と横方向の縦状の痕跡が残る。この間隔は約8mmで均等であるところから、型に被せられた布袋の紐跡であろう。糸切りが施され、部分的にヘラ削りも行われる。周縁はヘラによる面取り調整される。玉縁部は背面はナデ調整を、谷面はわずかに粗痕が残る。小口内側と周縁は丁寧なヘラ削りによって面取りを行なう。全体にいぶしが施されるが、背面の半分は地肌の灰色を呈している。

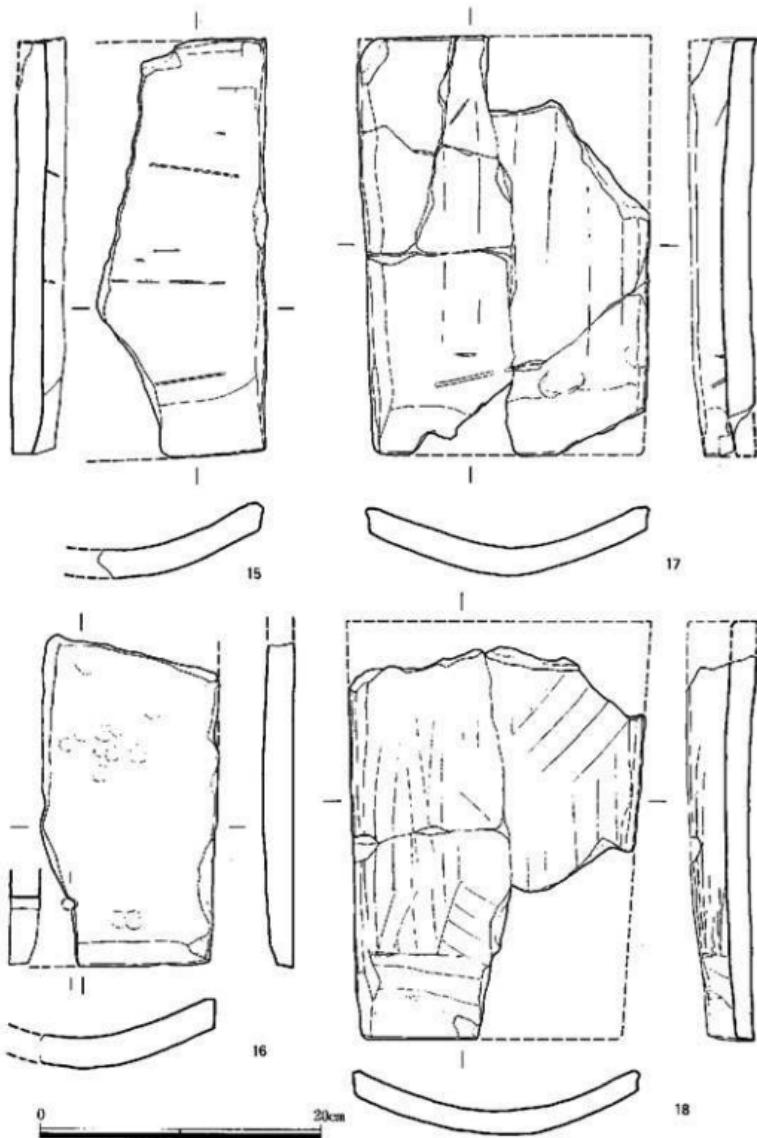


Fig. 24 2号溝出土遺物(平A)(1/4)

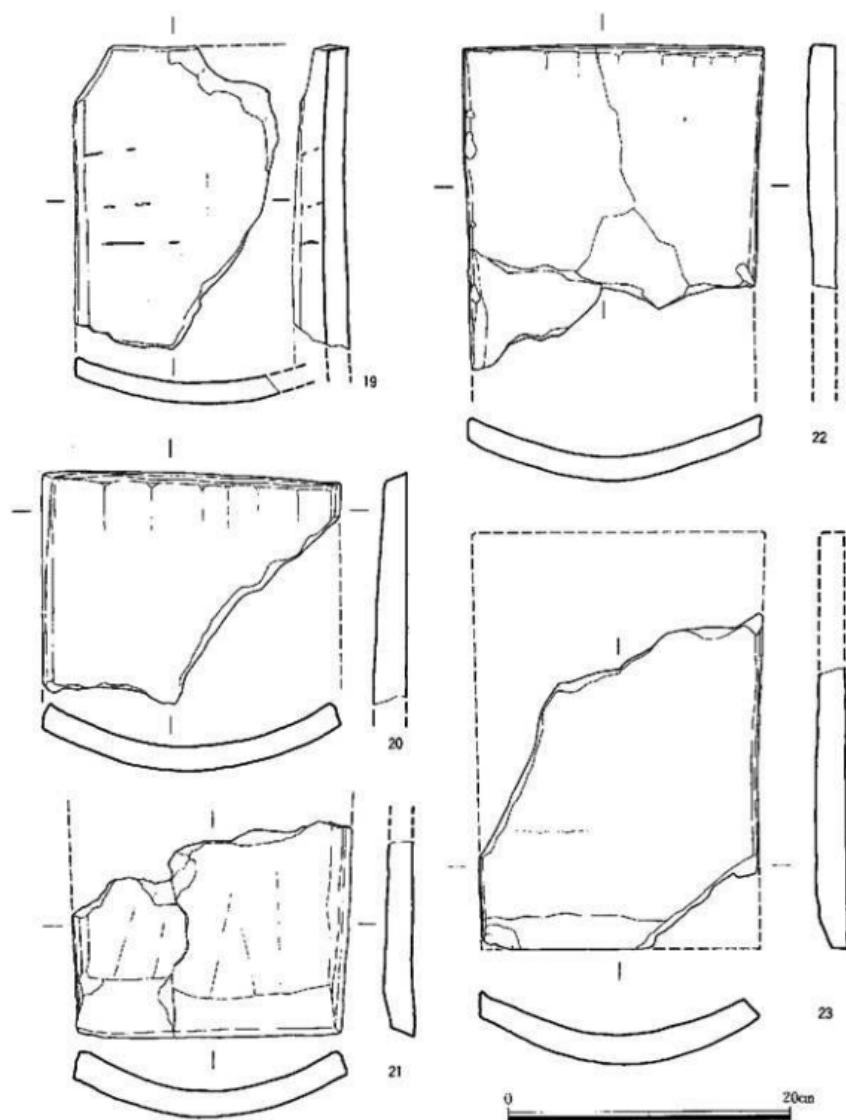


Fig. 25 2号沟出土遺物(平瓦)(1/4)

B類 丸瓦のほぼ90%以上を占める。いずれも成形、調整手法、胎土に共通するが、いぶしが丁寧に施されるものと、いぶしを全く施さないものの2つに分けられる。全長は完形品が一点も無いため復元推定で約30.8cmを測るものと思われる。筒部長は26の27.3cm、筒部前端部幅10.9~16.8cm、筒部後端部は11.8~12.3cm、平均値12.0cm、厚さ1.7~2.1cm、玉縁長2.9~3.9cm、平均値3.4cm、玉縁段幅9.9~10.8cm、玉縁尻部6.2~6.9cmを測る。背面はいずれも繩目のタタキ痕が残っている。玉縁の背面は丁寧なナデ調整で谷面は布目痕が残っている。小口内側は1~3.4cmの幅でケズリ込んでいる。29は玉縁小口から8.3cmの中心線上に径1.2cmを測る釘穴が穿孔されている。離れ砂は34は谷面にわずかに痕跡を残している。

上記のB類の内玉縁が上反りするものI類と、内側へ丸味をもつII類がある。

I類の背面はタテ方向のヘラケズリを施されるが一般に前端部にケズリ痕は明瞭に残る。26、27、34は特に丁寧なケズリである。谷面はいずれも粗い紐を組んだ布目痕が残っており、左下りの糸切り痕が残っている。34は谷面にタテ方向の太い繩紐状の痕跡が認められる。26・27の谷面には縦方向のヘラ描き条線を施している。周辺部は丁寧で幅広いケズリによって面取りを行なっている。後端部小口内側は幅1.8~5.4cmのヘラケズリを行なう。玉縁内側のヘラケズリは幅2~3.5cmを測り、筒部との断差は小さい。胎土に砂粒を含み、焼成は良好で、いぶしの施されるものは少ない。灰色、又は黄褐色を呈し、出土量が多い。

II類 (24, 33) 背面のケズリは頗著では無く、ナデに近い。谷面の布目は細かく糸切り痕は右下りである。中心から左手に繩状の痕跡が残る。布袋の縫い縫合であろう。谷面の玉縁との境の段差は大きく、玉縁小口内面のケズリは1cm内外である。胎土は緻密で、焼成は一般に軟質である。いぶしのため黒灰色、又は黒色系を呈し、胎土は灰色である。出土量は少ない。

I・II類は規模に於いて変化はないが上記のように成形、調整方法に於いてわずかに相違が認められるが時期的相違を表すのか、否か俄に決めがたい。

C類 (30) A類同様に個体数は非常に少ない。下半部を欠損しているため全長は不明。筒部後端幅10.9cm、玉縁部長2.5cm、玉縁段部幅8.5cm、玉縁尻部幅約6.8cmを測る。B類に比べると一回り小型である。筒部背面は繩目のタタキ痕が残るが、他は摩滅のため不明。谷面は紐を組み合わせた様な粗い布目痕が残っており、玉縁面へと連続する。糸切りは施されない。周縁は丁寧で幅広いヘラケズリが施される。玉縁との段差はほとんどない。玉縁の背面はやや反り気味でナデ調整である。胎土は緻密で、焼成は軟質である。色調は灰黄色を呈する。

以上、丸瓦について概括したが、A類、B I類、B II類、C類の4種類に分けることができる。この内、胎土、成形、調整手法からみて、A類とB-I類は近似した特徴をもっており同時存在が考えられる。又、B I類とC類は胎土に相違があるものの、器形や谷面の組織痕に共通した点をもっており、時期に余り差が無いと考えられる。大型のA類、小型のC類は共

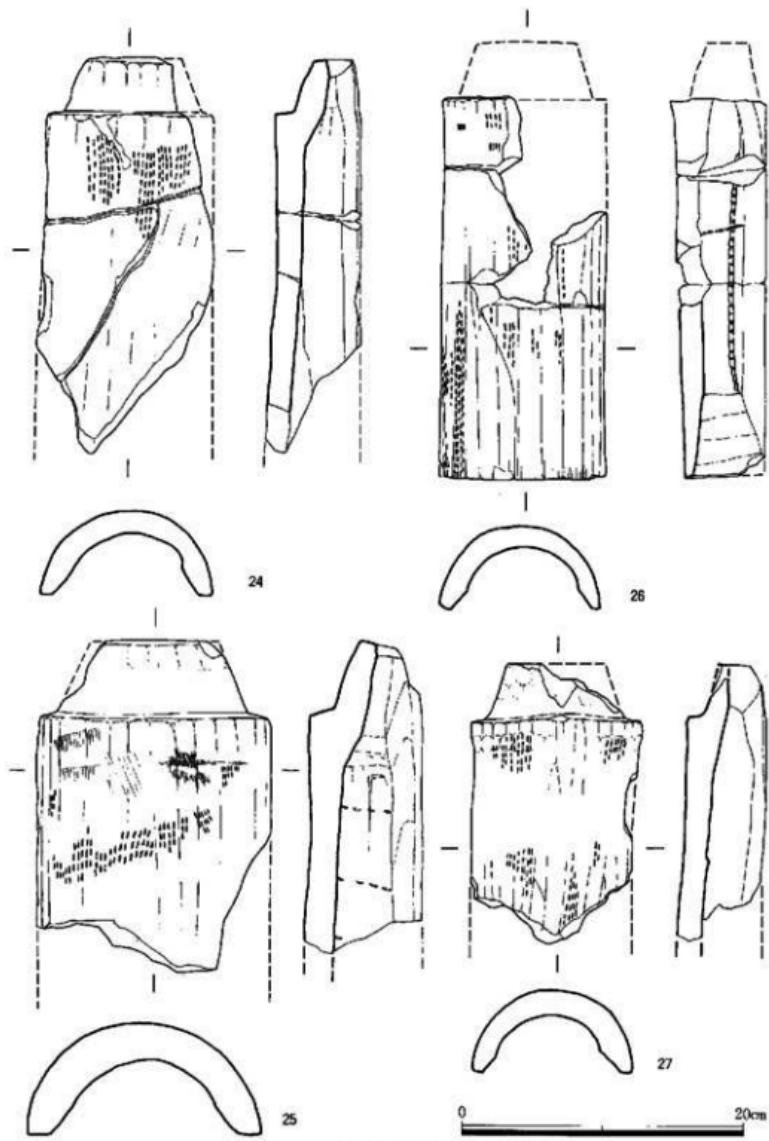


Fig. 26 2号溝出土遺物（九瓦）(1/4)

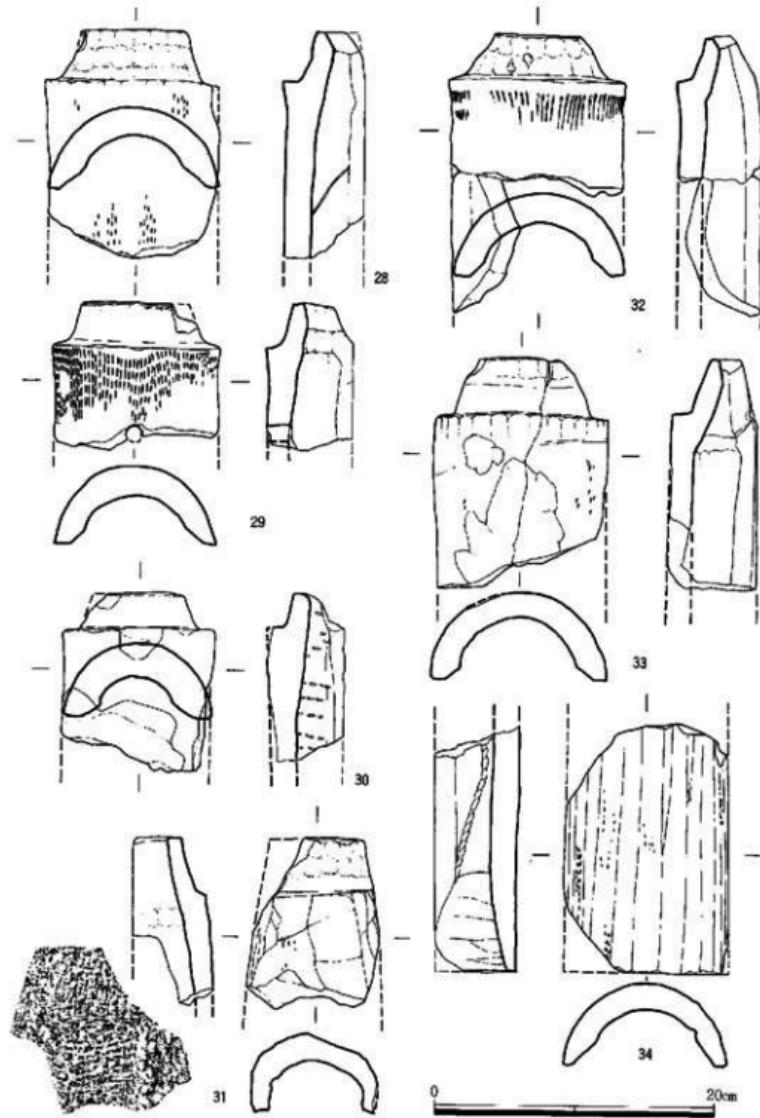


Fig. 27 2号溝出土遺物（丸瓦）(1/4)

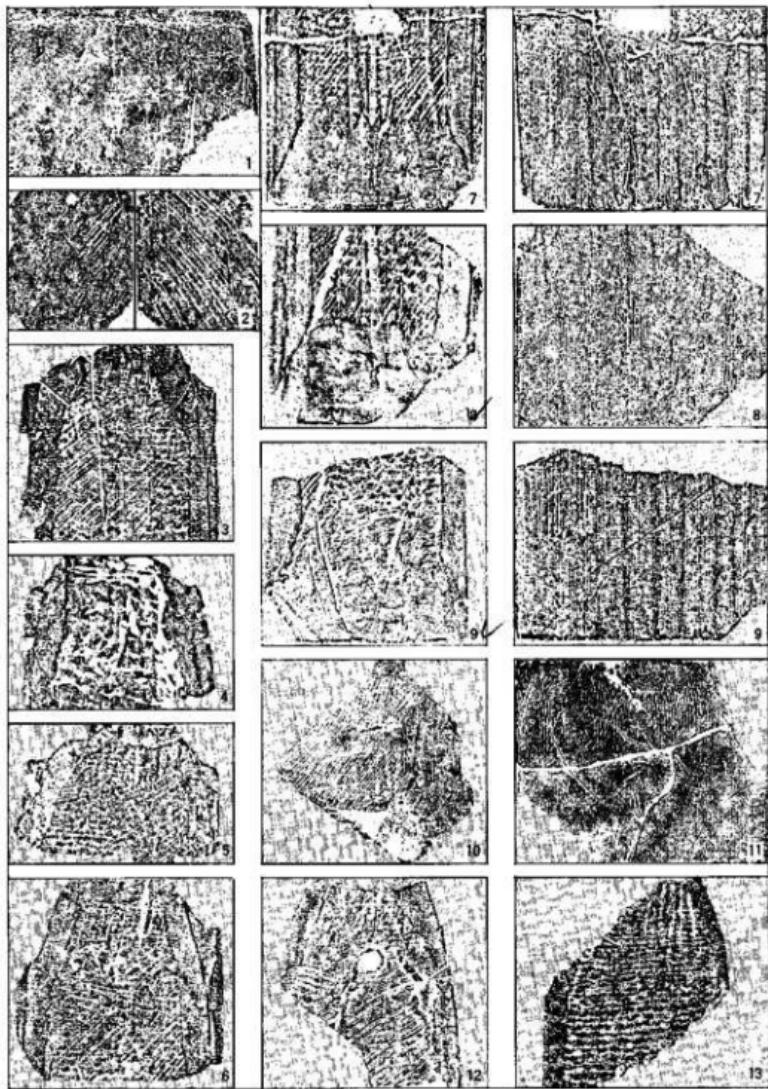


Fig. 28 2号墓出土遗物（瓦拓本）(1/4)

にB類に比べて出土量が少ないが、これは使用箇所が限られていたためで、A類は棟瓦として使用されたものであろう。

鬼瓦 (Fig. 29, 30, PL. 18)

鬼瓦の一部と思われる破片は全部で12片あった。その内、破片箇所の判別できるものは4点あり、鼻3個、牙1個である。鼻2個については図示し得た。

顔面 (35, 36) 35は鼻先と鼻孔の一部を欠損しており、現存最大幅16.2cm、復元幅約18.0cm、現存最大高11.2cm、復元高約13cm、鼻腔径4.4cmを測る。鼻スジはやや丸味をもって立ち上る。平面形では鼻先は丸味をもち、小鼻が張っているが、断面は三角形状を呈する。鼻孔は裏面に穴を開けており、深さ4.6cmを測る。外面は丁寧なナデ調整を施こすが、目元は粗口のハケを横方向に深く刻みつけ強調している。裏面はヘラ削りである。灰白色を呈し、焼成は良好。他に同泡と思われる鬼瓦片が1片ある。36は鼻幅10.8cm、鼻高9.4cmを測る。鼻腔は短径2.8cm、長径4.0cm、深さ2.8cmを測り、不整格円形を呈す。平面では鼻先は尖り氣味にケズり出しておらず、小鼻は丸味をもつものの35ほど張ってはいない。断面はだんご鼻状を呈し、鼻スジには瘤状の突起をもっている。全体にナデ調整が施される。裏面は指ナデ調整である。焼成は良好で黄土色を呈す。

板部 (37) 最大長13.0cm、外縁部の厚さ6.2cmを測る。板部の一部分の破片で、幅4.1cmを測る外縁に径5.2cmの円文を配している。内縁の文様は不明である。器壁も厚く、丸瓦との接合も不明確なところから、鬼瓦の板部と判断した。内外ナデによる丁寧な作りで内面の凹面には指圧痕が明瞭に残っている。いぶしのため内外黒色を呈し、胎土は灰色である。

把手 (38) 現存長17.6cm、中央部分の最大幅7.7cm、最大厚5.7cmを測る。柱状を呈し、一辺は平坦に他辺は丸味をもたせており、断面は三角形に近い形状である。全体はヘラ削りの整形が施されるが、平坦面には離れ砂の付着が認められる。又、左側辺の下位にはヘラによる刻み状の傷が残っている。この形状を示す道具瓦は他例には見当たらないが、鬼瓦の裏面に設けている把手がやはり柱状をなすことから、規模からみて鬼瓦の把手と考えた方が良いであろう。焼成は良好で胎土に大粒の砂を含む。色調は灰白色を呈し、鬼瓦の鼻部 (35) と同一の胎土、焼成である。

瓦埠 (Fig. 31, PL. 19)

総数24個を数える。その内形態的に分ければ、四角埠は9個、三角埠は5個である。

四角埠 (39~43) 四角埠はほぼ方形を呈し、周辺をやや斜目に切り落とし、断面を台形状に成形したものである。完形品は1点も無いが、同時期と思われる他の地点出土の瓦埠からほぼ復元長は約20.5cmを測ると思われる。厚さは統一されていず、42の2.6cmが最小で、最大は40の3.8cmである。表裏面は丁寧なナデ調整を施し、側面はヘラ切り落とし後、39~41のように周辺を面収調整したものもある。いずれも表裏面に離れ砂が付着しているが、部分的に両面の離れ砂をヘラによって削り取っているものもある。40には再利用の径約1.3cmを測る条痕がある。

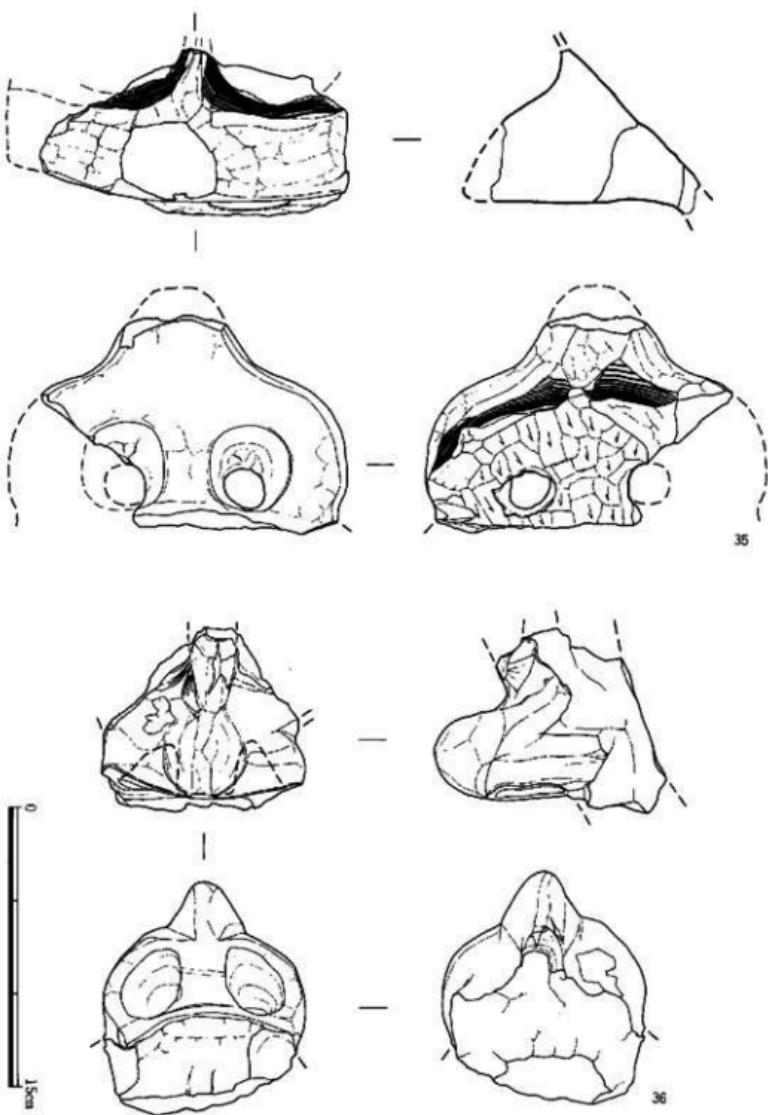


Fig. 29 2号溝出土遺物（鬼瓦）(1/3)

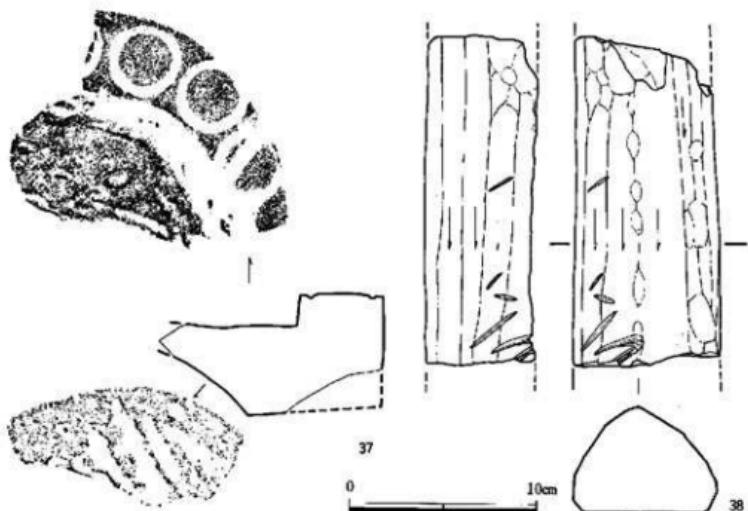


Fig. 30 2号溝出土遺物（鬼瓦）(1/3)

39は暗灰色を、40～43は黒灰色を呈し、いぶしが施される。いずれも焼成は軟質である。

三角塊（44～46） いずれも小片で二等辺三角形の鋭角部分を残している。四角塊の対角線から切り落として作ったもので手法は四角塊と同一である。推測値は二辺が20.5cmを、一边が約28cmと思われる。厚さは2.9～3.2cmを測る。全体にナゲ調整が施される。46はA面に離れ砂の痕跡が残っている。色調は黄灰色～淡黄褐色を呈し、四角塊に比べ明るい。

道具瓦 (Fig. 27, 32, PL. 18)

47, 48は塊とも思われるが、いずれも上位を弧形状に作り出している。47の切口は斜目に、48の切口は直に施している。厚さは47が3.0cm, 48が3.3cmを測る。離れ砂は47はA面のみ、48は両面に付着している。47は弧形部の裏面にヘラによる格子目状の刻みが施される。これは他の瓦との接合部分であるが、破片のため全体形を推測することができない。31, 50は丸瓦の一類と思われる。使用個所は不明である。31は玉縁付の丸瓦で筒部の両側辺を谷面へ強く内傾させ弧深を高くしている。背面は筒部の先端から荒いヘラ削りを施すが、これによって下縁との境の段差を小さくしている。玉縁小Iは未調整である。下縁部長4.2cm, 尻部幅6.8cm, 段部推定幅8.0cm, 筒部推定幅9.0cmを測る。谷面全体に格子目の組織痕が残る。糸切り痕は無い。丸瓦に比べ、玉縁がわずかに長いが、胎土はB-1類と同一であり成形段階で転用したものと思われる。50は筒部を成形段階で転用したもので他に3片ある。50は後端部幅7.8cm, 筒部中央幅11.4

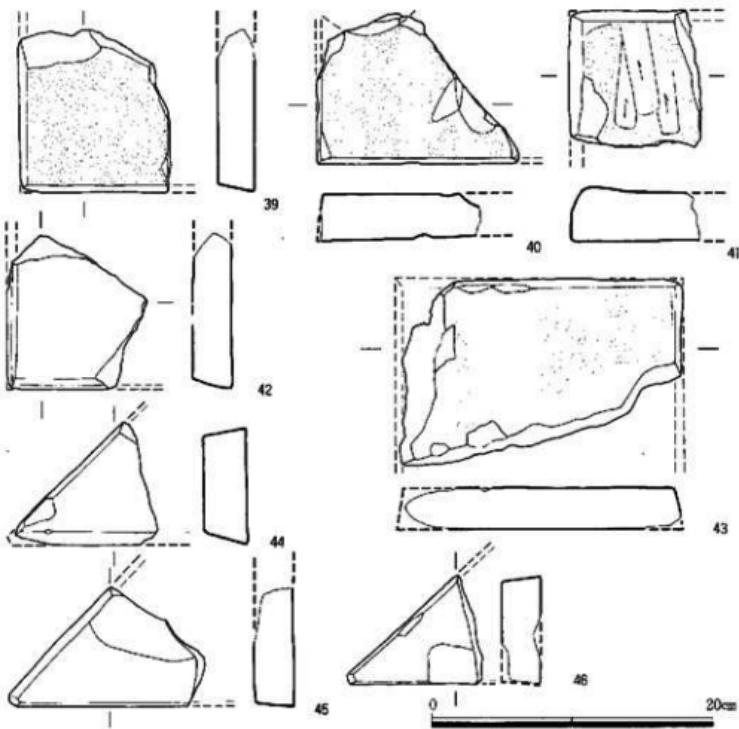


Fig. 31 2号溝出土遺物（瓦端）(1/4)

cm. 厚さ2.0cmを測る。後端部の両側の隅角を切り落とし、種やかに丸味をもたせる。背面は繩目のタタキを施す。後端部は窄めるように背面端部をヨコ方向にヘラケズリし、丸味をもたせている。本例のみ全体にヨコナナ調整である。後端部から約6cmの中心線上に径1.2cmの孔を設けている。谷面は布目痕を糸切りによって調整しており、周縁は丁寧なヘラケズリを施している。後端部の小口内側は1cm幅のヘラ削りを施す。胎七、及び手法はB-I類と全く同じ方法である。この瓦の用途は、ほぼ31と同様に使用されたと思われるが不明である。49は側辺部の厚さ3.6cmを測る。A面はヘラにより平坦に調整される。左側辺は弧形を呈する。B面は弧形の縁約2.5cm幅を残して深く削り込まれている。B面弧形縁辺部分に離れ砂が付着。どの器材の破片か不明である。

伏間瓦（51～53） 他に14点出土した。丸瓦の両側に平瓦部を接合させたものである。51、53は平瓦部分である。51の平瓦部幅8.4cm、厚さ2.4cmを測る。A面は繩目のタタキ痕が残る。B

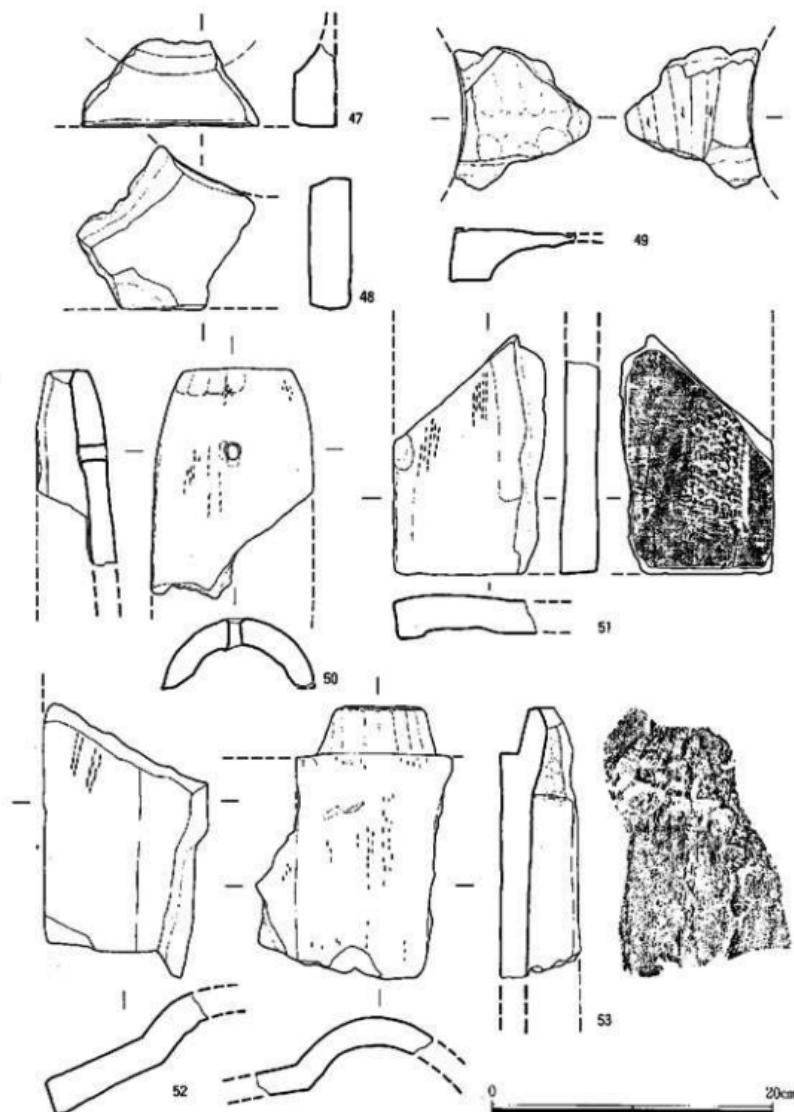


Fig. 32 2号溝出土遺物（道具瓦）(1/4)

面は離れ砂が付着している。側辺はヘラによって丁寧な面取りを、A,B面はヘラ調整を施す。53は51と同じ調整だが、B面に組織痕を残す。又、やや弯曲している。離れ砂はB面の縁辺部分に認められる。半瓦部分の現存幅10.5cm、厚さ2.3—2.9cmを測る。灰青色を呈する。52はB—I類の丸瓦と胎土上、作りとも同じである。玉縁背面の側縁はヘラ調整される。谷面の下縁はヘラ調整される。谷面の下縁接合部周辺は粗いケズりが施される。筒部は離れ砂の付着が著しく、又平瓦部も付着している。玉縁部長3.3cm、尻部幅6.4cm、段部幅8.6cm、筒部推定長12cm+αである。

以上、伏間瓦に於いても胎土、焼成等から2~3類に分けられる。I類は丸瓦B—I類と胎土、成形、調整手法を同一するもの。II類は丸瓦B—I類と似るが青灰色を呈し、胎土が緻密なもの。III類は胎土が緻密で、灰青色を呈し焼成の甘いもので、両面をいぶされているものである。II・III類は焼成度の違いであって、同一種類にして良いかもしれない。

以上、各種類の瓦について概説したが上記資料を踏まえて、各種瓦のセット関係について述べたいと思う。今回、検出した瓦の種類は軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦・平瓦、伏間瓦、鬼瓦・瓦搏・道具瓦と、瓦製品の大部分を占めている。特に丸瓦・平瓦の量が多く、それに比べ軒丸瓦、軒平瓦の出上は数%にしか満たなかった。軒丸瓦は3種類に分類されI類が最も多い。軒平瓦は5種類に分類され、I類が最も出土量が多い。前述のように軒丸瓦I類と軒平瓦I類は胎土、焼成に近似をもつたセッタであろう。丸瓦のB—I類、伏間瓦のI類、道具瓦の31、50は胎土、成形、調整手法とも規を一にしており同時性が考えられる。これらの胎土、焼成は軒丸瓦I類、軒平瓦I類とも近似するもので、大略セッタとして考えて良いだろう。出土量が著しく多く、胎土に砂粒を含み、焼成は堅く、黄灰色、黄褐色、灰褐色を呈する。いぶしの施されたものは少ない。これらには鬼瓦の35、36が伴うと思われる。次に丸瓦B—I類はいぶしが施され、胎土は灰色で表面は黒色を呈し、焼成は軟質の瓦であるが、これには成形手法から丸瓦A類が作る。平瓦は非常に少なく図示し得るものは無い。該当する軒丸瓦は無いが、軒平瓦は胎土、焼成からみてII類又は、III類が伴う可能性がある。III類の軒平瓦は4点出土しており、いぶしが施され、胎土は灰褐色を呈するものと、風化のためいぶしの状態は不明だが淡褐色、及び灰褐色を呈するものの二種類がある。平瓦に於いても二種が検出されていることからIII類と丸瓦B—I類はセッタの可能性が強い。又、鬼瓦の板部と考えられる37は丸瓦B—I類と同一成形手法であり、セッタとして良いであろう。

以上、概説したがこれらの時期を判断する資料は非常に少ない。最も出土量の多い大宰府史跡例と比較しながら検討を加えたい。14は同様な文様構成が見当らないが、大宰府史跡第67次調査(金光寺推定地)出土の軒平瓦(Fig.40-3)と比較すると、14が大きさに於いてやや小振りだが、唐草の構成などに近似する点が多く同系統の瓦と見て良いだろう。13は同じく第67次調査の(Fig.40-5)に比べて小振りであり、中心飾りの宝珠が細い線によって作られることや、鷲頭が広いなど作りに違いがあるが、唐草の構成、頭の作りなどに近似する点をもつてい

る。11、12の退化した宝珠形の中心飾りは細い線状の陽文だが、この宝珠形は13の中心飾りである宝珠形と共通する。頭の作りも段頭に近い。唐草文もうねりが小さく、上下に子葉をついている。唐草先端の巻き込みも小さい。こうした例は現在のところ見当らないが、瓦の作りなどから13に近い時期が考えられる。13・14と同時期の軒丸瓦としてはFig. 22-4・5が考えられる。4は珠文の外側に捲線を有するもので、大宰府史跡第43次、第45次出土瓦の中に同例を見出すことができる。5は大宰府史跡第67次調査の中に類似の瓦 (Fig. 39-4) が出土していることなどから上記の軒平瓦はほぼ14世紀代に位置するものと思われる。軒平瓦の9と10は宝珠形が近似し、又、唐草文も構成について9が子葉をもつなど若干違いがあるが、唐草の作りは近似した手法をもっており同系統と見做して良いだろう。又、9は胎土に大粒の砂粒を含み、いぶしが施されるものがある。軒丸瓦1・2はやはり大粒の砂粒を含み、いぶしが施されるものがあるなど軒平瓦9と同一の手法をもっており、セットとして考えることができる。これらの瓦は前述の軒丸瓦4、5、軒平瓦11~14に対し瓦当の作り、胎土などから後出の瓦と考えられる。

人骨 (PL. 16)

細片から粉末まで多量に出土。細片はしっかりとおり、一部に大腿骨片も認められる。骨の横方向の亀裂の状態などは火葬骨の状態に似ている。

鉄滓

鉄滓は溝の各層から出土。全部で19個ある。その内、馬体の一部と思われるもの1、鉄塊状のもの3点を含んでいる。

小 結

以上、各遺構、遺物について述べてきたが、年代は弥生時代前期から近世迄至っている。濠状遺溝である2号溝出土遺物は多岐に亘っており、特に瓦については現在では資料が少ないので興味ある資料と云える。遺構はI~IV期に分けられる。

II期の住居跡は1軒であったが、第6次調査で2軒検出しており、この区画に於いては3例目を数える。菱形土器は外面を左下り、又は、水平のタキを施し、内面はハケ調整である。壺形土器は二重II縁の壺形土器と同一の口縁を有し、胴部は球形に近い類例の無い器形である。又、胴部上位に穿孔を施すなど、器形的には須恵器に於ける趣を連想させる。内面ヘラケズリ調整はこの上器だけで、他はハケ調整、或いはナゲ調整である。これらの土器群は、壺形土器等の器形、或いは調整方法から庄内式土器の新しい時期に併行関係にあると思われるが、内面ヘラケズリの壺の出現は布留式土器併行期への過渡的段階にあるものと云えよう。第6次調査2号住居跡出土の土器群は内面ヘラケズリの上器を伴っていないものの、土器のセット、或いは壺形土器の成形手法に共通する点をもつてることから、同時期の住居跡と考えて良いだろう。

規模からみて2号住居跡が大規模であることから、この住居跡を中心とした数軒の単位集団があったと思われる。

Ⅲ期の1号溝は磁北から西へ2°30'振っている。底は南側へ傾斜しており、覆土は黒褐色粘質土を呈している。この溝の遺物はほとんど細片であり、年代を決定できるものはない。上層から瓦等が出土したが、この瓦は1号溝に重複して検出した中世の溝より出土したものである。付図1にみると1号溝の約13.2m西に併行して同規模の溝が南北方向に存在するところから、両者は同時性と同機能が考えられる。第29次調査等で検出した擋立柱建物は上軸を磁北よりわずかに東へ振っているが、1号溝及び第47次調査の2号溝がその覆土から律命時代に推測されるので上記の建物群と関わる遺構であることが充分に考えられる。

Ⅳ期の2号溝は形状、規模からみて中世の居館、又は屢敷に伴う濠状遺構と考えられる。西側の上層岡の状態では南から流れ込んだ第5層に多量の瓦が堆積していたことや、第5層の上、下層が褐色土のブロックを多量に含んでいることなどから、土塁及び建造物が南側に存在した可能性を残している。遺物は既述した通り土師器、陶磁器、鍋、鉢などの雑器、石塔類、石器を検出した。土師器皿は4類に、杯は2類に分類したが、皿は1類にみると径が小さく、小型化する傾向をもっている。陶磁器は9世紀から16世紀に及ぶが、古くは大宰府史跡分類の白磁碗I類・IV類・V類・罐類、皿III類、青磁龍泉窯系碗T類を出土する。同安窯系は1点も出土しない。14世紀から16世紀代に相当する陶磁器としては白磁杯30、青磁碗31、杯34、染付37~39、李朝青磁碗36が存在する。これらに伴うと思われる線描蓮弁の椀、或いは雷文帯をもつ椀は1点も出土しない。染付37の端反り椀はその下限が15世紀後半に及ぶといわれており、又、38、39の蓮子椀は16世紀中頃迄その下限が求められるようだ。李朝の杯は高台形の削りの状態から16世紀の前半に位置づけられる。14世紀~15世紀初頭の青磁碗31は、大宰府金光寺跡の調査で15世紀後半~16世紀中頃に位置づけられる暗青灰色上層や黒色上層からの出土もあるので、白磁杯30、青磁碗34、染付、李朝青磁に伴うものと思われる。以上からこれらの陶磁器は16世紀前半代と考えて大過ないであろう。瓦質の火舎~41、42、43、45、或いは土師質の鍋52は同様な形態をもつ一群が大宰府金光寺跡の調査で16世紀前半から中頃に位置づけられる第Ⅲ期の遺構、及び黒色上層、黒色土層より出土している。この事とは陶磁器の年代と大きな相違をもつものではなく、2号溝の終末の段階が16世紀の前半から中頃にあったことが推測される。

疊群は1号住居跡を被覆し、1号溝と重複した小溝の上層迄一部がかみ込んでいたが、これより出土する遺物は古墳時代須恵器から陶器迄幅広い。中世の陶磁器には同安窯系碗7、龍泉窯系碗8、李朝の白磁皿、鐵煎甕がある。又、須恵器、土師質、瓦質の雑器は摺鉢、探鉢がある。特に須恵質の鉢14、15は破片のため全体形を知ることをできないが、有田遺跡での出土例は多い。口縁部の形体にも幾種類があるようである。近年、北九州市新道寺・天神社前遺跡、或いは長野市J遺跡などで兵庫県魚住窯系の須恵質鉢が出土しているとの報告もあり、生産地の

検討も含めて集積分類する必要がある。12の瓦質捏鉢の出土は非常に少ない。中世後半代の瓦質捏器に比べて焼成が軟質で、いぶしを丁寧に行なっている。この種の鉢は非常に限られた時期に存在するようで、現在のところ五十川高木遺跡にみる13世紀年代の瓦質土器が下限のようである。以上のことからこの礎群は2分溝の終った段階に存在し、李朝の皿9や陶器6、17等から16世紀中頃から後半の段階が考えられる。

16世紀～17世紀の瓦についてはFig. 33に表わした。第19次調査の軒丸瓦は直径約13cmを測る。三巴文の尾は圓線状に接続し、太い珠文は29個を数える。軒平瓦は幅約20cmと約23cmを測る2種がある。中心飾は宝珠形で、3回転の唐草を配する。荒平城の軒丸瓦は直径約13.5cmを測り、三巴文の尾は圓線状に接続する。小さな珠文は12個を数える。1～4は胎土に砂粒を含み、いぶしは明瞭ではない。同時期の多聞城では軒丸瓦の直径14.4～14.9cmを測り、珠文は16～30個を数える。三巴文は右巻きと左巻きがあって、圓線をもつものもある。軒平瓦は幅約21～24cmを測り、中心飾は宝珠形、花文、三葉文がある。唐草は2～4回転する。胎土は砂粒を含み、いぶしのため銀化現象を呈するものもある。名島城の軒丸瓦は直径16～17cmの大型と13～14cmの小型がある。外縁幅は広くなり、三巴文は右巻きと左巻きがある。珠文は減少し、大型で16～20個、小型で15～23個を数える。軒平瓦は幅約26cmを測る。中心飾は退化した宝珠で、独立した4回転の唐草を配している。10は伏見城にみられると云う。いずれも銀化現象を呈し、胎土に砂粒を含まない。前代とは成形、調整方法に明確な違いがある。福岡城のI類軒丸瓦は直径約17.5cmの大型と約14cmの小型がある。珠文は太く、11～13個に減少する。13、15の三巴文の尾は他の巴文に接続しない。12は32個の珠文を有し、巴文の作りは5、6に近似する。名島城からの持込みと思われる。軒平瓦の中心飾は三葉文、菊花文で、2回転の唐草を配する。同時期の鬼井城では軒丸瓦に直径15.5cmの小型と17.0cmの大型がある。珠文は13個と15個である。軒平瓦の中心飾は三葉文で、2回転の唐草を配する。II類の軒丸瓦は更に小型化し、直径約13cmと約15cmの2種がある。巴文は各々独立する。I・II類の三巴文は右巻きが大部分を占める。軒平瓦は幅26cmを測り、写実的な三葉文、花文を中心飾とし、独立した2回転の唐草を中心飾の上位より派生させている。以上、各期の瓦について概略したが遺構に伴う資料に乏しく、

今後の調査資料を待って再検討したい。

註11. 口述範囲、有田城説明会パンフレット

2. 福岡市教育委員会「昭和56年度調査 現在整理中」

3. 北九州市教育文化事業局「長野D遺跡」1980、「延喜寺・天授寺の遺跡」1984.

4. 五十川高木遺跡「山陽幹線沿線埋蔵文化財調査報告」所収、福岡市教育委員会、1975

5. 福岡県教育委員会「大字古文跡、昭和52年度調査報告」1978

6. 横田寅二郎、森田航「大字古文跡の輸入陶器について」『九州歴史資料研究論叢4』1978

7. 真良市教育委員会「多聞城跡発掘調査報告書」1978、松永久秀、水添8(1565)年福岡 天正4(1576)年福岡

8. 福岡市埋蔵文化財研究所「福岡寺伝内連跡発掘調査報告」1978

9. 福岡県教育委員会「御陵跡」1980、瓦を1～直角に分類し、那珂城～江戸中期頃に北上される。セット開拓は想定されていないが、I・II類を17世紀とて置こう。

10. 大竹市教育委員会「奈良城跡」1980、猪鳥正則、寺澤8(1603)年奈良城

11. Fig. 33の4は石津司氏、5、6、10は石津庄助氏、7～9、17、20は高野屋某氏の品である。福岡城においては猪崎頼二氏より石垣山上上多、力武率二氏より海賊船出玉を提供いただいた。

事項		軒丸瓦・軒平瓦の瓦当文様		
1529(享禄2)年 大内氏早良郡代 大村兵庫助(典祭) 文献に表わされる。	有田道跡第19次調査	1	2	3
1551(天文20)年 大内義陽、海難房 に滅ぼされる。				
1555(天文12)年 大友氏被官小田部 民部大輔鎮道荒平 城主となる。 1580(天正7)年 小田部民部大輔戦 死。荒平城落城する。	荒平城	4		
1582(天正15)年 豊臣秀吉の九州征伐 ・(天正15)年 小早川隆景が筑前領 主となる。 1583(天正16)年 名島城竣工	名島城	5	6	7
1600(慶長5)年 関ヶ原の戦い ・黒田如水 名島城に 入る。		8	9	10
1602(慶長7)年 黒田長政名島城より福岡城へ移る。 1604(慶長9)年 黒田如水没す。 1607(慶長12)年 福岡城完成する。 1623(元和9)年 黒田長政没す。	I類 福岡城(石垣・御腰壁敷)	12	13	14
	II類	15	16	17
		18	19	20
				21

Fig. 33 16~17世紀の瓦

2. 第32次調査

調査の概要

調査対象地は福岡市早良区有山1丁目29-9番地に所在し、対象面積は237m²である。

有出地区での台地の標高は12~14mを測り、平坦部を形成するが、この平坦部は北東、北西の両方向から谷が入り込むため約200m四方に限られる。当該地はこの平坦部の北側に位置しており、標高約13mを測る。当該地の北側は谷頭に相当するため、北西方向には遺跡の拡がりが限られるものと考えられる。第19次調査の概要で述べたように、当該地周辺は区画整理事業に伴い、昭和41~43年に九州大学考古学研究室によって調査が実施されているが、当時、当該地も試掘調査の対象となっている。試掘調査は南北方向、東西方向の2本のトレンチによって確認調査が実施されているが、遺構検出の報告は行なわれていない。当該地周辺は近年多くの地点が調査されており、有山1丁目周辺だけでも26ヶ所を数えている。特に昭和53年度の第17次調査、昭和54年度の第23次、第29次、第30次調査は近接しており、これらとの関連する遺構の検出が想像された。第29次調査では既報の通り、古墳時代前期の住居跡や3間×4間の倉庫と思われる大規模な律令時代の建物跡を検出しているが、当該地は東側に隣接するだけに特に期待される地點であった。尚、第19次調査は当該地の東南約80mに位置している。試掘調査はトレンチにて確認調査を行い、柱穴、住居跡、溝等を検出したので、上記の資料を踏まえ本調査を実施した。

発掘調査は昭和54年12月14日~昭和55年2月10日と昭和55年2月25日~3月17日間の2回に分けて実施した。Fig. 40の土層図Iでみると、表土の耕作土の深さは30~50cmを測る。又、区画整理以前に小田部地区へ通じる庚申道があったため部分的に遺構面の荒れ方は著しかった。遺構面はローム層で、その上位に包含層は存在しない。遺構面は北方方向へ緩やかに傾斜している。

検出した遺構は古墳時代前期の住居跡1軒、古墳時代~奈良時代と思われる溝1条、掘立柱建物1棟、中世井戸1基、土壙4、溝1条、中世末の漆状遺構1条を検出した。

その他、時期不詳の土壙2基が存在する。

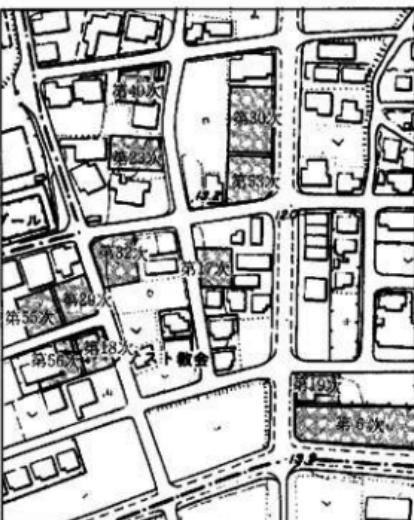


Fig. 34 第32次調査地位図 (1/2,500)

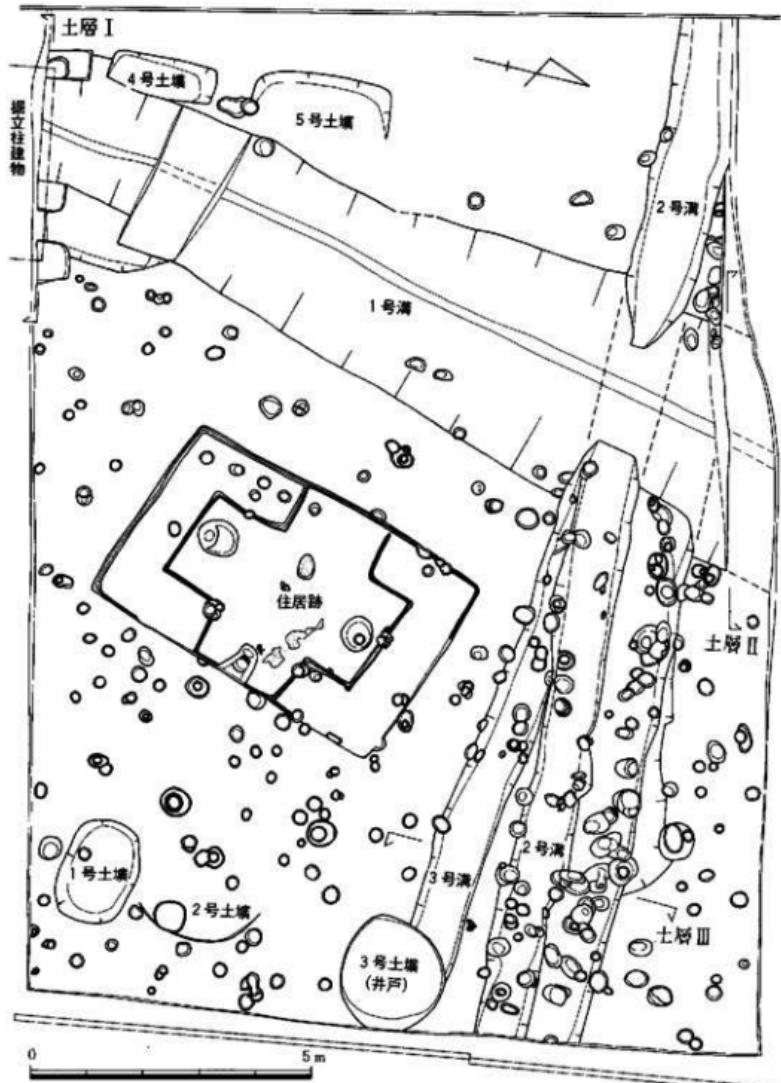


Fig. 35 造構配図 (1/100)

掘立柱建物は南側境界地に在るため規模は定かでない。遺物は弥生時代から中世末に及び、住居跡からは布留式土器併行期の良好な資料を得た。又、井戸からは土師器、瓦器椀、陶磁器、土師質上器、須恵質土器、石鍋などが多量に出土した。有田遺跡では12世紀から13世紀代の資料に乏しく、特に井戸出土の遺物が12世紀後半代の一括資料として扱えるところから貴重な発見であった。その他、2号溝からは陶質土器の壺と思われる破片を1点検出している。以下、各項目にて検討を加えてゆきたい。

検出遺構

遺構は古墳時代の住居跡1軒、律令時代の掘立柱建物1棟、中世の井戸1基、古墳時代～中世の溝状遺構3条、弥生時代～中世の土塙4である。

住居跡 (Fig. 36, PL. 21)

調査地のほぼ中央に位置し、長軸方向は南北である。区画整理時に削平を受け、壁の残存状態は悪い。平面形は長方形を呈し、隅角は明瞭に角張っている。長辺約5.7mを、短辺は南側が3.5m、北側3.6mを測る。残存壁高は東側約25cm、西側約10cm、北側と南側は約12cmを測るが西北隅の壁は完全に消失している。床の両袖にはコの字形のベッドを設けている。ベットの幅は85～92cmを測り、最も残りの良好な部分での床からの高さは6cmを測る。ベットの保存状態は悪く、周溝にて形状を確認した。壁下の周溝は全周せず、東南隅から始まり、南壁下、西壁下及び西北隅迄巡って終っている。溝幅は5～12cm、深さ6～8cmを測る。ベット下の周溝は全周し、東壁中央に接して作られたpitを巡接続している。溝幅は4～10cm、深さ4cm前後を測る。床面は長期間使用されたものかタタキ状を呈し、埋土との分離は容易であった。床面には3ヶ所の焼土痕が検出されたが、床中央西寄りの径34cm×28cm、深さ10cmを測る椿円形pitには焼土、炭が詰っており炉として用いられたものであろう。主柱は長軸方向に2本検出した。柱穴掘方は南側が径74cm×62cm、深さ30cm、北側が径56cm、深さ約30cmを、柱根径は共に約20cmで、深さは南側64cm、北側54cmを測る。掘方内には褐色ローム層が充填され固く締められていた。東壁中央に接して設けられたpitは、ベット下を巡る周溝とも接続している。これは2つのpitから成っており、形状は不定形を呈す。仮に西側のpitをPⅠとし、東側のpitをPⅡとする。両者を合わせた長さは東西62cmである。PⅠは東西22cm、南北34cm、深さ18cmを測り、椿円形を呈す。PⅡは長さ40cm、最大幅60cm、最小幅40cmを測り、断面が2段掘りで、2段目の平面形は円形に近い形状である。1段目の深さ約15cm、2段目の深さ12cmを測る。PⅠとPⅡの間にある土は地山ではなく、ロームを固く締めているように思われたが、各々のpitの覆土が黒色土であるため、撤去せずに残したものである。弥生時代後期末から古墳時代前期のベットを持つ住居跡の内、長辺の1辺中央に接して貯藏穴と云われる方形、或いは不定形のpitを設ける例は多いが、いずれもその機能に

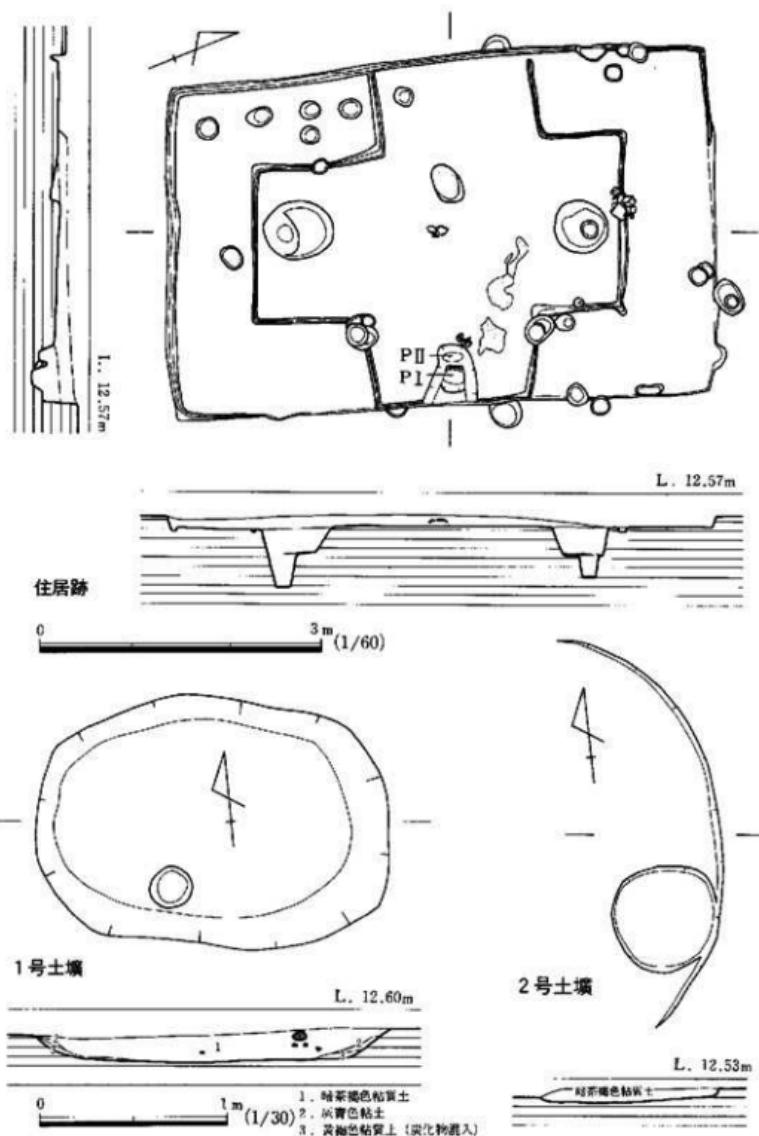


Fig. 36 住居跡, 1号・2号土壤

については明確にし得ていない。本例も当初、貯蔵穴的な要素を考えたが、従来の形狀とは様子を異にする。黒色土はP II全体に埋まっていたのではなく、西下へ斜面に入っており、他は黒色土とロームの混合土で締っていたことやP Iも同様に2段目の円形掘方以外は巣色土とロームの混合土であったことなどから、住居跡の入口に設けられた施設、つまり階段もししくは梯子が設けられたpitと考えたい。P Iに梯子の先端を斜面に差し込み、P IIに補強材を設け、周囲をローム土で固く締めたものであろう。住居跡の人口施設については神奈川県大塚遺跡検出の住居跡から梯子を構架したと思われるpitの存在が報告されており^{注2}、本例も疑い無いところであろう。集落に於ける単位集団の把握する方法の材料としても従来のいわゆる貯蔵穴状pitも、入口施設の問題から再検討してみる必要がある。同様な住居跡は今後増加するものと思われる。

遺物は土器の他、鉄器がある。土器は壺形土器、變形土器、高杯、器台、小型丸底壺、杯、鉢形土器がある。鉄器は手鎌が出土している。石器は1点も出土していない。

土 塚

全部で5基検出したが、D-3は井戸と判明したため欠番にしている。

1号土塚 (Fig. 36 PL. 22)

東南隅に検出されたもので2号土塚とは隣接している。最大長約1.7m、最大幅約1.3m、深さ17cmを測る。不整角丸長方形を呈す。断面は舟底状を呈している。覆土は第1層が暗茶褐色粘質土、第2層が灰白色粘土で、これは上塙壁全体に貼りつけられている。不純物を含まない第3層は黄褐色粘質土である。この層は第2層の灰白色粘土上の汚染を受けてロームが変色したとも考えられる。第1層には礫や土器を含んでいたが、まとまりのある出土は無い。遺物は土師器一皿、杯、甕泉窯系、及び同安窯系の青磁碗が出土しているのでほぼ12世紀中頃から13世紀初が考えられる。

2号土塚 (Fig. 36 PL. 22)

西側を削平されており、わずかに東側を残している。弧形を呈し、残存径は南北2.1m、東西0.6m、深さ5~8cmを測る。内部に径55cmのpitが存在するが土塚に伴うpitではない。覆土は暗茶褐色土に径2cm前後の灰青色の粘土ブロックが混入する。床に密着した状態で挿入石斧が当土し

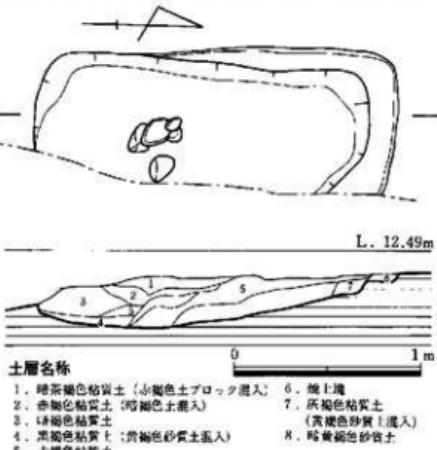


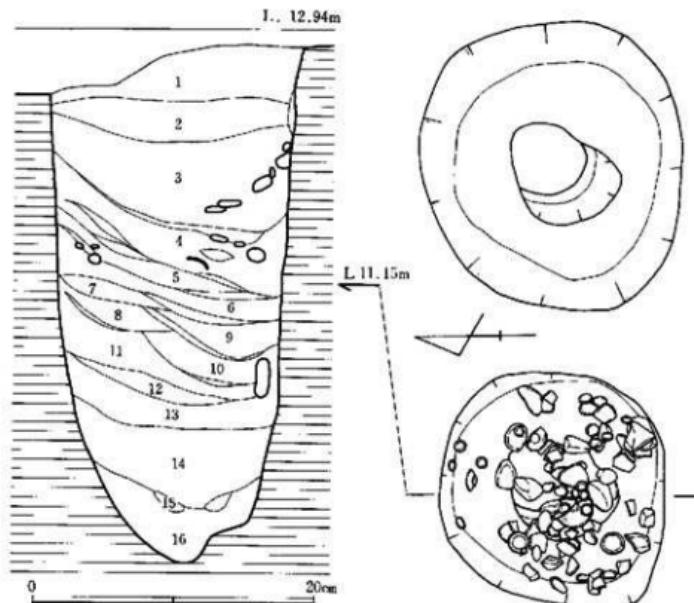
Fig. 37 1号土塚 (1/30)

たので、円形住居跡の削平されたものとも考えたが弥生時代には同様な覆土の例が無く、中世の覆土として一般的であるため上塙の削平されたものとした。

4号土塙 (Fig. 37, PL. 23)

5号土塙同様に1号溝の西南側に検出したが、土壤東側が1号溝のために削平をうけている。現存長1.8m、現存幅0.8m、深さ28cmを測る。覆土の第1層は暗茶褐色土を呈すが非常に薄い層である。他は全て焼土塊、及び炭化物で充填されている。火葬墓の可能性もあるので精査したが骨片、骨粉共に検出できなかった。遺物は土師器の細片を出土しているが年代決定の材料になり得ない。覆土の第1層の状態から中世の段階であろう。

5号土塙 (Fig. 35)



土層名称

- | | |
|-----------------------------|---------------------------|
| 1. 黒褐色粘質土 | 9. 暗茶褐色粘質土 |
| 2. 黒褐色粘質土 (炭化物を含む) | 10. 暗茶褐色粘質土 (灰及び焼土ブロック混入) |
| 3. 暗茶褐色粘質土 (ローム粒子、炭化物を含む) | 11. 暗茶褐色粘質土 |
| 4. 黑褐色粘質土 (炭化物、焼土、ローム粒子を含む) | 12. 黑褐色粘質土 (焼土ブロック混入) |
| 5. 單褐色粘質土 (炭化物を含む) | 13. 暗茶褐色粘質土 |
| 6. 暗茶褐色粘質土 (炭化した植物を含む) | 14. 灰褐色粘土層 |
| 7. 細青灰色粘質土 | 15. 灰褐色粘土ブロック |
| 8. 暗茶褐色粘質土 | 16. 青灰色砂質土 (灰褐色粘土ブロック) |

Fig. 38 井戸路 (1/40)

1号溝の西南側に検出したもので、削平が著しく原形をとどめていないものと思われる。現存最大長2.5m、最大幅0.9m、深さ7~11cmを測る。断面レンズ状を呈す。覆土は淡黒色土と黄褐色粘質土の混合土である。遺物の出土は無い。

井戸 (Fig. 38, PL. 24, 25)

調査区の東側に偏在し、3号溝との切合関係にあるが前後関係は不明である。北側は切合のため削平を受けているが、残存状態は良好である。素掘りの井戸で、上面径は東西2.05m、南北1.85mを測り、不整円形である。井戸断面は円筒状で下部がややすぼまる。井戸側下底面径は南北1.45mを測る。不整円形で、更に水溜を穿っている。水溜の径は65cm×50cmで、深さ約20cmの不整円形である。井戸の覆土は暗茶褐色粘質土と黒褐色粘質土が瓦層をなして堆積し、下位の第14・15層のみ暗青灰色粘土層、或いは青灰色砂質土層であり湧水による汚染を示している。各土層には全て礫を含んでおり、特に西側、南側から投げ込まれた礫群が離続して井戸底部迄存在した。いずれも拳大から人頭大の花崗岩系の転石を主体としている。遺物も又、各層から出土するが、Fig. 38のように第5・6層に於いてはほぼ同一の高さに土師皿14枚、杯1枚の完形品が他の陶磁器の破片と共に礫群中に散乱していた。この層の上には灰及び焼土ブロックを混入した層が存在していることから、井戸の埋戻しに関わる祭祀が行なわれたことが推測される。又、水溜の底部からも土師器杯が1点、密着した状態で出土している。

遺物は土師器が最も多く、次に陶磁器、瓦器の順である。土師器は皿、杯、瓦器は高台付椀・杯、白磁は碗・皿・壺、青磁は碗・杯・皿、青白磁は合子、陶器は瓶・壺・鉢、須恵質土器は鉢、土師質土器は鉢・鍋、石器は敲打器(擦り石)・砥石・石錐、その他、古墳時代須恵器、土師器、平安時代の瓦片などが出土している。前述したように有田遺跡では鎌倉時代の造構、遺物が非常に少なく、特に造構は皆無に近い状態である。同時性を示す多種多様な遺物の出土は有田遺跡の今後の調査に大きな手懸かりを与えてくると共に12世紀代のセット関係が良好に把握できる資料である。

掘立柱建物 (Fig. 39, PI. 23)

南側の境界地に位置していることや1号溝に切られていることから、残存状態は良好ではない。建物は南側へ伸びると思われる。

仮に西側の掘方から1, 2, 3と番号を付与すると、1号掘方径は126cm×55cm、柱根径約40cmを、2号掘方径は50cm+ α を、3号掘方径は70cm×60cm+ α を測る。3号掘方のはば中央に柱根があるとした場合、1号掘方の柱と3号掘方との柱間は約

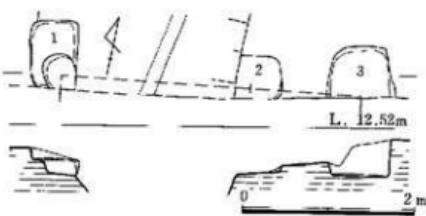


Fig. 39 掘立柱建物 (1/60)

3.4 m を測る。1号掘方と2号掘方との間にもう1ヶ所掘方が在ったと考えた場合、各柱間は約1.1mとなり非常に柱間のつまつた建物となる。1号掘方と2号掘方間は約2.2mを測り約7尺であるが、この柱間の長さは第29次調査で検出した掘立柱建物の梁行間の長さとほぼ相似する。とすれば1号掘方と2号掘方間には元来、他の柱穴は存在せず、柱間が約7尺で、東側に庇を持った建物が南側及至西側へ伸びていることが判断できる。付図2の調査地点配置図で調べると、この柱筋は第29次調査のSB01掘立柱建物の桁行の柱筋に通ることが理解できることから、SB01建物と同時性を示し、又、一定の規格と配置をもっている建物群が存在していることが明らかとなつた。当該建物の上軸方位は第29次調査のSB01建物と同じくN8°Wで、庇付の掘立柱建物である。掘方からの出土遺物は少なく、年代の決め手になり得るものは検出できなかった。

溝

南北方向の中世の溝

1条、東西方向の溝2
条の計3条の溝を検出
した。

1号溝 (Fig. 35, 40
PL. 26)

調査区の西側をほぼ
南北方向に伸びる溝で、
その規模は濠状を呈し
ている。現存長約14.5
m、最大幅約4.1 mを
測り、断面V字形を呈
した薬研堀である。南
側は4号・5号土壌、
及び掘立柱建物と切合
うため形状が変形して
いる。又、北側は2号、

3号溝とほぼ直交して
いる。いずれの造構よ
りも新しい時期である。
覆土は暗茶褐色粘質土
を主体としており、各
土層には大きな変化は

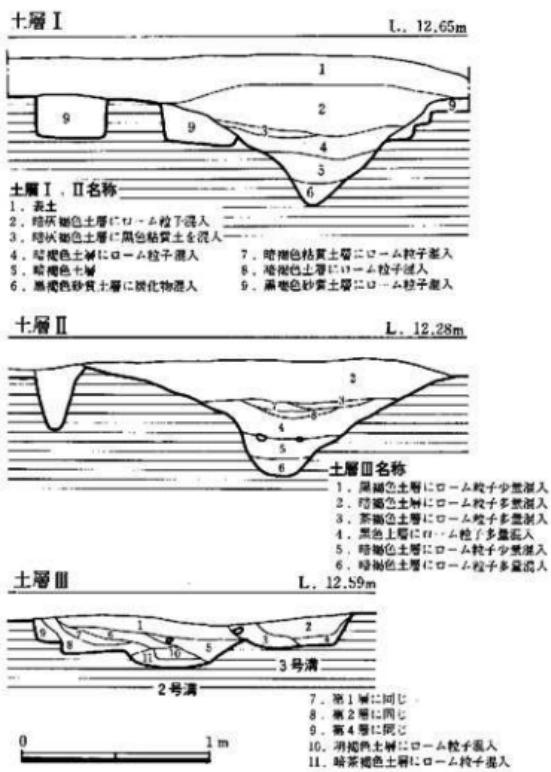


Fig. 40 1・2・3号溝土層図 (1/30)

ない。遺物の出土は著しく少ない。白磁の碗、皿、青磁の碗、盤、土師質土器の鉢、瓦質土器の釜、鼎、瓦片、ガラス小瓦を出土した。土師質土器、瓦質土器等から中世末が比定される。

2号溝 (Fig. 35, 40, PL. 26)

上軸をほぼ東西方向に置いた溝で、断面2段掘りである。最大幅2.2m、2段目の溝幅約1mを測る。深さは40cmを、2段目の深さは1段目の底から約20cmを測る。断面形は逆梯形状を呈しており、この溝は第17次調査の1号溝へ接続する。覆土は黒色粘質土を主体としており、褐色土の粒子の混入具合で分離したもので、大きな差異はない。この溝は同じ主軸方向をもつ3号溝と南側で重複しているが、土層間で観察する限り3号溝が2号溝を切っている。遺物は古墳時代の須恵器、及び土師器が出土したが、その内1点は陶質土器の口縁部片であった。

3号溝 (Fig. 35, 40, PL. 26)

2号溝と同じく主軸方向を東西方向に置いた溝で、2号溝とは北側壁で重複する。溝の東側は井戸と切合い関係にあるが、前後関係は定かではない。覆土は第1層—暗褐色粘質土、第2層—暗茶褐色粘土、第3層—黒色土の3層から成っている。溝は幅約95cm、深さ約30cmを測り、断面形は逆梯形状を呈している。遺物は井戸と同じく瓦器の碗片、青磁の碗、壺片などが出土している。

出土遺物

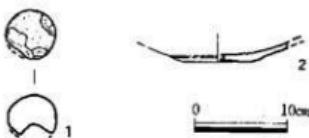
表土出土遺物 (Fig. 41, PL. 30)

青磁

皿(2) 無文で口縁部を欠いている。底径14.0cmを測る。釉は薄口で淡青灰色を呈する。外底部は丁寧に焼き取っている。同安窯系であろう。

土製品

器形不明(1) 径2.6cmを測り、一部表面が剥離している。丁寧なナダ調整である。土製玉とも考えたが、下部が接合部分より欠けた状態を示しているので他の器物の装飾、又は珠と考えられる。胎土に砂を含まない。淡褐色を呈する。



住居跡出土遺物 (Fig. 42, 43, PL. 27)

土師器

壺形土器(1, 2) 口縁部と胴部下半を欠いている。口縁部は外へ強く鉢状に開くもので、底部は丸底である。胴部は球体に近い丸味をもつ。胴部最大径29.2cmを測り、内外面はハケ調整

Fig. 41 表土出土遺物 (1/3)

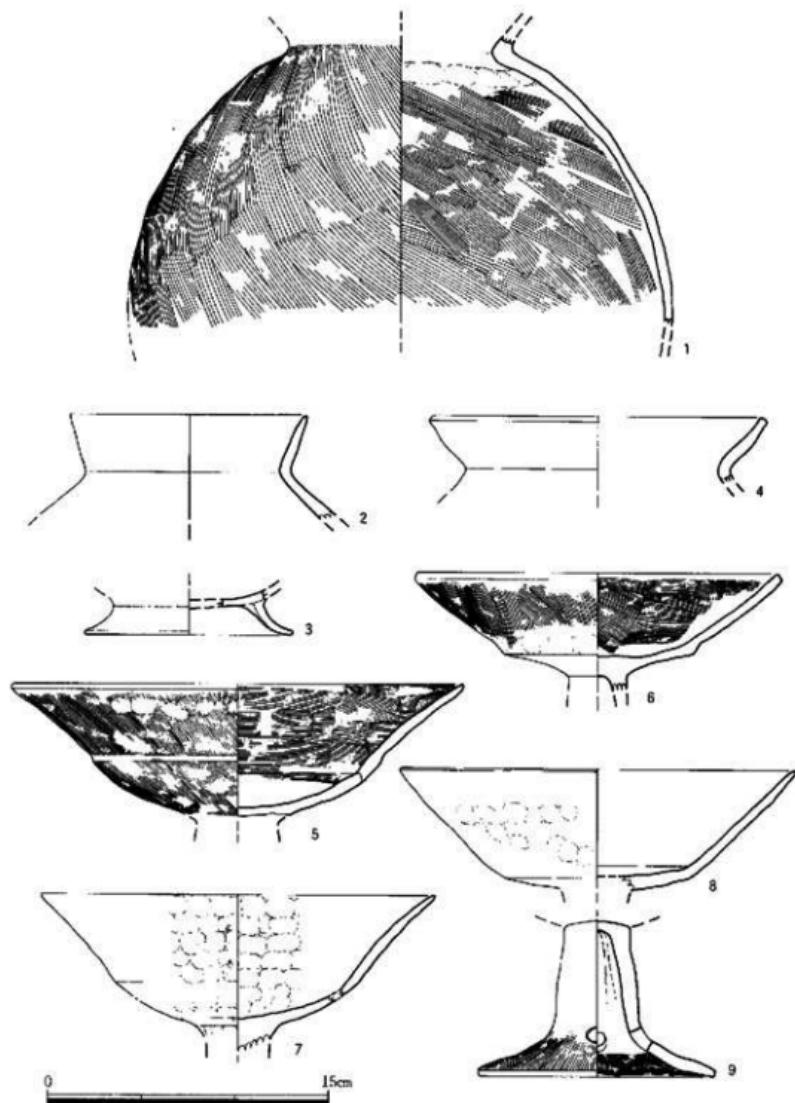


Fig. 42 住居跡出土遺物 (1/3)

である。胎土は良好で淡茶褐色を呈する。2は口径12.5cmを測る。口縁部は直線的に開き、端部は尖り気味である。摩滅のため内外の調整不明。淡茶褐色を呈する。

變形土器（4） 口縁部の破片で、径18.0cmを測る。口縁部は内窓氣味で、内外面ヨコナデ調整である。腹部はヘラケズリと思われる。細かい砂を含み黄灰色を呈する。焼成は軟質である。この土器の胎土のみ他とは相違する。

高台付壺（3） 壺部分を欠いている。高台の器高2.5cm、壺部口徑11cmを測る。外窓して強く聞く器形で、端部は丸くおさめる。胎土に少し砂粒を含む。淡黄褐色を呈する。

高杯（5～9） 5～8は脚部を欠いており、9は杯部を欠く。器型的に8の杯部と脚部9が接続する可能性をもっている。3種に分類できる。高杯A類（5、7）は体部が丸味をもち、口縁は外窓して大きく聞くもので、口縁部と体部の境は内外に緩やかな段を形成している。体部外面はタテハケを内面はヨコナデ、口縁外面はタテハケ、内面はヨコハケを施す。5の口径24.0cm、杯部残存高7.2cm、7の口径21.0cm、杯部残存高7.2cmを測る。6の摩滅は著しい。いずれも茶褐色を呈し、胎土は良好である。B類（6）は口徑19.6cm、杯部高5.6cmを測る。体部は丸味を失う。口縁部はやや内窓氣味に聞き、端部は厚く、面取りを行なう。体部との境は外面に明瞭な段をもつが、内面には無い。外面はタテハケを、内面はヨコハケを、内底部はナデ調整である。胎土は砂粒を含み、茶褐色を呈する。C類（8、9）8は口径21.2cm、杯部高約6.6cmを測る。底部は丸味を失っており、体部は直線的に聞く。口縁端部は丸味をもつ。底部と体部との境には稜を有している。全体に摩滅が著しいため調整は不明である。淡茶褐色を呈する。9は脚部口徑12.5cm、脚高8.3cmを測る。筒部の膨らみは小さく、脚部は強く聞く。脚端部は面取りを施す。外面はタテハケを、脚部内面はヨコハケを施す。筒部と脚部との境に径約1.0cmの孔を穿っている。筒部は摩滅しているが、焼成は良好で茶褐色を呈する。

小型丸底壺（10） 壺の形態よりも杯に近いが底部が丸底を残しているため敢えて壺とした。口径11.2cm、器高6.0cm、底部径4.2cm、高さ1.2cmを測る。底部は小さく丸い。大きく内窓して聞く体部をもつ。口縁端部は薄く尖り気味である。体部内外はタテハケを、内底部はナデ調整である。胎土に砂粒を含み、焼成は良好。ややすくすんだ茶褐色を呈する。

杯（11、12） 二種類ある。A類（11）は平底を呈し、口径11.5cm、器高4.3～4.7cm、底径5.5cmを測る。口縁部に垂みがある。内外面ナデ調整。胎土に砂粒を含み、黄土色を呈する。平底の杯は非常に少なく、一般的ではない。B類（12）口径12.0cm、器高3.3cmを測る。丸底を呈し、器高は低い。体部は丸味をもっている。口縁端部は尖り気味である。体部外面はヨコハケ調整を、内面はナデ調整である。胎土に砂粒を含み、黄褐色を呈する。

鉢（13） 複元口縁21.0cm、現在高7.0cmを測る。体部は丸味をもち、口縁端部はやや内傾させる。底部は丸底と思われる。内外面はナデ調整、外面の一部に粗いハケが認められる。

その他、器台形土器もみられる。

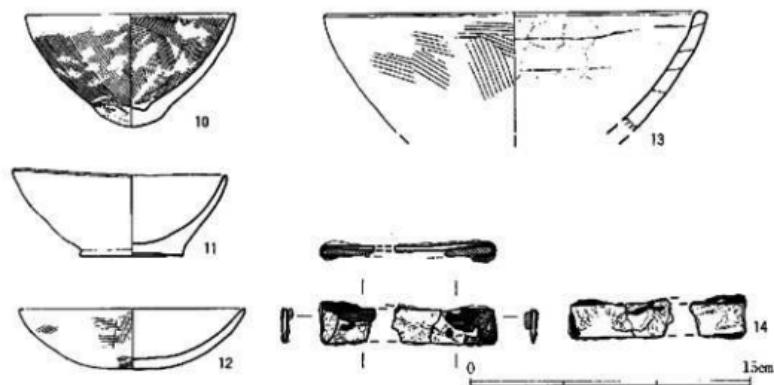


Fig. 43 住居跡出土遺物 (1/3)

鉄製品

手鎌 (14) 途中を欠いているため刃部の全長は不明だが、約10cmと思われる。Aの高さ2.1cm、刃部現存長3.4cm、背部現存長3.0cm、Bの高さ2.4cm、刃部現存長5.0cm、背部現存長5.3cm、厚さ約2.5cmを測る。両端を折返して袋部を形成するが、この袋部から背部に沿って木質が残っている。木質の厚さは約0.4cmで、幅はB部分で1.5cmを測る。この木質とは別に刃部近くは裏面にも木質の付着が認められる。A、B両方の破損部はAが2.1cm、Bが2.4cmの長さを測り、わずかに誤差が生じる。手鎌自体が本米、やや弯曲していたとも考えられる。厚み、木質の残存状態から別個体と考えるのは無理がある。錆化は余り進んでおらず残存状態は良好である。

1号土壙出土遺物 (Fig. 44, PL. 30)

土師器の皿、杯の破片を多く出土した。

土師器

皿 (1) 口径8cm、器高1.2cm、底径6.0cmを測る。体部内外はヨコナデ、内底部はナデ調整である。糸切り底である。淡黄褐色を呈する。

杯 (2) 口径13.4cm、器高2.5cm、底径10.1cmを測る。摩滅のため調整不明。淡黄褐色を呈する。糸切り底である。

青磁

碗 (3, 4) 2種類に分けられる。3は復元径16.0cm、現存高5.3cmを測る。体部はやや丸味をもって直線的に聞く。釉は緑灰色を呈する。内外面に細かい貫入がある。龍泉窯系の碗である。4は高台径5.1cmを測る。高台内面は深く削り込む。体部外面のカンナ削りは粗く下位に継

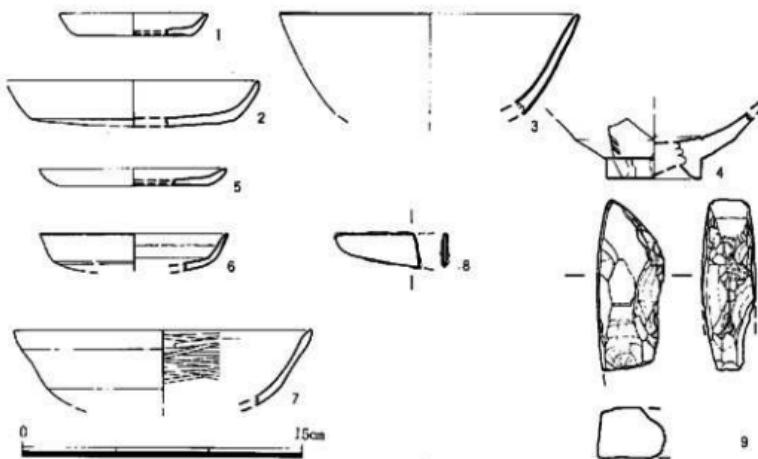


Fig. 44 1・2号土壙, Pit 9・18出土遺物 (1/3)

線を有している。外面の一部にナナメ方向の粗いヘラ描きの条線が数本認められる。内底見込みに沈線を施す。胎土に砂粒を含み、釉は緑味をもった青灰色を呈する。高台の作り、体部の条痕から同安窯系の碗と思われる。

2号土壙出土遺物 (Fig. 44, PL.30)

石製品

石斧 (9) 挟入石斧の破損品である。基部を欠損しており、現存長9.0cm、最大幅3.5cm、厚さ2.7cmを測る。破損したために更に小型化した成品の再加工途中であり、挟入部分に相当する部分、及び基部に打撃調整と敲打を加えている。刃部、背面は当初の状態と思われる。丁寧な研磨である。石質は頁岩であるが風化が認められる。

Pit出土遺物 (Fig. 44)

5, 6はP9出土。7はP18出土。8は1号堀立柱建物の1号堀方出土である。

土師器

皿 (5) 口径10.0cm、器高約1.0cm、底径7.5cmを測る。内外面摩滅しており調整不明。外底部に板目痕が残っている。

白磁

皿（6） 口径10cm、現存高2cmを測る。底部を欠いており、体部と口縁部との境は段を有する。口縁部はやや外反する。大宰府史跡分類白磁皿W-1類に相当するとと思われる。

瓦器

椀（7） 底部を欠いている。復元口径16.0cm、現存高4.0cmを測る。体部下半は丸味をもつ。内外面丁寧なヘラ研磨を施す。胎土に砂粒を含む。口縁部外面は黒灰色を、内面は灰色を呈する。

鉄製品

刀子（8） 刀子、又は小刀の切先である。現存長4.5cm、現存幅1.8cm、厚さ2.5cmを測る。切先は先端に丸味をもたせ、又、背部の先端も少し研ぎ込んでいる。銹は少なく、良好な状態である。

井戸出土遺物 (Fig. 45~59, PL. 28~35)

出土遺物は非常に多く、以下の種類を出土した。須恵器一杯、高杯、土師器Ⅰ一甌、高杯、杯、土師器Ⅱ一皿、瓦器一椀、杯、白磁一椀、皿、壺、青磁一椀、杯、皿、青白磁一合子、陶器一壺、瓶、鉢、甌、須恵質土器一鉢、上師質土器一鉢、鍋、瓦一半瓦、石器一滑石製石鍋、擦り石（敲打只）、砥石などであるが特に土師器皿の出土量は多く、次に杯と瓦器椀が統いている。

須恵器（1, 2）

杯身（1） 底部を欠いている。口径10.1cm、現存高4.2cm、復元高5.0cmを測る。器高は深い。蓋受けは小さく長さ約0.6cmを測り、端部は上向きで尖っている。口縁部の立ち上りは強く、やや内傾する。端部は内側に段を有している。内外面ヨコナテ調整を施し、灰色を呈する。

高杯（2） 現存高4.2cmを測る。高杯の脚部で、杯部と脚部を欠損している。器高が低く脚部が外へ大きく開いた器形で、脚上位に径約1cmの孔を穿っている。胎土、焼成共に良好で灰

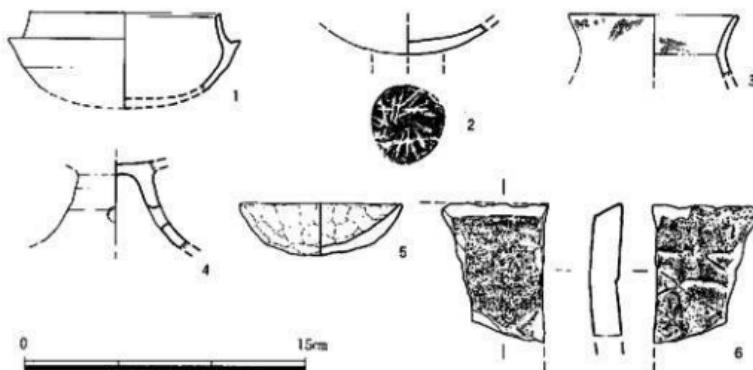


Fig. 45 井戸跡出土遺物 (1/3)

青色を呈している。

土師器 I (3~5)

高杯 (3) 杯部底部で、脚部の接合状態を明瞭に残している。杯底部は丸味を持っており、筒部径約3.5cmを測る脚が貼り付いていたと思われる。接合部にはヘラで螺旋状に刻みを付けている。色調は淡褐色を呈する。器形から4世紀中頃の土器と思われる。

杯 (4) 手づくねの上器で、口径8.7cm、器高2.8cmを測る。丸底で体部は余り開かない。作りが悪く、亀裂が著しい。粗い砂を多く含む。焼成は良好で黄土色を呈している。

變形土器 (5) 小型の變で、口縁は開きが小さい。胴部はやや長目で、肩の張らない器形であろう。復元口径9.0cmを測る。胎土、焼成とも良好で淡褐色を呈する。

瓦類

平瓦 (6) 後端部の部分に相当する破片で、厚さ1.5cmを測る。谷面には細かい布目痕が残っており、背面には斜格子の叩きが施されている。小口はヘラによる面取りである。胎土に砂粒が多く含み、灰青色を呈する。焼成は良好で須恵質である。

土師器 II

器種は皿、杯だけで、出土量は他を上回る。皿は約124点、杯は約77点を出土した。

皿 (1~37) 全て糸切り底である。外底部に板目痕のあるものと無いものがある。口径で分類すると4類に分けられるが、口径、器高、底径の相対比には変化がない。

I類 (1~13) は口径8.4~8.8cm、器高1.1~1.3cm、底径6.2~7.0cm、II類 (14~29) は口径9.2~9.5cm、器高1.0~1.3cm、底径6.3~7.4cm、III類 (30~36) は口径9.7~9.9cm、器高1.1~1.5cm、底径7.0~8.1cm、IV類 (37) は口径10.5cm、器高1.5cm、底径9.0cmを測る。

II縁端部は丸味を持ち、体部はやや外反するものと丸味をもつものがあるが、全体的に外反するものが多い。器形的に重みをもつ皿が多いが、成形、焼成段階の変形と考えれば良く、時期的な差として考えることはできない。内底部はナデ調整が施されている。外底部は糸切りによるものであるが上げ底状が多い。IV類は1点だけだが、他と比べて器高も高く、口径も大きいが、体部の立ち上がりが強く、口径と底径の比が小さいので、I~III類とは時期差があるかもしれない。外底面の糸切りは回転糸切りを主体とするが17のように螺旋状を呈する皿もある。板目痕には各種あって、大きくは板目の幅が小さいグループと幅の大きいグループがある。いずれも胎土に砂粒を含み、焼成は良好である。

杯 (38~54) 全て底部は糸切り離しである。口径から5種類に分けることができる。

I類 (38, 40) 口径13.6~13.9cm、器高2.6cm、底径9.2~10.2cm。II類 (41~45) 口径14.7~15.5cm、器高2.9~3.4cm、底径9.0~10.5cm。III類 (46~52) 口径16.1cm、器高2.5~3.8cm、底径10.2~11.8cm。IV類 (53, 54) 口径14.7~15.1cm、器高2.9~3.1cm、底径8.5~9.0cmを測る。

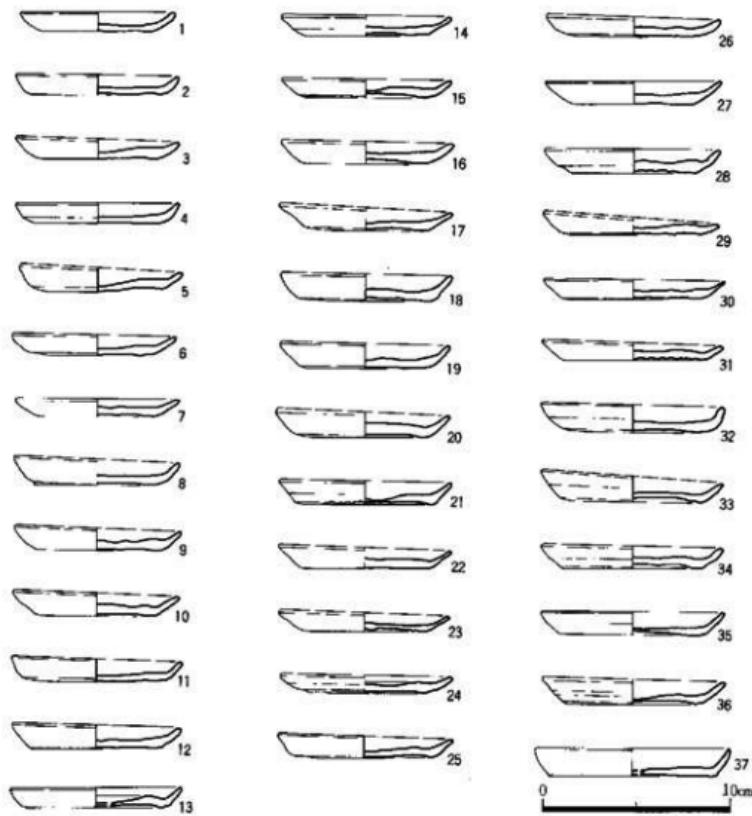


Fig. 46 井戸跡出土遺物 (七師皿) (1/3)

いずれも口縁端部は丸味をもち、体部は丸味をもつものと外反するものがある。各グループ共に数量が同一ではないので比較にならないが、体部に丸味を持つグループはⅡ類のほとんどを占める。Ⅲ類は48の1点だけで、Ⅰ類には無い。49は口径に対し器高が低く、Ⅲ類では器高の2cm代は1点だけである。Ⅳ類は口径と比べて底径が小さく、体部は丸味をもつて立ち上がる器形を呈す。相対的にⅠ～Ⅲ類はわずかに大型化する傾向はみられるものの、器形的な変化はなく、同一時期の所産と考えられる。外底部には板目痕があるものと無いものがあるが、グループ毎

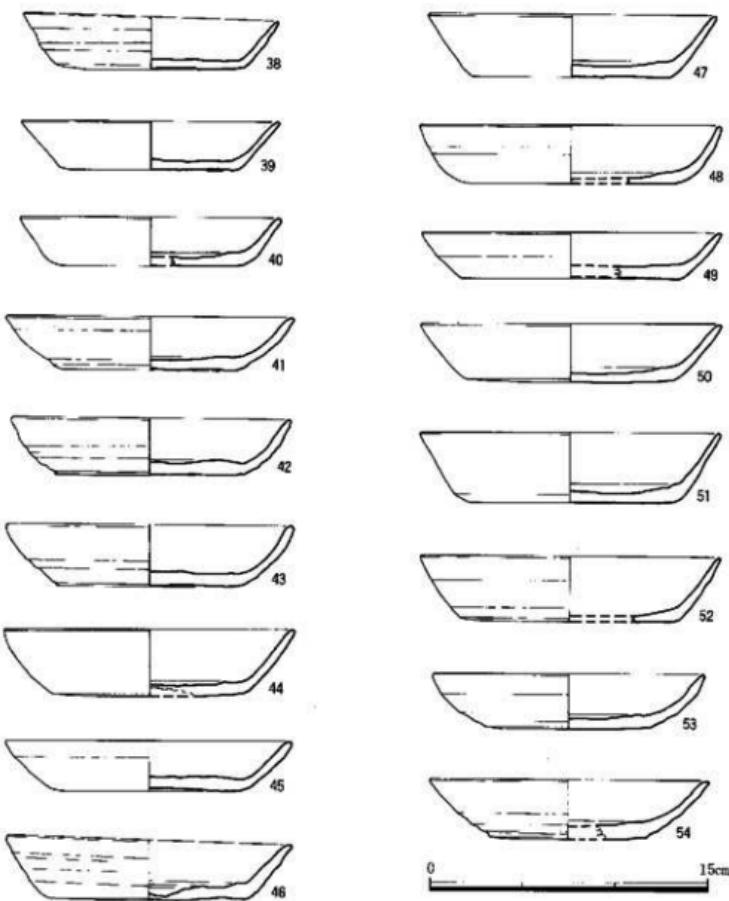


Fig. 47 井戸跡出土遺物（土師杯）(1/3)

の変化は無い。体部に水引き痕を残すものが多く、内面はヨコナデ、内底はナデ調整をしている。胎土に砂粒を含み、焼成は良好。色調は淡茶灰色から黄灰色を呈す。

瓦器

椀（1～9, 16～18） 1は口径17.6cm, 器高5.9cm, 高台径6.0cm, 2は口径16.8cm, 器高5.9cm, 高台径6.7cmを測る。3～4, 8～9の口径は16.4～17.2cmを, 5～7, 16～18の高台径は

6.3~6.9cm, 3~8の現存高は順に、4.6cm, 4.3cm, 6.7cm, 6.3cm, 6.9cm, 5.1cmを測る。1の体部は直線的に開き、口縁端部は丸味をもつ。底部の器壁は薄く、貼付高台は薄手で、唇付は外へ強く張っている。内外面ヘラ研磨を施し、高台部周辺はヨコナデ調整である。2は体部が丸味をもち、口縁端部はやや内傾する。体部の器壁の厚さは一定ではなく、底部は厚みがある。高台は小さな三角形を呈し、先端はやや内傾する。内外面共に丁寧なヘラ研磨を施す。高台部周辺はヨコナデ調整である。1, 2共に第16層の青灰色粘土層からの出土である。胎土に細かい砂粒を少し含む。3, 9は器壁が薄手で、器形は2と同じである。8は体部が球体に近く内外面ヘラミガキが施される。4, 16は2と同一器形と思われる。5~7, 17, 18は断面三角形の高台を貼付けた底部で、7の高台は非常に小さい。5, 6, 18は体部が球体に近く、8と同一の器形であろう。いずれも胎土は精選され、1, 2, 4~7, 16, 17の胎土にわずかに細粒を含む。焼成は良好で、灰白色~黒灰色を呈している。

杯 (10~12) 口径に対して器高が低いので、敢えて杯として分類した。10は口径16.6cm、残存高3.0cm、11は口径17.2cm、残存高3.8cm、12は口径16.7cm、残存高4.1cmを測る。体部は丸味を持っているが大きく開くもので、体部上半の器壁は肥厚している。12の器形から復元器高は4.3~4.5cmを測り、丸底で高台が付かない器形であろう。体部内外面共に丁寧なヘラ磨きが施される。胎土は精選され、焼成は良好。灰色、又は黒灰色を呈している。

白磁 (Fig. 49~51, PL. 31)

接合処理後の破片を含めて、総数91点を数える。楔65点、皿15点、注口片1点、番押片と思われるもの1点、その他の破片9点である。

碗 A~Dの4種類に分類できるが、更にB類は5種に、C類は5種に、D類は2種に分けることが可能である。大宰府史跡の分類を対応させるとA類一白磁碗Ⅰ類、B類一白磁碗Ⅳ類、C類一白磁碗V類、D類一白磁碗Ⅵ類に相当する。

碗A類 (10) 口縁部の破片のため復元は不可能であった。小さな玉縁を有し、体部は丸味をもっている。釉は灰色釉で、細かい貫入が内外にある。

碗B類 (1~9, 25~28) いずれも大きな玉縁II縁を有する器形で、25~28はその底部である。口径は16~17cmを測る。1は口径16cm、器高6.5cm、高台径6.5cmを測る。口縁先端がやや内傾気味の大きな玉縁II縁を有す。内底見込みに沈線を巡らす。高台の内側の削りは浅い。釉は体部の中位迄施されるが、口縁部と、体部の上位に釉が垂れている。釉は全体に薄目で灰色を呈している。高台の内側の削りは浅い。玉縁には幾つかの形態がある。

I類 (2, 3, 5, 6) 玉縁が幅広く、厚みがあって下位に稜をもつものである。

II類は器壁が薄く口縁が幅広く薄手で、稜をもたないもの (1点)

III類は薄手の玉縁の中位に稜がつき偏平な三角形を呈するもの (2点)

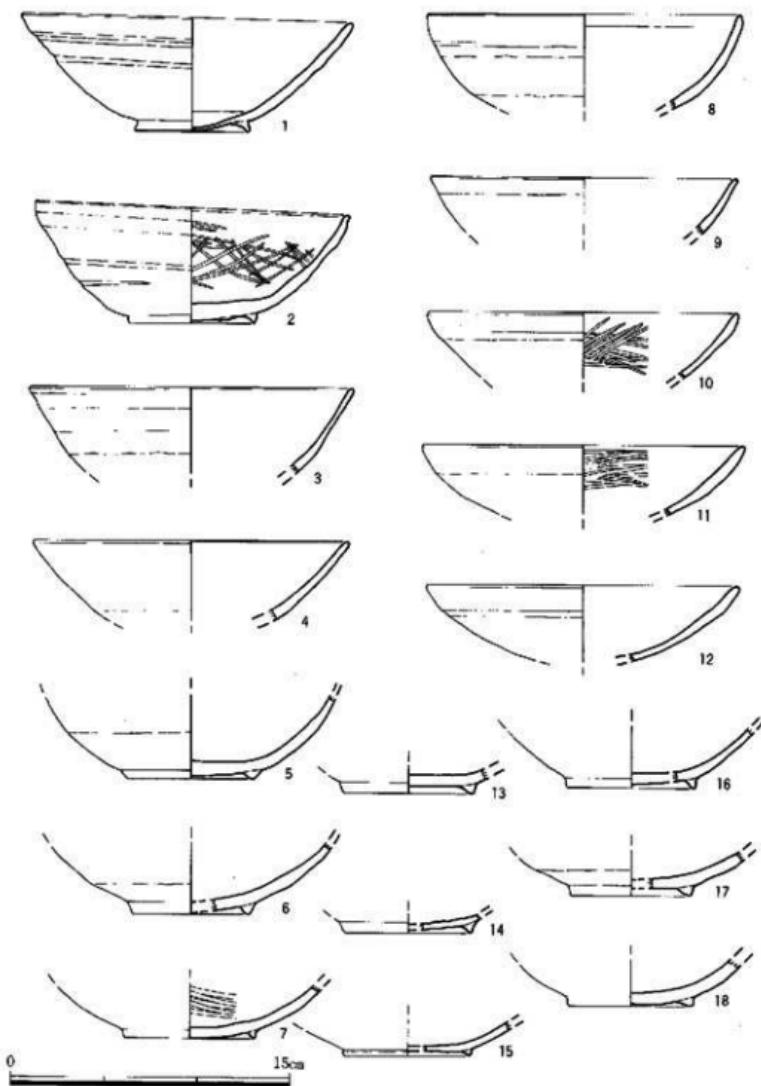


Fig. 48 井戸跡出土遺物（瓦器）(1/3)

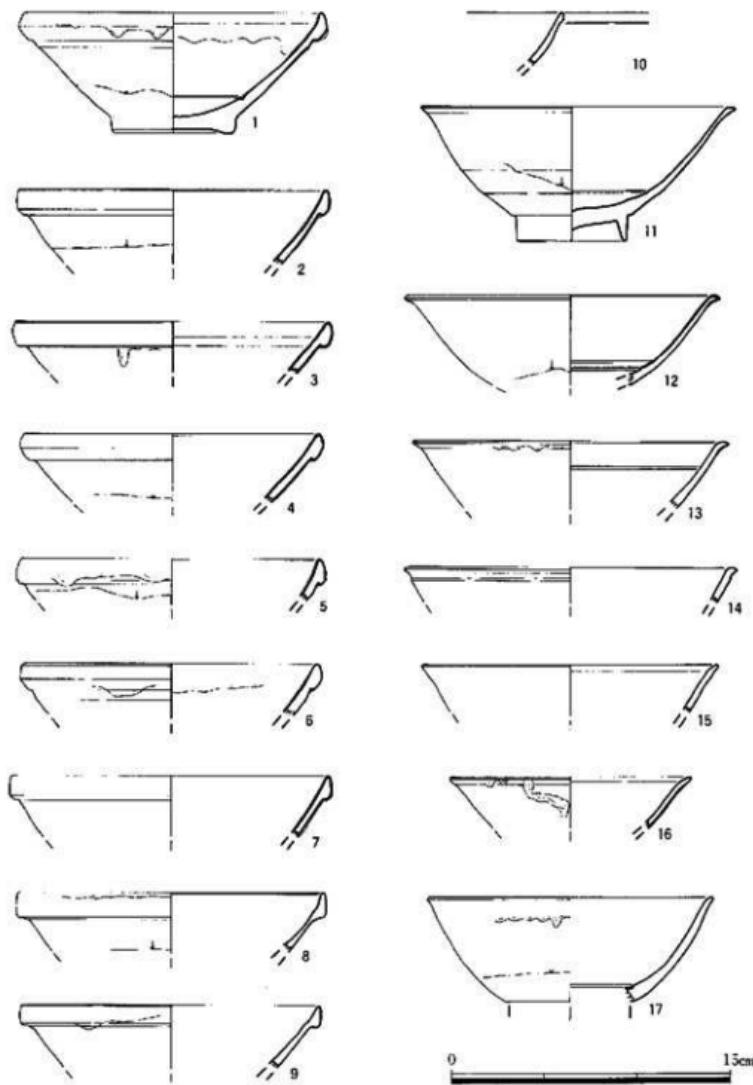


Fig. 49 井戸跡出土遺物（白磁碗）(1/3)

N類 (1, 4) T類の玉縁の稜が中位にあるもの。

V類 (7) T類に比べて小振りの玉縁である。釉は灰色、又は灰白色を呈するが、9のみはやや暗い灰色を呈する。

I, V類の口縁部にはやや厚日に釉がかかっており、5, 8は体部外面上位迄、2, 4は外面上位迄しか施されていない。3, 4, 7の内外と、5の内面には貫入がある。4, 7は細かい貫入である。8は外面に、9は外面に気泡が多い。底部はいずれも高台内側を斜めに浅く削り込む。25, 26, 28は疊付の幅が0.4~0.6cmであるが、27のように1cmを測る幅広いものもある。27は高台の作りにめり張りが無い。25~27の内底見込みには沈線を巡らしている。釉は25が白色、26が灰白色、27, 28が緑味をもった灰色で、いずれも外面の下位には施されていない。26の内面には気泡が認められる。底径は25が6.5cm, 26が7.0cm, 27が7.3cm, 28が7.8cmを測る。

椀C類 (11, 13~23, 29, 30, 33~35) 11は図上復元した。他は口縁破片からの復元である。口縁及び体部、形態から4種類に分けられる。

I類 (17, 30) 17は復元径15.5cmを測り、体部は丸味をもち、口縁端部はやや外反し、丸味をもつ。内底見込みに深い沈線を施す。体部下位は露胎で、釉は黄灰色を呈する。内外面共に細かい貫入、及び気泡がある。この口縁部に伴う底部は30と思われる。30は高台が高く、内底見込みに沈線を有している。高台径6.7cmを測り、釉は薄い茶色である。

II類 (15, 16) 15の復元口径16.0cm, 16の復元口径13.0cmを測る。体部はやや丸味をもつものの直線的に外開きし、口縁端部は小さく外反する器形である。16の口縁端部は丸味をもっている。いずれも釉は灰色を呈しているが、16は口縁部外面に釉が垂れており、又、溶け切っていない。いずれも内外面に細かい貫入があり、外面には気泡がある。他に5点ある。

III類 (11, 33, 35) 11は図上復元したもので、口径18.9cm、器高7.3cm、高台径6.0cmを測る。体部は丸味をもつが、器壁は全体に薄い。口縁部は外反させ、端部を丸くしている。内底見込みは、浅い沈線を施す。高台は細く高い。釉は灰白色を呈し、高台外面には施さない。内外面に細かい気泡がある。33と35はこれに伴う底部であるが、高台径は33が6.1cm, 35が5.0cmを測る。いずれも高台は細く高い。内底見込みに小さな沈線を施す。33, 35共に釉は乳白色を呈し、35は体部下位には釉が施されない。33は疊付に一部付着している。

IV類 a (13, 14, 34) 13は復元口径17.0cm、14は18.0cmを測る。いずれも体部は丸味をもち、口縁部を外反させて端部を水平にする。13の体部内面上位に浅い沈線を施している。34の高台径は6.4cmを測る。III類よりも細く高い高台で、高さ1.7cmを測る。内底見込みに沈線を施している。釉は一部高台外面迄垂下している。釉は13がやや暗い灰色を、14が黄灰色を、34が緑味を帯びた灰色を呈する。他に5点ある。

IV類 b (18, 20~23) 形態はIV類aと同じであるが、内面に櫛描きの文様を施す。18, 20は体部内面上位に沈線を、21, 23は見込みに沈線を施す。18, 20, 22は体部内面上位の沈線下に、

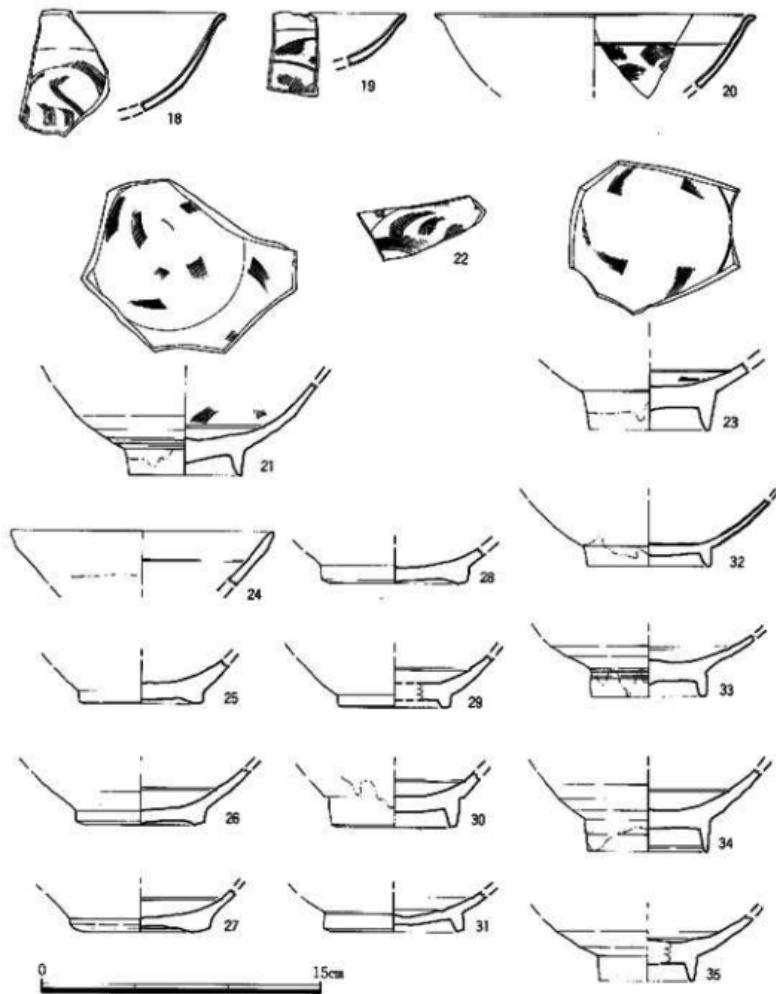


Fig. 50 井戸跡出土遺物（白磁楕）(1/3)

22は内底見込み付近の体部に、24は内底に横書き文を施している。20の復元口径17.3cmを測る。釉は灰白色で外面に荒い貫入がある。21の高台径は6.0 cmを、現存高4.8 cmを測る。高台は余

り高くない。釉は黄灰色を呈し、高台外面の一部迄垂下している。内外面に細かい貫入が、外面には気泡がある。23は高台径 6.5 cm を測り、高台は21に比べ先端が細く高い。釉は灰白色を呈し、高台外面迄垂下している。他に 2 点ある。

椀 D 類 (12, 31, 32) 体部下位に丸味をもち口縁端部を外反させ、端部を平らにしている。内底見込みの釉は環状にカキ取っており、見込み近くには細い沈線を施す。12の復元口径は 18.0cm を測る。31の高台は外面を直にし、約 1 cm の高さがある。釉は12が灰白色、31が乳白色、32が青味をもった灰白色を呈する。31は釉が高台外面迄かかっている。12は内外面に粗い貫入が生じる。

杯 2 種類に分けられる。

A 類 (19) 破片のため口径不明。文様構成等から椀 C 類 - IV b の椀に伴うものと思われる。

B 類 (24) 口径 14.0cm、現存高 3.2 cm を測る。上位に細い沈線を施す。釉はやや暗い灰色を呈し、体部外面下半は露胎である。内外面に気泡がある。

皿 4 種類に分類される。大宰府史跡の分類に対応させると A 類は皿 I 類に、B 類は皿 II 類 b に、C 類は皿 IV 類に相当する。

A 類 (36~39, 40~43, 48) 36~39 と 40~43, 48 の 2 種に細分できる。すなわち、I 類の体部の大きく開くものと、II 類の体部が丸味をもって立ち上がるものである。全体に断面コの字形の高台を有し、器高は低く、体部は丸味をもって大きく開き、口縁端部はわずかに外反して丸味をもっている。39, 40, 42, 43 は見込み付近に細い沈線を施している。釉は体部外面中位から下位にかけて施される。36~38, 48 は白色を、4~8 は緑味を帯びた灰白色を呈している。36~39 の口径は 9.8 ~ 10.8cm、器高 1.7 ~ 2.0cm、高台径 4 ~ 4.5 cm を、40~43, 48 は口径 9.4 ~ 10.6cm、器高 2 ~ 2.4cm、高台径 4 ~ 5 cm を測る。

B 類 (44) 復元口径 12.0cm を測る。体部は丸味をもち、口縁部は緩く外反し、端部は丸味をもっている。体部内面の中程には沈線状の段を有している。釉は緑味を帯びた灰色で、体部外面中位迄施している。

C 類 (45, 46) 45 は口径 9.8 cm、器高 2.5 cm、底径 3.9 cm を、46 は口径 10.0 cm、器高 2.5 cm、底径 4.2 cm を測る。底部はやや上げ底で、体部は丸味をもつて、体部上位で内寄し、内面に屈曲部をもつ。46 は口縁端部が反り気味である。釉は口縁部周辺は厚目で、全体に施されるが、外底部はカキ取られる。内底にはヘラ描きの花文を配している。いずれも外面は気泡が多い。

青白磁 (Fig. 51, PL. 32)

合子 (49) 合子の蓋で、口縁部を欠いている。体部には浮き彫りの蓮弁を施す。又、天井部外面にも浮き彫りの草花文を配している。釉は淡い青色を呈し、体部外面と内面天井部、及び体部の一部に施し、他は露胎である。浮き彫りの線は白色を呈している。胎土は灰白色である。復元口径 4.0 cm、復元器高 1.5 cm、天井部径 5.5 cm を測る。

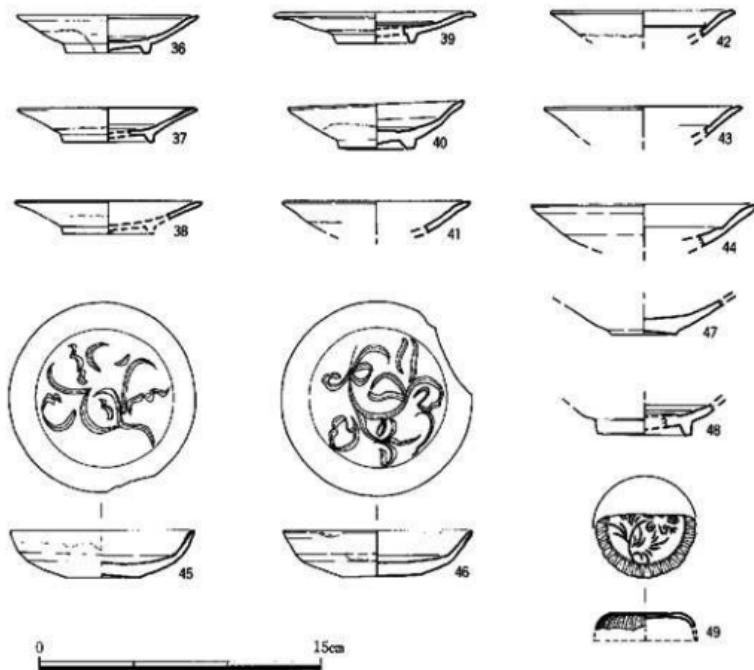


Fig. 51 井戸跡出土遺物（白磁皿、青白磁合子）(1/3)

青 磁 (Fig. 52, 53, PL. 31, 32)

接合後の総点数は破片を含めて計71点出土した。その内、龍泉窯系碗は16点で、皿は出土していない。同安窯系碗は31点、皿は15点である。碗はA類を龍泉窯系青磁とし、B～E類を同安窯系とする。

碗A類（1～4, 15）内外面の文様構成によって5種類に細分することが可能である。

I類（4, 15）Ia（15）は破片のため口径不明。体部は丸味をもち、口縁部はわずかに外反する。無文である。釉はやや厚目で、貫入がある。灰緑色を呈する。Ib（4）は体部は丸味をもたせ口縁部をそのままおさめる。口縁に6ヶ所の輪花を施す。釉は緑味を帯びた青灰色で、厚目に施される。今津古墓出土品に同形態の碗がある。^{註3}

II類（1, 2）体部下半は丸味をもち、上半はやや外反気味に立ちあがり、口縁端部は丸くおさめる。外面は無文で、体部内面にヘラ描きの草花文を施している。釉は緑味を帯びた茶灰

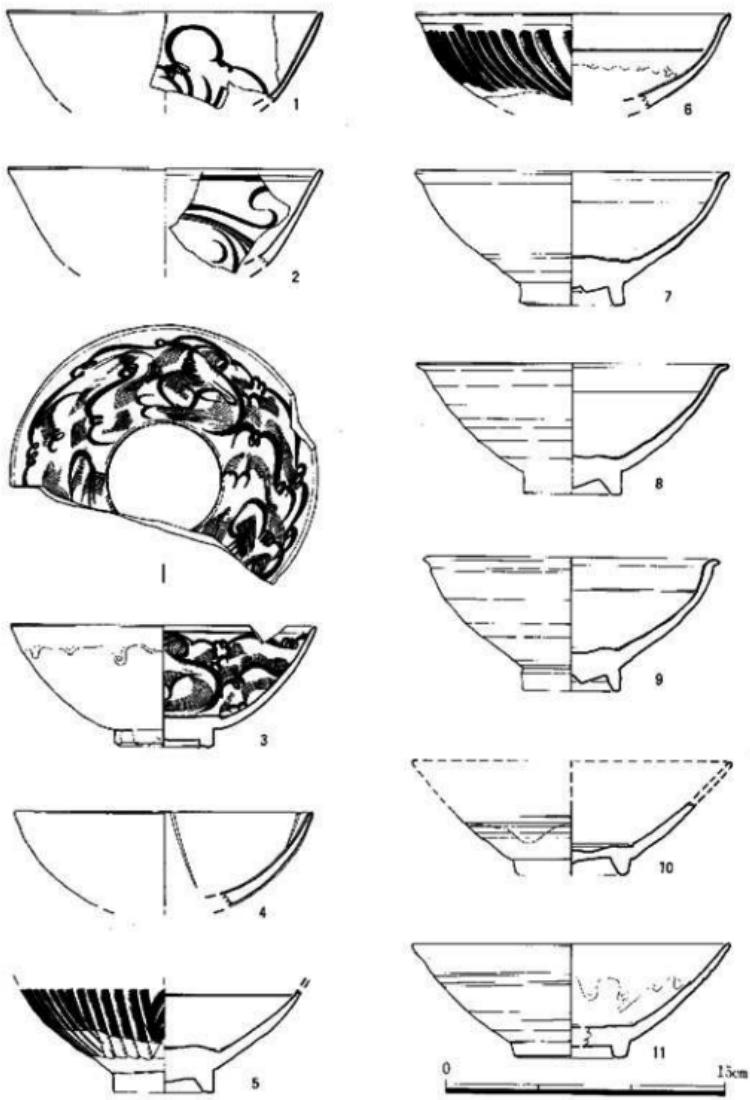


Fig. 52 井戸跡出土遺物（青磁碗）(1/3)

色を呈し、やや厚目に施される。いずれも内外面に粗い貫入がある。1は口径17.0cm、器高4.8cm、底径11.5cmを、2は口径17.0cm、器高5.6cm、底径10.7cmを測る。

Ⅲ類(3) 完形品に近い椀で、口径16.5cm、器高6.9cm、高台径5.4cmを測る。底部が非常に厚く、高台内側のケズリは浅い。体部は丸味をもって立ち上り、端部は反りが無い。外面は無文で、体部内面にヘラと櫛による花文を施している。釉は緑灰色を呈し、やや薄目に高台外面上部に施されるが、体部外面上位には釉の垂れ下りがある。疊付、及び高台内側へも釉が一部付着する。胎土は灰白色である。内外面に貫入が認められる。

Ⅳ類 図示できなかったが、体部外面上位には無文で、内面には縦方向の2本の沈線によって、5分割し、文様を施している。1点のみ出土。

Ⅴ類 これも図示できなかったが、体部外面上位に鏽蓮弁を施した椀である。1点だけ出土。

椀B類(5, 6) 外面上に片彫り状の幅広いヘラによる条線を施す。5は7本単位、6は4本単位である。内面は無文である。5の体部の丸みは小さく、6は全体的に丸味があり、口縁部は軽く外反させ、端部は丸味をもつ。体部内面上位には沈線を施す。釉は青味をもった淡い緑色を呈し、薄目に施され、いざれも体部上位は露胎である。5は内底は釉が厚く滲り、砂と粘土塊が付着している。5の高台径5.4cmを測り、底部は厚い。6の復元口径は17.0cm、現存高7.2cmを測る。他に2点出土している。B類椀には、Ⅱ類の内面に櫛による花文を施すもの1点、Ⅲ類の内面にヘラと櫛による文様を施すもの1点が出土している。

椀C類(7, 8, 9) いざれも復元によるもので、7は口径17.0cm、器高7.2cm、高台径5.7cmを、8は口径16.9cm、器高7.0cm、高台径5.3cmを、9は口径16.0cm、器高7.3cm、高台径5.3cmを測る。器形的にはB類に近似するが、外底部が山形突起状にケズリ出されるものが多い。体部は丸味をもつものの、余り開かず、口縁端部を外反させている。体部内面上位には沈線を施している。胎土は暗い青灰色で、釉はやや暗い青緑色を呈している。釉は体部外面上半部に施される。下半部は露胎である。8の内面には粗い貫入がある。他に2点ある。

椀D類(10, 11, 13) 10は口縁部を欠いている。10の高台径6.0cm、現存高4.0cm、11の口径17.0cm、高台径6.0cm、器高6.1cmを測る。13は復元口径15.3cmを測る。体部は丸味を残すものの直線的に開き、端部は細く丸い。11の体部外面上位には2条の沈線を、13の内面上位には1条の沈線を施す。底部はB、C類に比べて、厚みは無く、10の疊付は水平ではない。内底見込みには現状に釉のカキ取りが施される。釉は淡い黄緑色を呈し、体部下位は露胎である。胎土は黄土色を呈しているが、焼成が弱いのか軟質である。13の釉は灰緑色を呈する。内外面に細かい貫入がある。

椀E類(12, 16) 小型の椀で12は底部を欠いている。復元口径14.0cm、16の高台径は5.3cmを測る。12の体部は丸味をもち、全体に薄手である。11縁との境はわずかに屈曲し、体部内面上位には沈線を施す。外面には細かい目で、21本単位の条線が施される。体部内面の沈線下にはヘラ、

及び櫛状工具による花文を施す。16の高台はC類と近似するが、疊付の外刃を斜目にケズリおとしている。釉は12が灰緑色を、16が黄緑色を呈し、薄目である。体部下位は露胎である。16の胎土は淡い茶褐色を呈し、焼成が甘く陶器質である。

椀F類（14） 復元口径18.0cm、現存高3.7cmを測る。内外面無文の薄手の椀で、体部は丸味をもち口縁端部は内弯し、非常に薄手の作りである。体部には水引き痕が明瞭に残り、内面中位に1条の沈線を施している。釉は黄灰色を呈し、薄目に施され、口縁部は禿げている。焼成は甘く陶器質で胎土は黄灰色を呈する。

皿（17～21） A、Bの2種類に分けられ、更にB類は釉の施し方から2種類に細分できる。

A類（17, 19） いずれも底部を欠いている。17は復元径10.7cm、現存高2.5cm、19は復元径11.0cm、現存高2.0cmを測る。いずれも体部は丸味をもち、口縁部は内弯し、端部は17は丸く、19は尖り気味に仕上げる。17の体部内面上位には段状の沈線を、19には細い沈線を施す。釉は茶色を帯びた緑色で、17の体部外面下位は露胎である。17には縱方向の貫入が認められる。椀E類に伴う可能性がある。

B類（18, 20, 21） 体部外面下位が露胎のもの（18, 21）と、外底面の釉をカキ取るもの（20）がある。

I類（18, 21） 18は復元径11.0cm、現存高1.8cm、21は底径3.5cmを測る。底部は上げ底で

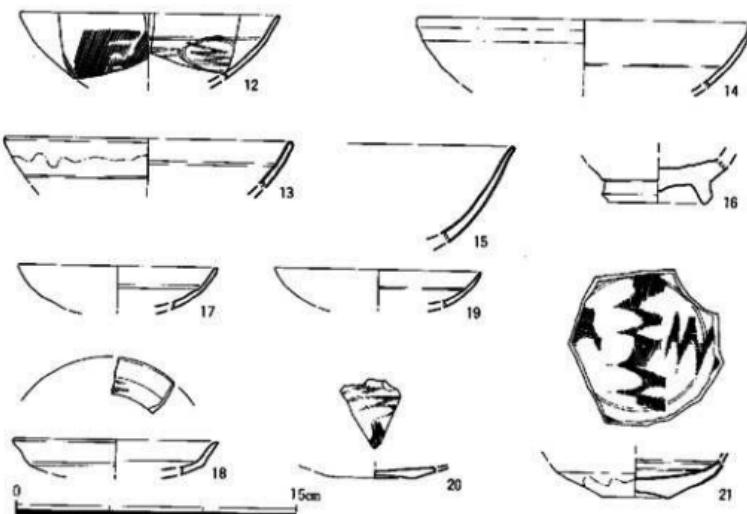


Fig. 53 井戸跡出土遺物（青磁碗、III）(1/3)

体部の中位で屈曲し、体部と見込みの境に段をもっている。内面にはヘラによるジグザグ文を施す。釉は21が淡緑色を呈する。

II類(20) 底径は4.0cmを測る上げ底である。内底にはヘラによる花文と櫛によるジグザグ文を施す。釉は淡緑色である。他に4点出土。

錐器 (Fig. 54~56, PL. 32, 33)

白磁、青磁、褐釉の磁器、陶器を含み、その他須恵質土器、上質土器がある。器種は壺形土器、香炉、鉢形土器、瓶形土器、變形土器である。

陶磁器

壺(1~6, 8) 1は復元径15.0cm、現存高17.7cm、胴部最大径24.6cm、2は復元径11.7cm、現存高16.5cm、胴部最大径19.5cm、5は口徑10.5cm、現存高7.3cm、6は口徑9.5cm、8は口徑9.3cmを測る。3・4は底部で、3は底径8.0cm、4は底径9.0cmを測る。1は白磁の四耳壺と思われる。L字形の口縁を強く内傾させて肩部に1条の沈線を施し、その下に横位置の耳を貼付ける。又、耳の下には波状の沈線を1条施す。最大胴径が中位にある。灰青色の釉で、全体に細かい気泡がある。2、5は褐釉の四耳壺と思われ、2の最大胴径は下位に、5の最大胴径は上位にある。口縁部は正縁状で丸味がある。2は肩部に2条の沈線を施し、耳を縱位置に貼付ける。5の耳は横位置である。2,5は陶器質である。6は口縁端部を外へ小さく外反させた広口壺で肩が張っている。釉は淡黄緑色を呈している。胎土に砂粒を含み、焼成は甘く、陶器質である。8はくの字形を呈した広口壺で、肩は張らず、最大胴径は中位にある。釉は淡茶灰色を呈している。3、4は底部である。高台部は削り出され、底部の器壁は薄い。いずれも釉は淡黄緑色を呈し、焼成は甘く陶器質である。その他、白磁の注口片と香炉片がある。

瓶(7) 復元径7cm、現存高5.1cmを測る。褐釉陶器で、水注形の口縁部であろう。二重口縁状を呈し、端部は平坦で内傾している。頭部は長く、中位に沈線を1条施す。

鉢形土器(9~15) 9は高台径9.0cm、10は口徑24.5cm、器高10.3cm、底径13.3cm、12は口徑27.4cm、器高10.4cm、底径15.0cm、14は口徑27.4cm、現存高5.7cmを測る。9は開く体部をもち、下位で更に屈折し外へ広がる。削り出しの高台は小さい。体部外面下位には目痕が残っている。釉は淡い緑色を呈する。10の開いた体部は丸味をもち、口縁部は端部をT字形に折り返している。高台は削り出しである。釉は黄緑色で、内面は暗い。外面は丁寧では無く、体部の大部分が釉の垂下の状態である。陶器質である。11は器高の深い鉢で、L字形の口縁を内側へ折り曲げて、小さな肩部を形成している。口縁平坦部には目痕が認められる。釉は暗灰緑色を呈し、内外面に施す。12~15はほぼ同一器形を呈し、褐釉陶器である。体部は丸味をもち、口縁端部をやや内傾させるが、口縁内面には二条の三角突帯を作り出している。14の口径は強く内傾する。底部は15のように平底を呈するが、12は外底部に重ね焼きのために4ヶ所の突起を物り出しており、鉢内底にも目痕が残っている。15の底部縁辺にも目痕が残っている。

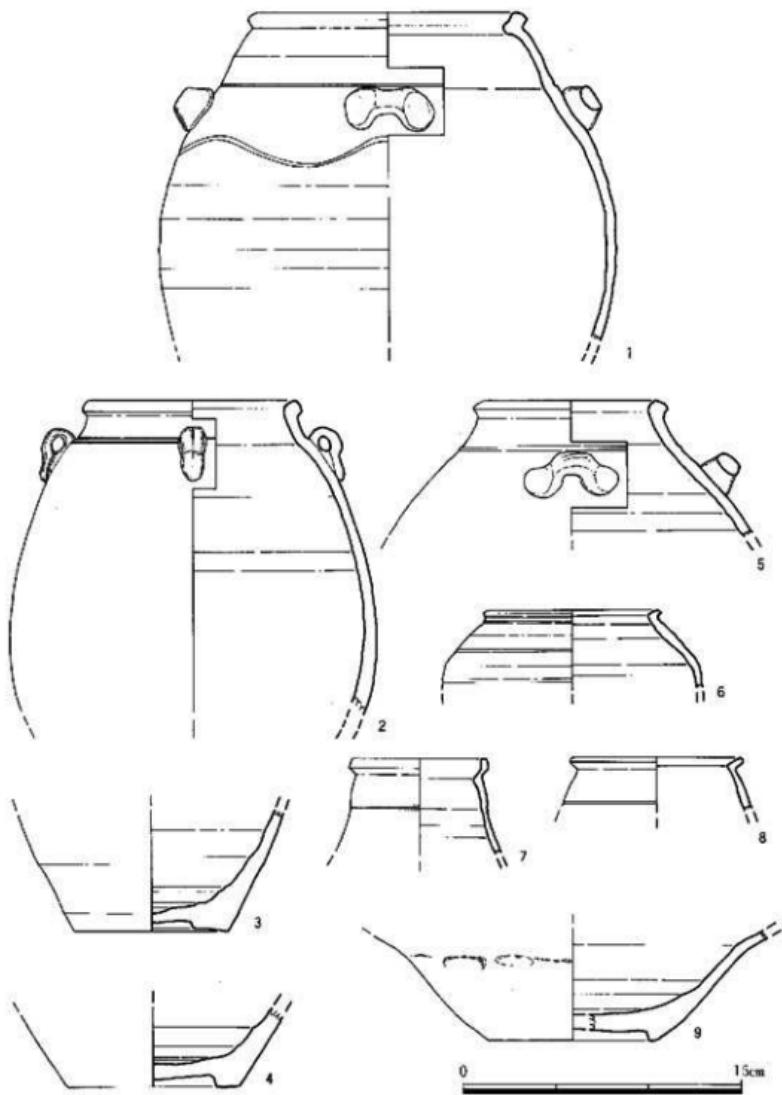


Fig. 54 井戸跡出土遺物 (陶磁器、壺、瓶、鉢) (1/3)

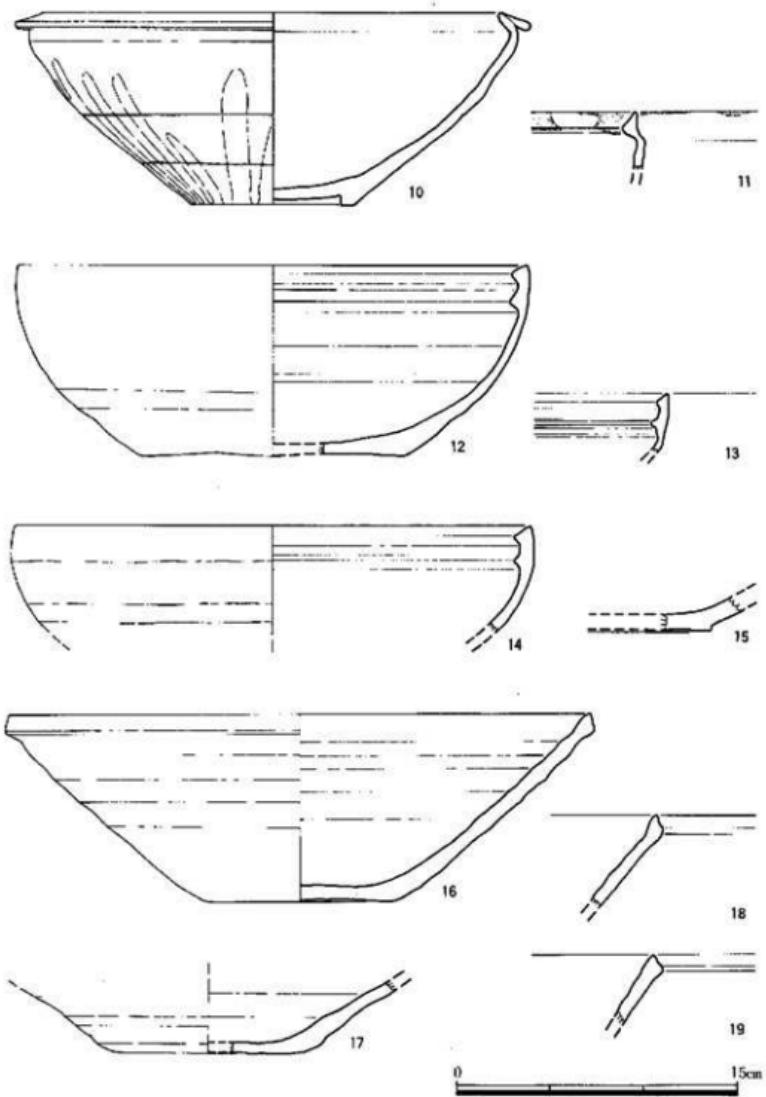


Fig. 55 井戸跡出土遺物（陶器、須恵質上器）(1/3)

内底は使用のため摩滅している。いずれも砂粒を多く含み、外面は赤紫色系を、15の内面は暗灰青色を呈する。

瓔形土器 (21) 体部上半を欠いている。底径11.0cmを測る。体部は丸味をもつが、開かない。内面は水引き痕がある。底部は上げ底で、ヘラによる条線が残っている。釉は茶褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。焼前系の国産品である。

須恵質土器

鉢 (16~19) いずれも片口の捏鉢である。16は口径29.5cm、器高10.9cm、底径10cm、17は底径9.7cmを測る。底部はやや上げ底状を呈し、糸切り底である。体部は大きく開き、水引き痕を明瞭に残している。口縁端部は上下につまみ出して、玉縁を形成している。18は器壁が薄く、口縁端部を上に引き出している。19は口縁端部を下へわざかに引き出している。16の内底は使用のため著しく摩滅している。又、18の口縁部外面下に煤が付着している。胎土に砂粒を含み、焼成は良好で、16は灰色を、17~19は青灰色を呈する。これらの鉢は国産品であるが、产地については明確では無い。近年、北九州市長野D遺跡、新道寺・天疫神社前遺跡、及び大宰府史跡等で魚住窯系の鉢を出土しているので、产地もこれらと同様な地域に求められるかもしれないが、須恵質土器の形状には各種あって時期的、地域的な変化が考えられるところから、在地の生産の可能性を含めて検討する必要がある。

土師質土器

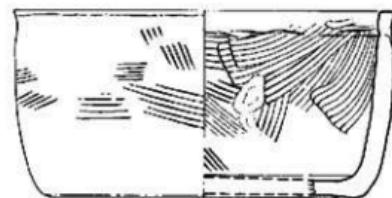
鉢 (20, 22, 23) 20は口径20.4cm、器高10.0cm、底径17.3cmを測る。底部はやや上げ底で、体部はやや丸味をもち、直口する。口縁部は少し外反させ、端部は平坦である。内外面ハケ調整を施し、外面はナデ消している。胎土に砂粒を多く含み、焼成は良い。黒灰色を呈しており、いぶしを施されたのであろう。火舎と思われる。22, 23は、大型の鉢の口縁部である。口縁端部を左右に引き出して、平坦形にしており、22の口縁部は内傾し、23のそれはやや外傾する。22の口縁部はナデを、体部はヘラナデ調整を施す。23は内面に粗いハケを施し、内外面指、ヘラによるナデ調整である。胎土に砂粒を含み、暗灰黄色、又は灰黑色を呈する。22の外面は火を受け赤変する。次に述べる鍋に近い形態と思われる。

鍋 (24~26) いずれも体部下半を欠いている。24は口径4.0cm、現存高8.7cm、25は口縁35.2cm、現存高8.0cm、26は口径36.6cmを測る。体部は丸味をもって開き、口縁端部を平坦にする。25は逆L字形を呈する。全体にナデ調整を施すが、24, 26の口縁端部はヘラによる調整を、25の体部外面はヘラ削りを、24の体部外面はタテハケ調整を施す。胎土に砂粒を含み、褐色或いは淡茶褐色を呈する。外面は煤、或いは火を受け、黒褐色、暗茶褐色を呈する。

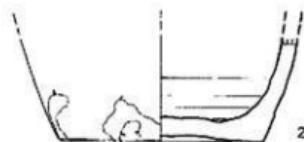
石製品 (Fig. 57~59, PL. 34, 35)

井戸内に投棄された礫群に混じて石鍋、砥石、擦り石等が検出された。

石鍋 (1~3) いずれも滑石製であるが、いずれも残存状態は不良のため破片から復元した。



20

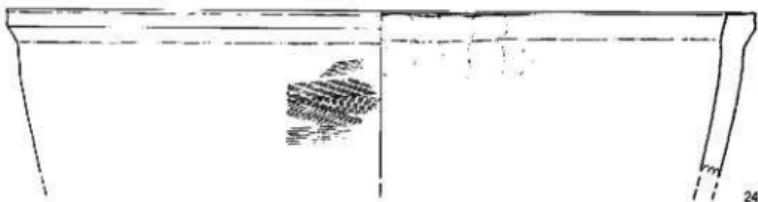


21



22

23



24



25



0

15cm

Fig. 56 井戸跡出土遺物（陶器、土師質土器）(1/3)

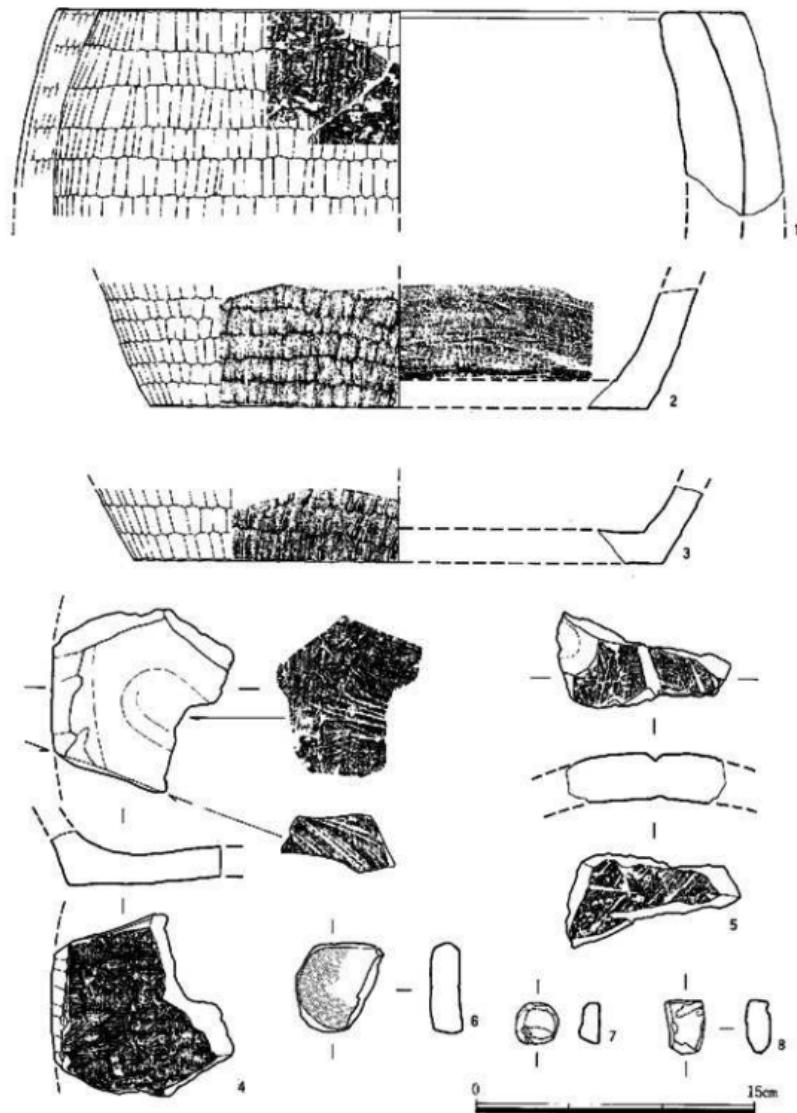


Fig. 57 井戸跡出土遺物 (滑石製品) (1/3)

1は口径32.0cm、現存高10.8cm、器厚3.2cmを測る。体部は丸味をもち、口縁部が内傾する器形で、左右に1対の握手をもつが、これは幅2.3cm、高さ約2.0cmを測る綫長の握手である。体部のケズリは横方向に行なわれるが、ケズリ痕は規則性があり綫長である。内面は丁寧なケズリで、痕跡を残さない。気泡の多い材質である。2、3は上半部を欠いている。復元底径は2が26.4cm、3が28.0cm、現存高は2が6.2cm、3が4.1cm、器壁の厚さは2が1.9cm、3が1.4cmを測る。いずれも体部の開きは小さく、丸味をもっている。外面のケズリは横方向で、2は方形に近いケズリを、3は綫長のケズリ痕である。内面は丁寧な仕上げだが、2の内面は使用時の痕跡であろうか、横方向の条痕が著しい。3の内底は使用のため摩滅している。材質は良好で木目細かい。

転用品（4～6、8） いずれも石鍋片を再加工して利用したもので、加工段階のものも含んでいる。4は最大長9.7cm、最大幅9.7cm、厚さ1.1cmを測る。石鍋底部の転用品で再加工は完了していない。一側面を鋸状の工具で切り取っており、条痕状に残っている。内面には数条の彫りの深い条痕があるが、これは石鍋破損後の転用による痕跡である。外底部に煤が付着している。5は最大長9.3cm、最大幅5.1cm、厚さ2.4cmを測る。石鍋体部の破片の加工途中である。側辺は部分的に調整を加えている。A面に数条の条痕があるが、特に中央は幅広く、B面にも連続することから石錘として利用したものだろう。6は同じく石錘体部片の再加工品で、右側を破損しており、現存長5.1cm、最大幅4.6cm、厚さ1.6cmを測る。側辺を研磨し、隅丸方形状に仕上げている。A面には石鍋使用時の煤が付着している。8は長さ2.9cm、最大幅2.0cm、厚さ1.3cmを測る。長方形に成形し、側面は面取りするが下小口の調整は完了していない。6、7共に材質は木目細かい。つまみ形製品（7） 滑石製で、縱、横ともに長さ2.2cmを、厚さ1.1cmを測る。隅丸方形状を呈し、縁辺にケズリ痕が残る。下半を欠損しているが、蓋物のつまみと考えてよいだろう。木目は細かくて、淡赤褐色を呈している。

擦り石（敲打具）（9、10） 9は最大長11.2cm、最大幅8.2cm、厚さ4.5cmを測り、橢円形を呈する。A、B面共に敲打痕があるが、A面は著しく、ノミ状の敲打痕が残る。又、上下の小口は敲石として使用されており、右側邊もわずかに敲打痕が残る。左側邊は磨滅しており、擦り石として利用したものと思われる。B面には部分的に研磨痕が認められる。二次的に火を受け、部分的に黒変する。玄武岩の転石を利用したものである。10は最大長11.3cm、最大幅8.7cm、最大厚3.6cmを測る。平面形は不整橢円形を呈し、一部破損している。A、B面共に中央部は敲打のため浅い凹み状を呈している。その他の部分の敲打痕は少ない。A面上位には手づれの磨滅が認められる。上下の小口部分と左側邊に敲打痕の集中する部分があるが、右側邊などは磨滅しており、敲打具、及び擦り石として使用されたことが認められる。9と同様に玄武岩の偏平礫を利用したものであろう。二次的に火を受け、部分的に黒変している。

砥石（11～15） いずれも材質は砂岩であるが、14と15は中粒砂岩で、13の粒子は細かい。

他は粗目の砂岩である。11は偏平な板材を利用してした砥石で、下部を欠いている。現存長12.4cm、最大幅8.1cm、厚さ2.3~3.4cmを測る。上小口、及び左側辺は粗削り状態で、調整を施していない。右側辺は丸味をもった自然面を残し、下部の一部に敲打痕がある。A、B両面を砥面として利用し、特にA面の使用は著しく、中凹みを呈している。B面には刃物による条痕、削りと一部に敲打痕がある。15は全長8.4cm、最大幅4.7cm、最大厚2.8cmを測る。平面は不整長方形形状を断面は長方形を呈す。A面、両側面の四面を砥面として利用。両側辺の一部に敲打痕が残る。B面は一部を研磨利用されているが自然面を残す。上小口は敲打調整を施す。下小口は粗削りの状態である。12は下部を欠損しており、現存長13.3cm、最大幅12.5cm、厚さ6.1~8.2cmを測る。上、下小口部分が中央部分に比べて幅広く、厚みのある撥形を呈した器形である。四面を砥面として利用している。上小口は打撃調整による面取りを施し、研磨調整は施さない。13は最大長23.5cm、最大幅10.9cm、厚さ8.6~10.8cmを測る。砥面としてA面、及び両側辺を利用しているが、右側辺

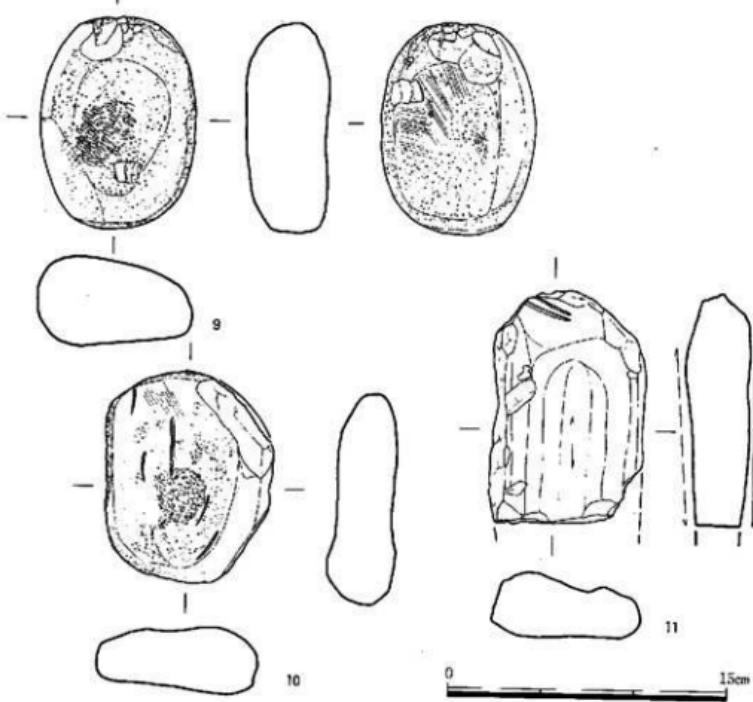


Fig. 58 井戸跡出土遺物(石器)(1/3)

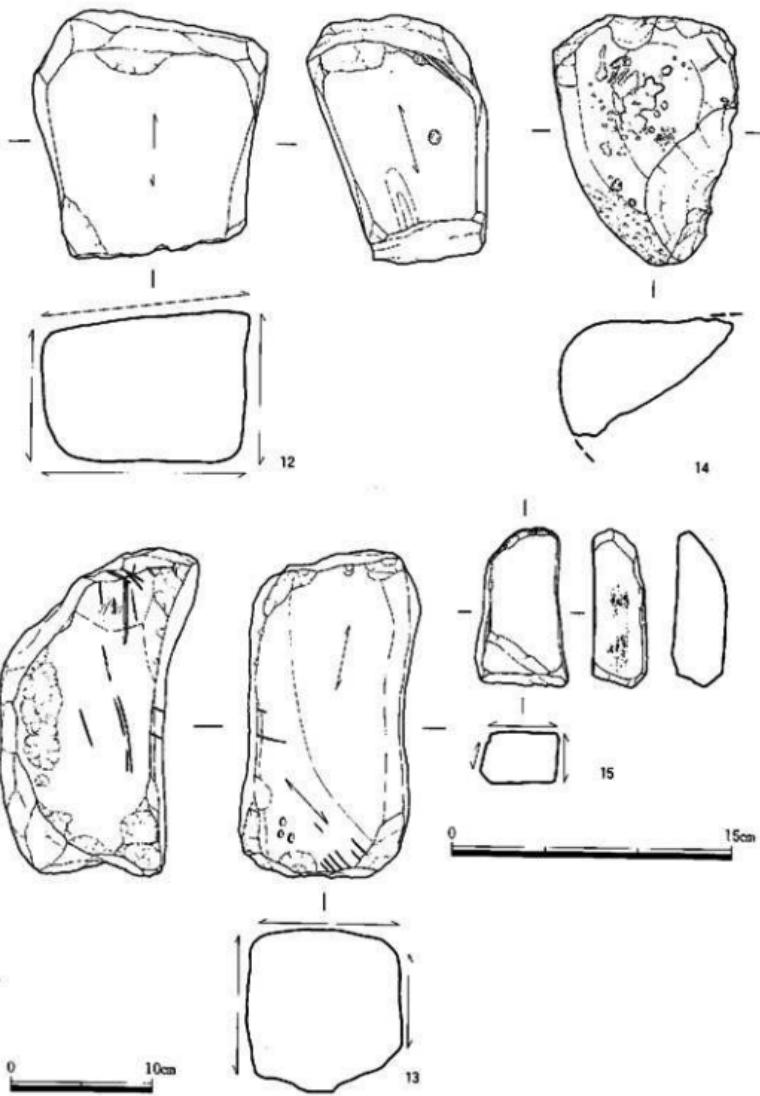


Fig. 59 井戸跡出土遺物（石器）(1/3)

には調整痕が、左側辺下部は未調整部分を残している。A面及び左側辺に刃物による条痕が残っている。B面両小口は粗削り調整の状態である。灰青色を呈する。14はB面を欠損している。全長13.1cm、現存最大幅9.8cm、最大厚7.4cmを測る。A面を砥面として利用している。A面の中央部分には敲打痕が集中し、やや中凹みを呈する。左側辺は摩滅しており、自然面とも思われるが擦り石として利用された可能性を残す。破損した縁辺については打撃調整が加えられている。色は灰青色を呈する。自然の軽石を利用したものと思われる。

1号溝出土遺物 (Fig. 60, PL. 35)

白 磁

椀（1, 2） 2種類に分けられる。2は大きな玉縁をもつ椀で、口径16.2cmを測る。釉は灰白色を呈する。1は底部片で、高台部復元径5.8cmを測る。内底には櫛描文を施す。釉は灰白色を呈する。2は大宰府史跡分類の椀VI類で、1は椀V類である。^{註4}

皿（3） 体部下半を欠いている。口径9.5cmを測る。玉縁をもった口縁で釉は白色を呈する。

小壺（4） 体部の破片から復元した。体部復元最大径5.5cmを測る。肩の張った偏平な球体に直口する小さな口縁が付く器形であろう。釉は薄目で黄灰白色を呈する。薄手の器壁で、体部には水引き痕が明瞭に残っている。

その他、白磁には壺の破片が1点出土している。

青 磁

椀（5） 出土した椀片は2種類あって、他の2片は細片のため図示しないが、龍泉窯系の鍋蓮弁椀の破片である。5は体部の破片で、釉は外面の下半部には施されない。外面にはヘラ状工具で6本単位の太い斜目方向の条線を施す。内面はヘラによる花文を描いている。釉はくすんだ暗緑色である。同安窯系の椀である。

盤（6） 底部の破片で、復元底径8.1cmを測る。釉は高台、外底部迄施されるが、内底部の釉は厚く、外面は薄い。釉は淡緑色を呈する。

土師質土器（7, 8, 9）

湯釜（7） 口縁部片である。内傾した口縁部で端部は厚みをもっている。復元口径15.2cmを測る。外面及び口唇端部はヨコナデを、内面は細かいヨコハケ調整を施す。胎土は精選されており、焼成は良好。いぶしを施されていない。

鉢（8, 9） いずれも摺鉢の破片である。8は現存高4.8cmを測る。外面はナデ調整で、内面は不明。内面には9本以上の条痕を施す。内面は暗い灰色を、外面は暗茶褐色を呈す。外面は二次的に火を受けている。胎土に砂粒を含む。8はいぶしが施されていた可能性もあり、瓦質に分類できるかもしれない。9は内面に幅広い条線を施す。内面はヨコ、ナナメ方向の目の粗いハケを施す。外面はナデ調整である。胎土は湯釜の胎土に似て精良で、黄白色を呈する。他に摺鉢片が1点ある。

瓦質土器

鼎 (10) 鼎の脚部片である。貼付け部分に相当し、脚のほとんどを欠いている。鉢部内面はヨコハケ痕が残る。全体に指圧調整痕がある。胎土に砂粒を含み、胎土は灰白色を、外面はいぶしのため黒灰色を呈す。

その他、瓦質土器の鉢の破片が1点出土している。胎土、焼成共に10の鼎脚と同一である。

瓦類

軒平瓦、平瓦、丸瓦の破片が出土しているが、数量は少ない。

軒平瓦 (11) 1点だけ出土。溝の上唇から検出した。平瓦部分を欠いている。中心飾りは宝珠形で、左右に唐草文を配する。2本目の唐草文は中心飾りから派生するが、1本目との間に1本の子葉がある。この種の瓦は第19次調査の2号溝内より出土している軒平瓦Ⅰ類と同一である。年代は16世紀の前半頃である。

鉄製品

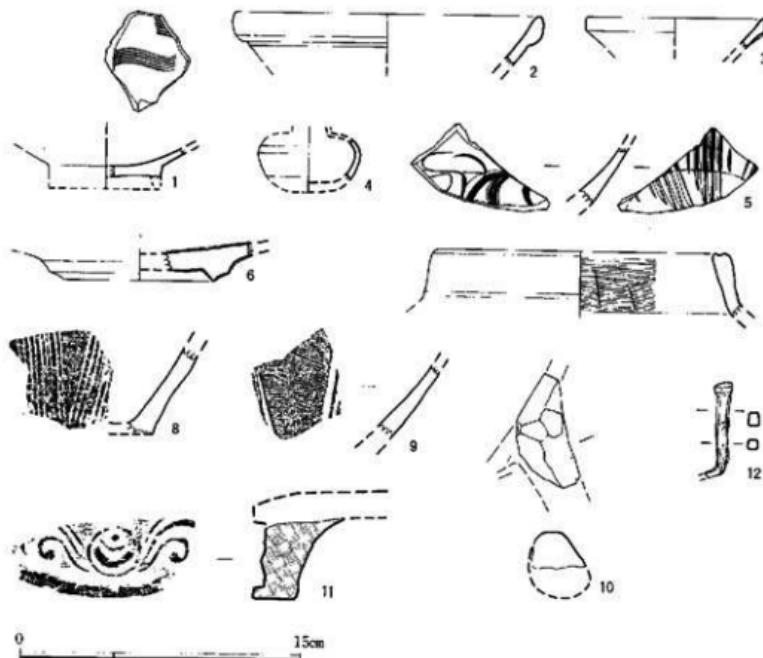


Fig. 60 1号溝出土遺物(1/3)

釘 (12) 先端を欠き、折れ曲っているが、全長5.3cmを測る。頭部は径0.6cmの方形に近い形状で、身の断面は頭部に近い部分は長方形を、先端に近いほど方形を呈す。銹化は進んでおらず、残存状態は良好である。

2号溝出土遺物 (Fig. 61)

遺物の大半が細片であり、図示した遺物も余り大きな破片では無い。

須恵器

変形土器 (1) 溝上層出土。復元口径18.2cmを測る。口縁部外面直下に小さい三角形の突起を有す。口縁部の厚みは薄く、端部は沈線状に凹みをもつてゐる。内外面ヨコナデ調整である。胎土に砂粒を含まず、焼成は良好。内面は暗い青灰色、外面は黒色に近い。この器形はいわゆる須恵器の古式には類例の無いところから、陶質土器の可能性がある。

杯蓋 (2) 復元口径12cm、現存高2cmを測る。体部は丸味をもち、口縁部を除いて逆時計回りのヘラケズリが施される。口縁部内面にはやや外反した断面三角形を呈すかえりを有す。かえりは口縁部より下方へ出ない。胎土に砂粒を含み、灰青色を呈す。

土師器

変形土器 (3) 復元口径22.1cmを測る。口縁部は強く外反し、胴部との境は内面に棱を有す。体部は丸味を持ち、丸底を有する器形であろう。頸部が最も肥厚し、口縁部は薄い。外面は粗いタテハケを施した後、口縁部のみヨコナデを行なう。胴部内面は下から上へのヘラケズリである。胎土に砂粒を多く含む。焼成は良く、暗い黄灰色を呈す。奈良時代に属する變である。

高杯 (4) 溝上層より出土。脚部と思われるが類例が無い。高杯の杯部とも考えたが、体部に穿孔があるところから高杯の脚部とした。破片のため復元図に問題もあるが、大きく聞く脚部の中位に明瞭に段を有しており、径0.7cmの孔を穿っている。摩滅のため不明だが孔は焼成後の可能性がある。筒部と裾部下半を欠損する。内外面は丁寧なナデ調整で、胎土も精良である。焼成は悪く淡褐色を呈す。杯部の転用品の可能性が残る。

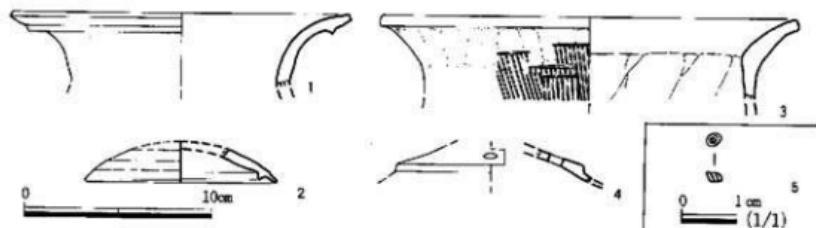


Fig. 61 2号溝出土遺物 (1/3)

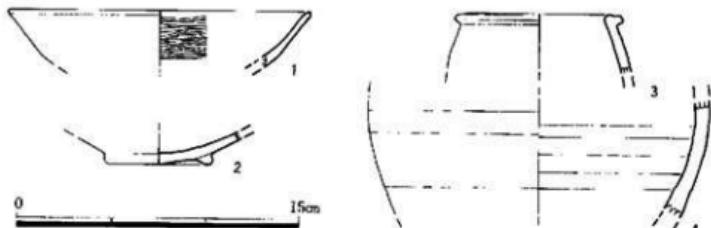


Fig. 62 3号溝出土遺物 (1/3)

玉類

小玉 (5) ガラス小玉で、径2mm、高さ1.7mm、孔径0.8mmを測る。色調はコバルト・ブルーである。溝底より出土。

3号溝出土遺物 (Fig. 62)

出土遺物は2号溝同様に細片が多く、復元径も疑問が残る。

黒色土器

椀 (1, 2) 1は口縁部の破片で復元径16.2cmを測る。体部は丸味を持ち、口縁端部はわずかに外反する。内面にヘラミガキ痕がある。2は底部で高台は摩滅のためわずかに変形している。底径5.8cmを測る。1, 2共に摩滅が著しく、焼成は弱い。胎土に砂粒を含む。

陶器

壺 (3, 4) 3は復元口径9.1cmを測る。口縁上面は平坦で端部は丸味をもつ。体部は長胴形と思われる。4は大型の壺の脚部片である。最大胴径18.2cmを測る。いずれも釉は薄く、くすんだ暗緑色を呈している。

鉄滓

長さ4cm×3cmを測る鉄滓が1点出土している。

小 結

以上、限られた地域の調査ではあるが、検出遺構、遺物について述べた。本項では、時期的な判断、或いは課題的な事項について述べたいと思う。

遺構は大きく4つの時期に分けられる。I期は古墳時代前期の住居跡である。西側に隣接して第29次、第55次調査が実施され計3軒の住居跡を検出している。年代的には当該の住居跡と同時期と思われるので、これらを含めて単位集団を形成していたと思われる。その他に付岡1で観察すると4世紀代の住居跡は第6次、第19次調査に2軒、第66次調査に1軒、第30次、

第53次調査で2軒、第3次調査に1軒、第52次調査に2軒、第7次調査で5軒を検出している。厳密に言えば同一地点内、或いは各地点毎にわずかに時期差を考えることができる。これらの住居跡は集落の一部を検出したことにどまっているが、本来は4~5軒の単位をなすものと思われる。分岐した台地上にある第7次、第52次調査地点を別にして、有田1丁目周辺の平坦地面上に所在する住居跡群は各々80~100mの間隔を保っている。これは1つの集落に於ける単位集団の存在と単位集団の数を表わすものと受けとめて良いであろう。幾つかの移動、廃絶があったとしても基本的な単位集団の数と立地に変化は無く、以後のカマドをもった住居跡群へ受け継がれて行くものと思われる。又、厳密に時間差を明確にした場合、単位集団の立地の移動も考え得るので、資料の分析と共に今後の増加の過程で再検討を行ないたい。

Ⅱ期は獨立柱建物を主体とする時期で、第29次、第55次調査と同時代を示すものと思われる。特に柱通りは、第29次調査検出の建物の柱行と柱通りが一致するところから同時期の所産と考えて良いだろう。第29次調査検出の建物が倉庫と考えられるのに対し、当該の建物は東側に底を持つなど住宅的な要素をもっている。時期は現在検討の段階であるが、第29次調査同様に奈良時代後半~平安時代が考えられる。

Ⅲ期は井戸、1号上塙、3号溝で構成される。1号土壇は周壁に粘土を貼付けるなど特殊な形態をもっている。粘土は棺の固定に用いられたものと考えれば、土壤中の要素もある。2号溝の底は西方向へ傾斜する。谷へ向いているので、排水施設と考えられる。又、この溝は井戸と切合い関係にあるが前後関係は不明であった。この溝は井戸より東へ伸びる形跡は認められず、井戸より派生した状態を呈していることから、井戸に付属する排水施設と考えられよう。

井戸の出土遺物は土師器、瓦器、陶磁器、須恵質土器、土師質土器を出土するが、白磁において大宰府史跡分類の椀Ⅳ類が著しく、次いで罐類の椀が多い。青磁は龍泉窯系の椀Ⅰ類の出土量に比べ、同安窯系の椀は著しく多い。^{注1}又、龍泉窯系の体部に鏽蘿弁を持った椀は1点のみと云う結果であった。土師器は皿と杯が、他の器種に比べて著しく出土しており、法量からそれぞれ皿が4類、杯が4類に分類されるが同一所産と考えて良い。皿は口径8.2~9.8cm、杯は口径13.7~16.2cmの間に分布する。全て糸切り底で板目が残るものと無いものがある。13世紀中頃に比定される大宰府史跡SK601に比べ器高は低く、口径は大きい。同じく、大宰府史跡SK1085は13世紀前後に比定されるが、法量は非常に近似するものの本例に比べ小型化の傾向がみられる。当遺跡の皿Ⅱ~Ⅳ類は口径9~10cm内に分布し、その量は多い。杯も同じくSK1085に比べ皿~罐類の口径は15cm前後~16cmを測り、その量は多い。大宰府史跡SE225はヘラ切り底と糸切り底の皿、杯が共存しており、その法量は杯が14.6~15.3cm、皿が9.0~9.4cmの範囲に分布している。当遺跡の杯Ⅰ類は13.6~13.9cmに、皿Ⅰ類は8.2~9.1cm(多くが8cm代)に分布しSE225よりも小型化の傾向を示しており、後出するものと思われる。大宰府史跡SK1203、SK1204は12世紀前半~中頃に比定されているが、皿、杯共にヘラ切り底と糸切り底が共存して

いる。又、法量は皿の口径9.0~9.6cm代で、8cm代は1点だけである。杯は口径15.0~16.6cmに分布し、14cm代は1点である。以上のことから、当該遺跡出土の土師器皿、杯は13世紀前後のSK1085よりも、法量的に大き目のものが多い。12世紀前半~中頃のSK1204に比べて小型化が目立つ。更に全て糸切り底と云う事から、SK1085より先行し、SK1204より後出のもとの考えられる。

瓦器碗は、I類一体部の立ち上がりがシャープなグループ(1, 4, 16)、II類一体部の立ち上がりが丸味をもち、内底が水平であるグループ(2, 3, 9)、III類一体部が更に球体に近くなるグループ(5, 6, 8)、IV類は図示しなかったが、体部中央に細折部をもつもの（破片が第2層より1点出土している）に分けられる。1, 2には器形に歪みがある。高台は1, 2が低く、小さな高台であるが、5は大きな断面三角形高台である。内面のヘラミガキは粗雑で、外面中位以下には指圧整形痕が残っており、2の体部下半は粗雑なヘラケズリが施される特徴をもっている。これを大宰府史跡出土資料についての編年にて当該する。I類はIIIaに、II類はIIIbに、III類(8)はIIIcに器形的に近似する。しかし、法量ではIIIb、IIIcが口径15.3~15.8cm、器高5.8~6.5cmに対し、2は口径16.8cm、器高5.9cm、8は口径16.8cm、現存高5.1cmを測り、法量的にはIIIaに近い数値を示している。1の口径17.6cm、器高5.9cmを測り、ほぼIIIaの段階と思われる。1, 2は完正品で、井戸下層の暗青灰色粘質土層にて共伴していることから同時期の所産と考えて良い。上層図(Fig. 38)の標高11.15mを測る深さで、土師皿、杯が一括して出土したが、この上層皿の法量は口径9.1~9.8cmを測り、口径8cm代の皿は認められない。瓦器碗5は上記の土師皿に共伴していることや、法量、器形から瓦器碗編年のIIIa~IIIbの間に位置するものと考えたい。又、瓦器杯の7, 12は1, 2に共伴する。以上、井戸出土の陶磁器、土師器、瓦器碗の分類を試みたが、上記よりこれらの上器群はほぼ12世紀後半から末の時期に比定して大過ないであろう。おのずから井戸の廃棄は12世紀後半に比定される。

IV期は1号溝であるが、出土した軒平瓦は第19次調査出土の軒平瓦I類と同一形態であり、16世紀前半の年代が考えられる。昭和56年度の第55次調査で検出した東西方向の溝は、16世紀代の明の染付等を検出しており、当該溝と東西から南北方向に接続する可能性がある。有田地区はこの時期の溝が数多く錯綜しており、その関連性については資料不足と云える。調査面積の拡大が進行しない限り、溝相互の関連、機能をも明確にし得ない。

註1. 福岡市教育委員会「有田・小田部第2集」1982

註2. 港北ニーカウン埋蔵文化財調査団「大塚遺跡発掘調査概報」調査研究集録第1冊 1976

註3. 東京国立博物館福「日本出土の中国陶磁」東京美術 1978

註4. 横田賢次郎、森田勉「大宰府出土の輸入陶磁器について」『九州歴史資料研究論集4』1978

註5. 森田勉「九州地方の瓦器碗について」『考古学雑誌』第59卷第2号所収

III

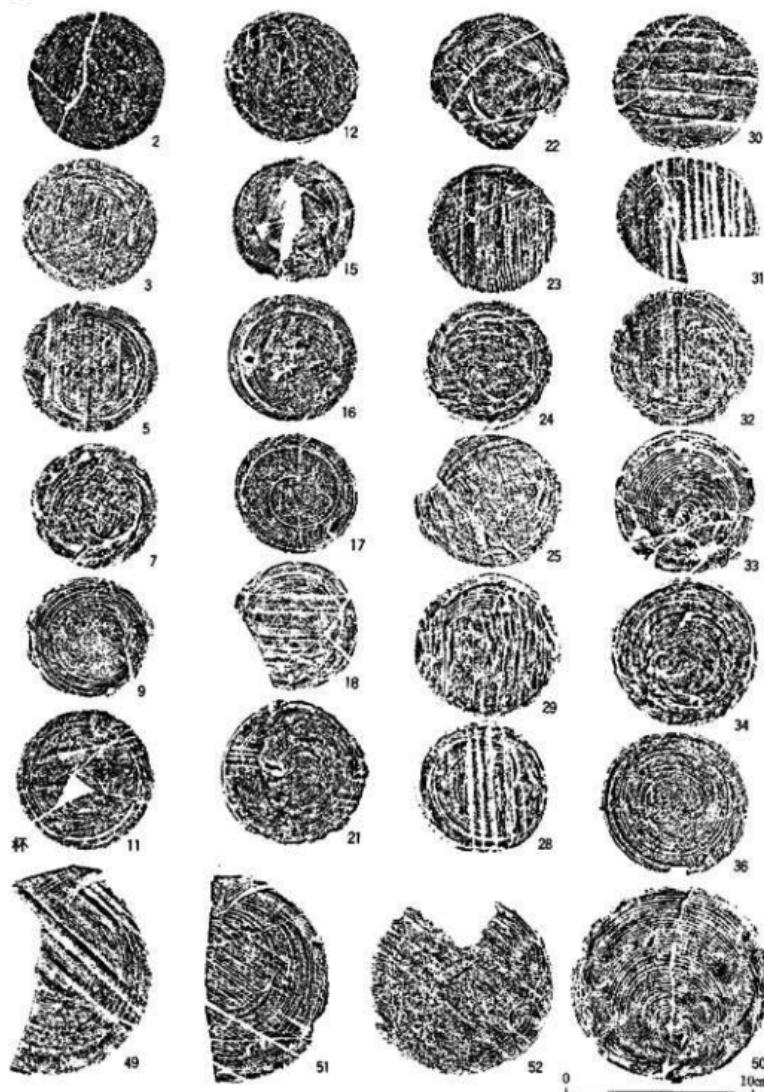


Fig. 63 井戸出土の土師皿。杯底部拓本

※番号は実測図番号と同一

Tab. 2 十師器皿、杯、瓦器検査測表

番	寸 径	外 周	高 度	形 式	色 調	地 紋	切削面の 内成形の 形状の ナメの有無			出 土 地 点	
							ハラ	ヒラ	内成形の ナメの有無		
1	9.2	1.0	4.0	輪底切削型	灰 色	良 好	○	○	○	第 3 層 L. 11.5m 付近一帯	
2	8.6	1.15	7.0	輪底切削型	(内) 黄褐色、(外) 淡黄色	良 好	○	○	○	第 14 層 L. 11.5m 付近一帯	
3	8.7	1.2	6.2	輪底、斜砂型	深 青	良 好	○	○	○	L. 11.5m 付近一帯	
4	8.65	1.1	6.6	輪 底	(内) 黑褐色、(外) 淡黄色	良 好	○	○	○	第 14 層 L. 11.5m 付近一帯	
5	8.7	1.2	6.2	輪 底	深 青	良 好	○	○	○	L. 11.5m 付近一帯 L. 11.5m 付近一帯	
6	8.7	1.1	6.5	輪底、斜砂型	深 青	良 好	○	○	○	L. 11.5m 付近一帯	
7	8.7	0.95	6.1	輪 底	青 色	良 好	○	○	X	L. 11.5m 付近一帯	
8	8.6	1.35	6.5	輪 底	深 青	良 好	○	○	○	第 14 層 L. 11.5m 付近一帯	
9	8.9	1.2	6.6	輪 底	(内) 黑褐色、(外) 淡黄色	良 好	○	○	X	L. 11.5m 付近一帯	
10	8.9	1.2	6.4	輪 底	深 青	良 好	○	○	○	第 14 层 L. 11.5m 付近一帯	
11	9.1	1.2	7.7	輪底、斜砂型	深 青	良 好	○	○	○	第 14 层 L. 11.5m 付近一帯	
12	9.0	1.3	6.9	輪底、斜砂型	深 青	良 好	C	○	○	第 14 层 L. 11.5m 付近一帯	
13	9.15	1.1	7.6	輪底の半球	深 青	良 好	○	○	○	第 14 层 L. 11.5m 付近一帯	
14	9.0	1.1	6.5	輪底、斜砂型	深 青	良 好	○	○	○	第 14 层 L. 11.5m 付近一帯	
15	9.1	0.9	7.5	輪底、斜砂型	深 青	良 好	○	○	○	L. 11.5m 付近一帯	
16	9.2	1.2	6.6	輪 底	深 青	良 好	○	○	○	L. 11.5m 付近一帯	
17	9.25	1.25	6.6	輪 底	深 青	良 好	○	○	X	L. 11.5m 付近一帯	
18	9.2	1.45	7.2	輪 底	深 青	良 好	○	○	X	第 1 层 L. 11.5m 付近一帯	
19	9.1	1.3	7.7	輪 底	深 青	良 好	○	○	○	第 1 层 L. 11.5m 付近一帯	
20	9.1	1.4	7.0	輪底の半球	深 青	良 好	○	○	X	L. 11.5m 付近一帯	
21	9.3	1.25	7.4	輪底、斜砂型	(内) 黑褐色、(外) 淡黄色	深 青	良 好	(3)	(3)	第 1 层 L. 11.5m 付近一帯	
22	9.3	1.15	7.0	輪底、斜砂型	深 青	良 好	○	○	X	第 1 层 L. 11.5m 付近一帯	
23	9.1	1.40	6.5	輪 底	深 青	良 好	○	○	○	第 14 层 L. 11.5m 付近一帯	
24	9.2	0.95	6.3	輪底、斜砂型	深 青	良 好	○	○	○	第 14 层 L. 11.5m 付近一帯	
25	9.4	1.2	7.7	輪底、斜砂型	深 青	良 好	○	○	○	第 4 层 L. 11.5m 付近一帯	
26	9.35	1.15	8.8	輪 底	深 青	良 好	○	○	○	第 3 层 L. 11.5m 付近一帯	
27	9.4	1.2	8.3	輪底、斜砂型	深 青	良 好	○	○	○	第 4 层 L. 11.5m 付近一帯	
28	9.4	1.3	8.6	輪底、斜砂型	深 青	良 好	○	○	○	第 4 层 L. 11.5m 付近一帯	
29	9.4	0.92	8.2	輪底、斜砂型	深 青	良 好	○	○	○	第 4 层 L. 11.5m 付近一帯	
30	9.2	1.05	8.7	輪底、斜砂型	深 青	良 好	○	○	○	第 4 层 L. 11.5m 付近一帯	
31	9.7	0.95	7.5	輪 底	(内) 黑褐色、(外) 淡黄色	深 青	良 好	○	○	第 1 层 L. 11.5m 付近一帯	
32	9.2	1.2	8.0	輪底の半球	(内) 黑褐色、(外) 淡黄色	深 青	良 好	○	○	第 1 层 L. 11.5m 付近一帯	
33	9.1	1.4	7.7	輪底、斜砂型	深 青	良 好	○	○	X	L. 11.5m 付近一帯	
34	9.2	1.2	7.5	輪底の半球	深 青	良 好	(3)	(3)	X	L. 11.5m 付近一帯	
35	9.6	1.2	7.7	輪 底	深 青	良 好	○	○	X	L. 11.5m 付近一帯	
36	9.6	1.25	6.5	輪底、斜砂型	(内) 黑褐色、(外) 淡黄色	深 青	良 好	○	○	L. 11.5m 付近一帯	
37	9.6	0.9	6.2	輪底、斜砂型	(内) 黑褐色、(外) 淡黄色	深 青	良 好	○	○	第 4 层 L. 11.5m 付近一帯	
38	10.4	1.0	9.2	輪底、斜砂型	(内) 黑褐色、(外) 淡黄色	深 青	良 好	○	○	第 4 层 L. 11.5m 付近一帯	
杯							ハラ ヒラ 内成形の ナメの有無			ナメの質感	
39	13.7	2.05	10.1	輪 底	深 青	良 好	○	○	○	第 14 层 L. 11.5m 付近一帯	
40	13.9	2.4	9.4	輪 底	深 青	良 好	○	○	○	第 14 层 L. 11.5m 付近一帯	
41	13.7	2.5	8.0	輪 底	深 青	良 好	○	○	○	第 14 层 L. 11.5m 付近一帯	
42	13.4	2.9	0.2	輪 底	白 色	良 好	○	○	○	第 14 层 L. 11.5m 付近一帯	
43	13.3	3.1	10.2	輪底、斜砂型	深 青	良 好	○	○	○	第 14 层 L. 11.5m 付近一帯	
44	13.4	3.2	10.0	輪 底	(内) 黑褐色、(外) 淡黄色	良 好	○	○	○	第 14 层 L. 11.5m 付近一帯	
45	13.2	3.5	10.1	輪底、斜砂型	深 青	良 好	○	○	○	第 14 层 L. 11.5m 付近一帯	
46	13.5	3.0	10.0	輪 底	深 青	良 好	○	○	○	第 14 层 L. 11.5m 付近一帯	
47	13.4	3.4	10.5	輪 底	深 青	良 好	○	○	○	第 14 层 L. 11.5m 付近一帯	
48	13.1	3.1	12.2	輪 底	深 青	良 好	○	○	○	第 14 层 L. 11.5m 付近一帯	
49	13.2	2.5	13.8	輪 底	深 青	良 好	○	○	○	第 14 层 L. 11.5m 付近一帯	
50	13.1	3.7	10.9	輪底、斜砂型	深 青	良 好	○	○	○	第 14 层 L. 11.5m 付近一帯	
51	13.6	3.8	9.8	輪底、斜砂型	深 青、部分に淡黄色	良 好	○	○	○	第 14 层 L. 11.5m 付近一帯	
52	13.1	3.1	11.8	輪底、斜砂型	(内) 黑褐色、(外) 淡黄色	深 青	良 好	○	○	第 6 层 L. 11.5m 付近一帯	
53	13.1	2.0	8.8	輪 底	深 青	良 好	○	○	○	第 11 层 L. 11.5m 付近一帯	
54	13.0	3.1	9.6	輪底、斜砂型	深 青	良 好	○	○	○	第 4 层 L. 11.5m 付近一帯	
瓦器類							ハラ ヒラ 内成形の ナメの有無			ナメの質感	
1	17.7	2.9	6.2	輪底、斜砂型	(内) 黑褐色、(外) 黑色	良 好	外 面下部	外 面下部	X	第 14 层 L. 11.5m 付近一帯	
2	16.9	1.6	6.7	輪底、斜砂型	深 青	良 好	C	○	X	第 14 层 L. 11.5m 付近一帯	
3	17.2	4.6	—	輪 底	深 青	良 好	外 面下部	外 面下部	○	第 14 层 L. 11.5m 付近一帯	
4	15.0	4.2	—	輪 底	白 色	良 好	C	—	—	—	
5	4.2	6.7	—	輪底、斜砂型	(内) 白色、(外) 淡黄色	良 好	金属性地	○	C	L. 11.5m 付近一帯	
6	3.9	6.3	—	輪底、斜砂型	白 色	良 好	外 面下部	○	X	第 3 层 L. 11.5m 付近一帯	
7	2.9	6.9	—	輪底、斜砂型	白 色	良 好	外 面下部	外 面下部	C	第 14 层 L. 11.5m 付近一帯	
8	16.7	1.1	—	輪 底	(内) 黑褐色、(外) 黑色	良 好	外 面下部	外 面下部	○	第 14 层 L. 11.5m 付近一帯	
9	15.4	1.0	—	輪 底	深 青	良 好	金属性地	○	C	第 4 层 L. 11.5m 付近一帯	
10	16.6	3.6	—	輪 底	深 青	良 好	金属性地	○	○	第 3 层 L. 11.5m 付近一帯	
11	17.2	3.6	—	輪 底	(内) 黑褐色、(外) 黑色	良 好	金属性地	○	○	—	
12	16.7	4.1	—	輪 底	(内) 黑褐色、(外) 黑色	良 好	外 面下部	外 面下部	○	第 14 层 L. 11.5m 付近一帯	

第36次調査

調査概要

調査対象地は福岡市早良区小田部5丁目143番地にある。調査対象面積は217m²である。

有田・小田部台地の北側は、北から4つの小谷が入り込み、ハッサウエー状に小台地を分岐している。各々の台地最高所は東側から標高10~7mを測る。当該地はこれらの西側台地に在って、標高7m前後の台地縁辺部に位置している。周辺では南側に第16次調査が昭和53年度に実施され、弥生時代の貯蔵穴や古墳時代の住居跡などが検出されている。当該地は昭和53年度に分譲住宅会社によって当該地を含めた約1,000m²を測る面積の開発申請が行なわれている。この当時の試掘調査では東側よりに弥生時代前期の甕棺が検出されている。昭和55年にその一区画である当該地が住宅建設に先立って発掘調査の申請がおこなわれたため、昭和55年度の事業として発掘調査を実施した。

発掘調査は昭和55年6月23日~7月23日迄実施した。遺構は褐色ローム層上に検出される。表土は耕作土で、東側約6mは10cm前後を、西側約6mは30cm前後の深さを測る。これはローム面が東から約6mの部分で段落ちになっているためで、旧畠地の地割り部分と思われる。又、西南隅は、中世の溝を破壊して大規模な鹿蹄塙が掘られている。時期は弥生時代から中世末に至る。

遺構は弥生時代の甕棺墓2基、古墳時代の貯蔵穴1、中世の土塹4基、中世の溝1条、中世の柵列2条、時期不詳土塹1基、他pit多数を検出した。遺物は弥生時代の土器、古墳時代の變形土器、中世の土師器、皿、陶磁器、板磚等を検出している。

検出遺構

甕棺墓

調査区東北隅の境界地周辺で甕棺墓を2基検出した。昭和53年度に試掘した際検出した前期甕棺墓は今回検出されず、この調査地の東側に存在するものと思われる。

1号甕棺墓 (Fig. 66, PL. 37, 38)

墓壙は一部崩壊しているが、不整の開



Fig. 64 第36次調査地位図(1/2500)

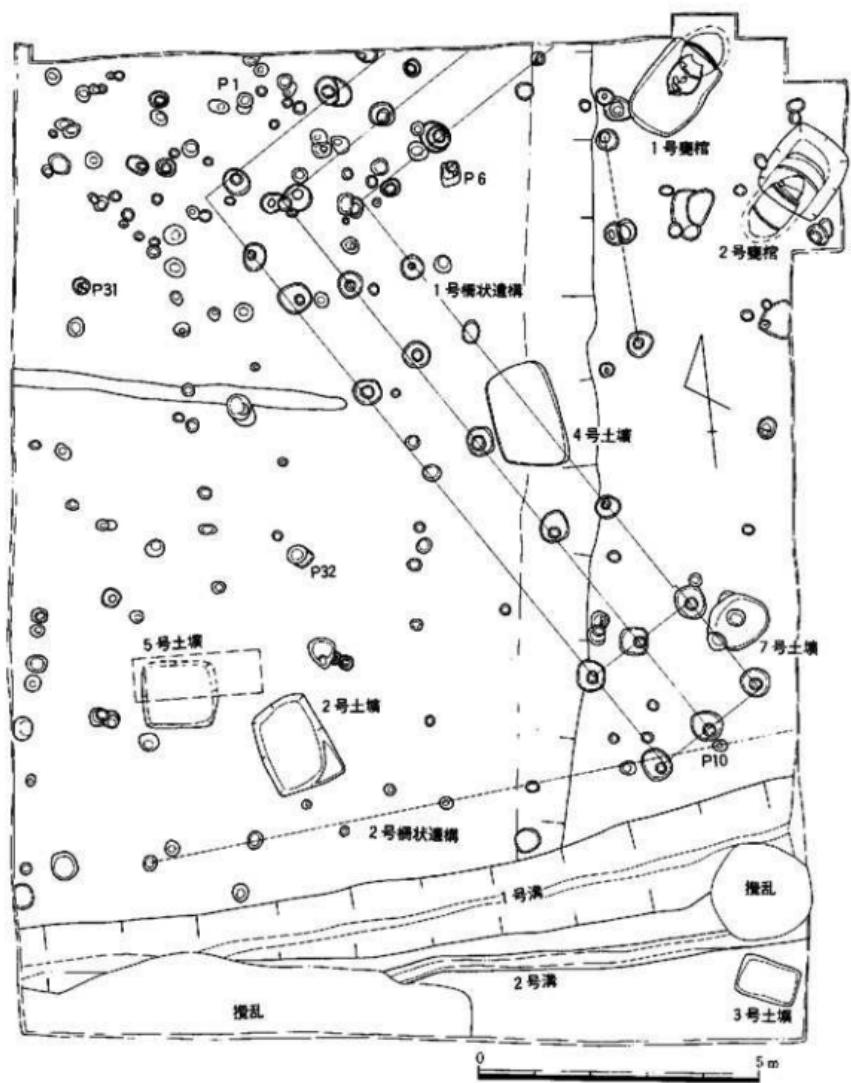


Fig. 65 造構配置図(1/100)

丸長方形を呈する。長さ2.26m、幅1.17m、深さ9cmを測り、床面は北側へ緩やかに傾斜する。土壇の北側に横穴を穿ち、喪棺の下蓋を据えている。横穴は奥行約60cmを測る。

喪棺は接口棺で、後世の削平により上蓋の大半が破損している。喪棺は主軸方位S 45°Wに置き、埋置の角度は26°30'である。上、下蓋共に喪形土器を利用している。合口には粘土の目貼りは認められなかった。上蓋の内側には喪片が転落しており、底部付近には中世の板碑片がある。板碑は室町時代と思われ、この時期に一度削平が行なわれたものであろう。

2号喪棺 (Fig. 66, PL. 39)

墓壇は隅丸長方形を呈し、長さ2.31m、幅1.32m、最大深1.02mを測り、底面は階段状を呈している。墓壇の南壁に間口約85cm、奥行85cmを測る横穴を穿ち、下蓋を据えている。喪棺は呑口の合棺で、上、下蓋ともに喪形土器と共に用い、上蓋を下蓋内

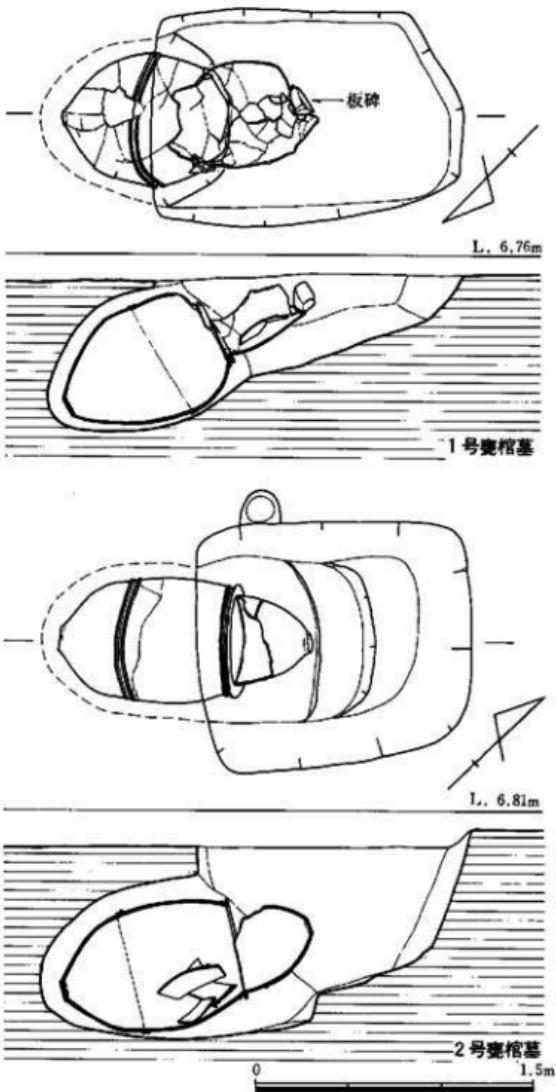


Fig. 66 1・2号喪棺基 (1/30)

に差し込んでいる。断面図で観察すると、上蓋は体部上半を欠いて接口した状態にみられるが、下蓋内部に体部上半部が転落破損した状態で検出された。本来、上蓋上半部を欠いたものでは無い。蓋棺は主軸方位をN45°Eに置き、埋置角度は16°である。合口には粘土の目貼り等は認められない。墓壙の上層より玉が1点出土しており、この蓋棺に伴う可能性がある。

以上、1、2号共に弥生時代中期後半の合口式の蓋棺墓である。頭位置は相違するものの墓壙方位は全く同一である。

両者は約1.5mの間隔で設けられており、一定の規則性が認められる。

土 壕

土壙は計6基検出したがその内、1号土壙は1号蓋棺墓の墓壙となったので欠番とし、6号土壙は内部に柱痕が認められ、大型柱穴である可能性が強いので土壙からは除いた。

2号土壙(Fig. 67, PL. 40)

平面形は隅丸長方形を呈し、底面は水平である。南側の小口幅が北側に比べて広い。長さ1.63m、北側小口幅1.02m、南側小口幅1.26m、深さ23cmを測る。長軸の方位はN20°Wに置いている。東南隅はやや張り出し、底部はステップ状を呈している。覆土は暗茶褐色粘質土である。遺物は覆土から青磁碗片が床面から香炉片が出土している。

3号土壙(Fig. 68, PL. 41)

平面形は隅丸長方形を呈

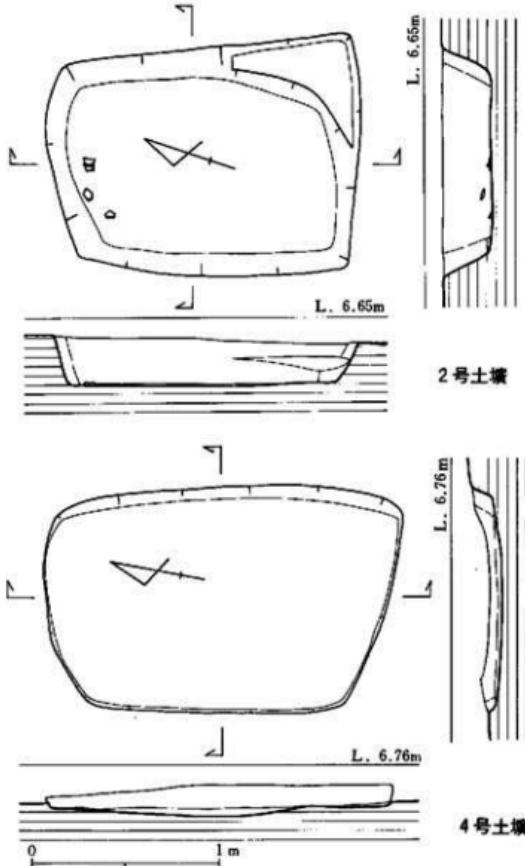


Fig. 67 2・4号土壙(1/30)

し、長さ1.03m、幅0.72m、最大深51cmを測る。床面が西側へわずかに傾斜し、側壁が袋状を呈している。主軸方位はN69°30'Wである。覆土は真黒色粘質土である。遺物は少なく、細片がわずかに出土したが年代の決定はできない。

4号土壙 (Fig. 67)

1号櫛列と切合い、櫛列より後出する。平面形は東南隅角が突き出しており、不整隅丸長方形を呈する。断面形は底面がわずかに舟底状を呈している。削平のため残存状態は良好ではない。長さは1.35～1.87m、幅は北側小口で約1.0m、南側小口で約1.1m、中央部分で1.21m、最大深は16cmを測る。主軸方位N13°Wに置いている。覆土は暗茶褐色を呈し、2号土壙と同一である。遺物は土器細片が出土した。

5号土壙 (Fig. 68, PL. 41)

後世に上部を削平されており、更に試掘調査のトレンチにて西半分を破損している。平面

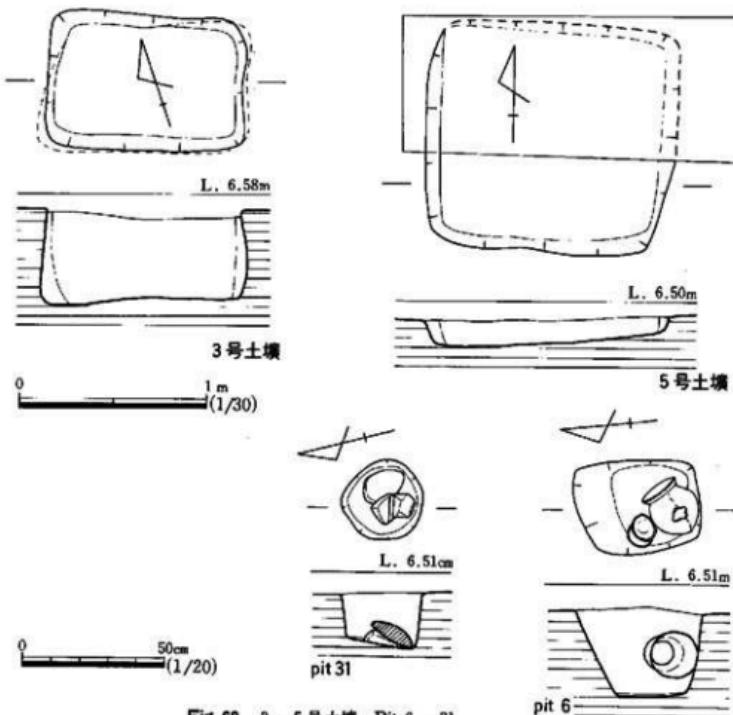


Fig. 68 3・5号土壙, Pit 6・31

は隅丸長方形と思われるが、現存部分での計測値は隅丸方形に近い。底面は南側へわずかに傾斜する。長さ1.33m、幅1.23m、最大深12cmを測り、主軸方位はN80°Wである。覆土は暗茶褐色粘質土で、2号土壙の覆土と同一である。遺物は土師器の細片が出土したが年代の手懸かりにはならない。

以上、土壙について述べたが、2、4、5号の覆土は同一であり、相互に切合い関係に無いところから、ほぼ同一時期と考えて良いだろう。2号土壙から龍泉窯系の鎮蓮弁の掠片と香炉片が出土している。時期的には14世紀前後の年代が考えられよう。

その他のPit

遺物を出土した柱穴、或いは用途不明の土壙を扱う。

Pit 6 (Fig. 68, PL. 42)

平面形は隅丸長方形を呈し、長さ約68cm、幅約50cm、深さ48cmを測る。底部はほぼ水平で、壁は摺鉢状を呈している。内部には變形土器1点と、高台付椭1点が据えられていた。これらの土器は、いわゆる布留式土器に併行する土器で古墳時代前期の所産である。このpitは柱穴としては例が無く、貯蔵的要素が強いと思われる。出土した土器の時期に伴う住居跡は、大半がベットを有した長方形、或いは方形の住居跡であるが、その壁の1辺に接して方形の貯蔵穴が設けられることがある。規模、形態共に近似しているところから、住居跡の全ての壁を削平された結果、このpitが残存したと考えられよう。

Pit 31 (Fig. 68, PL. 42)

平面形は円形状を呈す柱穴である。直径45cm、最大の深さ30cmを測る。内部に礎石として利用された、長さ約25cm、幅約15cm、厚さ6.8cmを測る転石と、板磚の頭部片が出土している。板磚は頭部を三角形に成形したもので、器形から室町時代と思われる。

溝

1号溝 (Fig. 69, PL. 43)

調査区南側で検出された。区画整理により著しい削平を受けている。全長14.2m、現存幅約1.8m、現存の深さ58cmを測る。断面形はV字形を呈している。覆土はFig. 69のように暗茶褐色



Fig. 69 1号溝土層図 (1/40)

土を主体とし、各層は年代的に差異はない。溝底は東から西方向に傾斜している。溝の西南部には大きな塵芥壠があるため溝の南壁が破壊されている。溝の北壁から約1mには長さ10.8mに及ぶ柵列が溝に沿って存在する。この柵列の柱間は約1.8mの等間隔である。1号溝に付属する遺構と考えたい。又、溝の南壁から約80cmには、幅約30cmを測る浅い溝が1号溝に沿って流下している。覆土は1号溝と同一であり、1号溝に付属する可能性をもっている。

出土遺物は瓦質土器の鼎、湯釜、火舎、土師質土器の鍋、土師器皿、陶磁片が出土している。

2号溝 (Fig. 65, PL. 43)

溝の西側は塵芥壠によって破壊されている。1号溝の南側約80cmに沿って設けられた浅い溝で、現存長7.5m、最大幅80cm、深さ25cm前後を測る。断面はU字形を呈する。覆土は1号溝同様に暗茶褐色粘質土で、上層には八女粘土のブロックが混入していた。遺物は細片のため、年代を知る手懸かりとならない。位置的にみて1号溝に付属する可能性が強い。

柵状遺構

規模の異なる2条の柵列を検出した。1号柵列は大規模な柱穴をもち、南北方向に設置され、小規模の2号柵列は1号溝に沿って設置されている。1号柵列と2号柵列はpit10で切合っている。1号柵列が先行する。

1号柵状遺構 (Fig. 70, PL. 36)

柵列は調査区北端で南北方向から東西方向へ直角に曲がる。南北方向の現存長は12m、東西方向の現存長は4.3m以上を測る。南北方向の主軸方位はN33°30'Wに置いている。柱列の掘方径は50~60cmを、柱根径は15~20cmを測る。各々の柱間は1.75~2.5mを測るが、その半始は約2mである。柵列の南側には梁行1間、桁行2間の建物を形成している。梁行1.95m、桁行は各々1.1mを測る。当初は柵の支柱と考えたが、柱筋が明確に通り、掘方規模や各柱間も均等であることなど建物として考えた方が良いと判断した。柵列の主柱は当然の事ながら、桁行中間柱の柱筋を通しているが、この主柱に建物の梁行の柱筋に通る柱列が併行する。これは柵列の支柱と考えられ、この柱穴の掘方、及び柱根規模は柵列主柱の柱穴と同一である。部分的に削平によって失っている。これらの柱間は建物の柱間と相違して、1.5~2.3mを測り、規則性をもたない。柵列に付属する建物はN123°Wに方位を置いている。柵列の主、支柱を含めた3本柱の方位は建物の桁行の柱筋に平行せず、各々、方位を徐々に北へ偏向しており、コーナー部分ではN70°30'Wの方位をとっている。これは上、支柱を含めた3本柱の柵列が南北方向から東西方向への転換を円滑にするための工夫が施されていると考えて良いであろう。掘立柱建物は柵内外へ通じる門的な要素、又は見張所的な要素を持っていると思われる。この柵列のpit10が2号柵列に切られており、又、4号土壙から柵列の東側支柱が削平を受けている。土壙の年代は2号土壙内出土の龍泉窯系の青炉片、或いは鎌蓮弁の碗からほぼ14世紀代に考えられ、4号土壙も2号土壙と同一覆土である点からほぼ同一年代の所産とした。2号柵列は1号溝

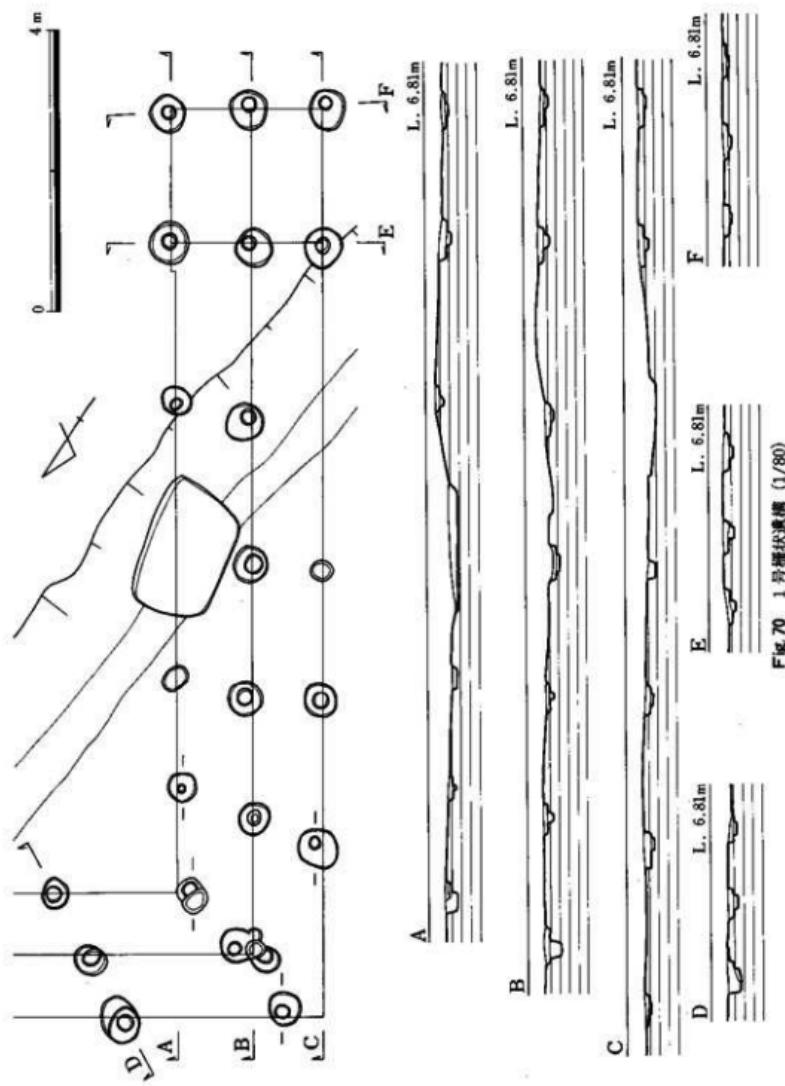


Fig. 70 1号勘探线 (1/80)

に伴う遺構と考えられ、その時期は1号溝の年代と同じく16世紀代を考えている。とすれば、切合関係から1号柵列は14世紀代の土壙よりも古い時代が考えられる。覆土は柵方が黒褐色土と茶褐色土の混合土を、柱根は砂混じりの茶灰色を呈していたが、この覆土は律令時代、或いは鎌倉時代初期に認められる覆土とは相違している。ゆえに、14世紀以前の鎌倉時代の前半～後半の段階に設けられた遺構と考えたい。

2号柵状遺構 (Fig. 65, PL. 36)

前述した通り、1号溝の北側約1m幅に沿って存在し、現存長10.5mを測る。柱穴径は20～30cm、深さ40～50cmを測る。柱間は1.6～1.9mを測り、平均値は約1.8mを測る。覆土は暗茶褐色を呈し、1号溝と同一の覆土である。1号柵列とは1号柵列のpit10で切り合っている。年代は1号溝が16世紀代と考えられるところから、同一時期で良いであろう。

掘立柱建物 (Fig. 65)

柱穴が多数検出され、しかも礎石をもつ柱穴や柱筋の通る柱穴群が幾つか認められるところから、建物の存在は充分に考えられるが、狭い地域の調査のため充分な確証を得ることができなかった。覆土は黒色土から暗茶褐色土迄あって、幅広い時代が考えられる。

出土遺物

表土、及び包含層出土遺物 (Fig. 71, PL. 44)

土師器

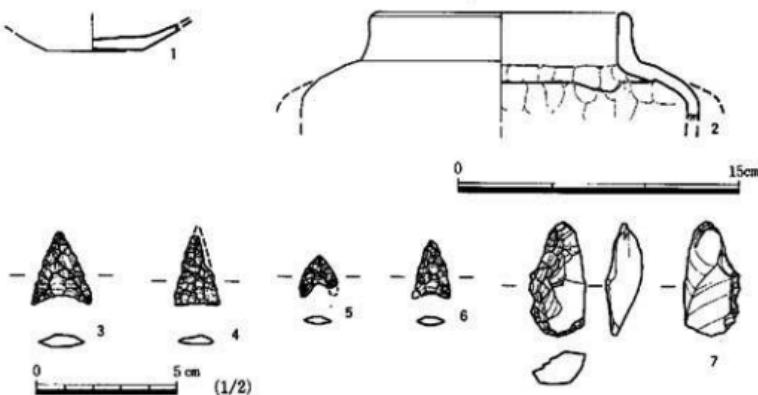


Fig. 71 表土出土遺物

皿(1) 口縁部を欠いている。底径5.1cm、現存高1.4cmを測る。内外面摩滅のため調整不明。胎土に砂を少し含む。淡黄灰色を呈している。

瓦質土器

湯釜(2) 口径12.8cm、現存高5.5cmを測る。体部は肩の張った球体を呈し、肩部に耳を1対貼付けている。口縁部は直口し、端部は丸味をもっている。内外面ヨコナデ調整で、頸部には指圧痕がある。外面は暗灰色で、内面は暗黄灰色を呈している。

石器

石鎌(3~6) いずれも黒曜石製である。3は長さ2.5cm、最大幅2.1cm、最大厚0.4cmを測る。左側のかえしの先端を欠いている。かえしの抉りは浅い。4は先端を欠いており、現存長2.5cm、最大幅1.6cm、最大厚0.3cmを測る。かえしの抉りは非常に浅く、平面形は長三角形状を呈している。5は長さ1.4cm、最大幅1.3cm、最大厚0.3cmを測る。右側のかえしを欠いている。抉りは深い。6は長さ2.1cm、最大幅1.3cm、最大厚0.3cmを測る。成形は粗く、完全な調整は済んでいない。左側のかえしを欠いている。抉りは浅い。

スクレイパー(7) 長さ3.9cm、最大厚1.3cm、刃部幅1.9cmを測る。A面は左側刃に調整を加えており、特に下位刃邊にある刃部には丁寧な調整を加える。B面の調整は左側刃をわずか調整するだけである。綫長の剥片を利用したもので、B面には打瘤を残している。材質はチャートである。

甕棺墓出土遺物 (Fig. 72, 73, 76, PL. 44, 45)

1号甕棺上蓋(8) 口径51.3cm、器高71.4~72.9cm、底径9.0cm、胴部最大径59.2cmを測る。口縁部はくの字形を呈し、頸部はやや窄まって、内面に稜を有している。胴部は砲弾形を呈し、胴部最大径は上位にある。頸部外面には1条の三角形突帯を、胴部下位には2条の低い三角形突帯を貼付けている。調整は、器面が摩滅しているのでハケ調整の有無は不明であるが、元ヨコナデ調整だけとも思われる。口縁部内外面と突帯部分にヨコナデが認められる。又、体部の一部に丹塗りの痕跡が認められた。胎土に砂粒を含む。焼成は良好だが、一部風化がみられる。淡褐色を呈する。

1号甕棺下蓋(9) 口径50.1cm、器高85~89cm、底径11.7cm、胴部最大径66.6cmを測る。器高に重みのある器形である。口縁部はくの字形を呈するが、頸部内面に粘土を引きだしてT字状に見せていている。口縁端部は丸味をもち肥厚する。胴部は丸味があって、胴部最大径は中程よりやや上位にある。頸部は強く窄まって、肩部を形成する。頸部外面に三角突帯を、胴部上位にコの字形突帯2条を貼付けている。胴部外面はタテハケを、内面はヨコナデ調整であるが、内外面上位にタタキ状の痕跡が認められる。口縁部内外面と突帯部分はヨコナデである。外面の一部に丹が付着している。焼成は良好で暗い黄褐色を呈し、部分的に黒斑がある。

2号甕棺上蓋(10) 口径39.5cm、器高57.3~59.2cm、底径11.5cm、胴部最大径46.4cmを測る。口縁部はくの字形を呈し、頸部は縮っている。頸部内面に稜を有している。胴部は砲弾形を呈

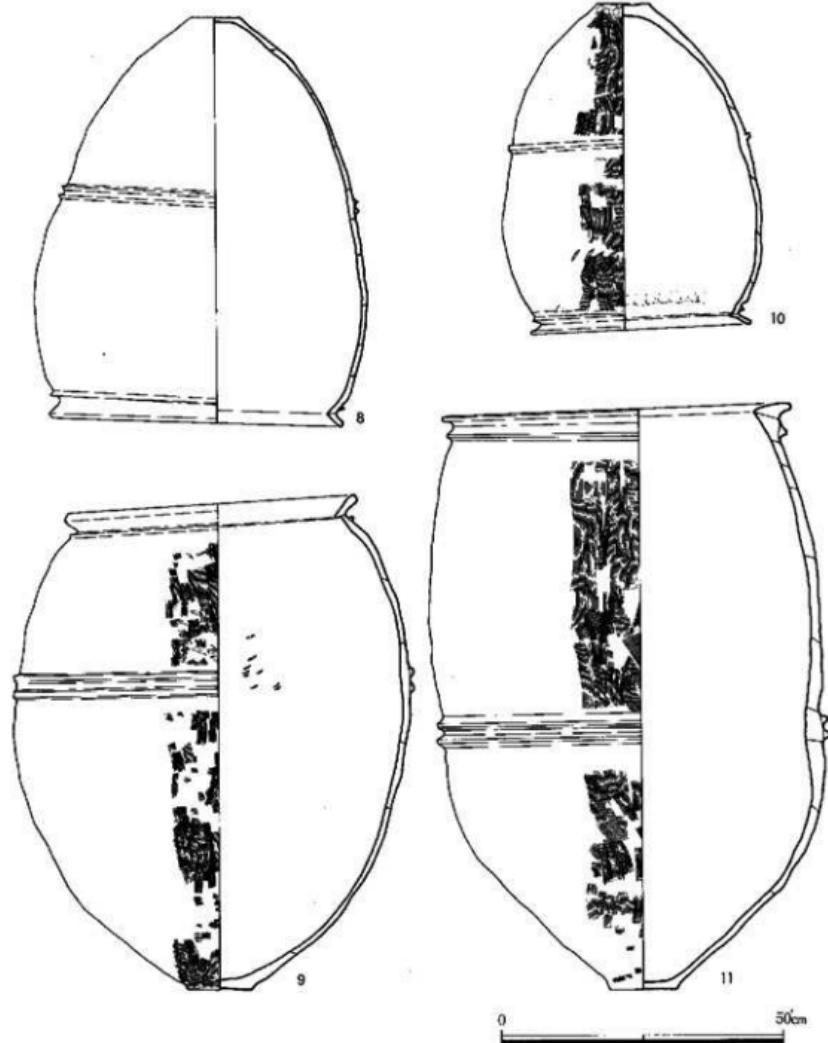


Fig. 72 麥桔實測圖 (1/10)

し、丸味をもつが肩が張る。胴部最大径は肩部にあって、頸部に1条の小さい三角形突帯を、胴部下位にコの字形突帯を1条施している。調整は口縁部内外面と突帯部分がヨコナデを、胴部外面はタテハケを、内面はナデ調整を施す。焼成は良好で、一部風化が認められる。全体に褐色を呈し、一部に黒斑が在る。

2号壺棺下蓋(11) 口径62.0cm、器高10.3cm、底径11.7cm、胴部最大径66.6cmを測る。口縁部は逆L字形を呈し、平坦部はわずかに内側へ突き出している。胴部は丸味をもつ円筒形状を呈し、胴部最大径は下位に在る。胴部下位から底部迄はシャープに窄まっている。頸部は内傾し、外面に台形状の突帯を、胴部下位には2条の突帯を貼付ける。胴部の突帯部分は貼付けのため中凹みをしている。口縁部内外面と突帯部分はヨコナデを、胴部外面はタテハケを、内面はナデ調整である。焼成は良好だが、下半部の風化は進んでおり、一部還元し、粘土質化している。色調は黄褐色を呈する。

石製品 (Fig. 76, PL. 44)

1号壺棺出土の板碑は後世の混入であり、2号壺棺墓壙内出土の玉は混入よりも副葬品として扱った方が良いだろう。

板碑(35) 頭部の額と身の一部で、頭頂部を欠損したため、再加工を行っている。頭頂部は三角形の山形に粗削りによって作り出しているが、ケズリは加えていない。額は身よりも4cm高い。横方向の薬研彫りの条線は、本来、額と頭頂部の境にあったものである。正面と側面は丁寧なケズリで、裏面は粗い調整で、ノミ痕が残っている。材質は砂岩である。二次的に火を受けている。

玉類 (Fig. 73, PL. 44)

(12) 2号壺棺上位の覆土より出土。壺棺の副葬品と考えた方が良いであろう。1側辺を垂直に、他辺を弧形に成形し、全体は半円状を呈している。最大長1.45cm、最大幅0.6cm、最大厚0.4cmを測る。A面の左辺上位に径0.4cmの孔を両側より穿孔している。又、この孔の1.4cm下にも別の孔の痕跡をとどめており、この玉が再加工品であることを示している。

両面には研磨痕跡である稜線が残っている。材質は硬玉である。

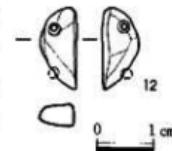


Fig. 73 玉実測図(1/1)

土壤出土遺物 (Fig. 74, PL. 44)

いずれも2号土壤より出土。6は底面より出土した。龍泉窯系青磁の破片である。

青磁

碗(22) 体部に鎧蓮弁を施す碗で、口縁部と底部を欠いている。釉は緑色を呈している。

香炉(21) 復元口径14.0cm、現存高5.8cmを測り、脚と底部を欠いている。体部はやや開き気味で、5条の幅広い沈線を施す。口縁端部は凹線を施して、内面へつまみ出している。釉は淡い

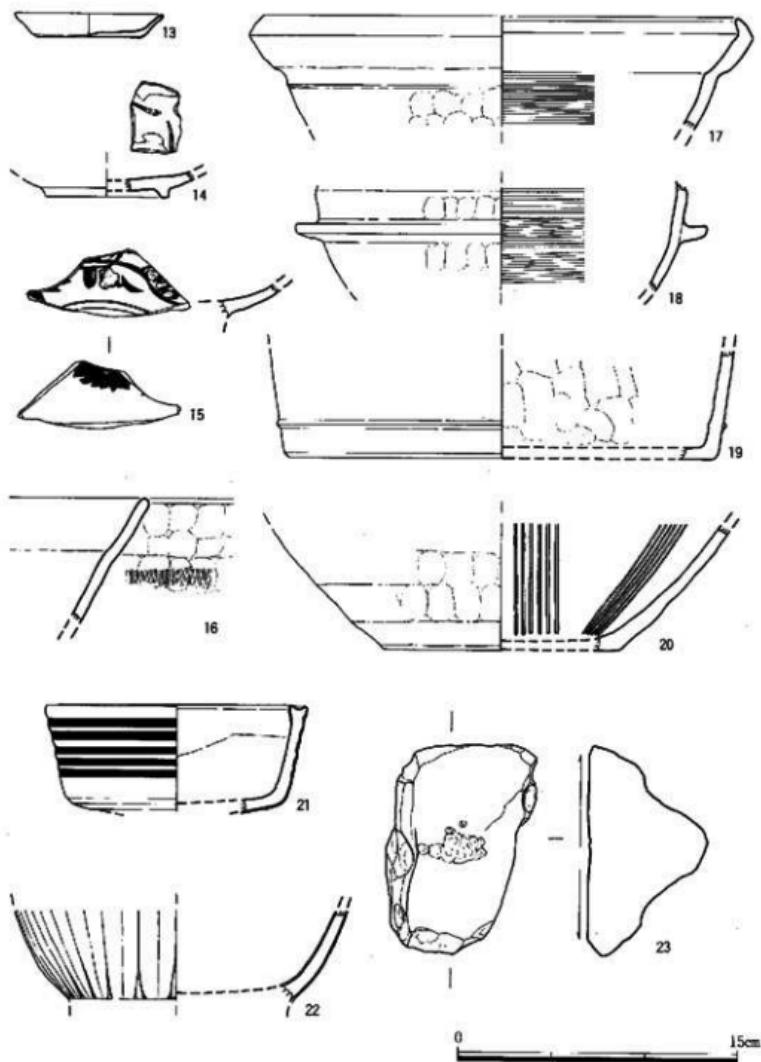


Fig. 74 1号沟、2号上坡出土遗物 (1/3)

青緑色を呈し、体部外面と内面の上位に施される。

1号溝出土遺物 (Fig. 74, PL. 44)

土師器

皿 (13) 口径7.9cm, 器高1.3cm, 底径5.5cmを測る。外底部は糸切底である。体部は外反し、内外面摩滅している。胎土は良質で、内面は赤橙色、外面は灰橙色を呈する。

土師質土器

鍋 (16) 破片のため口径は不明。体部は丸味をもって開き、口縁部は内寄し、体部との境は内面に棱を有している。口縁端部は丸味をもつ。胎土に砂粒を多く含む。黄褐色を呈しているが、外面は煤のため暗茶褐色、又は黒褐色を呈している。

摺鉢 (20) 復元底径12.8cm、現存高6.8cmを測る。体部はわずかに丸味をもって開く。器壁は薄く、内面には5本以上の条線を内底見込みから施すが、体部下位は使用のため摩滅している。内外面は摩滅しており、外面は指圧痕を残す。淡黄褐色を呈している。

瓦質土器

鼎 (17) 復元口径25.3cm、現存高6.0cmを測る。体部は丸味をもち、口縁部は内寄するが、体部との境は内面に強い棱をもっている。口縁端部は長く引き出して内傾させる。口縁部内外面、及び体部外面はヨコナデを、体部内面はヨコハケ調整である。内外面は黒灰色を呈し、焼成は良好である。

湯釜 (18) 口縁部、及び底部を欠いている。現存高6.8cm、体部最大径約20cmを測る。体部は丸味をもち、下位に幅1.5cmの鋸を貼付けている。内外面ナデ調整を、体部内面はヨコハケである。全体に煤が付着している。

火舎 (19) 火舎の底部と思われる。底径22.8cm、現存高5.8cmを測る。体部が鉢形に開く器形である。底部から1.8cmの高さに小さな三角突帯を貼付けている。外面はヨコナデを、内面にはナデを施す。内面には指圧痕が残っている。外面は黒灰色を呈し、焼成はやや甘い。

青磁

椀A類 (14) 小破片である。復元底径約6.6cmを測る。輪高台を有している。釉は淡い緑灰色を呈し、外底部迄施される。高台疊付と内底部に細長い目痕が残る。越州窯系の椀と思われる。

椀B類 李朝の椀片で、いずれも暗青灰色を呈し、胎土は砂を含んでいる。器形的に16世紀代の所産と考えられる。

赤絵付

皿 (15) 体部下半の破片のため、器形に疑問も残る。釉は灰青色で、胎土は灰白色を呈す。内外面に赤色、及び緑灰色の絵付を施す。時期については不明。

石製品

砥石 (23) 最大長11.3cm、最大幅7.5cm、最大厚6.3cmを測る。A面を砥面として利用している。平面形は不整長方形を、断面形は不整三角形状を呈している。A面以外は粗削り成形の状態である。A面の中央部分には雨垂れ状に盃状穴が重なっている。石質は砂岩である。

Pit出土遺物 (Fig. 75, PL. 46)

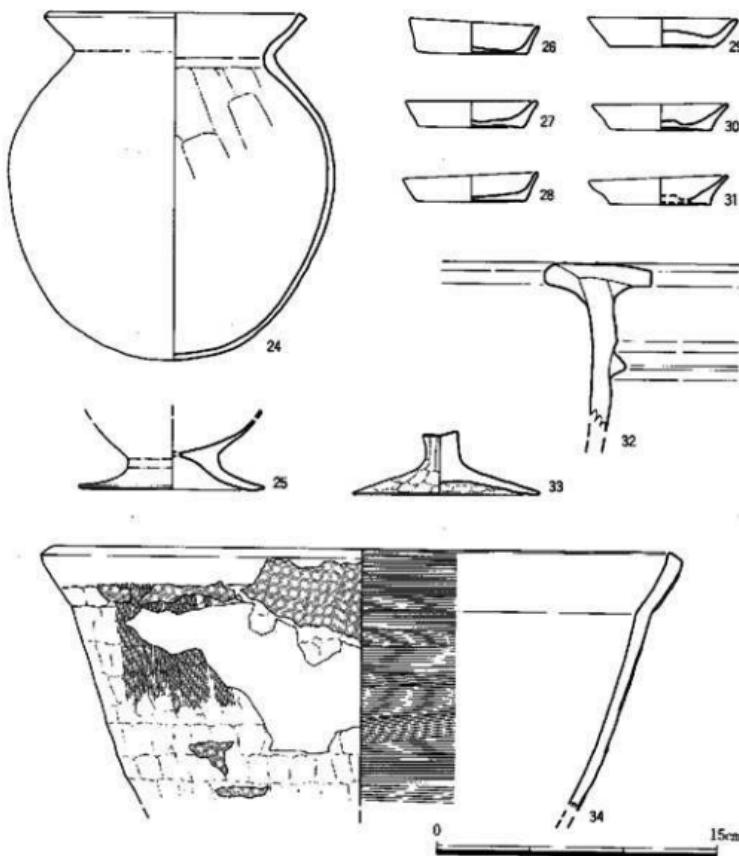


Fig. 75 Pit出土遺物 (1/3)

24, 25はP 6, 26~28はP 1, 29はP 27, 30, 31はP 32, 32はP 41, 33はP 39, 34はP 40, 36はP 31出土である。

弥生式土器

斐形土器（32） 大型の斐の口縁部片である。口縁内外面に粘土を貼付けて平坦部を形成しているため、断面丁字形を呈する。口縁部下に三角形の突帯を1条貼付けている。弥生時代中期中頃の時期で、斐棺に用いられたものであろう。

土師器

斐形土器（24） 完成品で、口径13.3cm、器高18.6cm、胴部最大径17.4cmを測る。口縁部は内寄し、口縁端部を平坦にし、やや内側へつまみ出している。頸部との境は内面に棱をもたない。胴部は球体を呈するが、胴部最大径が上位にあって、肩が張る。全体に摩滅しており、口縁部内外面はヨコナデ、胴部上位はヨコハケ、内面はヘラケズリ痕が認められる。焼成は悪く、黄灰色を呈する。

高台付椀（25） 24と共に伴する。椀の大部分を欠いている。高台の底径9.9cm、高台高20cm、現存高9.0cmを測る。脚は低く、脚裾が長く、大きく開いており、端部は丸味をもつ。椀は丸味をもって鉢状に開く。非常に薄手で、全体に風化が著しい。焼成は悪く、褐色を呈する。

器台（33） 脚部で、受け部を欠いている。底径10.0cm、脚高3.3cmを測る。脚身は円柱状を呈し、脚裾は内寄気味に長く、大きく開いている。端部は欠いている。全体に風化しているが、脚身にはタテのケズリ痕が、裾部内外面には指圧痕が残っている。やや軟質で褐色を呈する。

皿（26~31） 26~28は口径7.0~7.2cm、器高1.4~1.5cm、底径5.7~5.9cm、29は口径8.0cm、器高1.5cm、底径5.6cm、30, 31は口径7.4~7.5cm、器高1.4~1.5cm、底径5.4~5.5cmを測る。26~28は糸切り底で、体部内面はヨコナデ、内底部はナデ調整である。器高が高く、体部は余り開かない器形である。29は体部が丸味をもっている。底部は糸切り底で、器壁は厚くし、内底に盛り上がっている。30, 31の体部内底部は糸切り底で、やや上げ底状である。内底は径約1.6cmの範囲で、見込みよりも高く盛り上がっている。へそをもった皿と云えよう。体部内面はヨコナデである。黄灰色を呈する。

土師質土器

鍋（34） 復元口徑32.6cm、現存高13.9cmを測る。体部は丸味をもって開き、口縁部は内寄する。端部は平坦である。底部は丸底である。口縁部外面はヨコナデ、体部上半はタテハケ、下半はヨコナデを施す。内面はヨコハケ調整である。外面は煤が多く付着する。焼成は良好で褐色を呈する。

石製品

板碑（36） P 31内の礎石として利用されたもので、頭部の破片である。現存長14.7cm、現存幅10.2cm、最大厚6.5cmを測る。頭頂部は山形をなし、頸との境に薬研彫りの横線を2条施す。頸

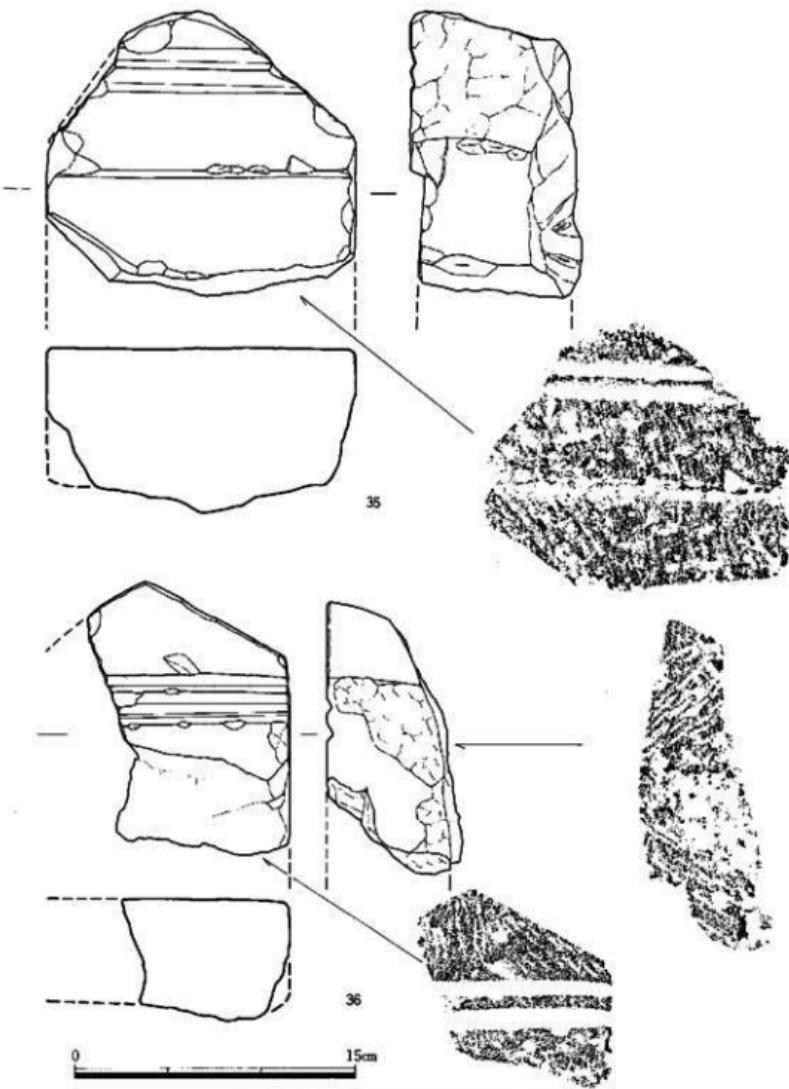


Fig. 76 1号墓坑, Pit 出土遗物(板片) (1/3)

の長さは破損のため不明だが、身との間に段を有するものだろう。正面、及び側面は丁寧なケズリ調整を施すが、裏面は粗成形の状態である。材質は砂岩である。

小 結

以上、遺構、遺物について詳述した。調査範囲が狭いため遺構の構成、年代について制約があるが、各遺構について検討してみたい。遺構は年代的には大きく5つのグループに分けることができる。Ⅰ期は弥生時代中期後半の妻棺墓の時期である。Ⅱ期はPit 6に代表されるように古墳時代前期の段階である。遺構は少ない。Ⅲ期は1号櫛列の時期で鎌倉時代前半～後半代が考えられる。Ⅳ期は2、4、5土壤を中心とした14世紀代の年代である。Ⅴ期は1号溝の出現する16世紀代の時期である。

Ⅰ期の妻棺墓はわずかに2基の検出であったが、昭和40年代前半に北側道路の工事中に多くの妻棺墓を検出している。この妻棺は台地の中心から東寄りに検出されている。又、昭和53年度の試掘調査では、東側隣接地で前期後半の妻棺2基を検出しており、この妻棺墓が前期から始まり、群を形成していることが知られた。昭和56年度の第46次調査は、当該地の西側に接しているが、この調査では妻棺墓を検出していない。このことは、今回検出した妻棺墓が群構成の中で最西端に位置している可能性を示している。又、昭和55年度の第35次調査は、当該地の東側約50mに位置する。この調査に於いても妻棺墓は検出していない。よってこの妻棺墓群の東西の範囲が約50m内であると考えてよいであろう。又、当該地の約50m北側は室見川の氾濫によって小段崖を形成しているところから、妻棺墓の北への延長も限られている。集落については、当該地の南約60mの第16次調査で、弥生時代前期後半の貯蔵穴を1基検出しているので、付近に住居跡が存在する可能性は強い。前期～中期の妻棺墓の存在から、東西約100m、南北約300mの範囲内に集落と墓跡が一体となって構成されている事が考えられる。

Ⅱ期のPit 6は住居跡内の貯蔵穴と考えるが、同一時期の住居跡は第16次調査で1軒、第35次調査で8軒を検出しているので、弥生時代と同一地域内に4世紀中頃の人集落が営まれた可能性が強い。

Ⅲ期は1号櫛状遺構を主体とするが、櫛列の柱穴と同じ覆土をもった柱穴があるので、他に掘立柱建物の存在する可能性がある。但し、遺物についてはこの時期に比定できるものは無い。第46次調査ではこの櫛列同様に主柱と支柱を組み合わせた3本柱の櫛状遺構が検出されているが、この櫛とは約9m離れてほぼ平行している。この事は、この櫛状遺構が二重構造であった事を示している。中世の居館的要素を考えられるが、台地幅が最大で約120mなので、櫛列の範囲も限られる。この地域の旧字名は「中園」と称するが、16世紀中頃の屋敷地として「下中園屋敷」として文書に表われる。鎌倉時代から屋敷地として利用されてきた事が充分に考えられる。

V期は3基の土壙であるが、用途は不明。2号土壙出土の椀、香炉片は、後世に破損、転落した可能性もあるところから、上壙墓的な要素も考えている。この時期に伴う遺物としては、Pit31や1号櫛棺内蔭から出土した板碑がある。この板碑は本来、供養塔としての用途があるが有田遺跡出土の板碑は全て小型であり、矮少化している。北九州市力丸遺跡出土の板碑は三方に石開いを行い、板碑の下に埋葬施設である小穴を有している。板碑の大きさは長さ約60cm、幅約25cmを測り、作りなども本遺跡例と近似していることから、今回出土した板碑も力丸遺跡同様に埋葬施設にも利用されたことも考えて良いだろう。とすれば土壙墓との関連も強く意識される。板碑については別項で詳しく扱いたい。

V期は1号溝と付属する2号櫛状遺構と小溝であるが、その他、掘立柱建物が伴うと思われる。建物については本文で述べたが柱列の通る柱穴群の在るもの調査範囲が狭いため確証を得られなかった。この時期は溝出土の土師質土器、瓦質土器、李朝の椀などから16世紀前半代の要素をもっている。但し、赤絵付とした皿は、国内産か、中国、或いは朝鮮産なのか判断できない。もし、国内産とすれば第V期の年代は1世紀前後下る事になる。有田・小田部地区は飯盛文書、或いは青柳文書の中で多くの「名」、「屋敷地」が在った事が知られる。当該地は前述の通り旧名字は「中國」で、東隣りに「敷町」がある。16世紀に「中國名」、又は「下中國屋敷」が在った事が知られ、この「下中國屋敷」は16世紀中頃に大内氏の早良郡代となった大村興景の知行地であった事が文書に記されている。大内氏が16世紀中頃(1557年)に亡びるところから、これらV期の遺構の下限も16世紀中頃と考えて良いだろう。溝は屋敷内の区画、又は排水溝的な用途を考えたい。

以上、資料不足の中で概説したが、今後、遺構、遺物の点で検討しなければならない事が多くある。特に出土した土師皿は16世紀代と考えられるが、資料不足のため今回は検討できなかった。今後の調査の進行過程で土師器については扱いたいと思う。

註1. 飯盛神社文書「飯盛宮行事
事屋敷小田部村郷地頭名
注文」に早良郡小田部村
中國名、下中國屋敷とある。

註2. 中村修身、山手誠治編
「力丸遺跡」北九州市教
育委員会 1978

註3. 福岡市教育委員会「飯盛
神社関係史料集」1981

註4. 佐伯弘次「大内氏の筑前
国郡代」『九州史学69』所
収 1980



Fig. 77 第36次、第46次調査中世遺構配置図(1/300)

4. 第37次調査

調査の概要

調査対象地は、福岡市早良区小田部1丁目237-3番地に所在し、調査対象面積は347m²である。

有田・小田部の台地は、北へ向って伸びる舌状台地を多く派生しているが、小田部地区の内でも特に1丁目周辺の台地は標高10m前後を測り、最も高い位置を示している。この台地の東側の斜面は急である。西側は緩く傾斜し、多くの造構を形成している。台地の北側は宝見川の蛇行による浸蝕を受け、ところどころ小規模の断崖を形成している。尾根筋にあたる小断崖は深く、水面との比高差3mを測る。当該地は、この台地の尾根筋上の断崖近くに位置している。標高約7mを測り、現況は宅地である。この周辺では、昭和54年度に北側隣接地で第25次調査が、同じく東側では第27次調査が実施されており、弥生時代から近世初頭に至る遺構、遺物が検出されている。昭和55年5月に建築確認が申請されたことに伴い試掘調査を行なった。その結果、通路部分は既に削平を受け、八女粘土面が露呈していた。又、東側の約1/4ほどは遺構が検出できなかった。遺構は西側に集中し、遺構の構成は第25次調査同様であると思われた。

発掘調査は昭和55年7月24日～8月20日迄実施した。試掘結果を受けて、西側約1/4の部分についてのみ調査を実施した。遺構面は茶褐色を呈したローム層上に形成される。表土は盛土、及び耕作土からなり、約10～30cmを測る。遺構面は、北東方向に緩く傾斜しており、その部分では約50cmを測る暗茶褐色粘質土の包含層が存在する。

検出した遺構は土壙2、孤立柱建物3棟、径20～40cmを測るPitである。覆土は暗褐色粘質土、黒褐色粘質土、淡黒色粘質土である。遺物の出土は少なく、時期比定のできるのはPit1出土の土器だけであった。

検出遺構

土 壙

1号土壙 (Fig. 79)

北側境界地に位置しているため、全形は知り得なかった。長さ約2.6m、現存



Fig. 78 第37次調査地位置図 (1/2500)

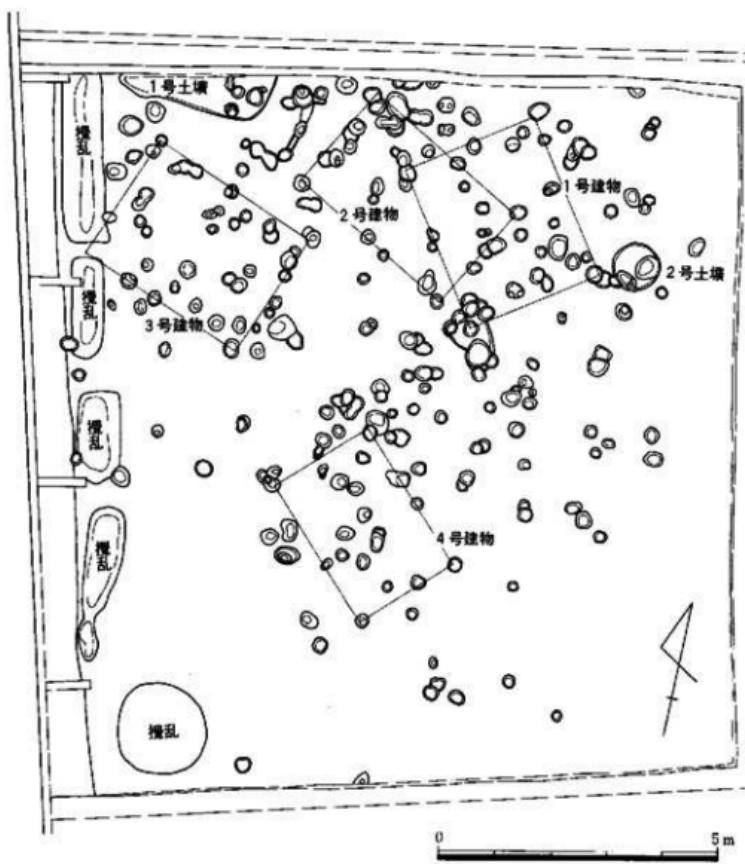


Fig. 79 遺構配置図 (1/100)

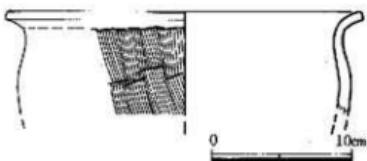


Fig. 80 出土遺物 (1/4)

幅0.95m、深さ12cmを測る。隅丸長方形プランを呈すると思われる。覆土は黒色粘質土で、縦りは無い。底部は一定していず、やや東へ傾斜する。遺物は土師器、須恵器の破片であった。

2号土壙 (Fig. 79)

径約85cm、深さ6.0cmを測る円形プランの土壙である。覆土は黒褐色粘質土を呈しており、やや縮っている。遺物の出土はなかった。

掘立柱建物

柱穴は径20~30cmを測り、多数検出した。現場に於いては建物の組合せを把握することはできなかったため、全て図上での復元作業を行なった。建物は第25次調査で検出したものと同様で規模の小さいものである。

1号掘立柱建物

梁行2間×桁行2間の掘立柱建物である。主軸方位をN44°Wに置き、梁行2.45m、梁間平均1.305m、桁行3.05m、桁間平均1.525mを測る。柱穴径は22~29cmを、深さ7~24cmを測り、形状は円形を呈する。桁行のP4~P5間の間柱は検出できなかった。又、P6~P7間にあるPitは、P6に寄り過ぎており、建物の柱として疑問である。遺物の出土は少ない。

2号掘立柱建物

梁行2間×桁行2間の掘立柱建物である。主軸方位をN64°30'Wに置いて、梁行間平均2.09m、梁間平均1.05m、桁行間平均3.05m、桁間平均1.51mを測る。柱穴は径21~30cm、深さ8~30cmを測り、円形もしくは橢円形を呈する。桁行の柱列はほぼ通るが、梁行は通らない。

3号掘立柱建物

梁行2間×桁行2間の掘立柱建物である。主軸方位をN44°Wに置いて、梁行1.99m、桁行平均2.88m、桁間平均1.42mを測る。柱穴径は24~29cm、深さ8~28cmを測り、円形を呈する。梁行、桁行共に柱列はほぼ通っている。遺物の出土は無い。

出土遺物

弥生式土器 (Fig. 80)

変形上器 (Fig. 80) P1より出土。口径26cmを測る変形土器の破片である。口縁部は外反するが、胸部最大径が上位にあるため、S字状を呈する。口縁端部はコの字形をなす。口縁部内面はヨコ方向のハケ調整を行ない、外面はヨコナデ調整を行ない、頸部で止めている。内面は摩滅のため不明。胎土に1~2mmの砂を多量に含んでいる。色調はやや暗い褐色を呈する。焼成良好。1/6の破片である。

他に岡示し得ないが、土師器、須恵器片、黒曜石が出土している。

小 結

検出した遺構は少なく、土壙2、掘立柱建物3棟であった。今回も又、現地での掘立柱建物を確認し得ず、結果として図上での復元を行った。第25次調査では1間×2間、或いは2間×2間の柱間の狭い小規模の建物であったため、建物の規模として多少の疑問も残った。今回も同様に、1間×2間、或いは2間×2間の建物しか検出し得なかったことから、この地域に於いては、小規模の掘立柱建物しか存在しない可能性が強くなってきたといえる。時期比定は遺物の少ないとから決め手がないが、覆土に繕りが無いことなど弥生時代から古墳時代に属するものとは考え難い。又、建物の機能についても判然とし難い。出土遺物は、弥生時代から16世紀代に至ると思われるが、第25次調査で出土した染付は17世紀代と考えられ、又、国产品とも考えられることから、この地域が少なくとも17世紀前半迄生活が営まれていたことがうかがえる。

註1. 福岡市教育委員会「有出・小田部第1集」 1980

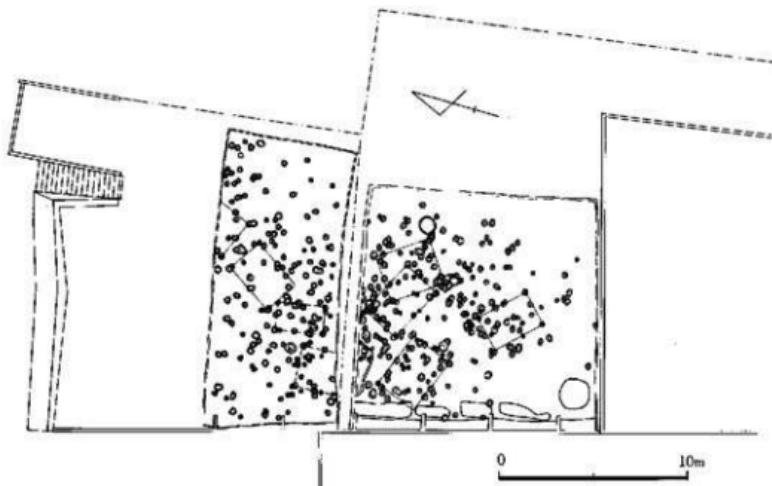


Fig. 81 第25次、第37次調査遺構配置図 (1/300)

5. 第38次調査

調査の概要

調査対象地は、福岡市早良区小田部1丁目198番地に所在し、対象面積は430m²である。

小田部地区は北側、或いは北西部から谷が開析するため幾つかの舌状台地を形成している。いずれも最高所は標高10m前後を測り、台地の裾部分との比高差は6~4mを測る。谷はいずれも細く、台地内に深く切り込んでいるが、有田・小田部の台地の縁辺が宝兒川、金屑川の蛇行、或いは氾濫によって洗われている状況からして、これらの谷が律令時代以前に水田として利用された可能性も含んでいる。当該地はこの細長い谷の中程の西縁に位置し、標高6mを測る。旧くは畑地、及び水田であったが現況は宅地化されている。

同一谷の東側では、昭和52年に第9次調査が、昭和54年には第22次調査が実施されており、古墳時代住居跡、土壙1、古墳時代から中世の掘立柱建物12棟が検出されている。当該地の大部分が谷内に位置しているといえ、台地の境界線、或いは谷の堆積状況の調査は有田・小田部の環境を知る上で必要である。昭和55年5月に当該地に於いて建築確認が申請されたので試掘調査を行なった。その結果、申請地の東側は水田が埋立てられており約120cmの客土と堆積層を合わせた深さが3mを越すため調査は不可能と判断した。しかし西側においては深さ約100cmの堆積土の下に、台地の堆積線上にそって台地の縁辺を検出したので発掘調査を実施した。

発掘調査は昭和55年8月5日~8月19日迄実施した。発掘調査は検出した台地部分にのみ集中して行ない、約90m²を調査した。東側は先に述べたように堆積土が深さ3mを越し、しかも狭い場所での調査は排水処理、水処理などから不可能と判断し、試掘調査のデータを資料とした。台地上の堆積土は、第1層は10cmの盛土、第2層は約20cmの茶褐色粘質土の旧耕作土、第3層は約10cmの暗茶褐色粘質土の包含層である。第4層は暗茶褐色粘質土である。第5層は台地段落ち部分の土層で暗青灰色粘質土を呈している。これは旧水田の耕作土である。第3層、第4層には弥生時代~中世に至る土器片を

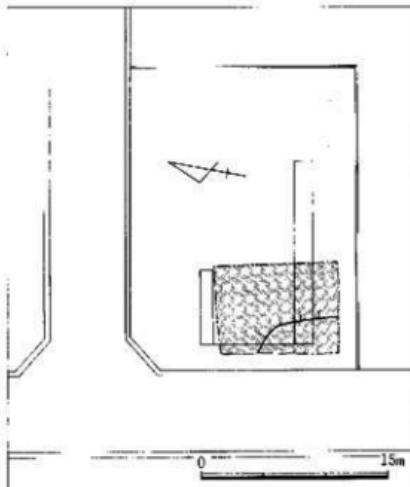


Fig. 82 第38次調査現況図 (1/150)

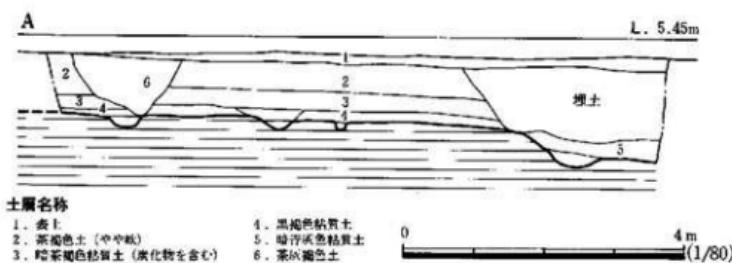
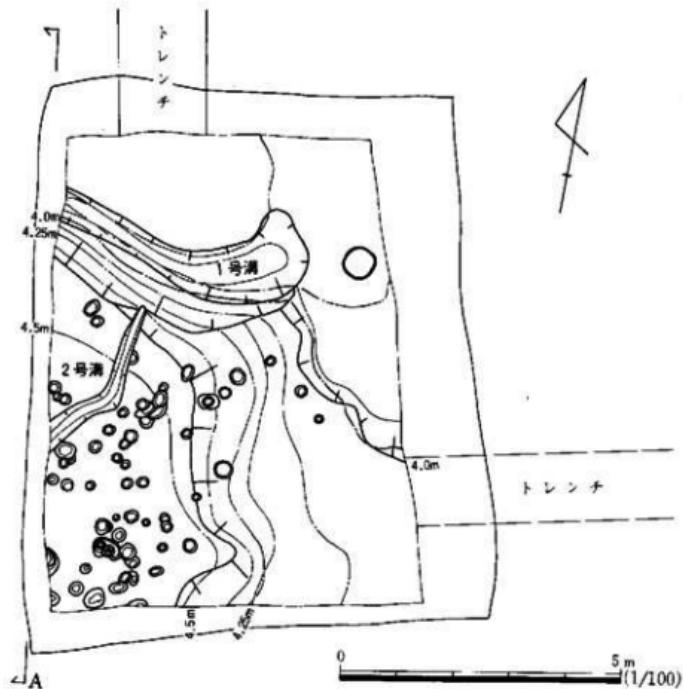


Fig. 83 造構配置図、及び土層図

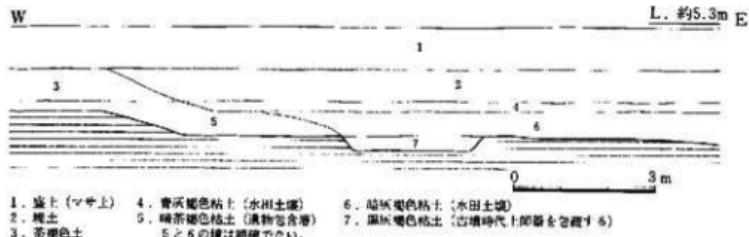


Fig. 84 試掘調査上層略図(約1/120)

含んでいる。台地縁線は東南方向から北西方向に検出され、標高4.5mを測る。遺構面は黄褐色ロームである。この台地は、東側、北側との比高差40cmをもって段落ちとなっている。この段落ち上には第5層が乗っており水田化によって削平されたものだろう。この段落ち部分においても遺構は検出できた。検出遺構は台地上では溝状遺構1条と多数の柱穴群を、段落ち部分では溝状遺構1条と幾つかの柱穴を検出した。

検出遺構

溝状遺構

台地上に1条、段落ち部分に1条検出した。

1号溝 (Fig. 83, PL. 48)

覆土は黒色粘質上で、間層として砂層がレンズ状に堆積している。現存長4.8m、幅60~120cm、深さ10~30cmを測る。北西より台地縁辺に沿って傾斜し、東側で溜りを作り溝は終わっている。出土遺物は染付が一点出土した。

2号溝 (Fig. 83, PL. 48)

覆土は暗茶褐色粘質土を呈し、現存長約3m、幅20~40cm、深さ15~20cmを測る。西方向から蛇行して北東方向の

台地縁辺に至り終わる。

遺物はわずかで時期の決め手にならない。覆土からみて中世の時期が考えられる。

柱穴群

径20~30cmを測る柱穴を多数検出した。覆土は黒色粘質土、及び暗茶褐色粘質土である。

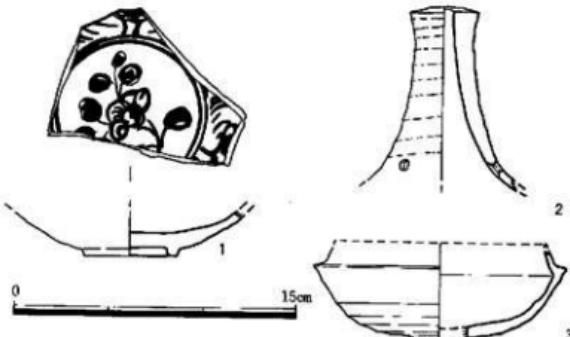


Fig. 85 出土遺物 (1/3)

時期は弥生時代から中世の時期の柱穴と考えられる。

出土遺物

1号溝出土遺物 (Fig. 85, PL. 48)

染付

碗 (1) 底径5cmを測る皿である。高台は輪高台で、やや内傾気味である。釉は内外面にかけられている。邊付には細い砂が付着している。内面には草花図案が描かれている。三方割花見込枝椿文皿であろうか。同様な文様は伊万里窯川古窯跡出土品の中に認められる。釉は乳白色を、呉子は墨青色を呈している。胎土は灰白色を呈し、微砂を含んでいる。内外面に貫入、気泡が多い。

包含層出土遺物 (Fig. 85, PL. 48)

須恵器

杯身 (3) 口縁部、及び底部を欠いている。復元口径11.2cm、器高5.2cmを測る。器高の深い器形である。蓋受けは小さく水平につまみ出し、立上りは細く内傾する。体部のヘラ削りは殆まで施される。ヘラ削りの方向は逆時計回りである。焼成は良好で、胎土に0.5mmの砂を多く含む。色調は青灰色を呈している。

土師器

高杯 (2) 杯部、及び脚部を欠いている。現存高9.2cmを測り、脚は開かない。脚部は緩く広がっており、内面に段をもたない。脚下位には径0.6cmの角ばった孔が三ヶ所あけられる。焼成後の穿孔である。外面には粘土紐を巻き上げ成形したような痕跡を残している。表面は摩滅風化している。焼成はやや弱く、胎土に径1mmの砂を多く含んでいる。色調は赤橙色を呈している。

小 結

当該地の調査では、台地縁辺部の検出と谷内の土層状態を知ることを重点に置いた。台地はローム層で道路端から5mの地点で段落ちになる。これは推定ライン通りで、北西から東南方向の台地段落ちラインを形成する。しかし、このラインは段落ち下の1号溝やPitの存在から、水田化によって形成されたと思われる。Fig. 83の土層図ではロームは東へ緩やかに傾斜しており、比高差は約64cmである。台地の段落ちラインは更に東へ偏する可能性がある。又、道路端から9mの位置には幅3m、深さ約30cmを測る溝状造構も存在しており、從来谷内と考えられた部分にも造構の存在が明確となった。造構の時期は台地上を古墳時代～中世迄を考え、段落ち部分は水路状造構から染付を検出しているので、近世初頭に開田作業が行なわれたと思われる。

6. 第40次調査

調査の概要

調査対象地は、福岡市早良区有田1丁目26-2番地に所在し、対象面積は376m²である。

有田地区の最高所は、標高15m前後を測る平坦な地形を形成するが、これより北側は、北東方向、北西方向から谷が深く開析するため、平坦部分は幅約150m、標高12m前後を測る狭長なくびれ部を形成している。当該地は、北西方向から切込んでいる谷の谷頭の位置に相当している。当該地の標高は約12mを測る。周辺では、南側に昭和41年～43年に第1、2次調査が、昭和53年度～54年度に第17、18、23、29、32次調査が、東側は昭和54年度に第30次調査が実施され、縄文時代終末の溝1条、古墳時代の住居跡7軒、弥生時代～中世の掘立柱建物約20棟、中世の溝3条、火葬墓1基を検出している。特に第23次調査と第30次調査は隣接しているため掘立柱建物等の遺構の存在が予想される地域であった。昭和54年6月に家屋の増改築のため、建築確認が申請されたので試掘調査を行った。その結果、敷地の両側に溝状の落ち込みを検出したので発掘調査を実施した。

発掘調査は昭和55年10月2日～10月31日迄実施した。調査は排水の関係上2分して行ったが、樹木等の関係から限られた範囲となった。遺構はローム層上に検出されるが、既に削平を受けており、遺構の密度は低い。表土は約20～40cmを測る。

検出遺構は、濠状遺構2条、土壙墓3基、掘立柱建物1棟を検出した。東側濠状遺構は上部に車庫があるため、幅、深さを確認できなかった。遺物は濠状遺構から青磁、白磁類、上師賞土器、瓦、鐵滓、石器を、土壙墓から小刀を検出した。

検出遺構

濠状遺構

濠状遺構は東西の両側に各1条検出した。いずれも同規模で、東西方向に伸びる濠であるが、両者の間には8mの陸橋を挟んでいる。

1号溝(Fig. 88, PL. 49, 50)

現存長約5.9m、現存幅7.1m、現存の深さは地山より1.9mを測る。北側壁が2段掘り



Fig. 86 調査区配置図 (1/400)

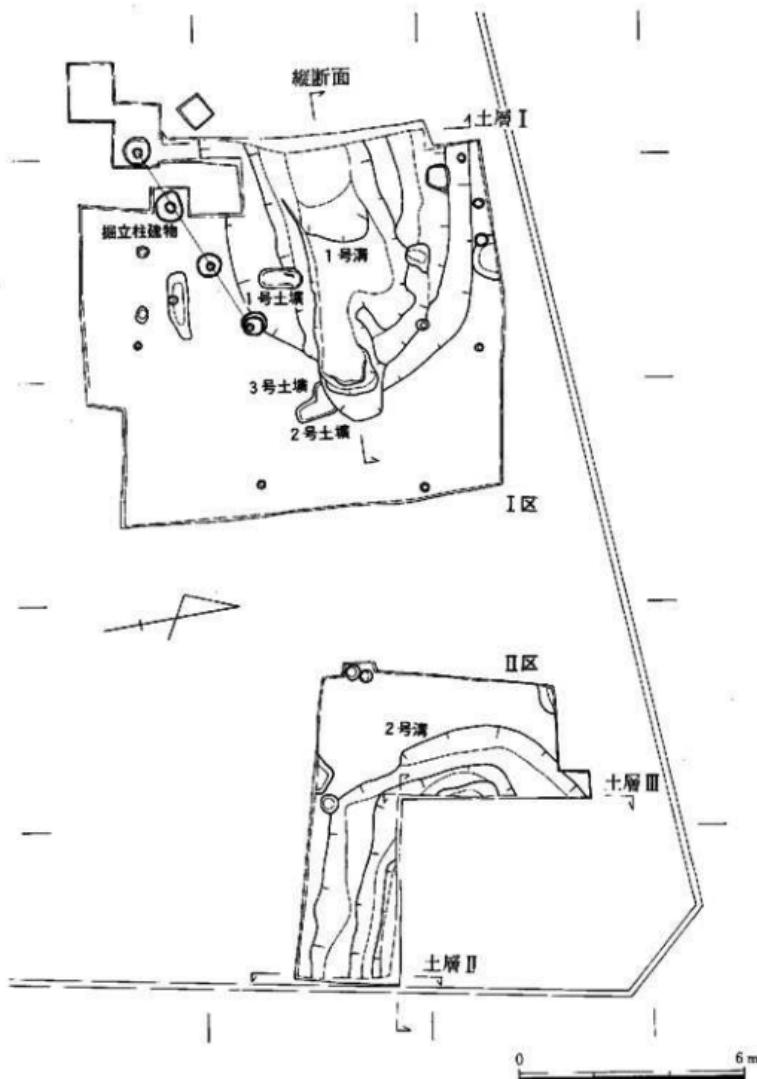


Fig. 87 造構配置図 (1/150)

縦断面図
(1号溝)

L. 12.02m



土層 I
(1号溝)

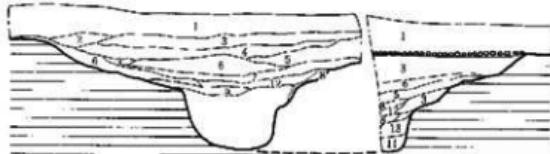
L. 12.02m

土層名

1. 表土
2. 暗褐色土上(耕作土)
3. 茶褐色土上に地山ブロック混入
4. 明褐色土上に地山ブロック多量に混入
5. 黒褐色土上に地山ブロック混入
6. 球状褐色土上に地山ブロック混入
7. 球状褐色土上に地山ブロック混入
8. 球状褐色土上に地山ブロック混入
9. 第2層と同じ
10. 地山ブロックに暗褐色土混入
11. 第2層と同じ褐色土混入
12. 第2層に炭化物混入
13. 茶褐色土上に暗褐色土混入
14. 第2層に炭化物混入
15. 黑褐色土上に炭化物混入
16. 黑褐色粘質土

土層 II
(2号溝)

L. 12.23m



土層 III
(2号溝)

L. 12.23m

土層 II, III 名称

1. 表土
2. 球状褐色土上に地山ブロック混入
3. 球状褐色土上に地山ブロック混入
4. 茶褐色土上に地山ブロック混入
5. 黑褐色土上に地山ブロック混入(堅鉄)
6. 黑褐色土上に地山ブロック多量に混入
7. 第6層に黄褐色土上混入
8. 黑褐色土
9. 地山ブロックと暗褐色土の混合
10. 暗褐色土
11. 黑灰褐色粘質土
12. 黑灰褐色粘質土
13. 暗褐色砂質土に地山ブロック多量に混入

0 4 m
(1/80)

Fig. 88 溝造構土層図、及び断面図 (1/80)

で、断面U字形を呈する。濠の南壁は比高差40cmを測る深さ迄は緩く傾斜するが、底面からの立ち上がりは急な壁である。北壁は南壁と同じく、比高差40cmを測る深さ迄緩く傾斜する。1段目の掘り方は幅1.40m、深さ70cmを測り、濠底との比高差86cmを測る。濠底は一定しておらず、東から西方向へ傾斜し、東西の比高差96cmを測る。濠底には径20cm前後の礫、及び土器片が部分的に堆積していた。濠の東側先端部は長さ1.5m、幅1.7m、深さ1.1mを測る不定形に突き出した掘り込みがみられる。この先端部の上部から中位にかけて、径10~20cmの花崗岩を主とした礫群と土器類が厚く堆積し、西へ傾斜した状態で検出された。この先端部の出っ張りは濠の東側に対して、新たに掘り込まれた様な壁の状態を示す。又、底面の幅も狭く、西側の底に比べ凹凸が著しいことなど、本来、溝に設置されていたのか疑問である。更に、検出の礫群は埋め戻し時に投棄されたものと考えられる。この濠は丘陵切断し、西端は谷頭に通じていると考えられるから、濠の機能が停止後に排水施設として利用された可能性もある。この東側先端部の出っ張りや濠底の西側への傾斜は上記の条件として考えられる。

覆土は暗褐色土、暗茶褐色土系の粘質土で占められ、濠底部において、わずかに第29層一層灰色粘質土が存在するだけである。暗茶褐色土、暗褐色土の細かい分離には無理がある。この層位は、この濠が廃棄された後、一度に埋め戻されたことを物語っている。

出土遺物は須恵器・斐形土器、高杯、土師器・高杯、鉢形土器、杯、瓦器碗、白磁一塊、壺、瓶、青磁、土師質土器、陶器、瓦片、石器・石斧、砥石、不定形石器、滑石製品・石鍋片などが出土している。

2号溝 (Fig. 88, PL. 53)

上部に車軌が走っているため、規模の確認は充分にできなかった。現存長約7m、現存幅7.5m、現存の深さ約1.7mを測る。幅と深さはもう少し大きくなると思われる。西側に先端部を作るが、平面形は丸味をもっている。南側壁を3段に、北側壁を2段に掘り、底部断面形はU字形を呈する。壁は北側、及び先端部分は比高差80~100cmの深さ迄緩やかに傾斜し、底部の壁の立ち上がりは急である。南側壁の一段目は幅約1.20m、深さ約50~70cm、二段目は幅約0.7m、深さ約90~105cmを測り、底部の立ち上がりはほぼ垂直である。南壁の二段目の肩と北壁の一段目の肩はほぼ同高位を示している。

覆土は暗褐色粘質土、暗茶褐色粘質土を主体とした土層で、濠底近くに於いて黒灰色粘質土が堆積している。いずれもレンズ状に堆積しているが、暗褐色粘質土系、暗茶褐色粘質土系の細かい分離は困難である。1号溝同様に一度に廃棄、埋め戻されたと考えられる。

出土遺物は、白磁一塊、香炉、青磁碗、須恵質土器一鉢、陶器一鉢片、丸瓦片が出土した。

3号溝 (Fig. 87)

東西方向の浅い溝で、西に伸びている。現存長約4m、幅約50cm、深さ約3~7cmを測る。覆土は暗茶褐色粘質土で、一部に径20cm、厚さ5cmを測る焼土を検出した。出土遺物は土師器

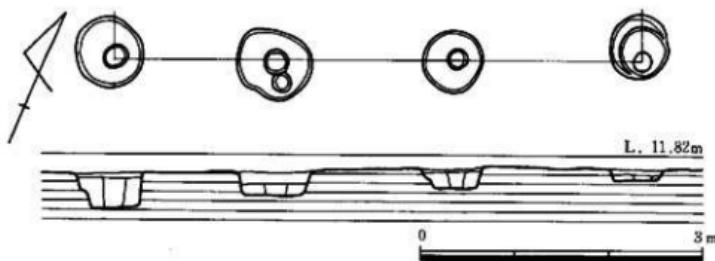


Fig. 89 捩立柱建物 (1/60)

の細片である。

擩立柱建物

1号溝、3号溝に切られている。削平のため残存状態は良好ではない。東西方向に4本の柱穴が検出されただけで、建物と考えるには若干疑問が残るが、杭列としては補助杭が無いことや1号溝による削平の度合を考えると、北方向へ規模が拡大する擩立柱建物と考えた方が良いだろう。柱列の長さは5.61mを測るが、有田・小田部地区では、この長さを測る桁行3間の建物は第30次調査で検出している。この柱列は主軸方位をN110°Wに置いた梁行2間、桁行3間の擩立柱建物が推測される。桁間平均187cm、柱穴掘り方径60~80cm、柱根径20~26cm、深さ15~35cmを測る。覆土は褐色土の小プロックを多く含んだ黒褐色粘質土、或いは黒色土のプロックを多く含んだ褐色粘質土である。柱根の覆土は褐色土を少し含んだ黑色粘質土である。遺物は全て細片で時期は不明である。

土壤墓

土壤墓と思われるものは3基検出した。いずれも同形態を呈する。2号土壤墓と3号土壤墓は切り合っている。3号土壤墓が新しい。又、1号土壤墓、3号土壤墓は1号溝と切り合い関係にあるが覆土に変化が無いため、造構面では前後関係を把握できなかった。

1号土壤墓 (Fig. 90, PL. 51)

1号溝と切り合っているが、1号溝の調査中に検出したので前後関係をつかめなかった。覆土は暗茶褐色粘質土に黄褐色土のプロックが混入している。隅丸長方形プランを呈し、長さ114cm、幅52cm、現存の深さ46cmを測る。墓壙内西側隅角には、床から15cm浮いた状態で小刀が置かれていた。小刀は切先を南方向に向けていた。革子の先端は漆状造構に面し、わずかに破損している。

2号土壤墓 (Fig. 90, PL. 52)

3号土壤墓と切り合っており、3号土壤墓よりも古い。隅丸長方形プランを呈しており、現存長約85cm、最大幅約58cm、深さ16cmを測る。北側の幅がやや広い。覆土は暗茶褐色粘質土で

ある。遺物は出土しなかった。

3号土壙墓 (Fig. 90, PL. 52)

2号土壙墓と1号溝と切り合っており、2号土壙墓よりも新しいが、1号溝との前後関係は不明である。覆土は暗茶褐色粘質土であるが、2号土壙墓よりも暗い。隅丸長方形プランを呈し、長さ約85cm、幅約60cm、深さ16cmを測る。遺物は土師器の細片が出土したが、時期比定にはなり得ない。

出土 遺 物

1号溝、2号溝から主に出土した。遺物の種類は1号溝—須恵器、土師器、瓦器、白磁、青磁、土師質上器、陶器、瓦、石器、滑石製品、2号溝—白磁、青磁、須恵質土器、陶器、瓦、1号土壙—鉄製小刀である。

1号溝出土遺物

(Fig. 91~95, PL. 54~56)

須恵器

菱形土器（1） 口径37cmを測る。口縁は大きく外弯し、端部を肥厚させ、上下にわずかにつまみ出し、幅1.8cmを測る平坦面をつくりっている。色調は灰色を呈している。

高杯（2） 口縁端部、及び脚部を欠損している。体部は丸味をもち口縁部との境は2条の三角突帯を造り出している。口縁部は器壁が薄く、外弯して立ち上がる。体部の突帯下には9条の波状文を丁寧に施している。脚には幅0.6cmのすかしが4ヵ所施されている。内外面ナメ調整で、色調は灰色を呈す

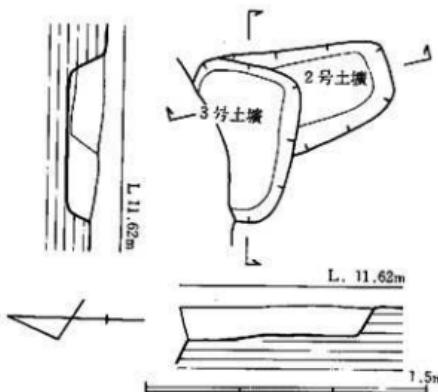
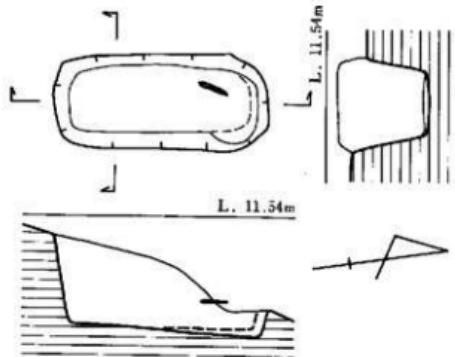


Fig. 90 1・2・3号土壙墓 (1/30)

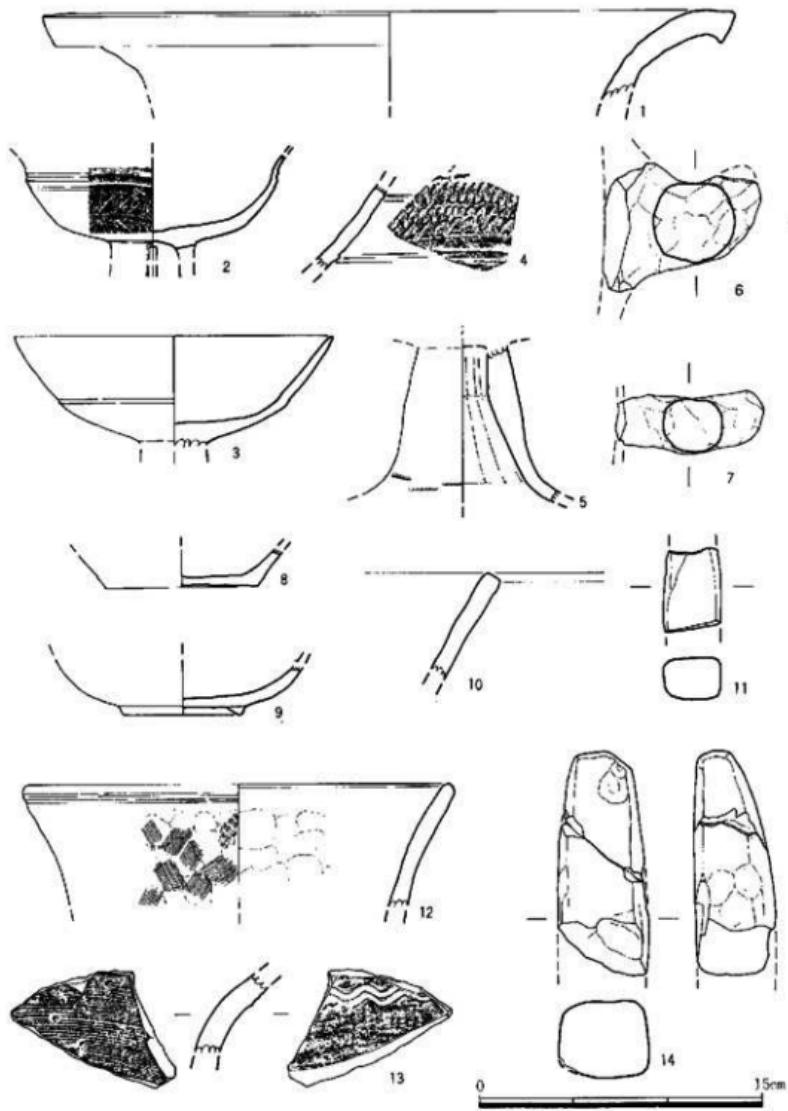


Fig. 91 1号溝出土遺物 (1/3)

る。

器台（4） 体部の破片である。2条の造り出しの三角突帯を有し、その間に上位12条、下位16条の波状紋を丁寧に施している。内面は摩滅している。色調は青灰色を呈している。

土師器

高杯形土器（3、5） いずれも脚はさほど開かない。5は脚の中程がやや膨らみ、脚裾は緩やかに広がっている。内面の稜は明瞭ではない。外面には、タテハケが施される。内面には横方向の削りが施される。色調は黄褐色を呈する。3は杯部で、口径17cm、器高5.6cmを測る。底部と体部の境に段を有している。体部はやや丸味をもち、端部は尖り気味である。色調は黄褐色を呈する。

把手（6、7） 6は現存長7.8cmを測る。鉢形土器の把手である。断面は径4.4cmを測り、不整円形を呈する。先端を上反りにしている。接合は貼付方法である。表面に指圧痕を残している。色調は黄褐色を呈している。7は長さ7.5cmを、断面形は不整円形で径3.1cm×2.6cmを測る。棒状を呈し、先端部は丸く成形している。器面に指圧痕を残している。どの器形に接合するのか不明である。色調は暗黄土色を呈する。その他に把手は2点出土している。

杯（8） 糸切り底の杯で、底径8cmを測る。体部は大きく外へ開く器形で、立ち上がりは直線的である。色調は黄褐色を呈する。

瓦 器

椀（9） 口縁部を欠損している。高台径6.4cmを測り、断面三角形の高台はわずかに外へ開いている。体部は丸味をもっている。内外面は摩滅している。色調は灰白色を呈する。

土師質土器

鉢形土器（12） 口径23cmを測る。体部は外開きを呈す。口縁部は小さく外反し、端部を丸く仕上げている。口縁部の屈折部分は内面に稜をもたない。口縁直下内外面はヨコナデを施し、内面はヨコナデで、外面は不規則なナデ仕上げである。内外面に指圧痕を残している。色調は暗茶褐色を呈している。

瓦質土器

五徳（11、14） 11は先端と基部を欠損している。現存長4.5cm、幅3cm、厚さ2.2cmを測り断面形は長方形を呈している。色は灰白色を呈し、胎土は精選されている。14は基部を欠損している。現存長12cm、最大幅4.9cm、最大厚4.2cmを測る。断面は長方形を呈し、先端は幅も細く、器肉も薄くなる。上小口はやや丸味をもつ。全体にナデ調整である。胎土に砂粒を含み、色調は暗灰色を呈する。

白 磁

器種は、椀、壺がある。椀は器形から6種に分類できる。

椀A類（15～20、22～24） 大きな玉縁の口縁を有するもので、22、23は口径15.4cmを測る。

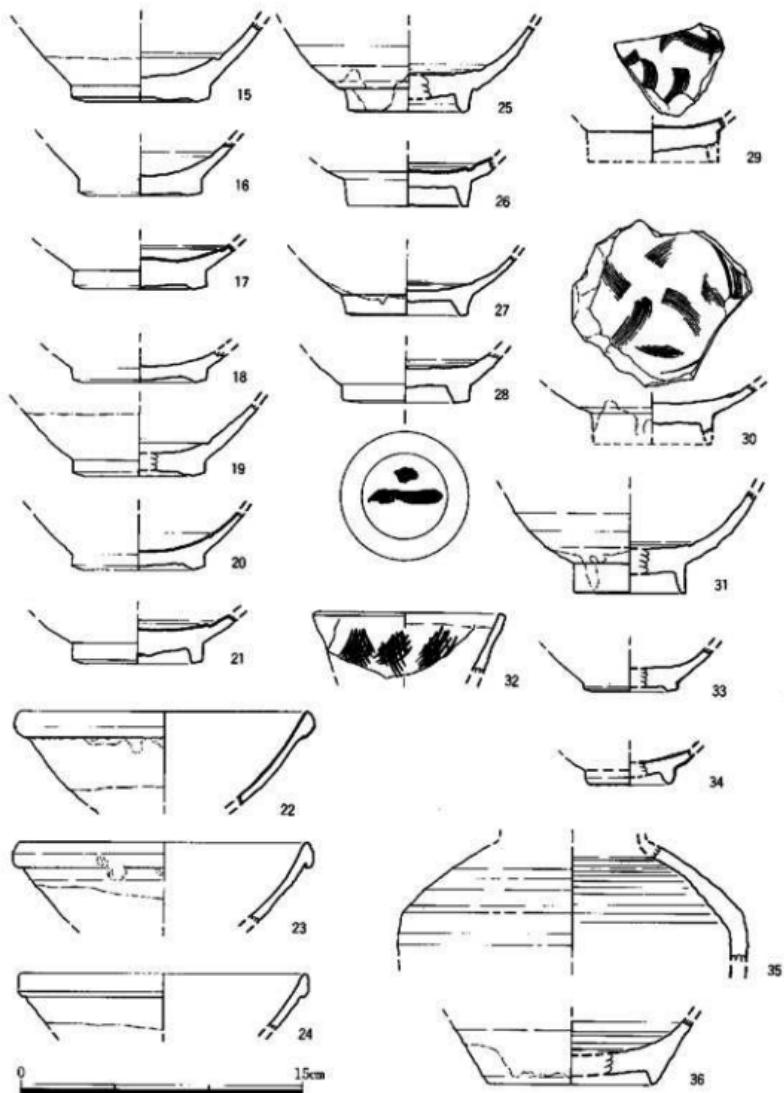


Fig. 92 1号溝出土遺物 (1/3)

22は断面三角形の玉縁で、釉は外面の内迄施される。釉は厚目で、口縁直下に垂れ下がっている。23は玉縁の下半が肥厚しており、釉は薄目で外面の外迄施される。釉は口縁直下に垂れ下がっている。22, 23共に内外面に細かい気泡がある。22の釉色は淡茶灰色を、胎土は淡赤褐色を呈している。23の胎土は灰白色で、釉色は緑味を帯びた灰色を呈する。15~20は底部の破片で高台は幅広く、外面を直に、内面を斜目に浅く削り出したもので、底部の器壁は厚い。18, 20は他に比べやや器壁が薄い。高台外面、体部外面下半にカンナ目調整を施す。内面見込みには沈線の墨線を巡らしている。釉は17と20を除いては薄目に施釉され、高台及び体部下半に施されない。胎土は灰白色を呈し、釉は灰白色を呈している。18は青味をもった釉である。底径6.5~7.4cmを測る。

椀B類 (24) 梗A類に比べ、口縁の玉縁が小さい。玉縁は下半が肥厚したもので、梗をもっている。底径15.4cmを測る。体部外面の内迄施釉する。胎土は灰白色で、釉は緑味を帯びた灰白色である。外面に細かい気泡がある。底部はA類と同形態を呈する。

椀C類 (21) 内底見込みに沈線の墨線を巡らし、高台は外面を直に、内面を深く削っているが、疊付の幅は広い。底径7cmを測る。釉は厚目で高台外面の一部迄垂れ下り、灰白色を呈している。外面の気泡多く、内外面に粗い貢入がある。胎土は灰白色を呈す。

椀D類 (25, 26, 27) 底径はいずれも6.5cmを測る。内底見込みに段、或いは沈線の墨線を巡らす。高台は外面を斜目に、内底を深く削り、疊付を細くした形状で高い。27は高台が他に比べ低く、器壁は非常に薄手である。内底面にタテ長の貢入が見られる。外面は気泡が多い。釉は淡灰青色で、胎土は灰白色を呈する。釉は高台、外面、体部の下位には施さないが、25は高台まで垂れ下がっている。26の釉は厚目で、胎土、釉とも灰白色を呈している。25の釉は薄目で、内外面に細かい貢入がある。気泡が多い。又、内底には細かい砂が付着している。胎土は淡黄灰色を呈し、釉は乳白色である。

椀E類 (28) 底径は6.8cmを測る。高台外面を斜目に、内面を深く削るが、梗C類程には高くない、疊付も幅広い。底部の器壁は厚い。内底には見込みを環状に削り取っている。釉は高台の一部迄流れている。青味をもった灰黄色釉で、細かい貢入がある。胎土は黄灰色を呈す。外底面に「ニ」の字の墨書がある。

椀F類 (29, 30, 31) 底径は29が7.0cm、30が約6.2cmを測る。高台は外面を直に、内面を深く削って、細く高い形状である。釉は高台外面には施さないが、一部流れている。釉は灰白色で、30は外面に気泡が多い。胎土は灰白色である。釉はやや厚目で、見込みに浅い沈線を巡らしている。29, 30共に内底に櫛描き文を施している。31は29, 30に比べ、体部の立ち上がりが強く、高台径も小さい。底径6cmを測る。見込みに沈線を環状に巡らす。釉は薄目で体部下位に施さないが、一部高台外面迄流れている。釉は黄味を帯びた灰白色で、胎土は灰色を呈している。29, 30と分けるべきかもしれない。

壺 (35) 肩が強く張っており、最大径18.4cmを測る。内外面に淡灰青色の釉を薄目に施す。内外面に細かい貫入がある。胎土は灰白色を呈する。

青 磁

壺 (33) 底径5.1cmを測る小形の壺である。高台の削りは浅く、断面コの字形を呈し、底部の器壁は厚い。釉は外底面迄施されるが、壺付は搔き取られている。内底見込みと壺付に目痕が認められる。釉は黄味を帯びた濃緑色を呈し、胎土は灰青色を呈する。底部内外面の釉は風化している。越州窯系の青磁であろう。

鉢 (香炉) (32) 口径10.8cm、現存高3.2cmを測る。体部は鉢状に開くもので、口縁端部を平坦に仕上げている。体部の下半は器壁が厚くなっている。器高はさほど高いものではない。釉は内面の口縁直下迄しか施されない。やや厚目で、灰緑色を呈する。外面はタテ長の貫入がある。又、体部には、6本から8本単位の斜格子のヘラ描き文様を施す。内面には口縁直下を除いて釉を施さないが、丁寧なヨコナデ仕上げを行っている。他の器形を考えられるかもしれない。

陶 器

壺 (34) 高台径4.5cmを測る。高台外面は丸味をもっており、内面は斜口に深く削っている。体部は丸味をもち、内底面に軽い屈折をもっている。釉は厚目に高台外面迄施されている。壺付は搔き取られている。釉は黄味を帯びた緑色を、胎土は灰白色を呈する。外底部は淡赤褐色を呈する。国産品の可能性がある。

變形土器 (13) 接釉陶器であろう。外反する口縁部の破片である。口縁部直下に2条のヘラ描き波状文を施している。内面はヨコナデ調整である。内外面には釉がかかり、外面は胎色を、内面は薄い茶褐色を呈する。胎土の色は灰黄色を呈し、焼成は良好である。波状文は一般的に須恵器の變に用いられる文様であるが、胎土からみて須恵器とは考え難い。

瓶 (36, 37) 36は底径9cmを測る。壺付は細かく仕上げ、釉は外底面を除いて薄目にかかっているが、外面の下位は流れている。釉はオリーブ色を、胎土は灰青色を呈する。37は瓶の下部に位置する破片と思われる。内外面共に丁寧な作りで、外面には鋸を削り出している。鋸間は、上位は1.5cm、下位は1cmを測る。釉は灰緑色を呈し、内外面に薄くかけられるが、鋸部は剥げて茶褐色を呈している。胎土は灰白色である。

その他、接釉陶器は1点出土している。外面暗茶褐色、内面灰青色を呈し、焼成は良好である。砂粒を多く含んでいる。

瓦 類

丸瓦 (39, 40) 39は厚さ1.7cmを測る。外面は斜格子の叩き痕が、内面には粗い布目痕が残っている。外面はタテ方向のナデを行なっている。暗灰青色を呈している。40は厚さ1.8cmを測る。外面には格子目の叩き痕が、内面には布目痕が残る。叩きは深くはない。外面はタテ方

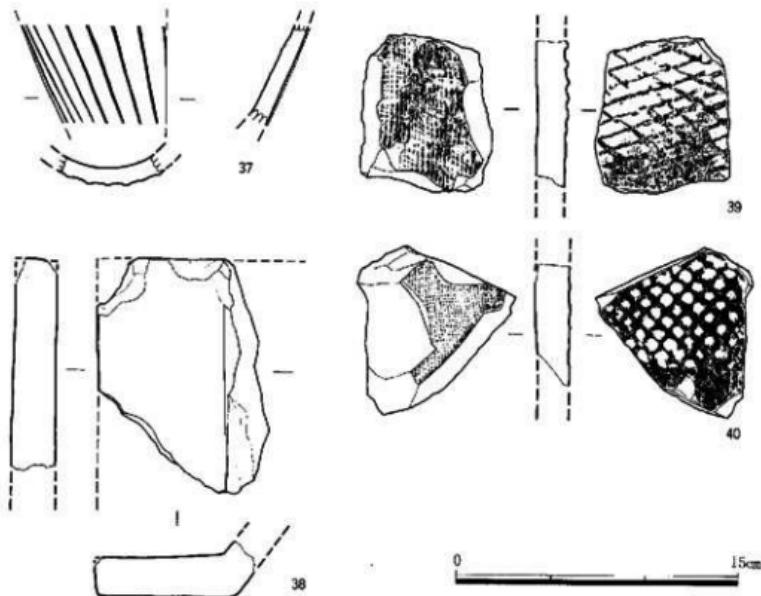


Fig. 93 1号溝出土遺物 (1/3)

向のナデを行なっている。焼成はややあまく、淡灰色を呈している。その他、厚さ2.6cmを測り、外面は摩滅しているが、内面には布口痕を残し、黄褐色を呈する丸瓦片がある。

伏間瓦 (38) 厚さ2.4cmを測る。平瓦を側辺に付属するもので、幅7.8cmを測る。凹面には離れ砂が多く付着している。色調は暗黄土色を呈するが、一部熱を二次的に受け赤変している。

滑石製品

石鍋 (41~46) いずれも石鍋の破片である。41は底部で最大厚2.2cm、底径26cmを測る。体部外面はタテ長の削り痕を残し、外底部は、中心へ向って放射状に削りを行なっている。内底は丁寧な仕上げで、削り痕は残していないが、使用時の細かいキズがある。見込みには沈線を圓錐状に巡らしている。44は体部が内弯し、端部は平坦にしている。底部を欠損しているが、推定高14.5cm、厚さ2.2cmを測る大型の鍋である。外面はタテ長の削り痕を残しており、内面、及び口縁端部は丁寧な仕上げで削り痕を残さない。42、46は口縁部である。いずれも外面はタテ長の削り痕を残している。内面は丁寧な仕上げであるが、46は材質が硬質のため部分的に凹凸を呈している。43、45は体部の破片で、いずれも外面はタテ長の削りを施し、内面は丁寧な仕上げである。

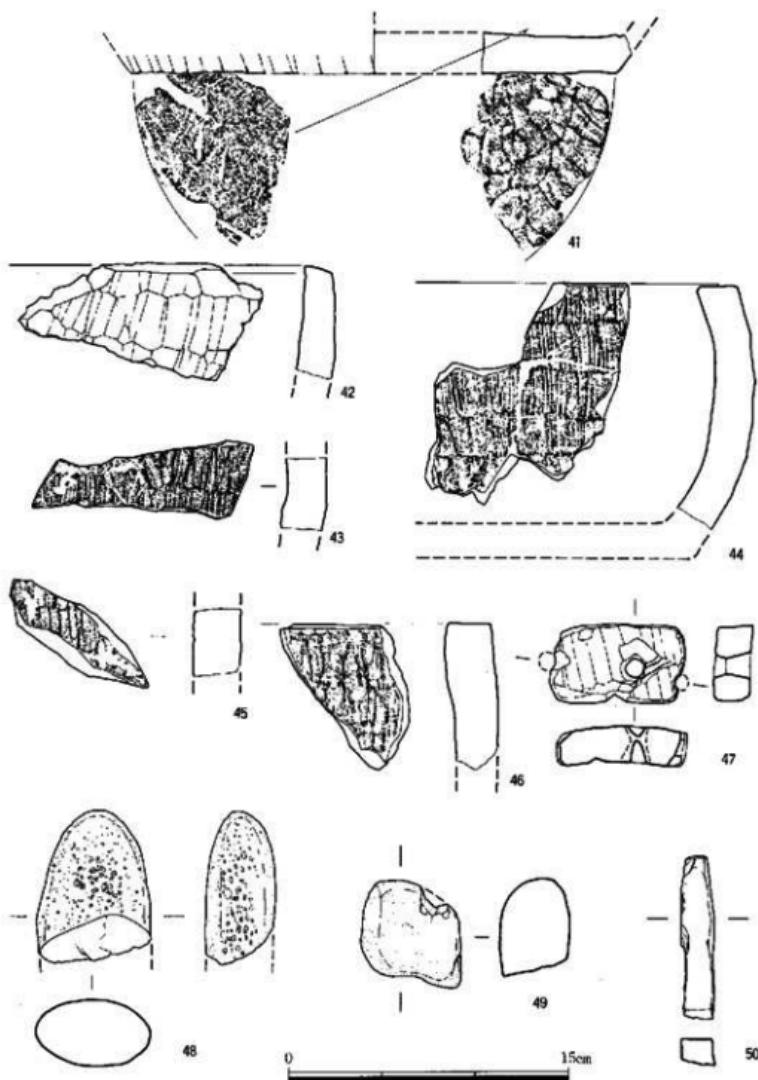


Fig. 94 1号溝出土遺物(石器)(1/3)

再生品 (47) 石錠の転用品と考えられる。長さ7.3cm、幅4.3cm、厚さ2cmを測る。中央寄りに径1.7cmの孔を両側から穿孔している。両側辺、小口は面取り整形を行っている。又、両小口には抉りをつけるが、左小口部分の抉りは石錠時の穿孔部分を利用している。外面はタテ長の割り痕を残しており、内面は丁寧な仕上げである。石錠として利用されたと考えられる。灰黄色を呈して、わずかに煤が付着している。

38, 39, 40, 41の外面は煤のため黒灰色、もしくは淡黒色を呈している。42と43は硬質の滑石で、他は軟質である。

石 器

石斧 (51, 52) いずれも玄武岩製の石斧の未製品である。51は現存長9.4cm、幅6.7cm、厚さ6.3cmを測る。52は現存長7.9cm、幅7.6cm、最大厚3.5cmを測る。51は刃部を欠損しており、断面形は不整円形を呈する。A面は表面が剥離しており、B面は大きな打裂を残している。A面、及び左側辺には研磨を施している。52は刃部の破損品で、断面形は偏平な不整隅丸長方形状を呈する。A、B面共に荒い打裂を残し、両側辺は小さな打撃を加えて面取りを行っている。刃部は丁寧な打撃を加えてA面は深く、B面は浅くし、片刃状に作り出している。

砥石 (54, 56, 57) いずれも中粒砂岩である。54は下小口を1部欠損しているが、ほぼ不整長方形を呈する。自然縫を利用したもので、下小口面は自然面である。長さ10.3cm、幅8cm、厚さ4.9cmを測り、断面形は長方形を呈する。左側辺は面取り後荒い研磨を加え、右側辺は粗削りの状態である。上小口面は半分が研磨面で、残りは敲打が加えられる。A、B面共にやや中凹みの砥面である。56は長方形プランを呈し、A面、両側辺の3面を砥面として利用している。長さ7.7cm、幅8cm、最大厚4.9cmを測る。両小口は面取りしており、B面は粗削りの状態である。57は不整形を呈し、砥面はA面だけである。下小口部分は欠損していると考えられる。B面、上小口、両側辺は面取りされている。現存長3.6cm、最大幅4.1cm、厚さ3.6cmを測る。

不定形石器 (48~50, 53, 55, 58) 形状、研磨の状態から、特定の器種と判断し難いものである。48は玄武岩製で、現存長8.2cm、最大幅6cm、最大厚3.5cmを測る。形状は先端の幅が小さく、尖り気味で、断面形は偏平な楕円形を呈している。器面には敲打痕が残っており、材質からみても古い時代の石斧と考えた方が良いかもしれない。49は木目が荒く、軟質の砂岩製で、長さ5.7cm、幅5.3cm、最大厚3.8cmを測り、不定形を呈している。下小口部分は欠損している。全体に丸味をもち、表面は滑らかである。左側辺は面取りしている。擦り石的な用途が考えられる。50は頁岩質の石質で、形状は方柱状を呈している。4面、及び両小口は面取りされ、A面、及び両側面は研磨が施されているが、丁寧ではない。長さ9.6cm、最大幅1.8cm、最大厚1.4cmを測る。ノミ形の石斧未製品が考えられるかもしれない。53は滑石製で卵形プランを呈している。表面は風化しており、縁辺は不整形である。長さ8.9cm、最大幅6.5cm、厚さ3.4cmを測る。断面形は偏平な不整楕円形を呈し、両側辺は丸味をもっている。55は粗い粒子の砂岩製で、形

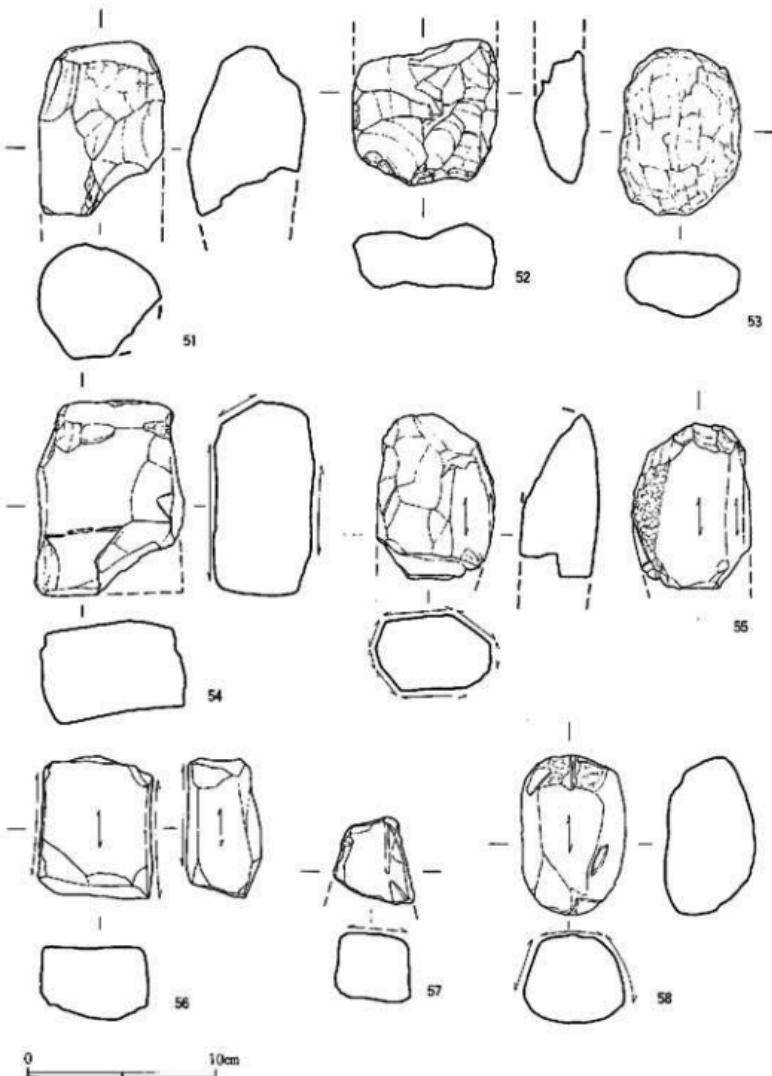


Fig. 95 1号溝出土遺物(石器)

状は不定形を呈する。現存長8.9cm、最大幅6.2cm、最大厚4.0cmを測る。両小口部分は欠損しているが、平面形は卵形を、縦断面は橢円形を呈していたと考えられる。B面の一部に自然面を残しているが、横断面形は7面体に成形している。いずれも研磨によるものであり、手持ち砥石の用途が考えられる。58は長さ8.5cm、最大幅5.5cm、最大厚4.8cmを測る。粒子の荒い砂岩で、形状は橢円形を呈し、全体に丸味をもっている。両小口は一部削離しているものの丸く仕上げ、A面、両側辺に面取り研磨がみられる。B面は丸味をもって成形している。これも手持ち砥石、又は擦り石の機能が考えられる。

鍛滓

径8~15cmの大きな塊りが計10個検出された。いずれも鍛治滓である。

2号溝出土遺物 (Fig. 96, PL. 56)

遺物の出土量は、遺構を完掘できなかったこともあるが西側の漆状遺構に比べ、著しく少ない。

白 磁

楕（1） 復元口径13.2cmを測り、口縁の玉縁は小さく薄いもので、稜をもっている。器壁は薄手に作られ、釉は薄目に体部外面の片迄施される。底部は器壁が薄く、内底見込みに段をもたず、高台は低く幅広いものが付くであろう。この他、図示しえなかつたが、楕体部の破片がある。内面に4条の櫛描き文が施される。胎土、釉ともに灰白色を呈する。

香炉（2） 口径10.8cmを測る。直口する口縁で、端部内面をつまみ出し、上面を平坦に成形する。体部外面には、ゆるい稜をもった蓮弁が造り出されている。蓮弁の幅7~8mmを測る。釉はやや厚目で、内面の口縁直下迄施す。釉、胎土ともに乳白色を呈する。

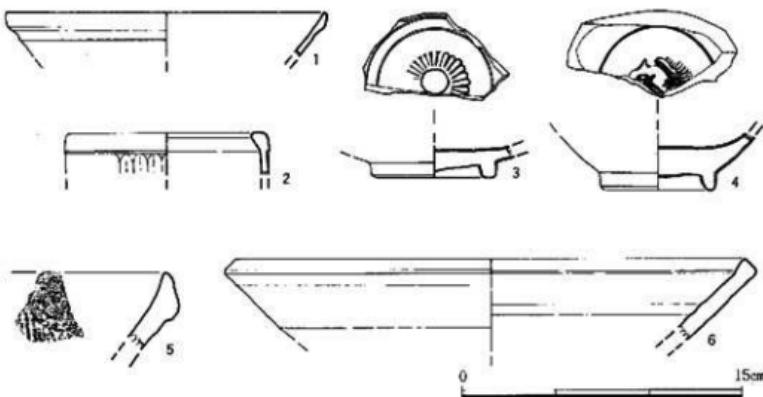


Fig. 96 2号溝出土遺物 (1/3)

青 磁

椀A類 破片のため図示し得ない。鍋蓮弁を体部外面に施したもので、釉は厚目に施され、緑灰色を呈する。胎土は灰色である。

椀B類（3, 4）3は高台径6.6cmを測る。高台外面を直に、内面を深く削り、断面コの字形を呈する。疊付外縁を斜目に削り取っている。内底見込みに2条の沈線を圓錐状に施し、内底には花文をスタンプしている。釉は厚目で高台内面迄施している。疊付の釉はカキ取っていない。釉は暗いオリーブ色を、胎土は灰青色を呈す。4は高台径6.0cmを測り、体部の立上りは強く、底部の器壁は厚い。高台外面はやや丸味をもち、内面は斜めに深く削っている。釉は厚目に高台内面迄施すが、疊付の釉はカキ取っていない。内底見込みに沈線を圓錐状に施し、内底にはスタンプしている。スタンプの形状は不明である。釉色は淡緑青色を、胎土は灰白色を呈する。

その他、李朝の椀片が一点出土。見込みに段をもち、生地は荒い。釉色は暗いオリーブ色を、胎土は青灰色である。胎土に白っぽい微砂を多く含んでいる。

陶 器

指鉢（5）幅袖陶器の指鉢で、口縁は肥厚し正縁を作っている。外面ナデ仕上げで、内面は数条の条線が口縁直下迄施される。備前系の鉢と思われる。

須恵質土器

鉢（6）体部が大きく開く片口の器形で、口径28.4cmを測る。口縁端部は上ににつまみ出でて、わずかに肥厚させている。外面ナデ仕上げである。灰色を呈している。

その他に丸瓦が数点出土している。

1号土塚墓出土遺物

鉄製品 (Fig. 97, PL. 56)

小刀 基子の基部を欠損しているが、現存長27.5cm、推定長28.3cm、基子の現存長6.2cm、基子の推定長7.0cm、最大幅20.0cm、刀身の長さ21.3cm、関部分の幅2.3cm、切先部分の幅1.3cmを測る。銹が著しく付着しているが、残存状態は良好で、刀身

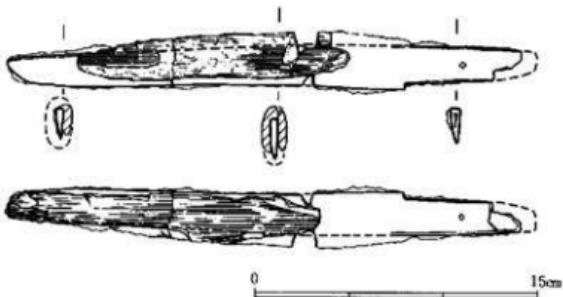


Fig. 97 1号土塚墓出土遺物（小刀）(1/3)

部分には鞘が木質化して残っていた。刀は刃部側に間を開くもので、刀身は内弯ぎみである。茎子には径2mmの目釘穴が1ヶ所ある。切先部分は細く、三角形状を呈するが、丸味をもっている。刀身の厚さは背部で4mmを測り、両側から厚さを減じながら刃部を研ぎ出すが、切先部分の断面はふくらみをもたない。中程の背面の厚さ6mm、腹部の厚さ2mmを測る。背面は鋳造のため内部が空洞化しており、そのため肥厚している。刃部の背部は丸味をもち、茎子の背部は角張る。鞘は刀身を包んだ状態で、長さはA面は14.6cm、B面は16.2cm、幅は2.5cmほど残っている。背面の木質の厚さ6mmを、側面は4~5mmを測るので、鞘の復元を行なった。刀身の中程では、長さ3.2cm、幅1.4cmを、切先近くでは長さ2.8cm、幅1.4cmを測る偏平梢円形の鞘を推測できる。木質は刀身の方向に糸目が通っている。

小 結

以上、遺構、遺物について概説した。著しい削平と狭い調査範囲のため遺構の用途など不充分な点は否めない。遺構はその覆土から大きく2つの時期に分けられる。

I期は掘立柱建物の段階で、建物は北方向へ伸びていたと思われるが濠状遺構にカットされている。覆土は黒色粘質土に褐色土が混入する。この周辺では第30次調査が東側約30mで実施され、古墳時代から中世迄の多数の建物を検出している。本遺跡検出の建物は主軸を磁北方向から大きく西へ113°振っているところから、律令時代以前の建物と考えたい。

II期は土壙墓と東、西の濠状遺構を含む時期であるが、厳密には土壙墓と濠状遺構は更に時期が細分される。1号土壙墓から出土した小刀の茎子は先端をわずかに欠いているが、この破損部は古く調査時での破損とは考え難い。出土状態が柄の茎子先端を濠側へ向けで置かれており、濠状遺構の掘削時、或いはその以降に破損したものと考える。とすれば、土壙墓群は濠状遺構の掘削以前に存在した事になる。覆土が暗茶褐色粘質土であることから、I期に後出することは明らかである。濠状遺構とは覆土に余り草は無いところから、年代的に大きな隔りがあるとは思えない。濠状遺構は本文で述べたように、幅約150mの狭い丘陵の切斷を意図したもので、防御的要素が強い。但し、陸橋部分が西側に偏在していることが丘尾切削的な機能に疑問を抱かせ、居館を形成する濠の可能性も残る。又、1号濠状遺構は東側先端が幅広く、底も浅く、底の凹凸が著しい。底は西に向って傾斜して谷へ向うところから、排水的な要素も持っていたのだろう。調査時に於いては多量の磚群が投棄された状態で出土し、その内部より多数の陶磁器が検出された。この陶磁器は大宰府史跡分類では白磁碗IV類、V類、罐類に相当し、IV類が主体である。しかし、濠底出土の34は焼成が甘く、釉も濁緑色を呈し、陶器の要素が強い。又、32は香炉と思われるが上記の白磁碗の段階には例を見ない新しい要素をもっている。瓦は伏間瓦と思われるが同様な器形は第19次調査の2号溝内より多量に出土している。2号濠状遺構は遺物が非常に少なく、1号濠状遺構にみる白磁碗IV類、V類、罐類の出土状況は

みられない。検出した青磁椀3、4は共に体部に退化した蓮弁を施すもので、4の椀は体部の立上りが強く、口縁は端反りしない形態であろう。同時に出土した丸瓦は、1号漆状造構出土瓦同様に第19次調査出土の丸瓦と同様の作りである。又、1片ではあるが李朝と思われる椀片が出土しており上記を総合すると、これら漆状造構は中世末の16世紀前後が考えられよう。以上、充分に検討を加えることができなかったが、造構の抜張調査段階で再度検討の機会を持ちたいと思う。

註1. 九州歴史資料館「大宰府史跡」昭和52年度調査概報 1978

註2. 横田賢次郎、森田勉「大宰府出土の輸入陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』1978

7. 第41次調査

調査の概要

調査対象地は福岡市早良区小田部3丁目307番地に所在し、対象面積は325m²である。

有田・小田部の台地は北方向から幾筋もの谷が切り込むため、台地はハッサク状に分岐しているが、この台地のほぼ中央部分は小山部の集落が存在する。この地域の標高は11~12mを測り、有田1丁目周辺同様に幅広い平坦地形を形成している。当該地はこの平坦地西側の緩傾斜地に位置しているが、古くから住宅地として利用されているため遺構の残存度は期待できなかった。旧字名は「上町」と称している。周辺では第14次調査が昭和53年度に実施されており、近世初頭の井戸などが検出されている。昭和55年9月に住宅増築の申請が提出されたため試掘調査を実施した。表土は30~40cmであるが、長い間住宅地として利用されてきたためローム層は非常に荒れ、幾つもの擾乱層が存在した。遺構はわずかに柱穴を検出するにとどまったが、地域的にみて遺構の広がりは確実であるので発掘調査を実施した。

発掘調査は昭和55年11月4日~11月19日迄実施した。調査は住宅増築分と庭、通路など支障の無い部分についても調査範囲を拡大した。遺構面はローム層である。前述したように、長い間住宅地として利用されたためにローム面は非常に荒れ、遺構の残存度は悪く、Pit等の検出は非常に少ない。地山のローム層は削平のため東南側から北西側に傾斜している。表土は20~40cmを測る。検出遺構は全て中・近世に至る時代で、溝、及び濠状遺構3条、土壙2基、井戸状遺構1基を検出した。遺構配置図にみるとように土壤状の大型Pitは全て擾乱、及び塵芥層である。遺物は中世末から近世の土師質土器、瓦質土器、陶磁器、瓦片、石錘、煙管、歯骨等を検出している。

検出遺構

擾乱のため遺構面の削平は著しく遺構は少ない。中世末の濠状遺構1条、溝状遺構1条、井戸状遺構1基、近世の溝状遺構1条、土壙2基、その他柱穴である。

土壙

いずれも1号溝と切合い、1号溝に後出する遺構である。

1号土壙 (Fig. 100, PL. 59)

南側半分が調査区の境界地にあるため、全形を

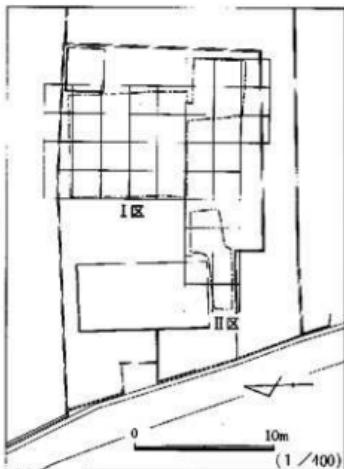


Fig. 98 調査区配置図(1/400)

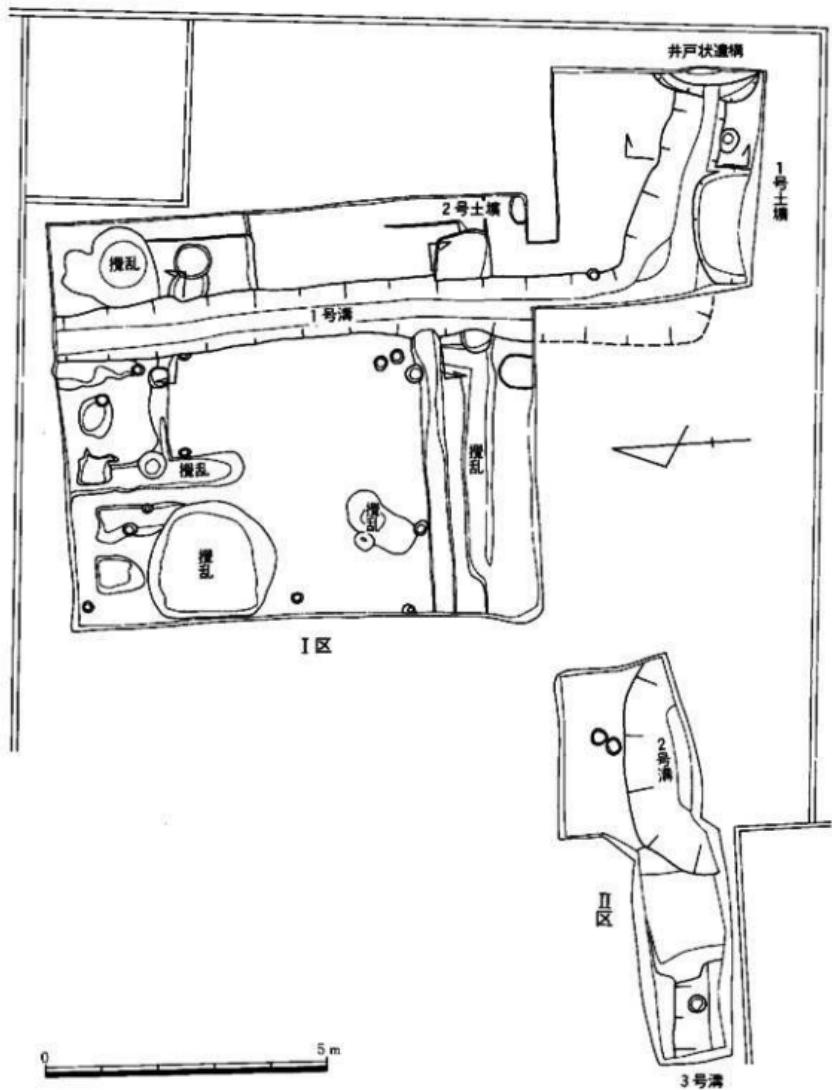


Fig. 99 造構配置図 (1/100)

確認することができなかった。又、北側では1号溝を削平している。土壌は平面形を隅丸方形もしくは隅丸長方形を呈するもので、底部はやや舟底状を呈している。東西長約2.02m、南北の現存長約1.0m、深さ80cmを測る。覆土は暗茶褐色粘質土に黒褐色粘質土が混入し、土層のしまりは無い。第2層は暗い青灰色を呈し、湧水のあることを示している。形状から溝になる可能性もある。出土遺物は伊万里系、唐津系の陶磁器、及び土師質土器が出土している。陶器よりみて17世紀代の遺構としておきたい。

2号土壌 (Fig. 100)

1号溝を切っており、当初、擾乱と考えていたが遺物にまとまりのあるところから、近世の土壌として扱った。平面形は隅丸長方形を呈し、東側を基礎により破壊されている。東西の現存長8.0m、南北の長さ1.0m、深さ38cmを測る。底面はやや中凹みを呈し、断面形は逆梯形状である。東、西側壁は直立に近い。覆土は茶褐色粘質土であるが縋りは無い。遺物は土師質土器を主体とし、一部瓦質土器片を含む。1号土壌と同様に近世の段階が考えられる。

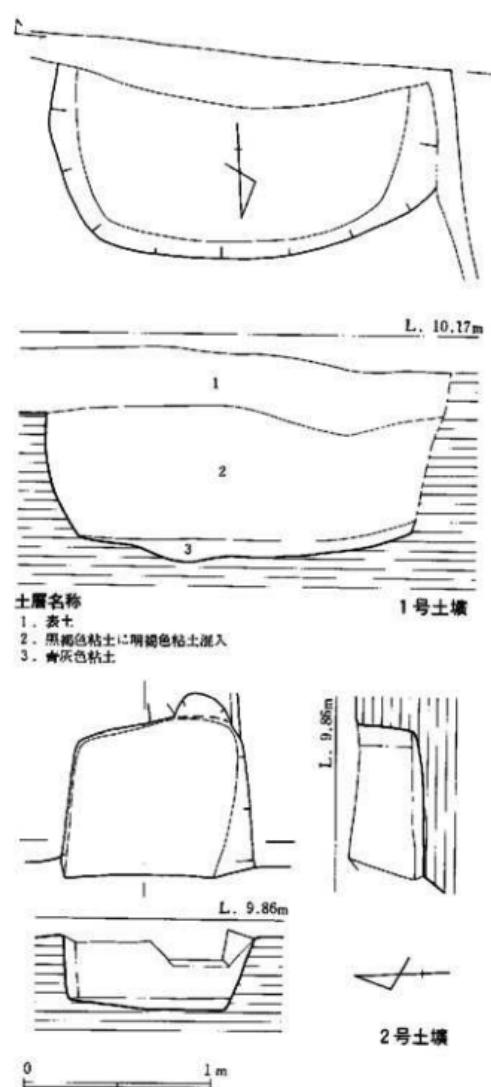


Fig. 100 1, 2号土壌 (1/30)

井戸状遺構 (Fig. 101, PL. 59)

調査区の東南隅の境界地にて検出したため、規模、構造は確認できなかった。1号溝と切合い関係にある。擾乱等が著しいものの土層により1号溝よりも先行するものと考えていた。又、出土遺物は1号溝よりも古い様子を呈している。覆土は暗い茶褐色土を主体としており、1号土壤の十層とは同一上層に近く、今後の調査如何では切合い関係は逆転するかもしれない。掘方は2段構造になっており、1段目の現存の径は1.6m、深さ0.3~0.55mを測り、2段目の径は約1.0mを測る。今回は土壤の一部を調査したに過ぎないが、2段目の掘方は井戸側になる可能性を充分に持つている。遺物は土師皿片を探集した。糸切り底である。

溝

調査I区の東側で、南北方向の1号溝と調査II区の南部隅で溝の痕跡である3号溝、又、同じ地域で濠状の大規模な2号溝の計3条を検出した。2号溝は境界地に存在し、3号溝は擾乱により削平が著しい。

1号溝 (Fig. 99, PL. 58, 61)

調査区の東寄りに在って、1号、2号土壤、井戸状遺構に切られる。南北方向から東西方向へ屈折する溝で、底は東から北方向へ傾斜している。現存長約13.1m、幅は東端部で0.9m、中央部分で1.1m、北端部で0.8m、深さは東端部で約35cm、中央部分で約75cm、北端部で82cmを測る。隅角部分は特に幅広となり、断面は東側でU字形を、中央部分と北端部分は箱型研磨形である。地山のローム面は東側と北側との比高差は約10cmを測る。北側の擾乱の著しさを考慮すれば、この溝の深さは本来1.0m前後はあったものと思われる。覆土は暗い茶褐色土を主体とするが、土層I、IIの最下層は黒灰色粘質土を呈し、30~40cmの深さに堆積している。この土は澁りが多く、ヘドロが沈澱堆積した土層と考えられる。遺物は溝底から軒丸瓦片が、覆土からは陶磁器、瓦質土器、土師質土器、瓦、鐵滓が出土している。

2号溝 (Fig. 102, PL. 60, 61)

調査II区で検出したが境界地にあるため、わずかに先端部分を確認するにとどまった。東西の現存幅4.0m、南北の現存長1.4m、現存の深さ1.8mを測る。断面形は逆梯形状を呈し、壁の立上りは上半部は緩やかで、下位は傾斜が強い。覆土は黒色に近い暗茶褐色粘質土を主体とし、褐色ロームのブロックが混入する。下層の第13層は黒色に近い暗青灰色砂質層で、ヘドロ状

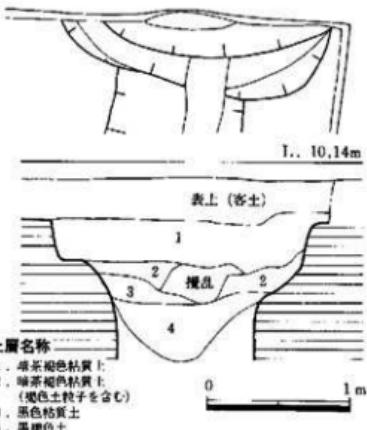


Fig. 101 井戸状遺構(1/40)

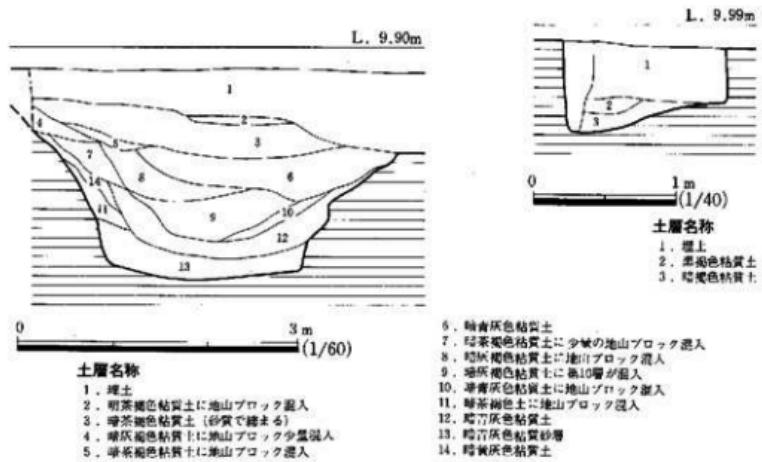
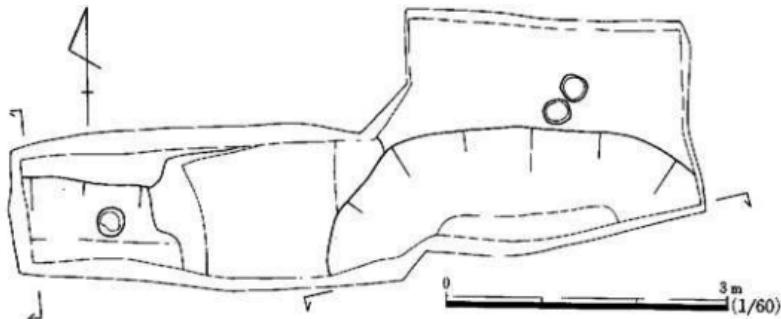
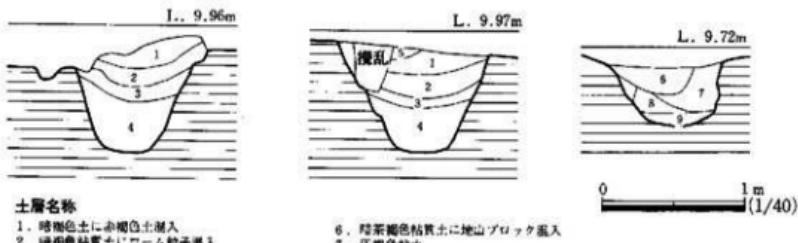


Fig. 102 2・3号溝、及び土層図

に堆積した層であろう。第13層を除いては全て、投棄による層と考えて良く、第12層は暗青灰色を呈するがブロックを含んでいることから湧水によって青灰色に汚染された層であろう。溝幅、深さなどの規模から濠としての要素が強い。出土遺物には国産の陶器もあるので、この濠が埋没した時期は17世紀代が考えられる。

3号溝 (Fig.102, PL. 61)

2号溝同様に調査II区の西端部で検出された。東西方向の溝と思われるが、東側は既に擾乱により著しく削平を受け、原形をとどめていない。現存長1.8mを測る。南半分が境界地にかかるので断面形は明確ではないが、土層図で見る限り溝は深さ約23cmを測り、断面形は浅いレンズ状を呈していると思われる。復元幅は約1.8mを測るものと思われる。覆土は1、2号溝と同様に黒色に近い暗茶褐色土である。遺物は細片にて時期判断はできないが、ほぼ1、2号溝に近い年代の所産であろう。

出土遺物

1号土壤出土遺物 (Fig.103, PL. 62)

全て覆土中の遺物で、土層図でみると1号土壤の覆土は投棄による堆積土であるから、土壤の埋没時期に関わっている。

陶器

皿(1) 体部を欠いている。高台径4.0cmを測り、高台は低く、高台内側は斜めの浅いケズリである。体部はやや丸味をもつ。内底と高台疊付に4ヶ所の目痕が残る。内底の目痕は粘土小塊を貼り付けた状態である。外面は体部下位が露胎で、内面は暗緑灰色の釉が施される。外面下位は茶褐色に発色する。内面は気泡が多く、貫入がみられる。唐津系の皿と思われる。

染付

椀(2) 体部上半部分を欠いている。高台径6.2cm、現存高3.8cmを測る。内底は鍔頭心状に盛りあがっている。体部は丸味をもち、高台は細く、疊付は内傾する。外面は高台上位に2条の横線を施し、内底見込みに2条の横線と中央には花文を施す。釉は赤味がかった灰白色で、具須はくらい青灰色である。内面に貫入が多い。初期伊万里系の椀と思われる。

土師質土器

鉢(3) 破片のため器形に不安が残る。復元口径25.1cmを測る。やや内傾した口縁端部の前後に粘土を貼り付けて、端部を平坦に仕上げている。体部はわずかに丸味をもっている。内外面はヘラによるヨコナデ調整である。微砂を含み、淡黄褐色を呈する。

捏鉢(4) 片口で、体部下半を欠いている。復元口径36cm、現存高6.4cmを測る。体部は直線的に強く開き、口縁端部は丸味をもっている。厚みは一定である。外面はヨコナデを、内面は細かいヨコハケ調整である。外面に煤が付着している。細かい砂を含み、内面黄褐色を、外面淡

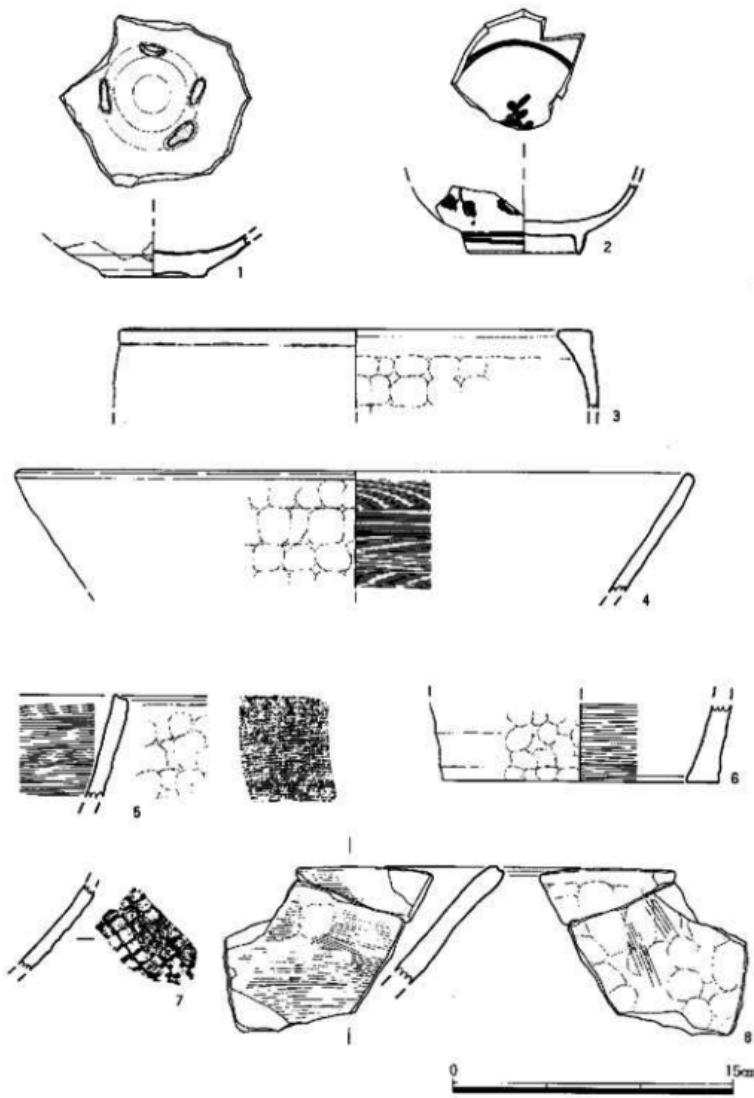


Fig. 103 1 · 2 号土墩出土遗物 (1/3)

黒褐色を呈する。いずれも焼成は良好である。

その他

染付の楕片が1号土壙の直上から1点出土しているが、出土の層は1号土壙の覆土であり、上記の遺物に共存するものと思われる。

2号土壙出土遺物 (Fig. 103, PL. 62)

土師質土器

鉢（5） 片口を呈する口縁部の破片で体部は開いている。端部は中凹みしている。内面にヨコハケを、外面はヨコナデ調整である。内面は褐色を、外面は煤のため墨色を呈する。

器形不明（6） 1号土壙出土の3と同様な器形かもしれないが、口径が小さいため別の器形とした。底径14.7cmを測り、やや外開きした体部を有する。内面は粗いヨコハケを、外面はヨコナデを施す。胎土は良質で、暗黄褐色を呈する。用途は不明である。

瓦質土器

鼎（7） 体部下位の破片で、格子目のタタキが施される。内面は淡黒色を呈し、外面は煤のため暗灰色を呈する。

鍋（8） 復元径50cm以上を測るものと思われる。大型で、器高の低い器形で、体部は外反する。底部との境は腰部を形成し、底部は浅いレンズ状を呈する丸底である。内面に粗いヨコハケを、外面はタテ方向の粗いハケを部分的に施すが、全体にナデ調整である。口縁端部に沈線が1条巡る。いぶしのため内外面は黒色を呈する。

1号溝出土遺物 (Fig. 104~106, PL. 62, 63)

底部より出土したのは軒丸瓦片だけで、他は各層から出土。層位毎の遺物による時期的な変化は認められない。

青磁

椀 破片のため図示し得ないが、体部に鎌蓮弁を有した龍泉窯系の碗である。

陶器

皿（9~11） 9は底部を欠いている。口径10cm、現存高2.7cmを測る。体部は外弯し、口縁部は大きく開き、端部に丸味をもつ。底部との境に腰部を形成する。釉はやや青味をもった灰色で全体に施され、厚目である。内外面に貫入があるが、特に外底部には気泡が多い。胎土は灰黄色を呈する。10は体部上半を欠いている。高台径4.5cm、現存高3.4cmを測る。高台は基盤底座にケズリ出している。器高の浅い器形で、体部は直線的に大きく、内底には螺旋状に釉のカキ取りがあって、砂粒が付着している。外面は露胎で、部分的に釉垂れがみられる。内面は暗緑色の釉を施す。外面は明茶褐色を呈している。胎土に微砂を含む。11は口径12.9cm、器高3.4cm、高台径4.5cmを測る。高台は高さ0.4cmを測り、円盤状を呈す。糸切りである。体部は大きく開き、口縁部を内弯させる。端部は細くシャープな作りである。釉は灰緑色を呈し、内底見込み

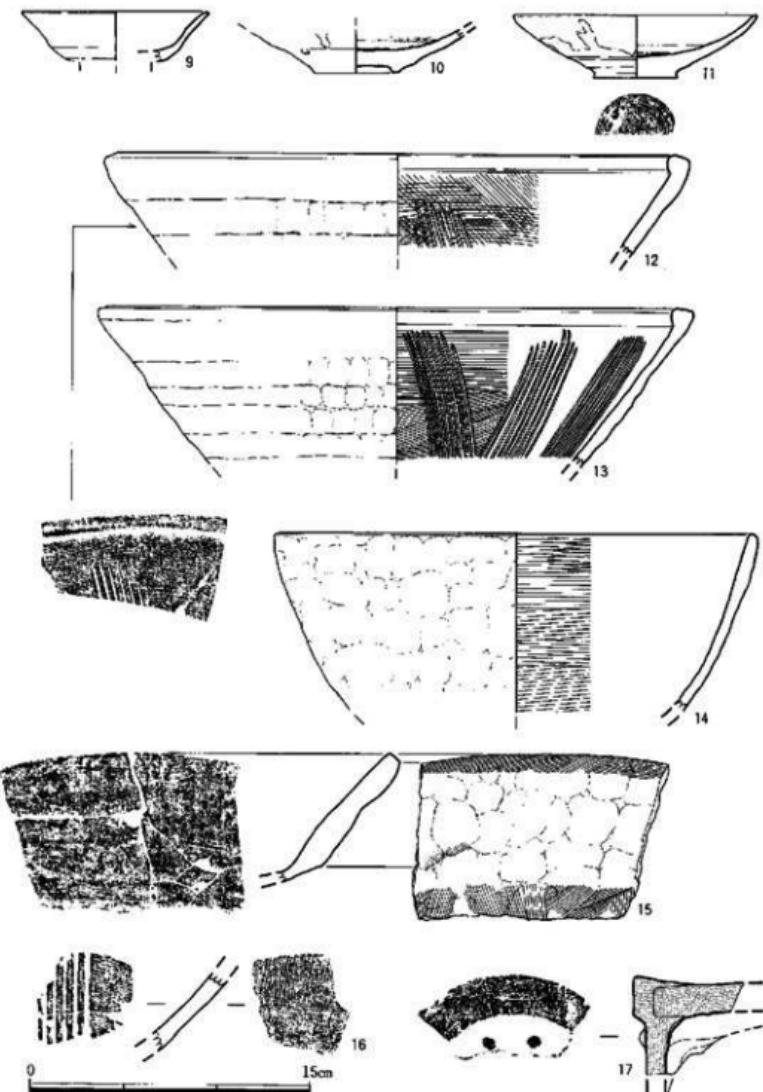


Fig. 104 1分溝出土遺物 (1/3)

に環状の軸のカキ取りがあつて砂粒が付着する。外面は口縁外面迄施し、体部は釉垂れが著しい。体部下半は露胎で、茶褐色に発色する。9、10、11共に国内産の椀と思われ、10、11については波佐見窯の可能性もある。

その他、瓶と思われる破片が2点出土。いずれも唐津系と思われる。

土師質土器

鉢 (14) 復元径26.0cm、現存高9.5cmを測る。底部を欠くが、体部は丸味をもち、器高の深い器形である。薄手の作りであるが、口縁部は肥厚する。外面はヨコナデを、内面は目の深いヨコハケ調整である。内面はやや暗い褐色を呈し、外面は煤のため黒色を呈する。焼成は良好である。

措鉢 (16) 体部の破片で、厚さ0.8cm前後を測る。内面に5本以上の幅広く、目の深い条線を施す。外面はタテハケ調整である。内外面はやや暗い黄褐色を呈する。

鍋 (15) 現存高6.9cmを測る。体部の器壁は厚く1.2~1.6cmを測る。口縁端部は平坦に仕上げる。底部との境は腰が張っており、底部の器壁は薄く、0.5cmを測る。底部が浅い丸底を呈する器形である。内面は細かいヨコハケを、外面は口縁部周辺をヨコ・ナメのハケを、外底部はタテ方向のハケを施す。体部はナデを施すが指圧痕は明瞭である。内面は褐色を、外面は煤のため黒褐色を呈する。2号土壙出土の8もこの鍋と同じ器形を形成するのであろう。

瓦質土器

措鉢 (12, 13) 12の復元口径29.8cm、現存高4.9cm、13の復元口径29.7cm、現存高8.3cmを測る。いずれも体部は直線状に開き、口縁端部を内側へ折り返して、内面に玉縁を形成する。13の玉縁は断面三角形状を呈する。12の口縁部外面はわずかに内傾する。口縁部と外面はヨコナデ調整だが、体部に指圧痕を残している。内面は12が粗目のナナメハケを、13が細目のヨコハケを施す。条線は12が7本以上、13が9本単位である。13の器壁は薄い。12は墨灰色を、13は灰白色を呈する。12の焼成はやや弱い。

鍋 (18, 19) 19は復元径25.4cm、現存高10cmを測る。底部を欠いているが、丸底を呈するとと思われる。体部との境は腰部を形成する。体部は直線的に開くが、立上りは強い。口縁端部は

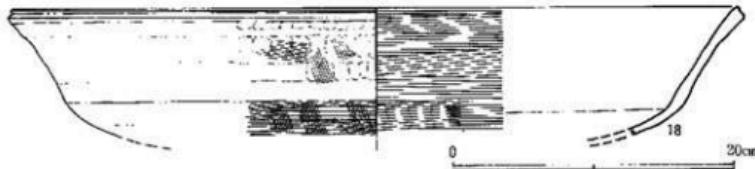
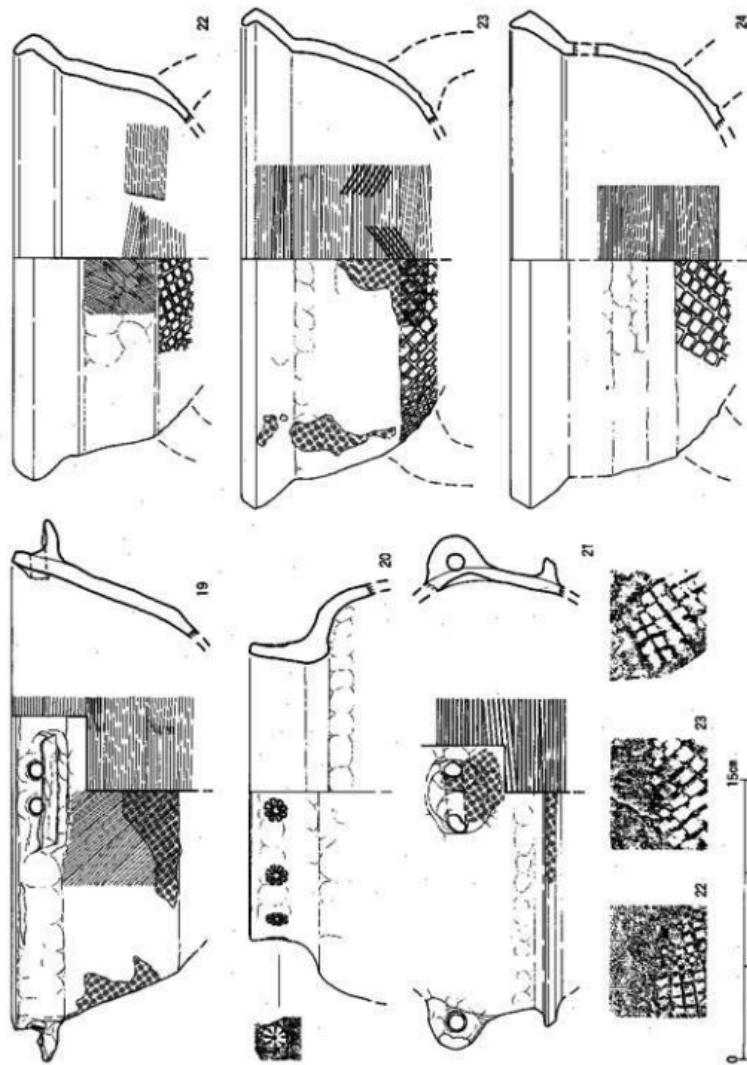


Fig. 105 1号溝出土遺物 (1/4)

FIG. 106 1 月満山土遺物 (1/3)



平坦に形成し、外面の口縁直下に1対の耳を貼り付ける。耳は長さ約6.2cm、幅約2.0cmを測る。端部は細く上反りさせている。耳の直上には径0.8cmの孔を2つ穿ち、釣手を結わえる孔としている。内面はヨコナデを、外面は耳から下はナナメハケを、耳から上はナデ調整である。内面は灰黄色を、外面は暗灰色を呈し、下半は煤のため淡黒色を呈する。18は復元口径12.8cm、現存高9.2cmを測る。体部は外弯気味に開き、口縁端部を肥厚させ、底部との境は段を形成する。底部は浅い丸底である。底部の器壁は薄い。体部内面はヨコハケを、外面はヨコ、タテハケを施す。焼成は良好で、暗灰色である。

湯釜（20, 21） 20は体部下半を欠いており、21は口縁部と底部を欠いている。20の口縁はやや外反し、端部を平坦にする。体部は丸味をもち、肩が張る。頸部には明瞭な段を有している。口縁外面には菊花文のスタンプを施す。肩部内面は指圧痕が明瞭に残り、他はヨコナデ調整である。21は肩部に1対の耳を、体部下半に高さ1.5cmを測る鈎を貼り付けている。耳は径3.4～3.8cm、高さ2.2cmを測る手づくねで、形状は珠文状を呈している。この耳に径0.9cmの孔を横方向に穿っている。内外面ヨコナデ調整で、耳の貼り付け部分の内面は指圧痕が残る。耳、及び鈎に煤が付着している。20は淡黄灰色を、21は内面淡茶褐色、外面は煤のため暗茶褐色を呈する。いずれも胎土に砂粒を含み、焼成は良好である。いぶしが施されていないので、土師質の分類に入るかもしれない。

鼎（22～24） いずれも底部、及び脚を欠損している。24は口縁部片と体部片を図上にて復元した。22の復元口径22.1cm、現存高9.8cm、23の復元口径25.0cm、現存高10.5cm、24の復元口径25.2cm、現存高は口縁部が3.6cm、体部が7.1cmを測る。23, 24の体部は丸味をもち、24は球体に近い。22は体部が直線的に開き、下位に腰部を形成する。口縁部は内弯気味に外反し、端部を内側へ長くつまみ出して内傾させる。24は22, 23に比べ口縁端部の内側へのつまみ出しあ小さく、口縁は断面三角形の玉縁状を形成する。口縁端部を中凹みさせている。頸部内面には明瞭な棱を有している。体部下位から底部は格子目のタキを施す。内面のヨコハケは22が下位に、23は全面に、24は体部に施す。23のハケ目は粗い。22は体部外面にも細かいナナメハケが施される。他の部分の調整はヨコナデである。22, 23には煤が付着している。22は内面青灰色、外面は煤のため淡黒色を、23は内外面暗灰色を、24はやや暗い灰色、外面は黒色を呈している。22, 23の焼成は良好で、24はやや軟質である。胎土に砂粒を含んでいる。

瓦類

軒丸瓦（17） 瓦当の復元径は7.5cmを、外縁幅2.0～2.2cm、外縁の高さ0.6cmを測る。珠文は径0.9cmを測り、復元では10～11個の珠文を施していたと思われる。瓦当部の上縁はヨコナデ、丸瓦部の背面はタテ方向のヘラケズリが施される。瓦当面と背面はいぶしのため黒色、もしくは黒灰色を呈する。風化しており銀化現象については不明。この種の軒丸瓦は福岡城で出土しており、巴瓦1類の小型の軒丸瓦、又は2類の軒丸瓦と同一形態を呈すると思われる。福岡城の注¹

築城期間をも考え合わせると17世紀前半頃が考えられる。

平瓦 破片にて図示し得なかった。表面摩滅しているが、灰黒色を呈し、いぶしが施される。

谷面にはタテ方向のケズリ調整が認められる。

鐵滓

5点出土。椀状のものを1点含む。

その他、古墳時代の須恵器、土師器、黒曜石を多数出土した。

2号溝出土遺物 (Fig. 107, 108, PL. 63)

遺物は古墳時代～中、近世の遺物が各層より出土し、層位毎に時期差は認められていない。

下層の暗青灰色粘土層から獸骨や埋管が出土している。

白磁

椀 (25) 図上にて復元した。口径16.8cm、器高6.9cm、高台径7.2cmを測る。大きな玉縁をもった口縁で、体部はやや丸味をもつ。高台内側のケズリは浅い。釉はやや暗灰黄色を呈し、体部下位は露胎である。質入は細かく、外面には気泡が多い。

皿 (26) 復元口径9.9cm、現存高2.1cmを測る。底部を欠いているが、輪高台の付く器形であろう。体部は丸味をもち、口縁端部はシャープである。体部下位にはカンナケズリが施される。釉は灰白色を呈し、外面下位まで施される。一部汚染され褐色を呈する。胎土は灰白色で、焼成は甘く、陶器質があるので国内産の可能性がある。

壺 図示し得ないが壺片が上層より1点出土している。

陶器

皿 (28) 口径12.6cm、器高3.1cm、高台径5.2cmを測る。体部はやや外反気味で、体部下位に腰部を形成する。体部下位はカンナケズリが施される。高台は低く、高台内側を深くケズリ込む。底部の器壁は厚い。口縁端部は丁寧に研磨が施され、平坦をなすが、本来この端部より更に、水平に近い外反するII縁が付属する器形である。口縁部が欠けたために再加工したものであろう。内面見込みは段を有し、内底には3ヶ所に目痕がある。釉はやや緑味を帯びた灰色で、外面上位迄施される。内底は褐色に発色し、露胎は淡褐色を呈する。胎土は精選され、焼成も良好である。初期の唐津焼である。

瓦質土器

摺鉢 (27, 31) 27は復元口径24.9cm、現存高7.2cmを測る。片口で、体部は内凹する。口縁部は肥厚し、端部は平坦である。体部内面には目の浅い3本単位の条線を施す。外面はナデ調整を、内面は口縁部が粗目のナナメハケ、体部がヨコハケ調整である。内外面のいぶしは薄く、暗い黄土色を呈している。胎土に微砂を含む。31は同じく片口である。口縁部は肥厚し、端部は丸味をもつ。外面はヨコナデを、内面は口縁部が目の細かいナナメハケ、体部がヨコハケ調整である。

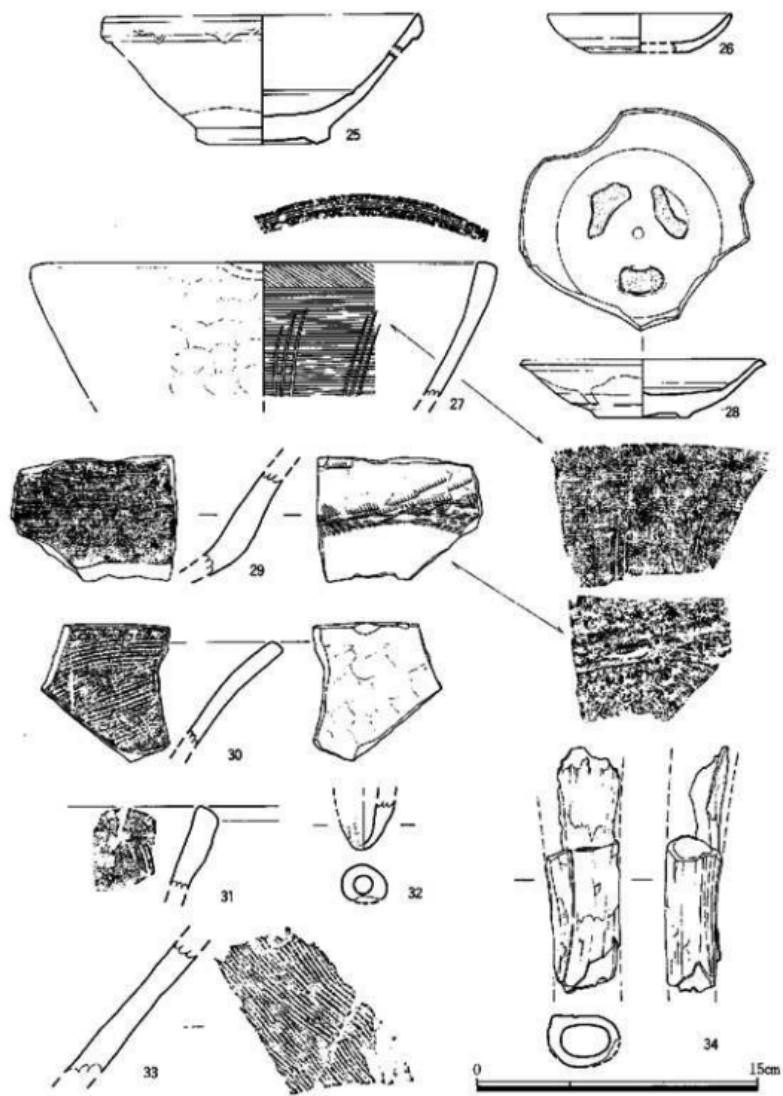


Fig. 107 2号满出土遗物 (1/3)

内面に3本以上の条線を施す。いぶしをわずかに施され、暗灰青色を呈す。

鉢（30） 外弯する体部を有し、口縁端部は平坦である。器壁は一定の厚さである。内面は粗目のヨコハケを、外面はヨコナデ、又はナデを施す。内面は黄土色を、外面は黒色に近い暗茶褐色を呈し、煤が多く付着している。土師質土器に分類できるかもしれない。

鍋（29） 1号溝出土の鍋（15）と同様な器形で腰部の破片である。器壁は厚く、1.1~1.6cmを測る。内面は暗灰青色を呈し、外面は煤のため黒色を呈す。内面のいぶしは浅い。

甕（33） 大型の變片で、須恵質に近い焼成である。外面は細かい平行タタキを、内面はナデ調整である。厚みは1.1~1.4cmを測る。外面は暗灰色、内面は黒灰色を呈し、胎土は灰青色である。硬質の焼きで、胎土に砂粒を含んでいる。他の土器が土師質土器に近いのに対し、最も瓦質的である。

土師質土器

尖底土器（32） 現存高2.7cmを測る。砲弾形を呈し、尖底の厚みは0.3cmを測る。内外面ナデ仕上げである。復元器形、及び破片部位は不明である。内面は黒褐色を、外面は褐色を呈する。

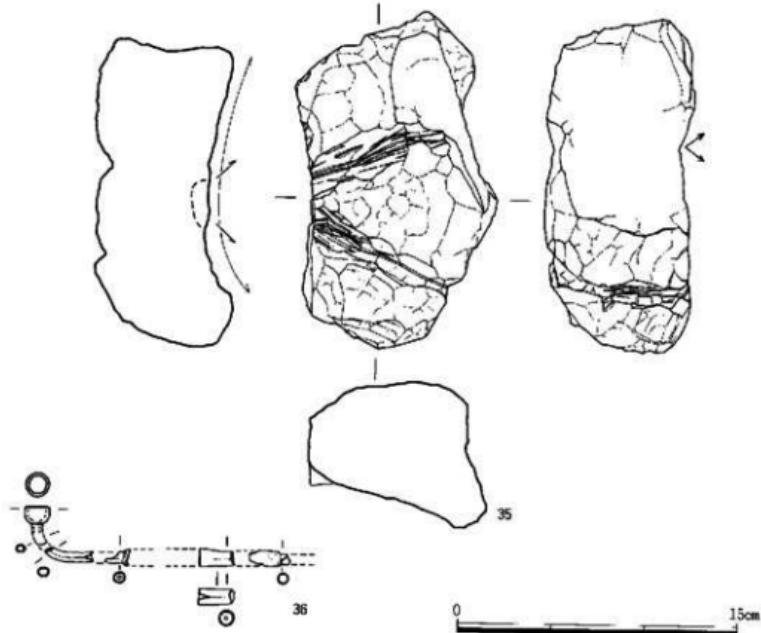


Fig. 108 2号溝出土遺物 (1/3)

石器

石鍤（35） 鐵石と考えた方が良いかもしれない。右側面の上部を欠き、形状は不整形を呈す。現存長18.1cm、最大幅10cm、最大厚7.8cmを測る。A面は丸味をもち、部分的に研磨され、八の字形に2条の溝を彫り込むが、この溝は左側面迄つづくが、他面には施されない。溝は上が幅2.0～2.5cm、深さ1.2cm、下が幅1.5～1.8cm、深さ0.7～0.9cmを測る。B面の左側辺中央部に抉りを設け紐掛けとしている。上小口左側面は粗削の状態であるが、下小口は一部研磨が認められた。下小口、右側面は打撃調整の他、ケズリによる面取りを行なう。B面は皿状を呈して右側辺、及び下辺に1.0～2.5cm幅の縁取りがある。削り痕、及び研磨が施されているところから、本来この面が石皿的な用途に用いられ、破損後の転用として鐵石、或いは石鍤として用いたものと思われる。石質は滑石の薄い層を含んだ蛇紋岩である。

金属製品

煙管（36） 同一個体となる煙管の火口部と吸口部分の金属部分だけが残存している。青銅製品で、雁首は鋳物作りであるが、他は銅板の薄手のものを卷いて作られる。雁首火皿の外径は1.4cm、内径0.9cm、深さ0.8cmを測る。銅管の太さは、火口部の曲り部分で0.4～0.5cm、羅字との接合部分で径0.8cm、吸口部分で径0.6cm、羅字との接合部分1.0cmを測る。煙管羅字の復元径は約0.9cmと思われる。煙道は雁首部分で0.3cm、吸口部分、雁首基部には内部に木質が残っており径約0.1～0.2cmを測る。

その他

獸骨（34） 現存長3.2cm、径3.9cm×2.8cmを測る。いずれの骨か不明だが、骨の大きさから馬、牛等の家畜獸の大腿骨であろう。

小 結

狭い範囲での調査のため、1号溝を除いては充分な調査ができなかった。遺跡は土壤と溝から構成されるが出土遺物からみて、ほぼ同時性を示している。切合関係、覆土から2期に細分してみると、Ⅰ期は1号溝の存在する時期で、この溝と位置関係が併行する2号溝も含まれるかもしれない。Ⅱ期は1号溝埋没後に掘り込まれた1号土壙・2号土壙である。Ⅰ、Ⅱ期共に国内産の陶磁器を含んでいる。これらは初期伊万里、古唐津と云われるもので、その製作の初現は、初期伊万里が秀吉による文禄、慶長の役に従軍した鍋島直茂によって、古唐津が松浦地方の武将が朝鮮より陶工を連れ帰ったことを契機として始まるもので、16世紀末から17世紀初め頃と云われる。但し、Ⅰ、Ⅱ期の共伴物を観た場合、Ⅰ期には16世紀代の土器群（12、13、19～24、27）が含まれており、Ⅱ期よりわずかに先行するものと思われる。これらの時期は、陶磁器の作陶年代や瓦から、ほぼ17世紀初めから中頃にかけての所産と考えたい。

雜器については前代と違う特徴をもつ土器群が出現する。鉢(4, 14), 鍋(8, 15, 29)に代表されるものである。この時期にはいぶしの強い瓦質、或いは須恵質に近い硬質の瓦質土器は失なわれ、鉢にみる硬質の土師質土器、鍋にみる軟質で、いぶしがわざかにかかる土師質系の土器に統一される。4は16世紀前半に出現する軟質の土師質鍋の内寄する口縁が失なわれた退化形態と思われる。又、14は中世後半に存在する捏鉢と比較して器高が深く、丸底の可能性もあるところから鍋としての機能も考えられる。鍋は15の器形に全て統一できる。口径が50cm内外を測るものと思われる、器高が低く、体部が非常に厚い器形で、外面に煤の付着が著しく、煮沸に利用されている。尚、波多江遺跡では、SD03出土の鉢(6)は口径59.5cm、器高^{註2}10cmを測り、器壁の厚さの違うものの、器形的には15の鍋と同形態を呈する。溝SD03は共伴の土師器皿等の形態、法量から16世紀前後の年代を推定されている。

有田遺跡でのこの種の鍋は当該調査地、或いは、第44次調査の16世紀末から17世紀初めの遺構より検出され、16世紀前半には検出されていない。特に、波多江SD03出土の鉢の器形に近いものは、第44次調査の井戸より検出される。この鍋には唐津系の陶器や初期伊万里も伴っている。又、鍋外面の煤の付着は前述の鉢(14)にも認められるところから、同じ煮沸の機能を持ちながらも、煮沸の対象物による使い分けがおこなわれた可能性を示している。恐らく食生活の多様化が同一機能の器種を更に分化させたものと考える。摺鉢等は陶器製に変わると思われるが、26の様に条線が少なく、小型化した土師質の摺鉢もわずかに残る。瓦質土器(12, 13, 19~24)は16世紀代と思われるが、これらの土器の消滅と、前述の土器群との間には時間的な隔りがある。現在のところこの時期の資料は不足しており、資料の増加を待って16世紀から17世紀の「捏る、摺る、煮る」の機能をもった土器群の器型、器種の検討を行ないたいと思う。又、瓦質土器(12, 13, 19~24)は筑前に於ては非常に限られた空間と時間をもっており、これらの土器を検討することは中世末の流通、筑前領上の支配構造を考える意味で興味がもたれる。限られた調査範囲のため資料不足は否めず、遺構の機能や遺物について不充分な説明で終始した。今後の資料に期待したい。

註1. 福岡市教育委員会「御薦屋敷」1980

註2. 福岡県教育委員会「波多江遺跡」今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告(7) 1982

註3. 福岡市教育委員会 昭和56年度発掘調査 現在整理中である。

8. 第42次調査

調査の概要

調査対象地は、福岡市早良区有田2丁目85番地に所在し、対象面積は150m²である。

当該地は、有出地区台地の南端部に位置する小田部城伝承地の北東側緩斜面に所在する。旧有田村の集落内に位置し、標高9m前後を測る。当該地の東側は台地落ちとなり、比高差約2.5mを測る。小田部城は、16世紀後半に荒平山に居城した小田部氏の里城と云われ、地元では別名「月城」と称されている。台地南端の標高13m前後を測る宝満宮にその本丸が所在したと云われており、この高台と、有田1丁目周辺の標高14m前後を測る高台との間には鞍部を形成する。小田部城の東側と西側の台地際には土塁が存在したことが伝承され、現在も幾つかを確認できる。当該地周辺には中世の宝鏡印塔、板碑等の石塔残片が寄せ集められており、当該地が小田部城の盛衰に関連した地域であることを想わせる。昭和55年度に埋蔵文化財発掘調査の申請が行なわれた事に伴い、試掘調査を行なった結果、中世の溝等を検出したので、昭和56年度事業として発掘調査を実施した。

発掘調査は、昭和56年4月10日～4月25日迄実施した。表土は耕作土で、深さ20～30cmを測る。造構面はローム層で、東側へ緩傾斜し、東側では表土との間に最大約30cmを測る暗茶褐色粘質土の包含層が存在する。この包含層は弥生時代から中世の遺物を含んでおり、中世の整地層と考えられる。1号溝は、この層を切り込んで設けられている。検出造構は弥生時代～古墳時代の掘立柱建物1棟、中世の溝2条、掘立柱建物2棟を検出した。遺物は弥生時代中期の變形土器、器台、平安時代の椀、中世の陶磁器、及び板碑等を出土している。

検出遺構

造構は弥生時代のPit、掘立柱建物1棟、平安時代の上壙、中世の溝2条、掘立柱建物2棟を検出した。

溝

調査区の東側で1条、南側拡張区で1



Fig. 109 第42次調査位置図 (1/2500)

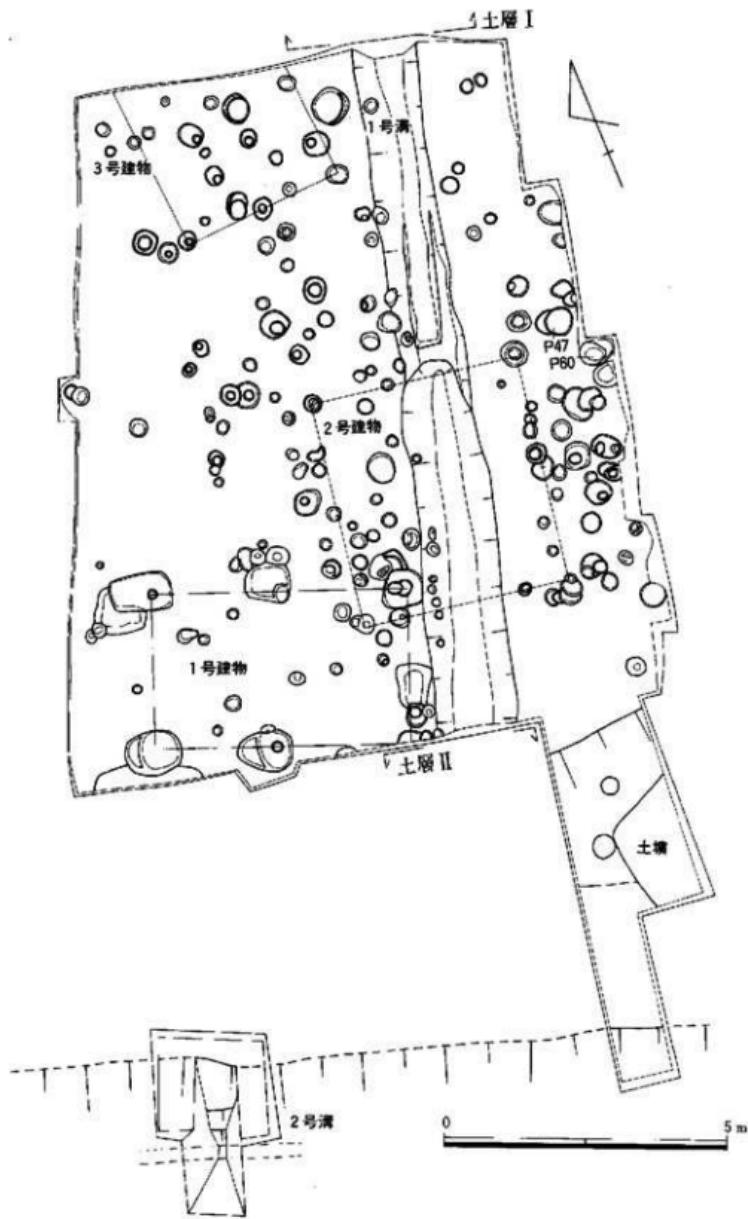


Fig. 110 遺構配図 (1/100)

条検出した。2号溝は調査区南側に設けた試掘トレンチで検出した。

1号溝 (Fig. 111, PL. 64, 67)

調査区の東側の緩傾斜地に位置し、東西方向に伸びる溝である。主軸をほぼ南北方向に置き、断面U字形を呈する。溝は土層図I (Fig. 111) で判るように、包含層である茶褐色土から切り込んでいる。現存長は12.3m、現存幅は0.9~1.3mを測る。西側の深さは70cmを、溝の中央部は40cmと浅くなり、台形状の高まりを形成する。この高まりの両側では、溝底の高さが異なり、南側が約10cm程低くなり、緩やかに南へ傾斜していく。溝の堆積状態は灰褐色粘質土、又は茶褐色土を主体とし、底面に近い程青味を帯び、粘性が強くなる。遺物は主に上層より出土したが、細片である。弥生時代中期から古墳時代、中世迄の土器片、中世の土師皿、陶磁器、瓦、土錐、板磚、鐵滓等が出土した。

2号溝 (Fig. 111, PL. 65)

調査区南東側の拡張区、及びトレンチで検出した。遺構が隣地境界にかかる事から、平面プランの確認、土層断面の観察のみを行なった。溝の主軸はほぼ東西方向に取り、その幅は1.5m以上を測る。深さは約1.25mを測る。覆土は暗茶褐色粘質土を主体とし、黄白色の地山粘土ブロックを混入する。溝底は暗青灰色粘質土である。覆土の堆積状況は一度に埋められた状況を示している。検出遺物はトレンチ調査のため少なく、弥生式土器、古墳時代の須恵器、土師器、中世の瓦質土器、土師質土器、瓦、鐵滓などを出土した。いずれも細片である。

掘立柱建物

1号掘立柱建物 (Fig. 112, PL. 65)

調査区の南側の境界地で検出した。現存状態は南北が1間、東西が2間の規模をもつ掘立柱建物である。南へ建物が延びる事も考えられるので、南側にトレンチを設定したが、柱穴は確認出来なかった。掘立柱建物は本来1間×2間の規模と思われる。主軸方位をN70°Wに置き、梁行2.72~2.83m、桁行4.46~4.49m、桁行間2.15~2.30mを測る。柱穴掘り方は長さ73~110cm、幅66~78cmを測る隅丸長方形、又は楕円形の平面形を呈し、深さは30~50cmである。掘り方の覆土は黒褐色粘質土である。柱根径は15~20cmである。遺物は細片が多いので時期は明確には判断出来ないが弥生式土器片がほとんどである。他にも黒曜石製の石鏃破片などが出土している。以上の事から、弥生時代の掘立柱建物である可能性が高い。同様な例は第48次調査にても1棟検出しており、この建物は中期の住居跡に伴っている。^{註1}

2号掘立柱建物 (Fig. 110)

1号溝と重複しており、前後関係は不明である。主軸をN8°Eに取り、梁行2間×桁行2間の掘立柱建物である。梁行長3.66~3.72m、桁行長4.08m、梁間0.8~2.32m、桁間2.0~2.08mを測る。柱穴掘り方の形狀は円形を呈し、径は約45cm、深さ16~52cmである。四隅の柱穴は他

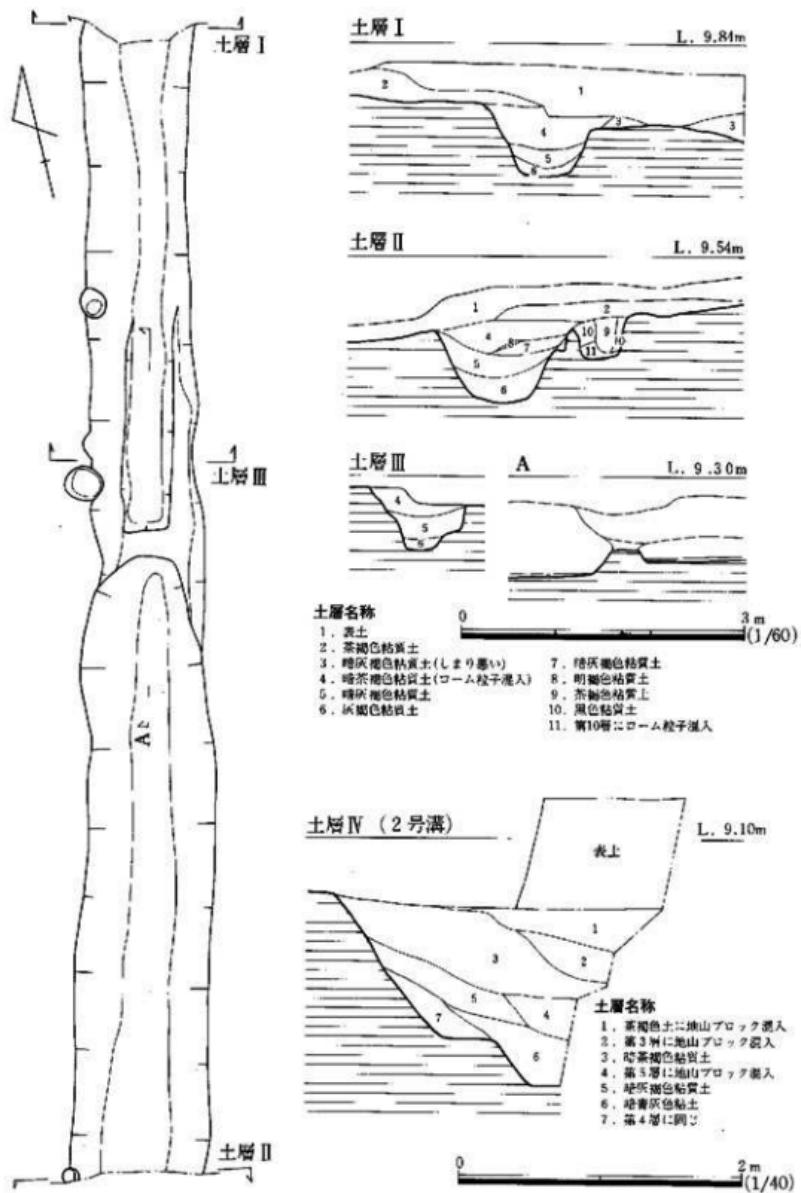


Fig. 111 1・2号溝, 及び土層図

に比べ規模が大きい。遺物はPit 3, 6~8より、弥生式土器片、中世土師皿片、小鉄滓が出土した。

3号掘立柱建物 (Fig. 110)

北西隅の境界地に検出された。現存状態は梁行2間×桁行1間以上を測り、主軸をN5°Wに取る。梁行2.86m、梁間1.38~1.45m、桁間1.80~2.0mを測る。柱穴掘り方の形状は円形で、径24~39cm、深さ16~30cm、柱根径は15cmを測る。遺物は出土しなかった。

土 壤 (Fig. 110)

1号溝の南側拡張区で検出した。調査期間の制約から遺構面の確認のみにとどまった。1.5m×1.5m以上を測る方形プランの隅角部分を確認したのみで大半は東南側の未調査区域にある。覆土は暗茶褐色粘質土を主体とし、焼土、炭化物を混入する。遺物は覆土上面から土師器の高台付椀、黒色土器の椀、須恵器、土師器の甕等が出土している。土師器の甕は9世紀後半~末時期と考えられる。

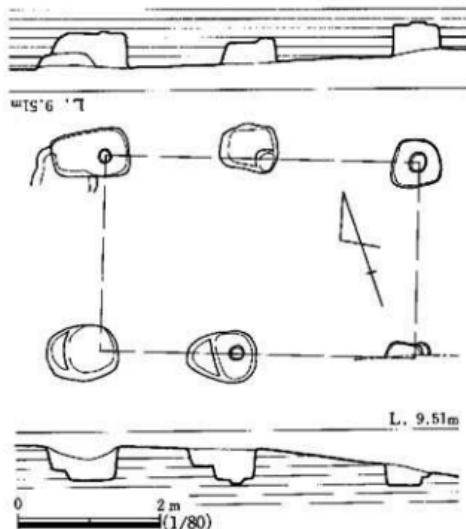


Fig. 110 3号掘立柱建物 (1/80)

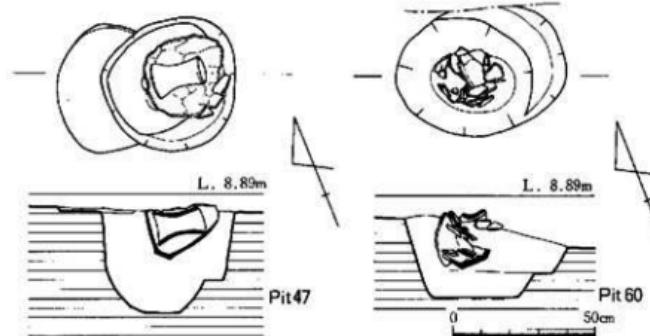


Fig. 113 Pit 47・60 (1/20)

焼 土 (Fig. 110)

調査区南東隅で焼土面を確認した。3m×4m の方形の範囲に焼土面は分布する。削平を受けた住居跡の床面の可能性もある。遺物は焼土面直上から少量出土しているが、すべて細片である。

Pit 47, 60 (Fig. 113, PL. 66)

いずれも削平を受け、東側が2段掘りとなった円形Pitである。Pit47は径48cm、深さ35cmをPit60は径48cm、深さ29cmを測る。Pit47は變形土器をやや斜目に埋置し、その内部に横倒しの器台が存在した。Pit60は、やはり内部にやや北方向に傾いた直立の變形土器がつぶれた状態で検出された。いずれも弥生時代中期中頃の變形土器である。腰指基とも考えたが、埋置の状態から住居跡に伴う遺構と思われる。これらのPitを含めた柱穴群で構成された住居跡が存在したものと思われる。

出 土 遺 物

表土出土遺物 (Fig. 114, 115, PL. 68)

弥生式土器

高杯（1） 脚部片である。底径17cmを測る。脚裾部は広がりの緩く、端部は平坦に調整している。内外面ナデ調整である。色調は黄褐色を呈する。

器台（3） 脚部片である。復元径15cmを測る。脚裾部は外開きをしており、端部は丸味をもっている。端部内外面はヨコナデ調整で、色調は黄褐色である。

土師器

高杯（2） 脚部片である。脚裾径は12cmを測る。脚筒部は余りふくらまない。脚轂は低く、大きく外反する。筒部と裾部との境は、内面に強い棱を有している。内外面は摩滅している。内面はヘラケズリ調整で、淡褐色を呈する。

瓦質土器

壺（5） 壺の脚の部分である。現存長6.4cm、最大厚2.2cmを測る。器面全体にナデ調整を行なう。焼成は良好で、色調は灰褐色を呈す。

湯釜（4） 羽釜の鋸部分である。鋸部の復元径は31.2cm、鋸の高さ2.2cmを測る。体部は丸味をもち鋸は水平に貼り付けられている。鋸の下位は煤が厚く付着している。鋸はヨコナデ、下半部はタテハケを施し、内面はヨコハケ調整を行なっている。胎土に砂粒を含み、焼成は良好。色調は黒灰色を呈する。

石 器

叩石（16） 石質は花崗岩の転石を利用したもので、長径9.0cm、短径8.2cm、厚さ7.1cmを測る。A面、右側面に使用による細かい打撃痕が残る。

石鎌（19） 先端部が欠失するが、現存長2.0cmを測る。剥片を利用しておらず、かえしは長く、

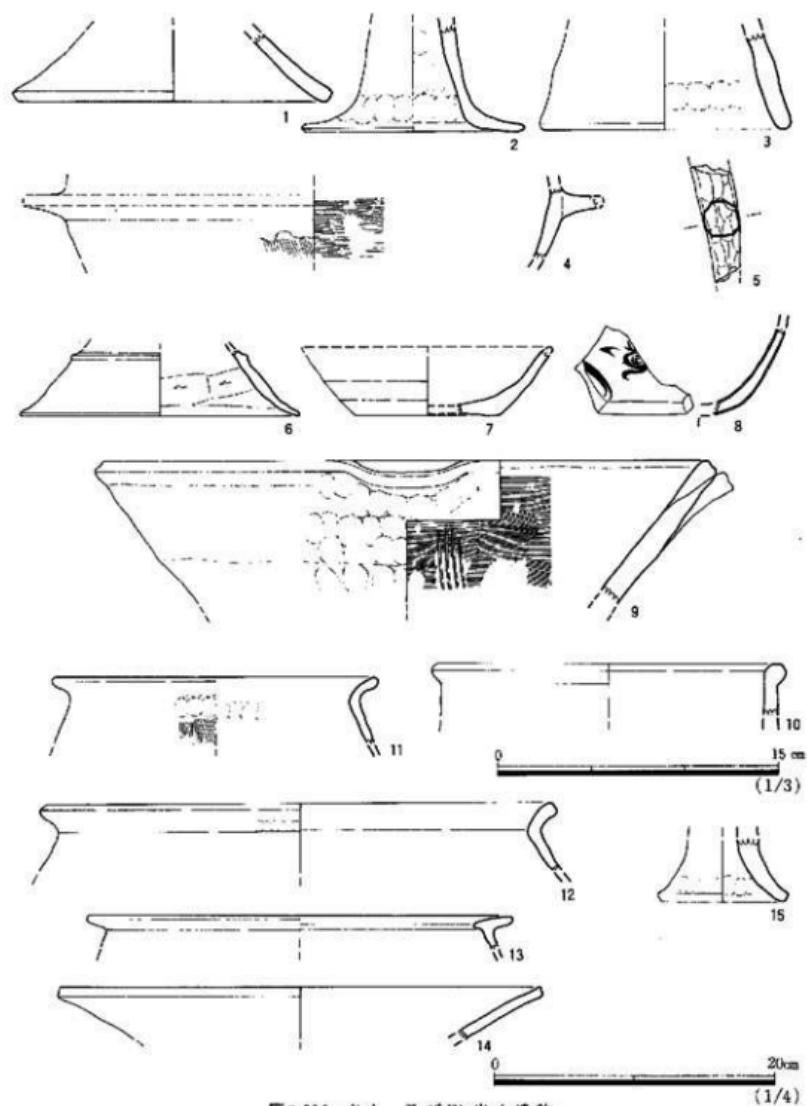


Fig. 114 表土, 及び Pit 出土遺物

抉りは深い。石質は黒曜石である。

鉄製品

鉄鎌 (17) 現存長3.6cm、現存幅5.3cmを測る。厚さ2~3mmの薄い板材を折り曲げて袋部を作っている。全体に銹化が進んでいる。

Pit出土遺物 (Fig. 114, 116, PL. 68)

Pitより弥生時代から中世～近世に至る各時期の遺物が出土した。1~5, 10, 17は表土、6~16, 18~21はPit出土である。

弥生式土器

変形土器 (11~13) 11はP57, 12はP1, 13はP24出土である。12は復元口径35.8cmを測る。口縁部はくの字状に外反し、端部を肥厚させる。器面は摩滅するが、外面にナデ調整が認められる。胎土に砂粒を含む。焼成は良好。色調は茶褐色を呈す。15の器台が共伴している。11は復元口径22.6cmを測る。外面にはタテハケ、内面はヨコナデ調整を行なう。胎土は砂粒を含み、焼成は良好。色調は茶褐色を呈す。13は復元口径30cmを測る。逆L字形を呈する変形土器の口縁部である。外面にヨコナデ調整を施し、胎土に砂粒を含む。焼成は良好。色調は淡赤褐色を呈する。

高杯 (14) P46より出土。大きく開く口縁部片である。復元口径は30cmを測る。胎土は砂粒を含む。焼成は良好。色調は赤黄褐色を呈する。内外面共ヨコナデである。

器台 (15) P1より出土。12の変形土器が共伴する。脚部片で、底径は9.2cmを測る。内外面はナデ調整を施す。胎土に砂粒を含み、焼成は良好。色調は明赤褐色を呈する。

土師器

器台 (6) P53より出土。鼓形器台の脚部片である。脚部の復元径は17.0cmを測る。器壁は薄く、据端部はやや外彎する。外面はヨコナデ、内面はヨコ方向のヘラ削りを行なう。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は赤褐色を呈す。

杯 (7) P37より出土。復元口径13.2cm、器高3.6cmを測る。内外面はヨコナデ、底面は摩滅しているがヘラ切りと思われる。胎土に金雲母片を含む。焼成は良好。色調は赤褐色を呈す。

その他に高杯脚部片 (Pit18), 梶の把手片 (Pit37) がある。

青磁

梶 (8) P42より出土。龍泉窯系の梶で、内外面にくすんだ緑青色釉が厚く施される。体部

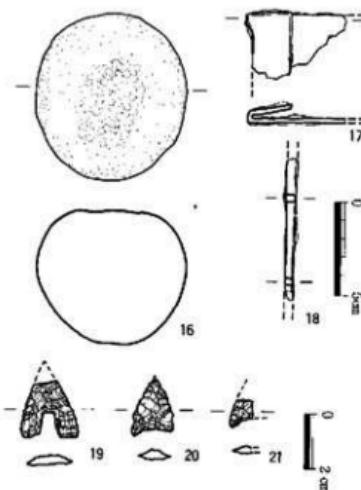


Fig. 115 坑出土遺物（石器・鐵器）

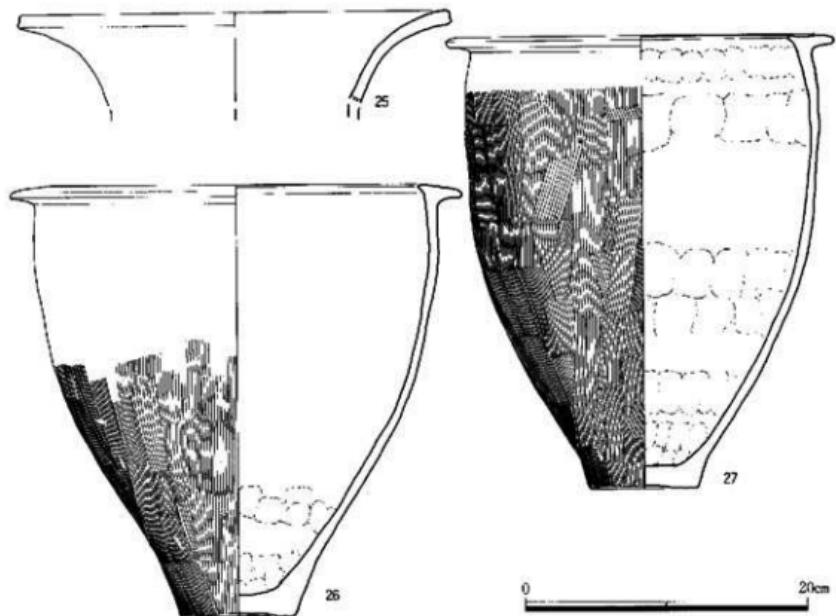
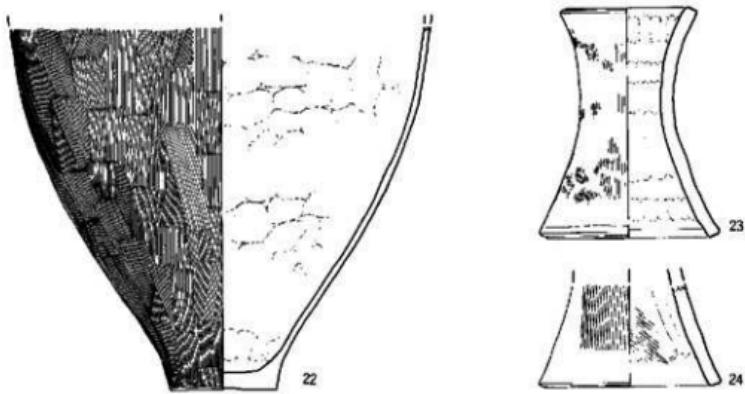


Fig. 116 Pit. 47, 60 出土遺物 (1/4)

内面には、ヘラによる片切彫りの草花文が施される。胎土は灰色を呈する。

陶器

鉢 (10) P42出土。口縁部片で、復元口径18.5cmを測る。口縁部は玉縁状をなす。内外面ヨコナデ調整で、外面に白色の釉がある。胎土は精選され、色調は明褐色を呈する。

土師質土器

鉢 (9) P15より出土。片口で、復元口径32cm、現存高7.2cmを測る。外面はナデ調整を、内面はヨコハケを施し、4本以上の条線を施している。焼成は良好で、暗黄褐色を呈する。

鉄製品

鉄鎌 (17) P42より出土。尖根鎌の茎子と思われる。現存長7.6cm、厚さは0.4cm×0.5cmの断面長方形を呈する。全体に鎌がひどい。

石器

石鎌 (20, 21) 20はP5、21は1号掘立柱建物-P1より出土。20はほぼ完形、21は脚部分である。20は全長2.0cmを測り、断面偏平な菱形を呈する。いずれも黒曜石である。

Pit47出土遺物 (Fig. 115, 116, PL. 68)

弥生式土器

菱形土器 (22) 口縁部を欠失する。底径7.5cm、現存高26cmを測る。器壁は底部で1.2cm、胴部で0.6cmを測る。胴部は砲弾形を呈し、最大径が上位にある。口縁部は逆し字形の口縁部が付くと考えられる。底部はわずかに上げ底である。外面に幅2cmで12本単位のタテ、又はナナメのハケ調整を行ない、内面はナデ調整である。焼成は良好、色調は暗い黄褐色を呈す。

器台 (23, 24) 23は口径8.8cm、底径11.6cm、器高23.4cm、器壁は1cm内外を測る。口縁、脚端部は中凹みに仕上げる。調整は内外面共にナデ調整で、指圧痕が残る。内面中央にはしづり痕が見られる。胎土は砂粒を混じえ、焼成は良好である。色調は黄灰色を呈する。24は脚部片である。底径11.5cm、現存高6.2cm、器厚1cmを測る。脚部端部は中凹みに仕上げる。調整は外面に幅3cmで13本を単位とするタテハケを加え、内面はナデ調整を施す。胎土は良質で細かい砂を少量含む。焼成は良好。色調は赤橙色を呈する。

Pit60出土遺物 (Fig. 116, PL. 68)

弥生式土器

壺形土器 (25) 広口壺の口縁部片である。口縁部は大きく外反し、端部を肥厚させる。復元口径30.5cmを測る。内外面共に摩滅するが、両面に丹塗の痕跡が残る。胎土は精選され、焼成は良好。

壺形土器 (26, 27) 26は口径26.0cm、最大胴径28.6cm、器高30.8cm、27は口径25.8cm、最大胴径25.2cm、器高32.3cmを測る。いずれも胴部は砲弾形を呈し、最大径は上位にある。器壁の

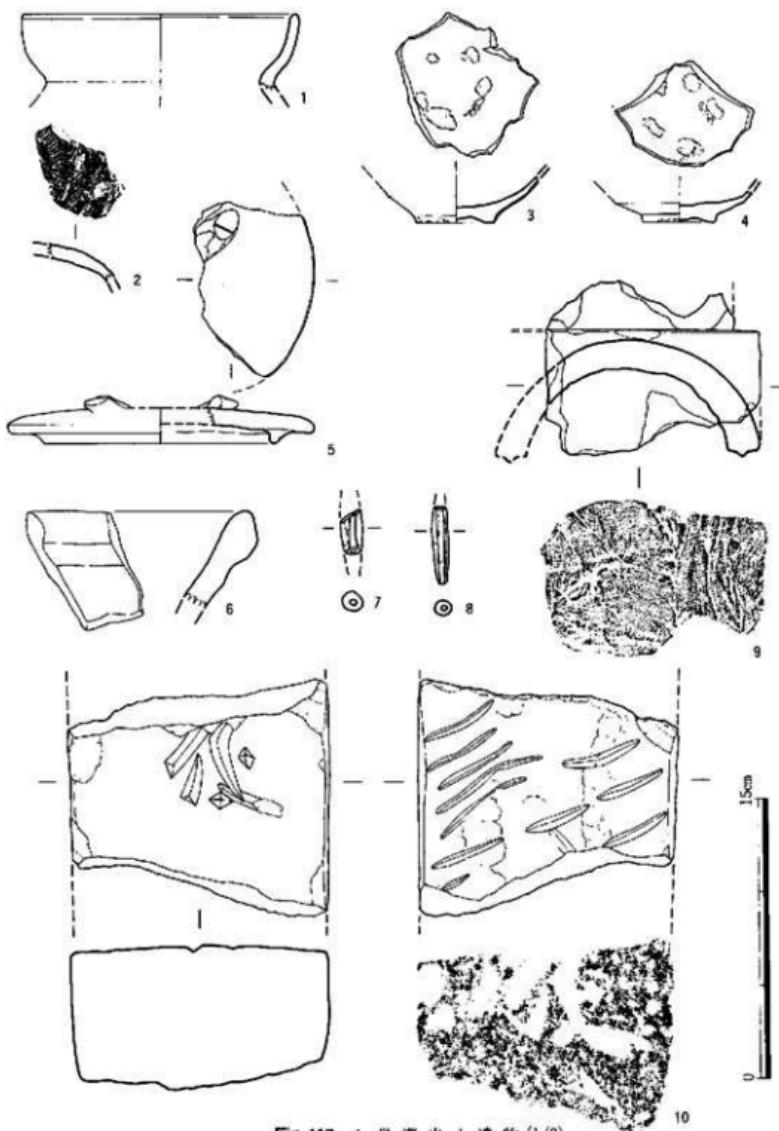


Fig. 117 1号溝出土遺物(1/3)

厚さは0.6cmである。口縁部は逆L字形を呈す。底部は若干上昇底である。26は外面に幅2cmで8本を単位とするタテハケを胴部中位迄施す。27は15~20本単位のハケをタテ方向に加える。口縁部、及び胴部内面はいざれもナデ仕上げである。胎土は精選された砂粒をわずかに含む。焼成は良好、色調は26が明褐色、27が淡赤褐色を呈し、いざれも外面に煤が付着する。

土壤出土遺物 (Fig. 118, PL. 69)

土師器

高台付椀 (11, 12) 復元口径は11が15.4cm, 12が15.8cm, 器高は11が5.8cm, 12は現存5.2cm, 復元高6.0cmを測る。体部は丸味をもち、口縁端部は軽く外反する。底部はヘラ切り離しである。高台は薄手の作りで外へ開いている。外面はヨコナデ調整を行なう。外面は摩滅している。胎土に砂粒を含み、焼成はやや不良。色調は11が赤褐色、12が淡赤褐色を呈す。

他に土師器杯底部片と黒色土器片がある。黒色土器は体部は丸味をもち、口縁部は外寄する。端部は丸味をもっている。外面研磨を施している。

1号溝出土遺物 (Fig. 117, PL. 69)

土師器

変形上器 (1) 口縁部は内寄しており、口縁の退化形態を思わせる。復元口径14.5cmを測る。調整は内外面共にヨコナデを施す。又、外面は摩滅している。胎土に石英粒が多く含む。焼成は良好、色調は淡赤褐色を呈す。

その他、甌の把手が1点出土している。

須恵器

杯蓋 (2) 蓋の体部と思われる。体部は丸味をもっている。外面にヘラによる刻みを放射状に1重に施している。胎土には白っぽい砂粒を多く含み、焼成は良好。色調は暗黄灰色を呈する。陶質土器と思われる。類例は第7次調査でも出土している。陸2

瓦質土器

蓋 (5) 復元口径12.4cmを測る。天井部外面に現存の長さ2cm、幅1.5cm、高さ1cmを測る不定形のつまみが貼付けられる。つまみは象形的な形と思われるが、復元はできない。外面はナデを、内面はハケ調整を加える。胎土に砂粒を多く含み、焼成は良好。色調は灰褐色を呈す。

鉢 (6) 口縁部片である。器壁は肥厚し、玉縁状を呈している。外面は摩滅している。調整は粗い。砂粒を多く含み、焼成は良好。色調は灰褐色を呈する。

陶磁器

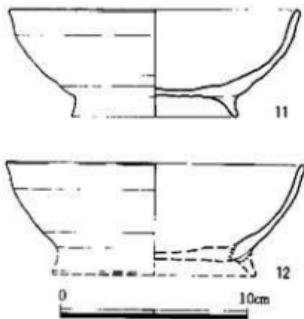


Fig. 118 土壤出土遺物(1/3)

椀（3、4） いずれも底部片である。5は底径4.2cm、6は底径3.9cmを測る。高台内側のケズリは浅く、斜めに施こされる。内面見込みと高台疊付に目痕が5ヶ所残る。釉はくすんだ灰緑色を呈し、胎土はやや粗い。李朝の青磁碗である。

瓦類

丸瓦（9） 玉縁部分である。筒部の復元幅14.1cm、筒部の弧深6.5cmを測る。背面に綱目の叩き痕、谷面には布目が残る。胎土は精良で石英粒を少量含む。焼成は良好。焼しが施され黒灰色を呈す。

土製品

土錠（7、8） いずれも先端部を破損している。7は現存長4.1cm、孔径0.3cm、直徑1.2cm、8は現存長2.4cm、径1.4cm、孔径0.4cmを測る。手づくねによる成形で、ナデ調整で仕上げる。胎土は精選され、焼成も良好。色調は7が淡赤褐色、8が黒灰色を呈す。

石製品

板碑（10） 碑身の一部で、頭頂部、額を欠損する。現存長14.0cm、最大幅7.6cmを測る。断面は長方形を呈す。A面は丁寧なケズリ調整で、薬研彫りの梵字が施される。字形から見てキリーカ（阿弥陀）である。B面は粗い調整でノミ跡が残る。中粒砂岩であるが、二次的に火を受け赤褐色を呈する。

小 結

以上、遺構、遺物について概説したが、狭い地域の調査のため掘立柱建物など不明瞭な点が多い。遺構は大きく3つの時期に分けられる。Ⅰ期は弥生時代中期中頃で、Pit47、60を主体とするが、このPit周辺は径40cm前後の柱穴がまとまっており、住居跡を形成すると思われる。1号掘立柱建物はトレンチによって建物が南へ伸びない事を確認しているので、1間×2間の建物と思われ、更に、覆土に弥生式土器以外を含んでいないところから、Ⅰ期に近い年代を考えられる。同様な例は第48次調査にて検出しており、弥生時代中期の住居跡に伴っているところから共伴関係が考えられよう。Ⅱ期の土壤は調査期間の関係から平面プランの確認に終った。時期は高台付櫓より9世紀後半代～末が考えられる。平面形は1辺1.5m以上測り、方形を呈するが用途は不明である。有田遺跡では7世紀代には竪穴住居から掘立柱建物へと移行していると思われる所以、住居跡としては可能性が薄い。Ⅲ期は1、2号溝で、いずれも出土遺物より16世紀代が考えられる。2号溝は東西方向の大溝で、西南方向70mに在る小田部城と関連する遺構と思われる。丘陵切斷を行なう掘切りと考えて良いだろう。

註1. 福岡市教育委員会 昭和56年度調査 現在整理中

註2. 福岡市教育委員会「有田・小田部第2集」1982.

9. 第45次調査

調査の概要

調査対象地は福岡市早良区有田2丁目12-15番地に所在する。対象面積は111m²である。

有田地域の台地は、標高14m前後を測る有田1丁目周辺と南端部の標高12~13mを測る宝満社周辺の高台との間に標高10~11mを測る鞍部を形成している。宝満社周辺は16世紀後半に存在したといわれる小出辺城伝承地となっており、台地の東側、西側にはそれぞれ濠、土塁が存在したと伝えられる。事実、当該地の南約80mには東西方向の土塁が約5mの長さで残存している。又、飯盛神社関係の文書には16世紀前後の代註の「名」や「屋敷地」が多く記載されており、「常九名」などは現在迄旧字名として残っている。当該地は上記鞍部の西側斜面に位置し、標高9mを測る。西側には小さな谷があり込んでおり、当該地も谷内に入る可能性もあった。昭和56年4月に試掘調査を行なったところ溝状遺構を検出したため発掘調査を実施した。

発掘調査は昭和56年4月23日~4月28日迄実施した。面積が小さく、遺構面迄の深さが約1.0mを測るために排土の処理に苦慮した。そのため発掘調査の範囲を東西長4.4m、南北長6.5mの部分に限って実施した。遺構は八女粘土面に検出されるが、住宅地であった関係上擾乱は著しく、遺構直上に存在する第1層の暗茶灰色粘質土の二次堆積土はほとんど消失している。遺構面迄の深さは表土が65cm、第1層が約35cmを測る。遺構は井戸、溝とも余り深くないところから、

第1層の形成時、もし

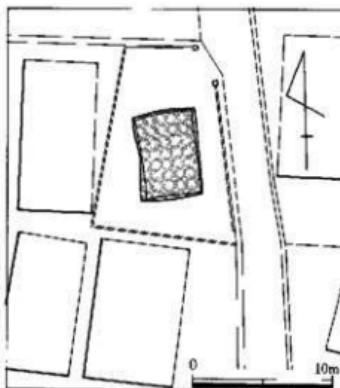


Fig. 119 第45次調査地位置図 (1/400)

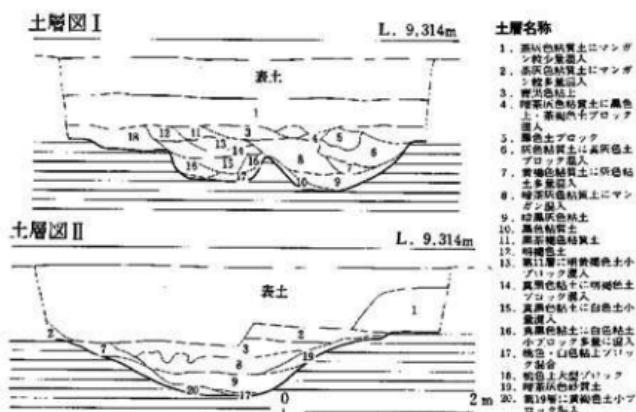


Fig. 120 1・2号溝土層図 (1/60)

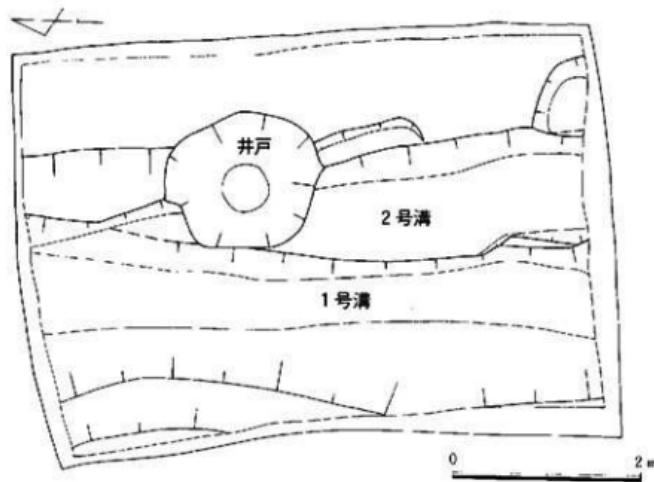


Fig. 121 遺構配図 (1/60)

くは以前に削平されていると思われる。遺構の残存状態は比較的良好であったが、湧水が著しいため不充分な調査に終った。

検出遺構は縄文時代晩期の溝1条、古墳時代前期の井戸跡1基、中世の溝1条、その他、土壤2基を検出した。遺物は縄文時代晩期の夜臼式土器—菱形土器、壺形土器、高杯、弥生時代前期後半の上器、同中期初頭の土器、古墳時代土師器、中世土師器杯片、竹籠製品を検出した。

検出遺構

当該地は住宅地として利用されていたため擾乱、削平が著しい。部分的に茶灰色粘質土の包含層が残っている。遺構は八女粘土面で検出され、南北方向の溝2条、井戸状遺構1基、土壤2基を検出した。

溝

南北方向の溝2条が大半を重複した状態で検出された。西側の溝が新しく、1号溝と呼称し、東側の古い溝を2号溝と呼称する。いずれも溝幅は土層図にて計測した。

1号溝 (Fig. 120, PL. 70)

2号溝に後出するもので、主軸はほぼ磁北方向である。北壁の土層観察では、南側で幅3.4m、深さ1.0m、北側で幅5.2m、深さ1.1mを測る。東、西壁の立ち上りは緩やかで、断面形は南側で逆梯形を、北側で深いレンズ状を呈する。溝底はほぼ水平で、南から北へ幅広くな

る。覆土は第2層が暗茶灰色粘質土、第3層は青味を帯びた黒色粘質土、第4層は暗茶灰色粘質土、第7層は暗い黒灰色粘質土を呈し、溝が2段階に分けて埋った事を示している。すなわち第3層、第7層はヘドロ状の堆積土と考えられ、第7層は溝の使用時に堆積した層で、第3層は溝が或る程度埋った後、浅い水路状として存在した事を示している。第1層、第2層は東側台地から流れ込んだ堆積土である。第1層、第2層の境は明瞭でない。遺物は縄文式土器、弥生式土器の破片を多く出土しているが、わずかに土師皿を検出している。糸切り底の皿で、覆土が暗灰色粘質土であることから13世紀以降の年代が考えられよう。

2号溝

1号溝と切り合い、1号溝に先行するもので、主軸は1号溝より西へわずかに振っている。現存長約5m、復元幅約2.3m、深さ0.9mを測る。断面形は逆梯形状を呈し、溝底幅は1.0mを測る。東側肩は1、2号土壙を切っている。土壙は黒色粘質土を主体とするもので、明褐色土、又は明黄褐色土ブロックを混入する層、或いは八女粘土の白色粘土ブロックを混入する層が互層をなしている。遺物は各層から縄文時代晚期の土器片が出土している。

土 壕

井戸、及び2号溝と切り合う1号土壙と、南側の境界地で2号溝と切り合い関係にある2号土壙の計2基を検出した。いずれも遺存状況が悪く、壁高の残存高は10cm前後である。1号土壙は現存長42cm、現存幅48cmを測る。形状は隅丸方形と思われる。2号土壙は境界地にあるが、現存長1.2m、現存幅80cmを測る。形状は不整円形と思われる。2号土壙は2号溝に切られている。遺物は、1、2号土壙共に細片のため、時期は不詳である。

井 戸 (Fig. 122; PL. 71)

調査区の中央や北寄りで検出した。1、2号溝、1号土壙と切合う素掘りの井戸である。長径1.75m、短径1.47m、深さ1.34mを測り、平面プランは円形を呈する。井戸底の底径は50cmを測り、ほぼ円形を呈す。覆土は黒色粘質土である。出土遺物は縄文時代晚期の夜臼式土器、弥生時代前期、向中期の土器、古墳時代の高杯、石器、黒曜石片、竹製品等を出土した。年代は土師器高杯より4世紀後半の年代が考えられる。

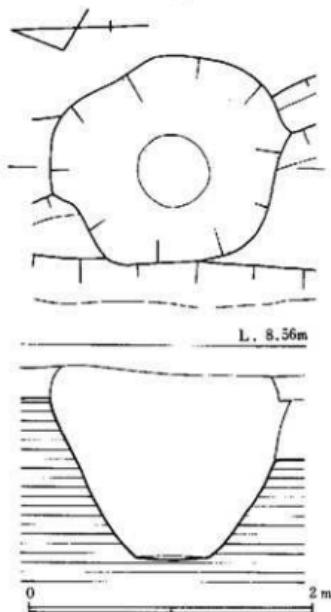


Fig. 122 井戸跡 (1/40)

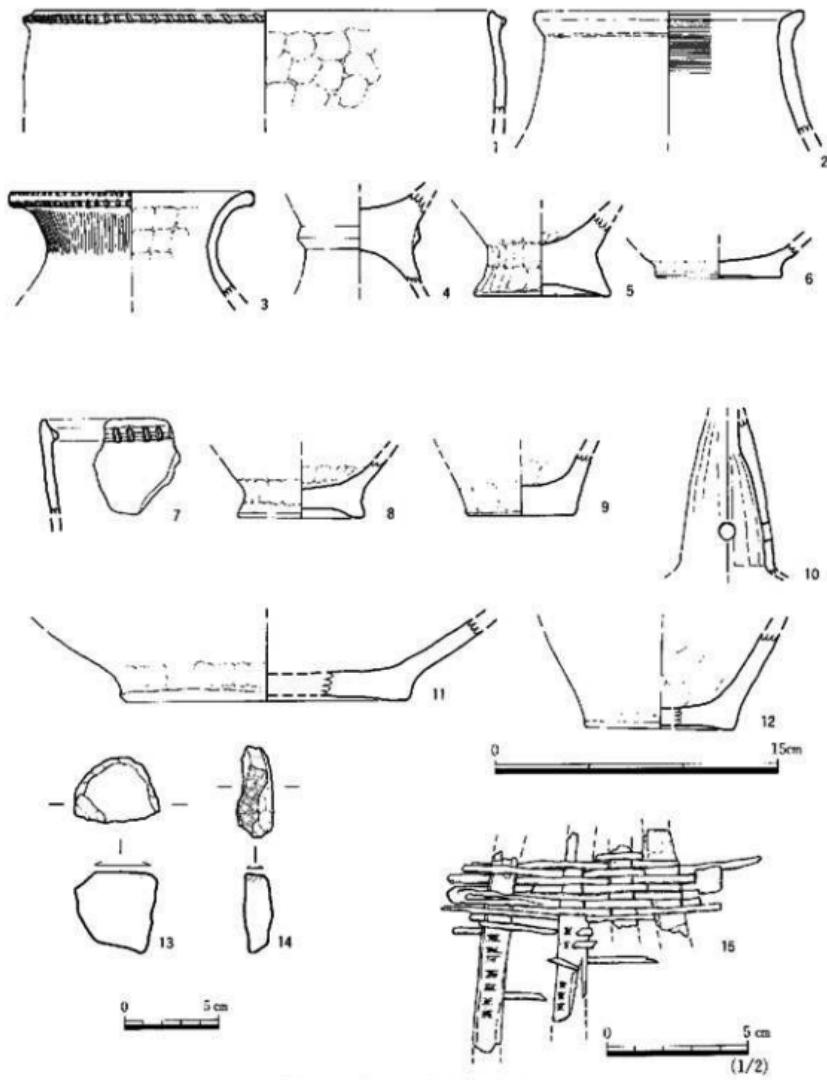


Fig. 123 出土遺物 (1/3)

出土遺物

2号溝出土遺物 (Fig. 123, PL. 71)

縄文式土器

變形土器（1, 5） 1は復元口径24.4cm, 最大胴径25.8cmを測る。口縁部直下に一条の突帯を貼付け、ヘラによる刻目を施す。胴部はやや膨らみ、胴部最大径は口縁部直下にある。外面はヨコナデ調整である。胎土は砂粒を含み、焼成は良好。色調は黄褐色を呈す。5は底径7.3cmを測る。上げ底を呈し、端部が強く外へ張り出している。内外面全体にナデ調整を施す。焼成は良好。色調は黄灰色を呈す。

壺形土器（2） 復元口径12.5cmを測る。頸部は内傾し、口縁部は小さく外反する。口縁端部は丸味をもつ。頸部との境は明瞭ではない。外面はヨコナデ調整で、丹塗りの痕跡が外面に残る。胎土に砂粒を多く含む。焼成は良好。色調は淡黄色を呈す。

高杯形土器（4） 脚部片である。筒部はラッパ状に開き、杯部の開きは小さい。脚部と杯部との境に三角形の突帯を貼付け、ヘラによる刻み目を施す。外面に丹塗りの痕跡を認める。胎土は砂粒を含む。焼成は良好。色調は黄灰色を呈す。

鉢形土器（6） 底径6.6cmを測る。壺形土器の底部の可能性もあるが、底部内面に煤が吸着し黒色を呈する事や体部の立ち上がりが緩いことから鉢形土器と考えた。内外面共に摩滅を受けける。浅鉢形を呈すと思われる。焼成は良好。色調は暗茶褐色を呈する。

弥生式土器

壺形土器（3） 口縁部は強く外弯し、肥厚させ、端部を平坦に仕上げる。頸部との境は無い。胴部は肩の張った器形であろう。口縁端部の上下にヘラによる刻目が施される。外面はタテハケ調整を施される。胎土は良質で、焼成は良好。色調は茶褐色を呈す。

井戸出土遺物 (Fig. 123, PL. 71)

縄文式土器

變形土器（7, 8, 12） 7は口縁部片である。口縁直下に一条の突帯を貼付け、ヘラによる刻目を施す。内外面摩滅している。胎土に砂粒を含む。焼成は良好。色調は暗褐色を呈す。8は復元底径8.0cmを測る。上げ底で、端部が強く外へ張り出している。胎土に砂粒を含み、焼成は良好。色調は黄灰色を呈す。12は底径5.8cmを測る。体部の立ち上がりは強く、胴部と底部の境は無い。器壁は1.6cmを測る。胎土に砂粒を多量に含み、焼成は良好。色調は淡灰色を呈す。

その他、夜印式土器の破片に模様がついたものがある。

弥生式土器

壺形土器（9） 底径8.0cmを測る。体部の立ち上がりは強い。内外面共に摩滅する。胎土に砂粒を多量に含み、色調は淡灰色を呈す。

壺形土器 (11) 底径15.0cmを測る。胴部が大きく張る器形で、底部は円板貼付け状を呈す。胎上に砂粒を多く含む。焼成は良好。色調は淡灰褐色を呈す。

土師器

高杯形土器 (10) 脚部片である。筒部はやや膨らみをもち、裾部は大きく外方へ広がる。底部と筒部との境は明瞭で、内面に稜を有している。内外面共に磨滅する。内面はヨコ方向へのラケツリを施している。胎上は精選され、焼成は良好。色調は明橙色を呈す。

石製品

砥石 (13, 14) 13は最大長4.5cm、最大厚4.3cmを測る。A面を砥石として利用し、他面は粗削調整である。小粒子の砂岩である。14は現存長4.8cm、現存幅1.9cm、厚さ4.7cmを測る。板状に細かく破損している。A面を砥面として利用。しかし、A面は2次的に火を受け、黒く焼けており、鋳型の可能性もある。微粒子の砂岩である。

竹製品

籠 (15) 井戸底部より出土。小片で遺存状態は悪い。現存長は横約13cm、縦約8cmを測る。竹皮を利用して1.5~2.0cm間隔に幅1cm、厚さ2mm程度の縦条を主に、幅6mm、厚さ1mmの縦条を二又に突いて、一本越え一本潜りで縦条をはさみ込むように編み上げる。縦条が緩まらないように縦条の端部には一辺1cmの方形の止めものを作り出している。

小 結

検出遺構は出土遺物からⅠ~Ⅲ期に分けられる。Ⅰ期の2号溝は縄文時代晩期末の夜臼式土器を検出しており、この土器はいずれも形式的には夜臼式土器で、1が変形土器Ⅰ類。^{註2} 2が壺形土器Ⅱ類もしくはⅢ類に分類される。器形として甌、壺、高杯、鉢型土器があり、夜臼の基本的セット関係にある。3の壺形土器は口縁部の形態、及び調整から、弥生時代中期初頭に位置づけられる。2号溝は夜臼期の遺物を主に含むが、溝の埋没年代は弥生時代中期初頭と思われる。Ⅱ期の井戸状遺構は夜臼式土器から古墳時代の遺物を検出した。土師器の高杯は形狀から4世紀後半の年代が考えられ、井戸状遺構の時期を表わすものと思われる。しかし、土師器は1点だけで、遺物の大半は夜臼式及び弥生時代前期後半の土器を主体としている。土師器の高杯の出土状態が不明のため、現状ではこの土器をもって遺構年代としなければならない。Ⅲ期の1号溝は土師皿片を出土するが、いずれも系切り底である。13世紀以降の時期が考えられる。又、竹製編物は有田遺跡では初例である。類例として博多区瑞穂遺跡の出上があり^{註3} 編み方は共通する。

註1. 福岡市教育委員会「板盛神社関係史料集」1981

註2. 山崎純男「弥生文化成立期における土器の形態的編年研究」(銭山猛先生古希記念論考) 1980

註3. 吉岡完祐編「瑞穂」日本住宅公団 1982

図 版
PLATES



作業風景（第55次調査） 昭和56年



有田・小田部周辺航空写真（昭和50年撮影）



有田・小田部周辺航空写真（昭和21年米軍撮影）



(1) 第19次調査 南側遺構



(2) 集石群出土状態（北から）



(1) 住居跡（北から）



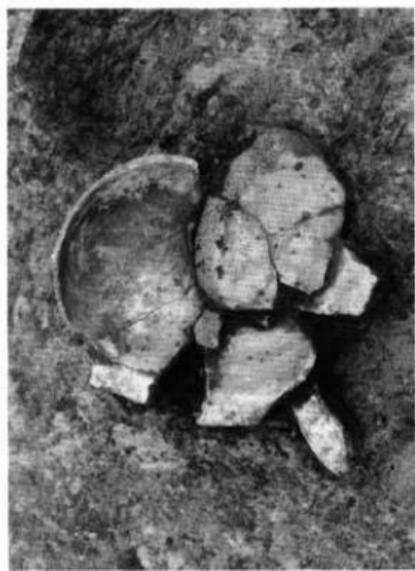
(2) 住居跡床面遺物出土状態（西から）



(1) 集石群内遺物出土状態



(2) 住居跡遺物出土状態



(3) 住居跡遺物出土状態



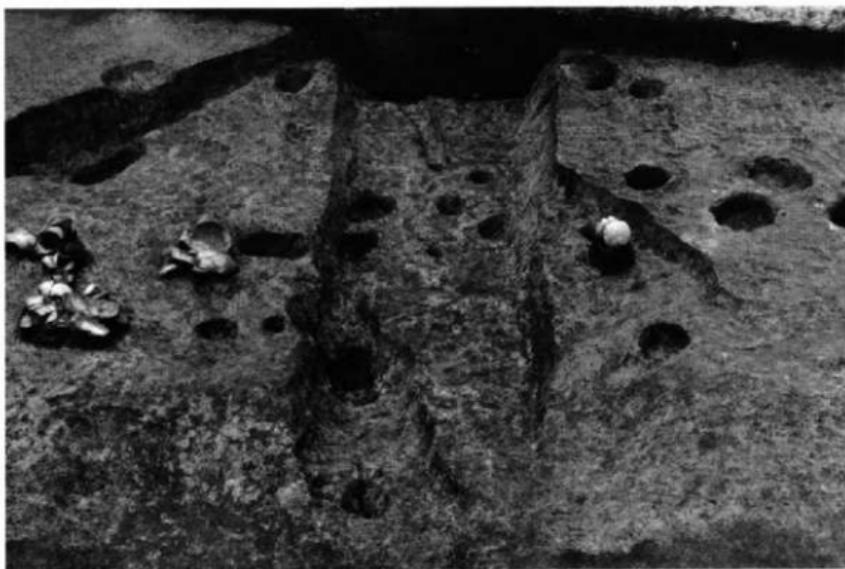
(4) 住居跡遺物出土状態



(1) 井戸跡（北から）



(2) 1号溝北側部分（南から）



(1) 1号溝南側部分（北から）



(2) 1号溝上面疊出土状態（西から）



(1) 2号溝（西から）



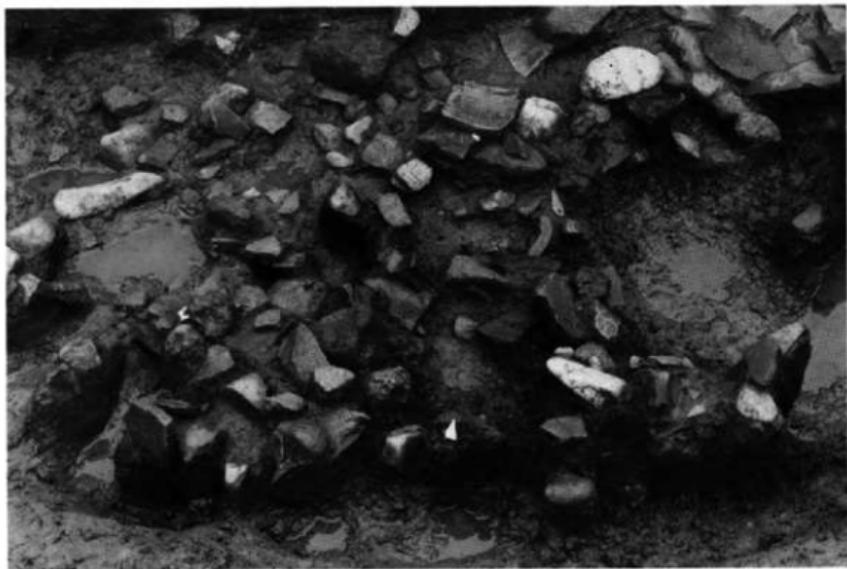
(2) 2号溝（東から）



(1) 2号溝隅部分（南から）



(2) 2号溝遺物出土状態（西から）



(1) 2号溝遺物出土状態（南から）



(2) 3, 4号溝（西から）



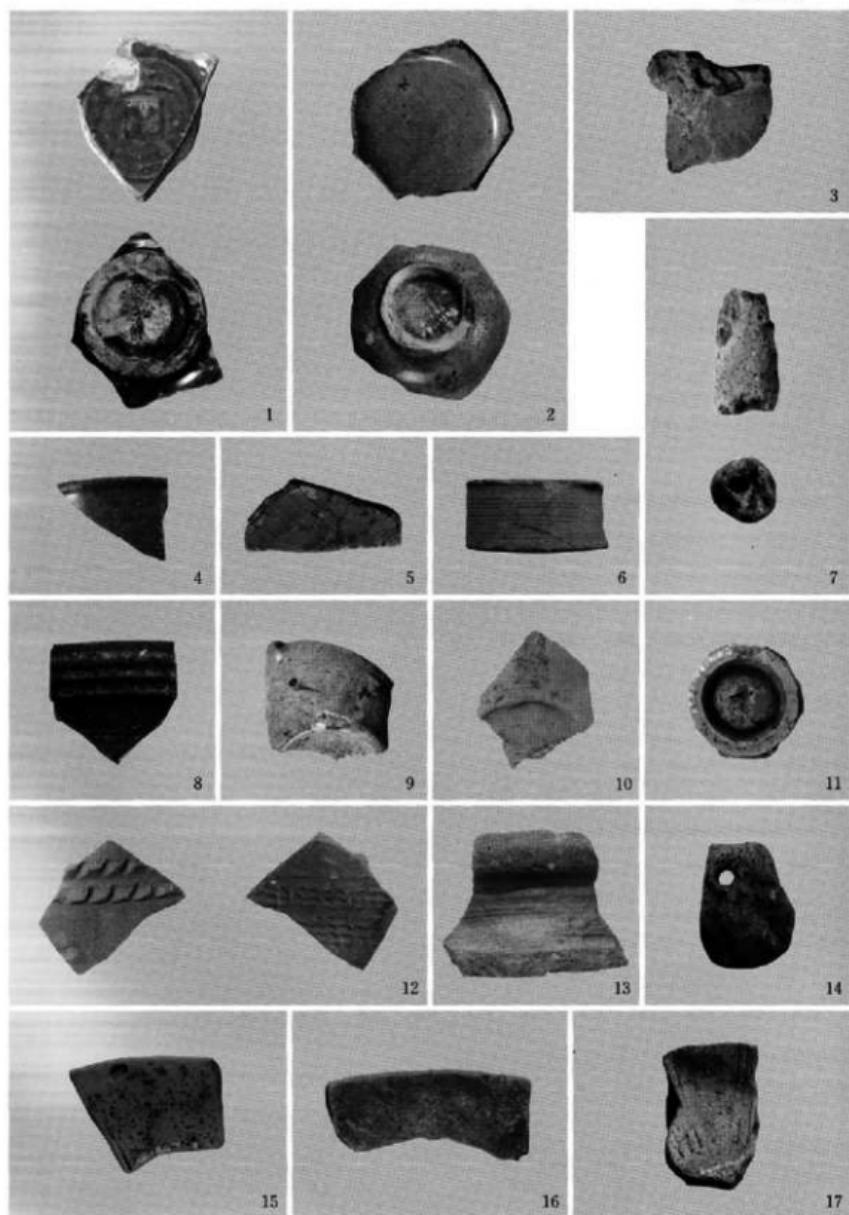
(1)
2号溝西側土層狀態



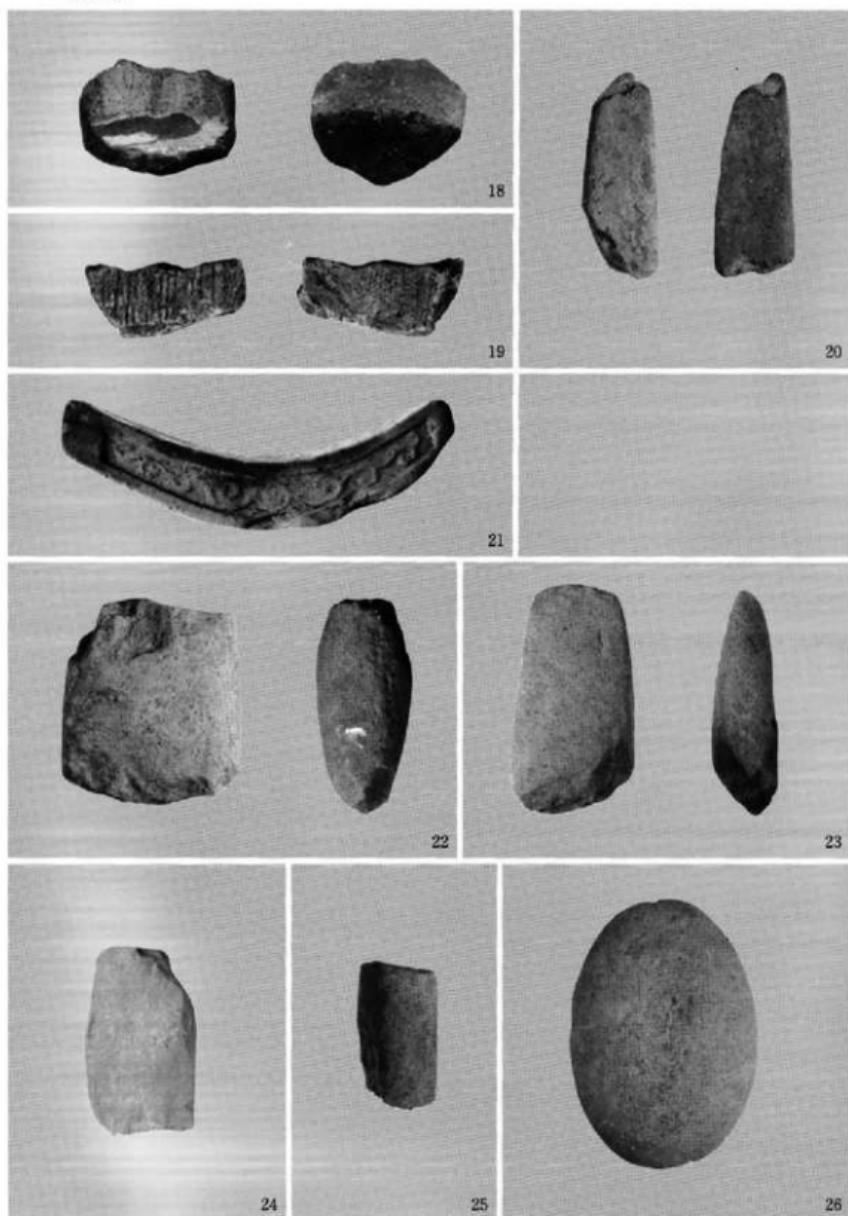
(2)
1号溝南側土層狀態



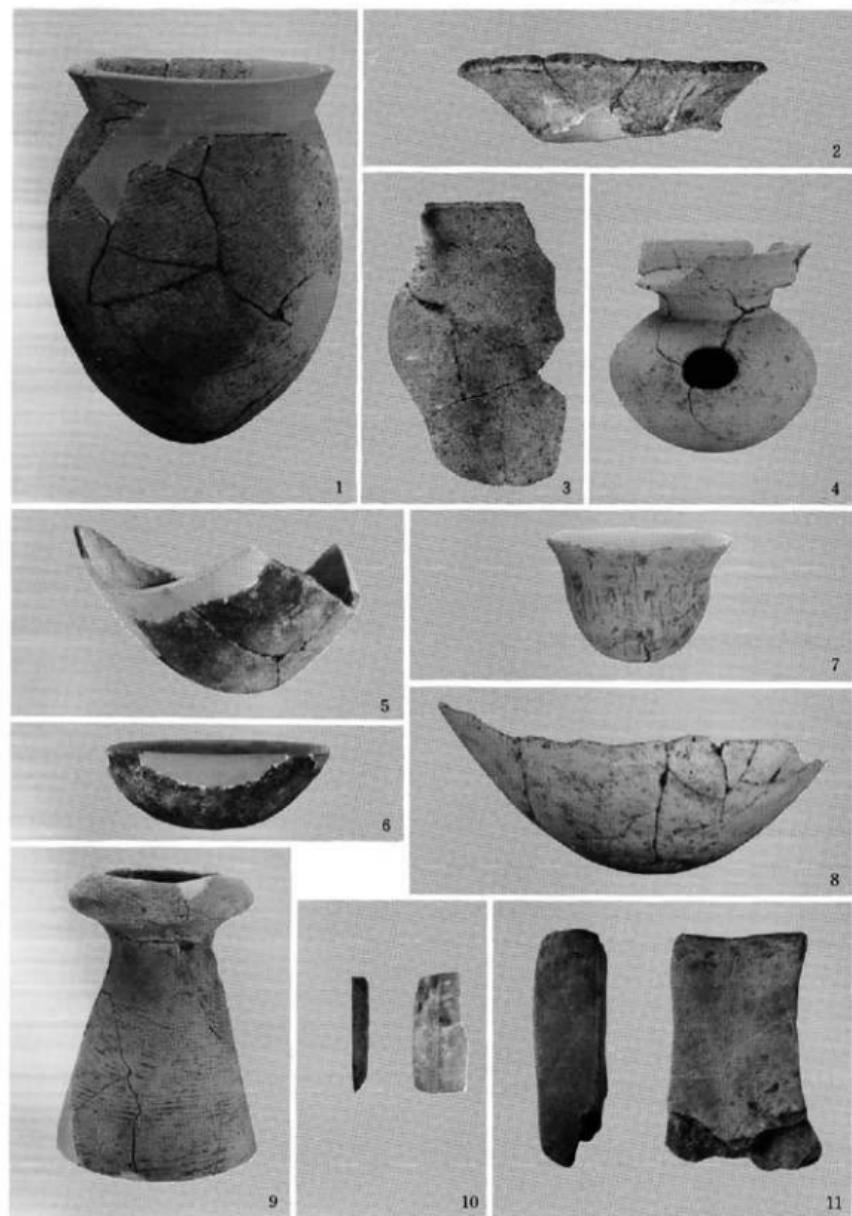
(3)
3・4号溝土層狀態



表土、集石遺構出土遺物 (1～7は表土、8～17は集石。縮尺: 1/2, 5, 7は1/4)



表土、集石遺構出土遺物 (18~25は集石、26は表土 比尺:3分)



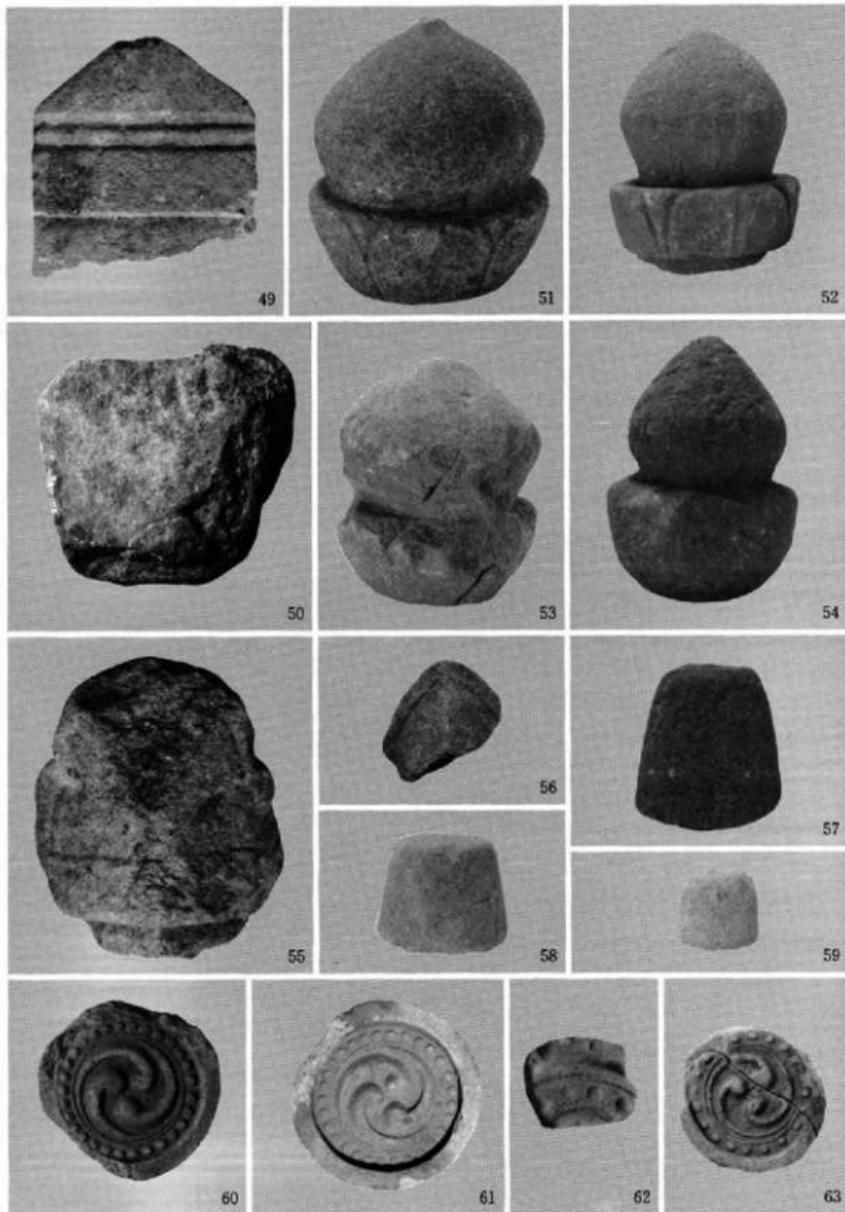
住居跡出土遺物 (縮尺: 4, 6, 7, 10, 11は3分)



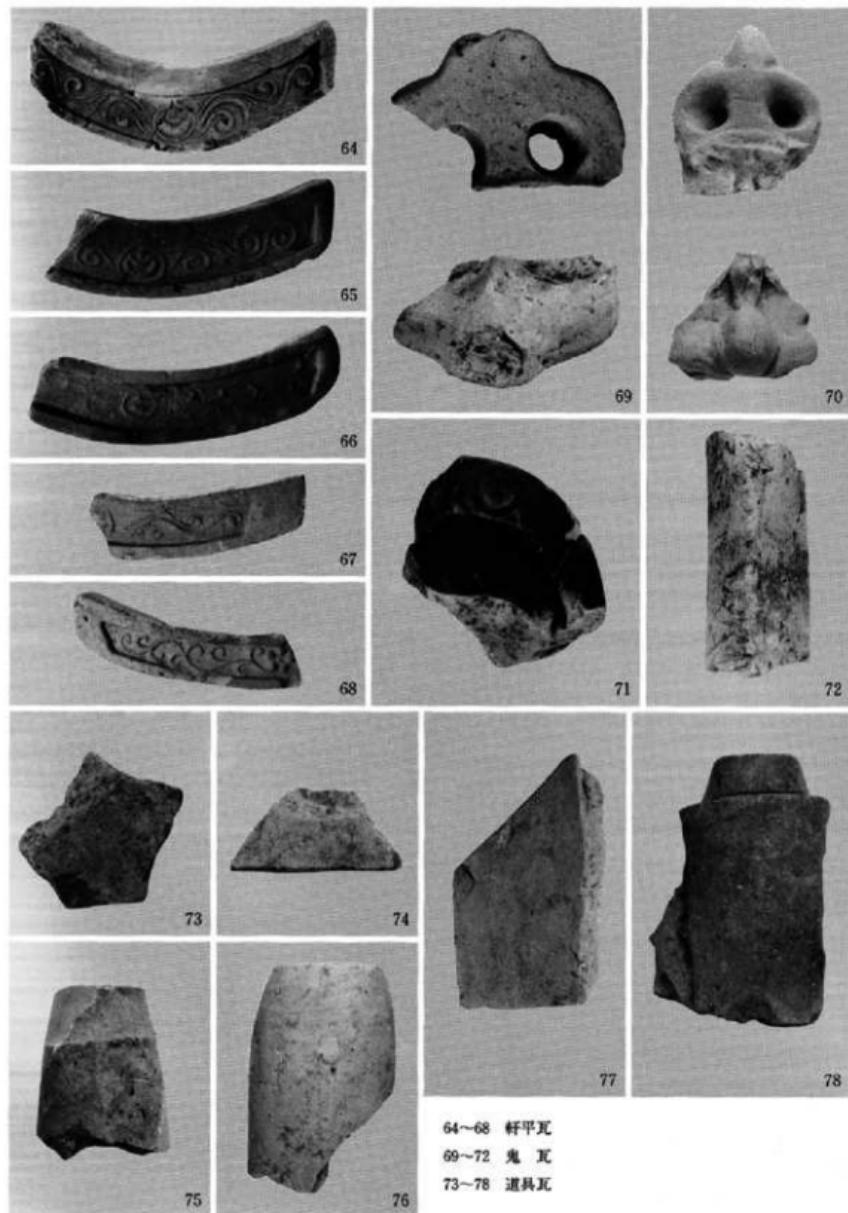
2号溝出土遺物 (縮尺: 1号, 23, 24, 26は2号)



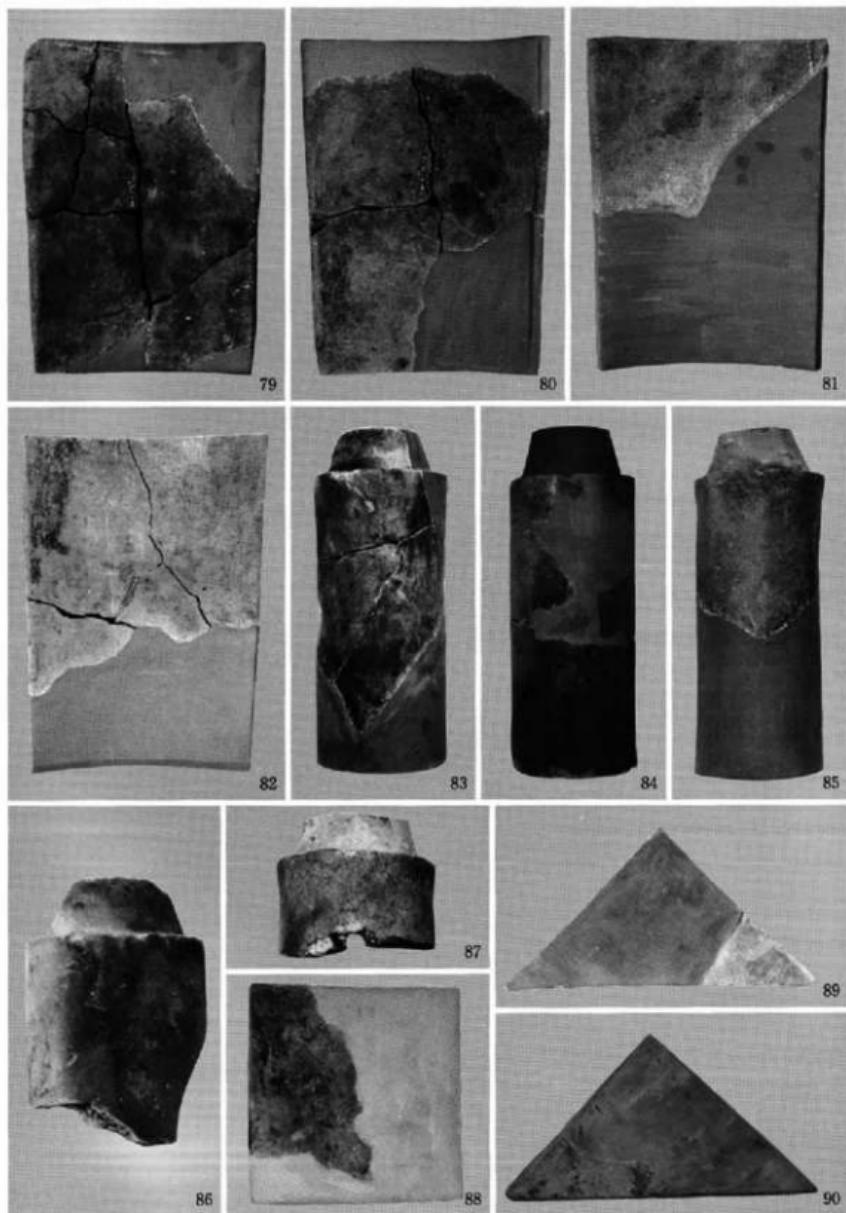
2号溝出土遺物 (縮尺: 30, 38, 39は1/4, 45~47は1/2)



2号構出土遺物 (縮尺: 4号, 60~63は1/4, 49, 50は板碑, 51~59は石塔, 60~63は軒丸瓦)



2号沟出土遗物 (缩尺: 1/4)



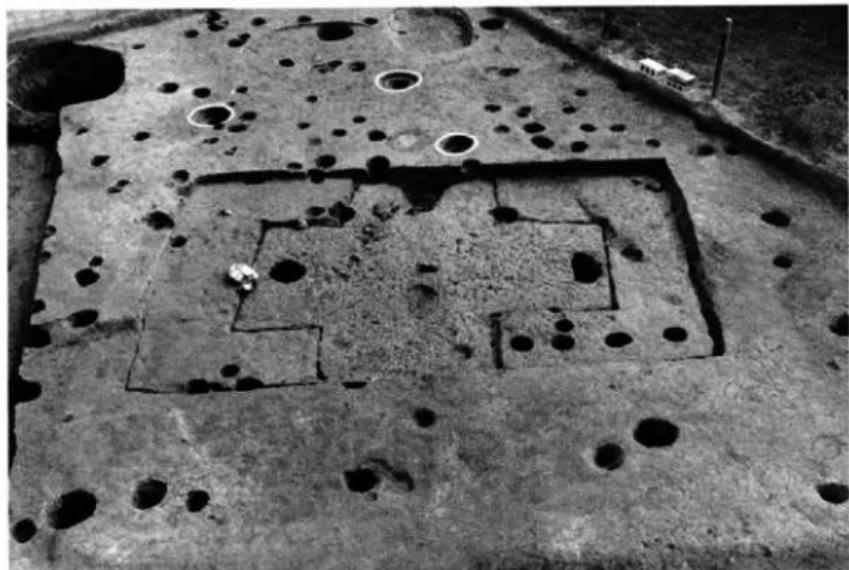
2号溝出土遺物 (縮尺: 1/4, 87は1/2)



(1) 第32次調査 全景（西から）



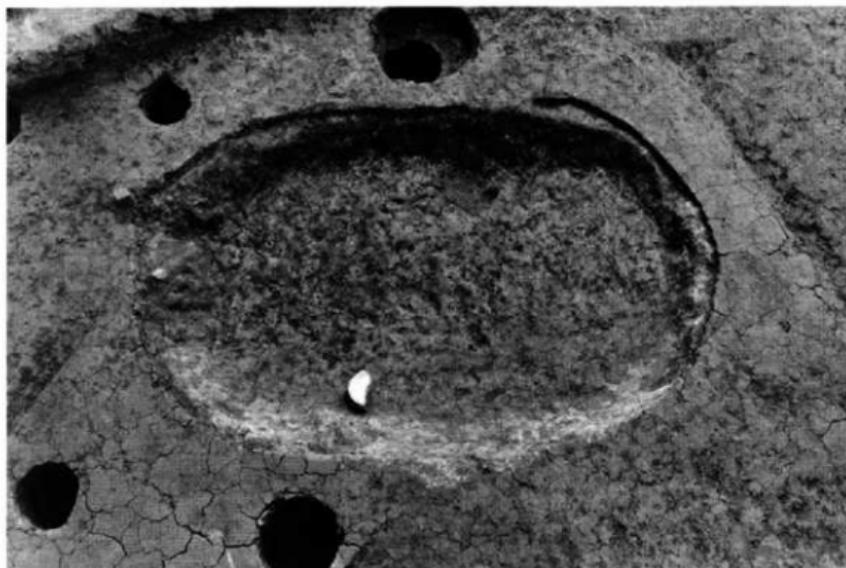
(2) 第32次調査 東側遺構（北から）



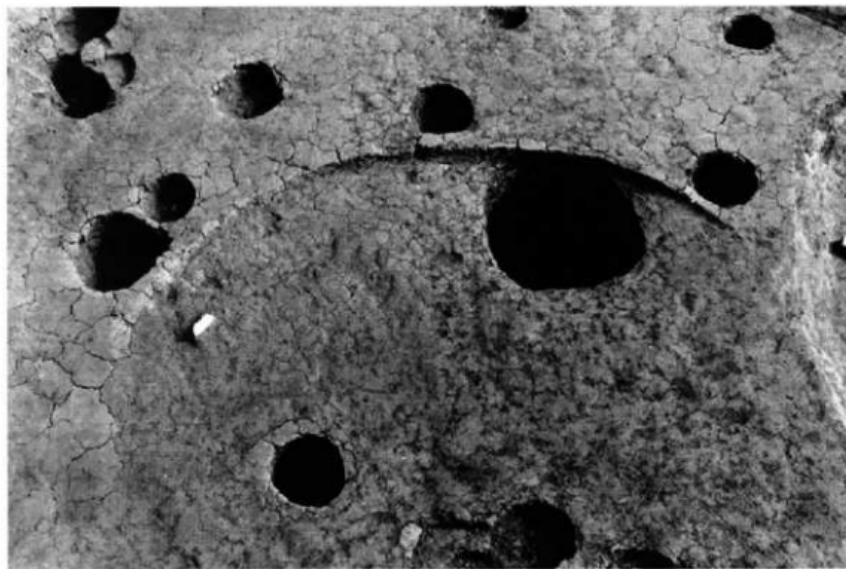
(1) 住居跡（西から）



(2) 住居跡内 P I, P II (北から)



(1) 1号土壤（北から）



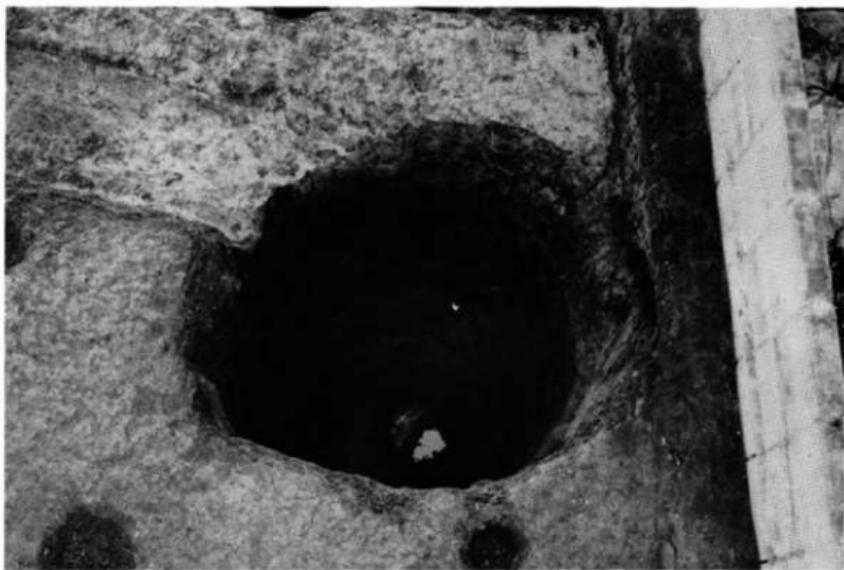
(2) 2号土壤（西から）



(1) 4号土壤（西から）



(2) 掘立柱建物（北から）



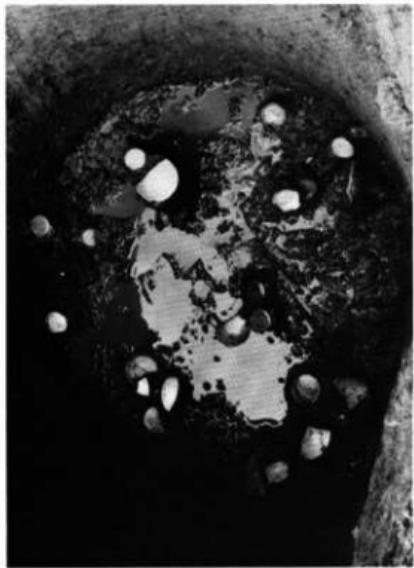
(1) 井戸跡（南から）



(2) 井戸内砾, 造物出土状態



(1) 井戸縦断面(南北方向)



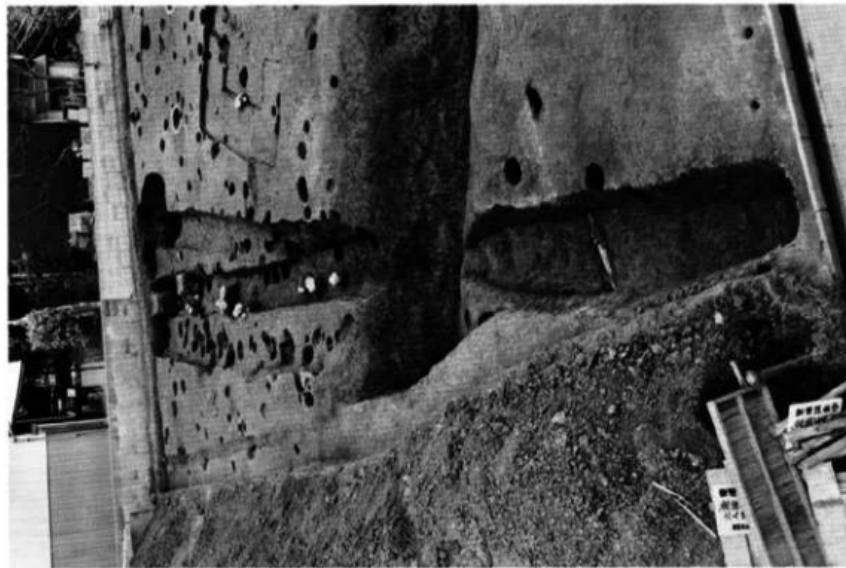
(2) 遺物出土状態



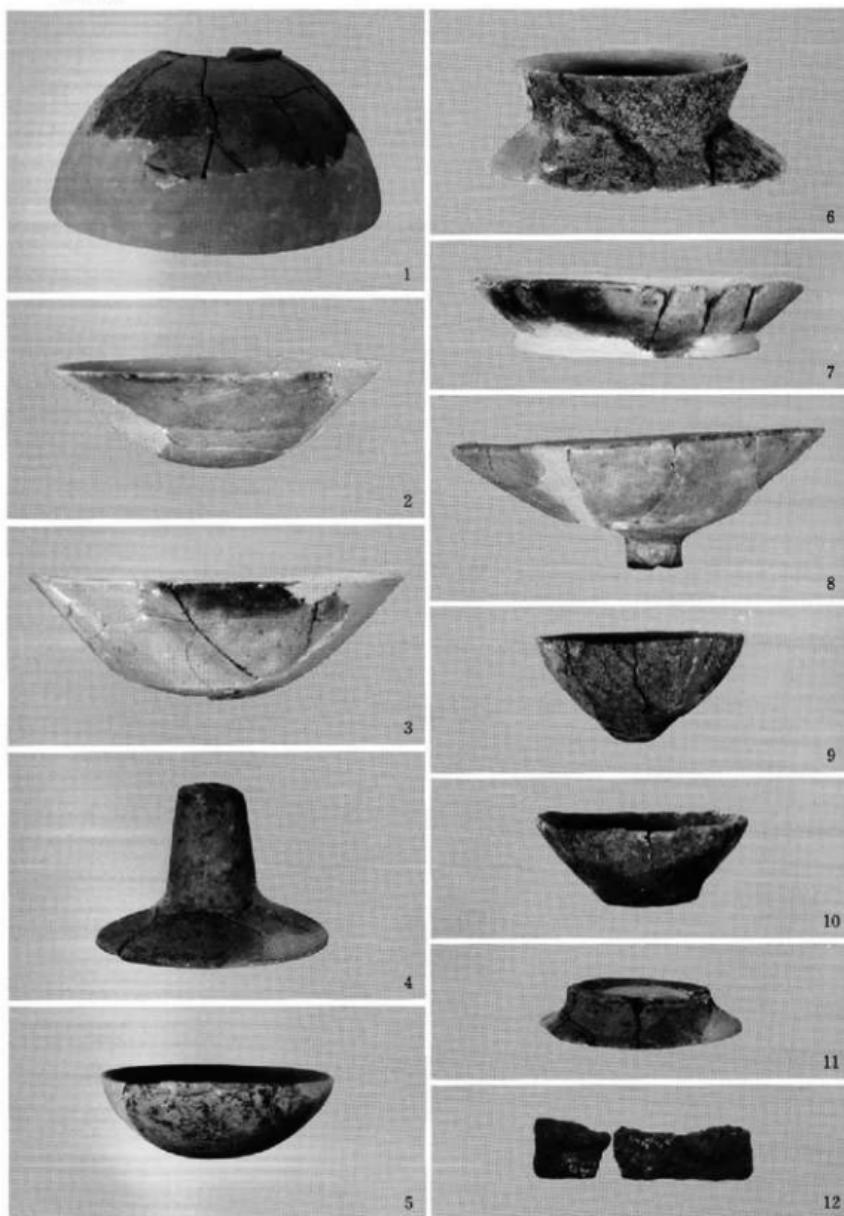
(3) 遺物出土状態



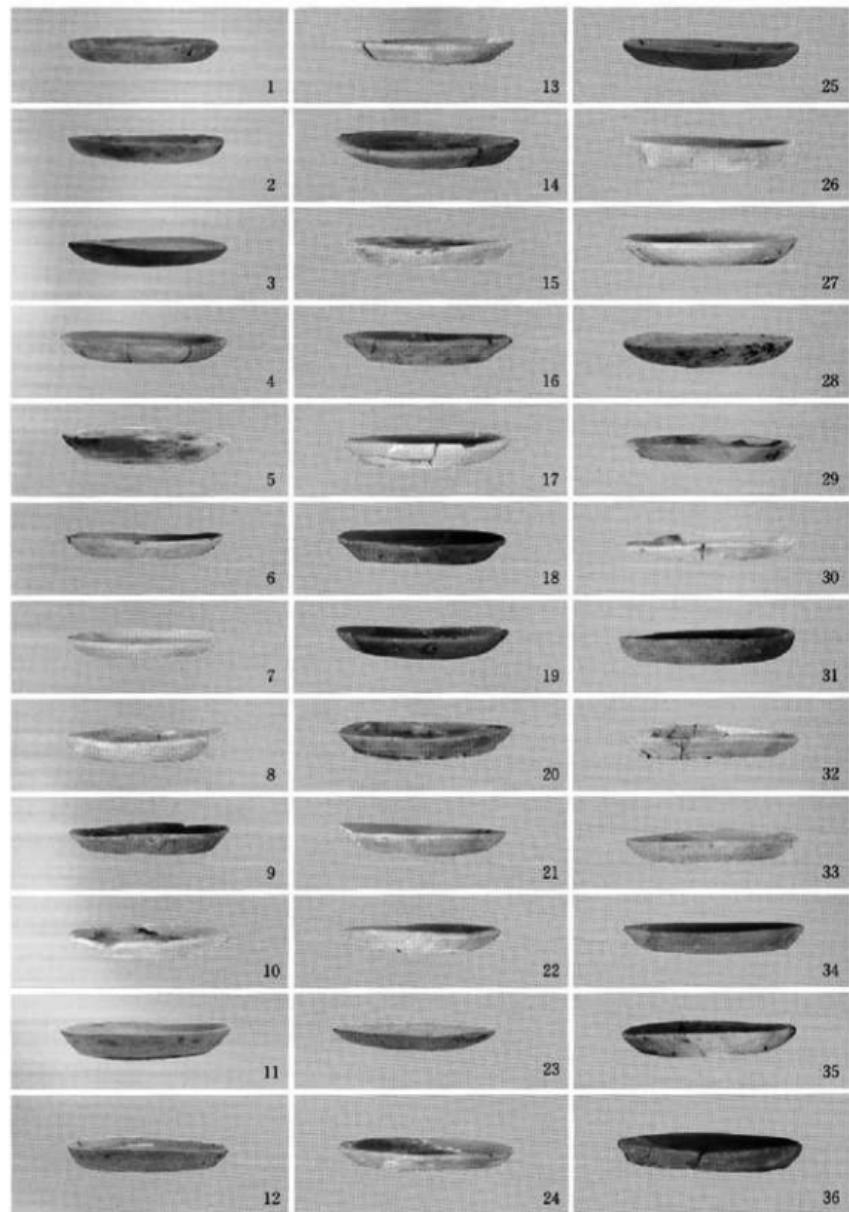
(1) 1号池 (北から)



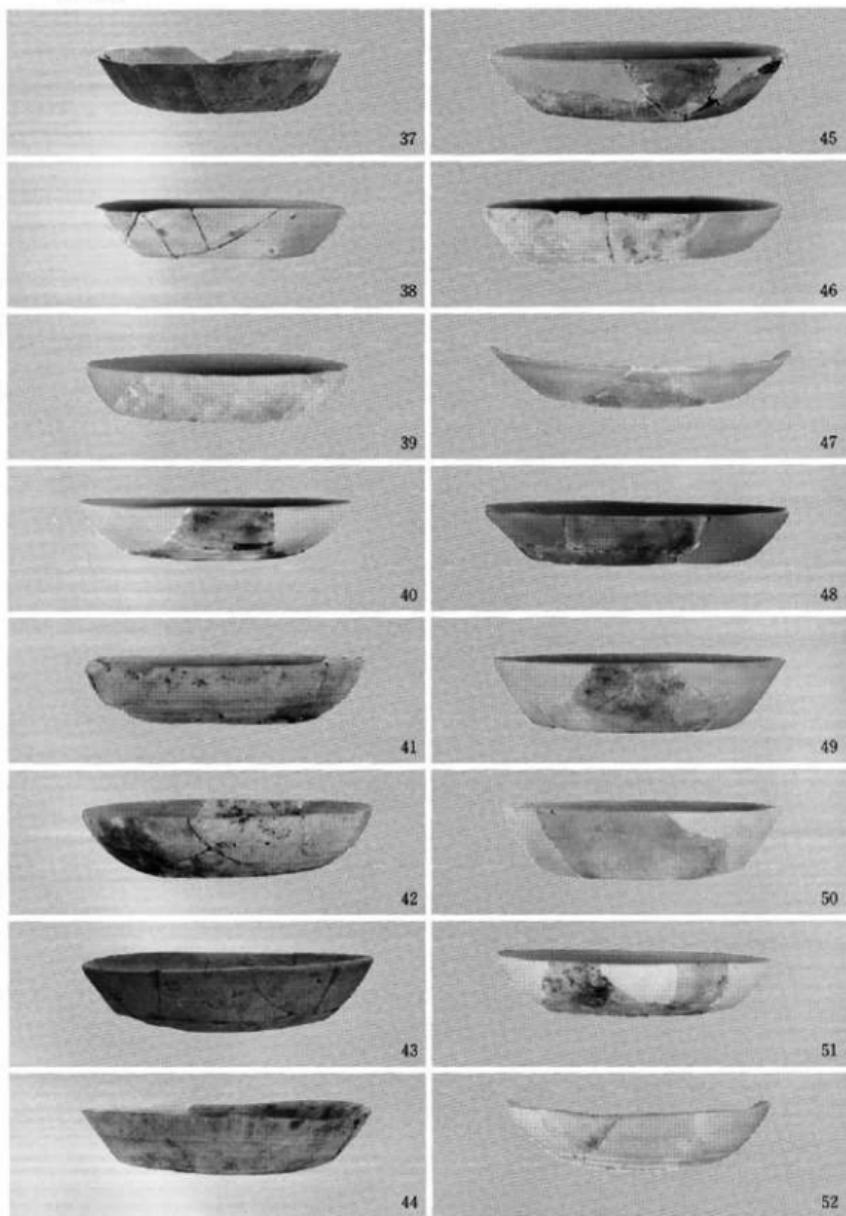
(2) 2・3号池 (西から)

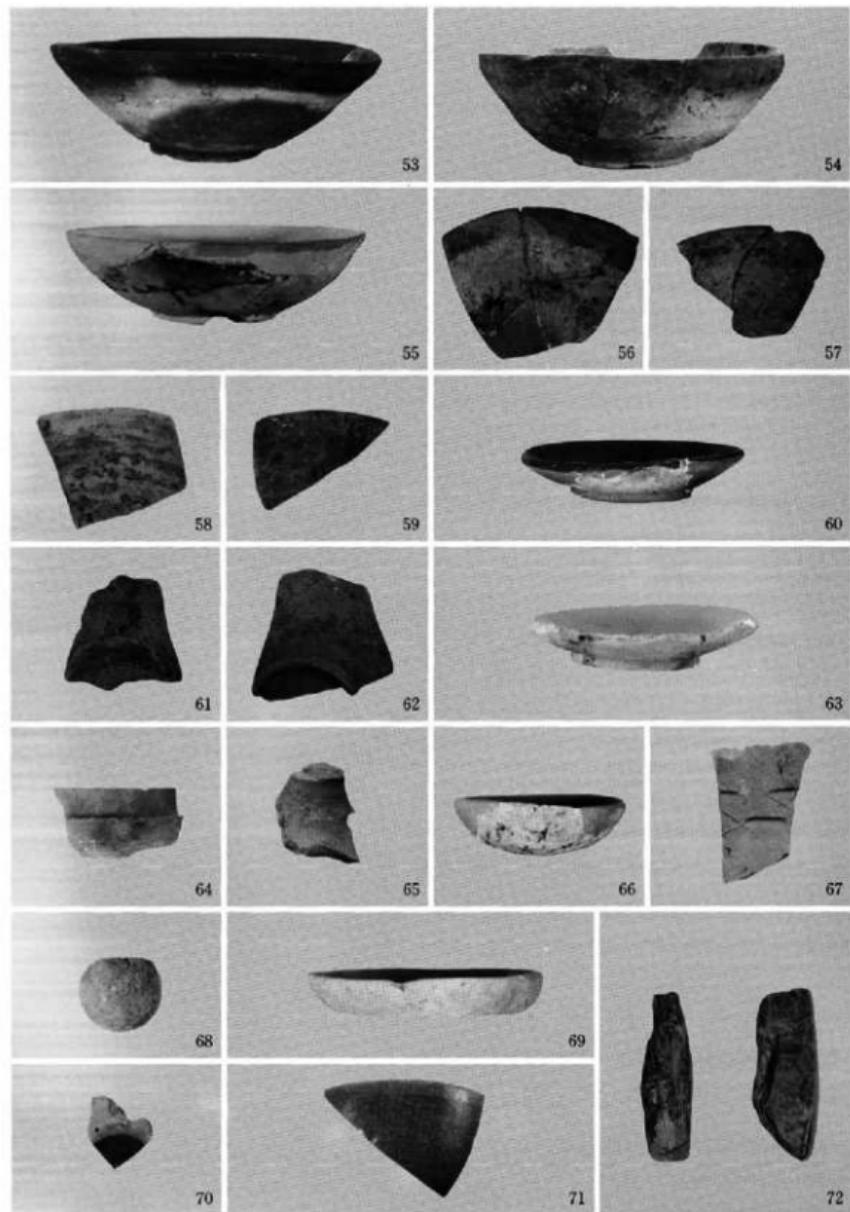


住居跡出土遺物 (縮尺: 1は3%, 2, 3, 6~8は3%, 4, 5, 9~12は3%)

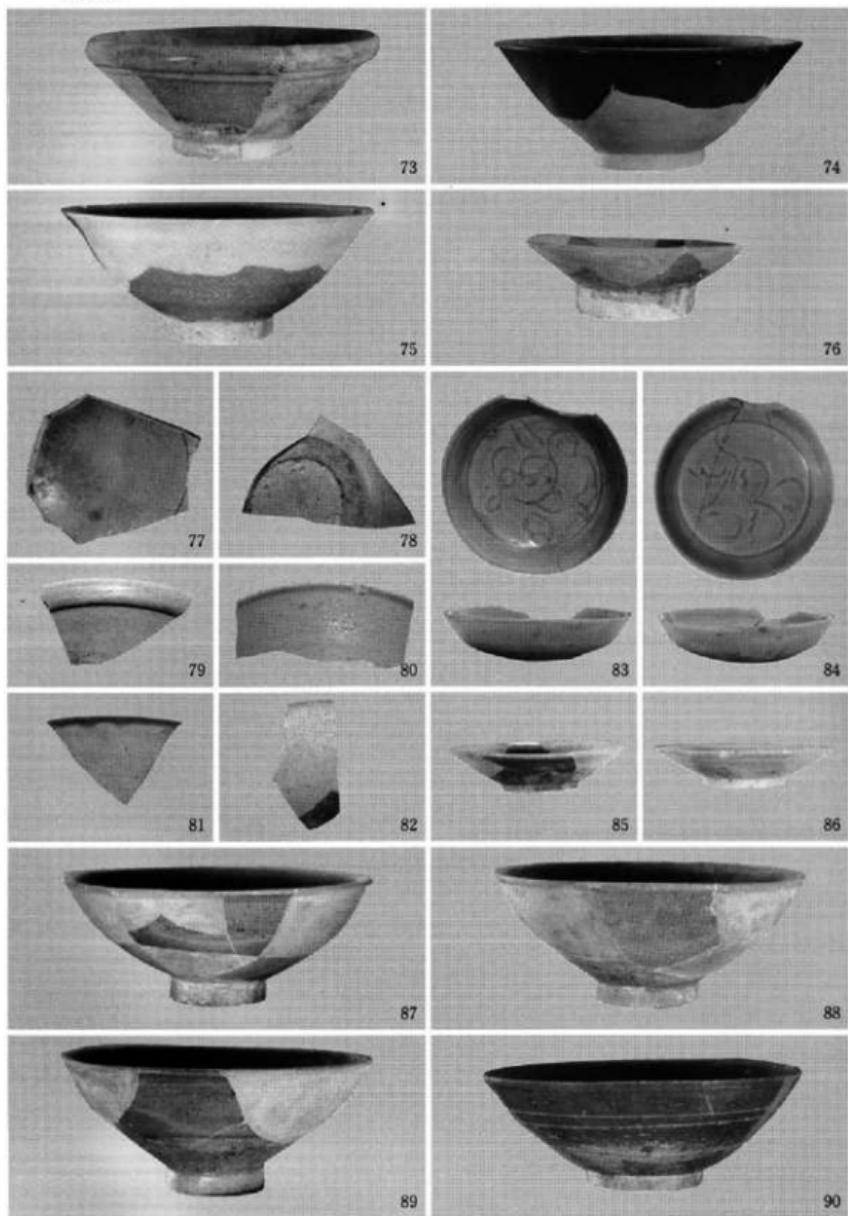


井戸出土遺物 (縮尺: 1/6)





井戸出土遺物 (53~67は井戸、68は表土、69~72は土壤 縮尺: 1%, 68は2%)





91



92



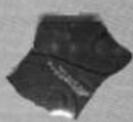
94



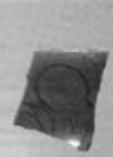
95



96



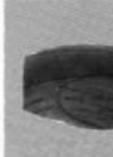
97



98



99



100



101



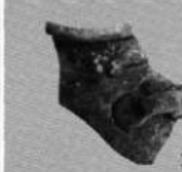
102



103



104



105



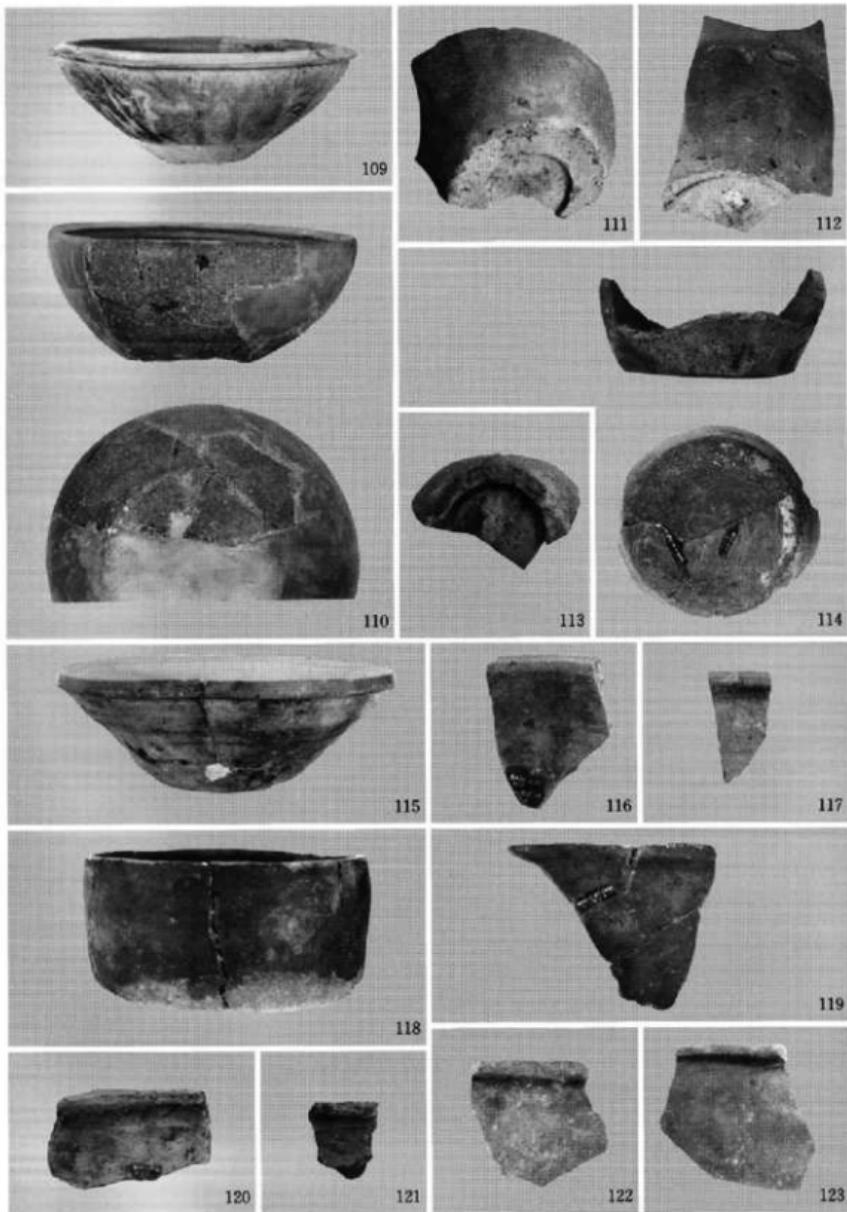
106



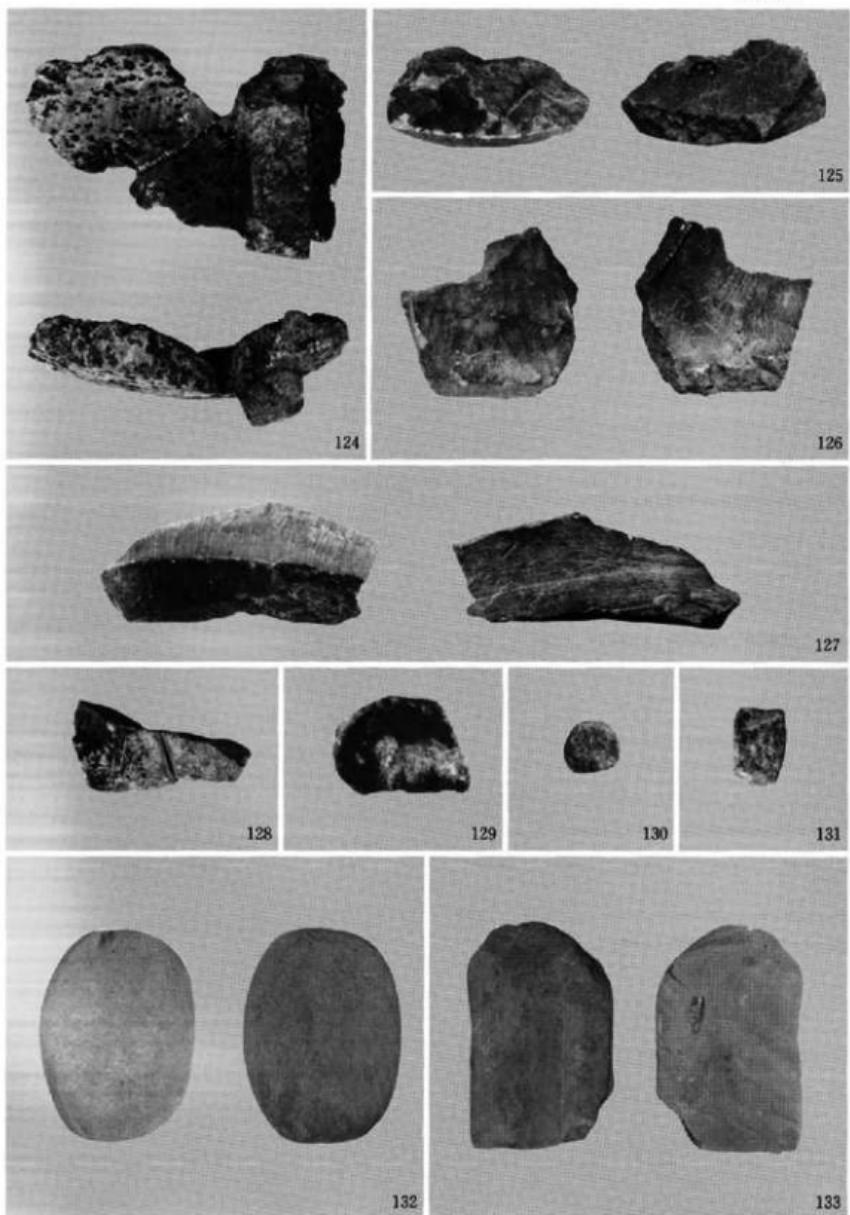
107



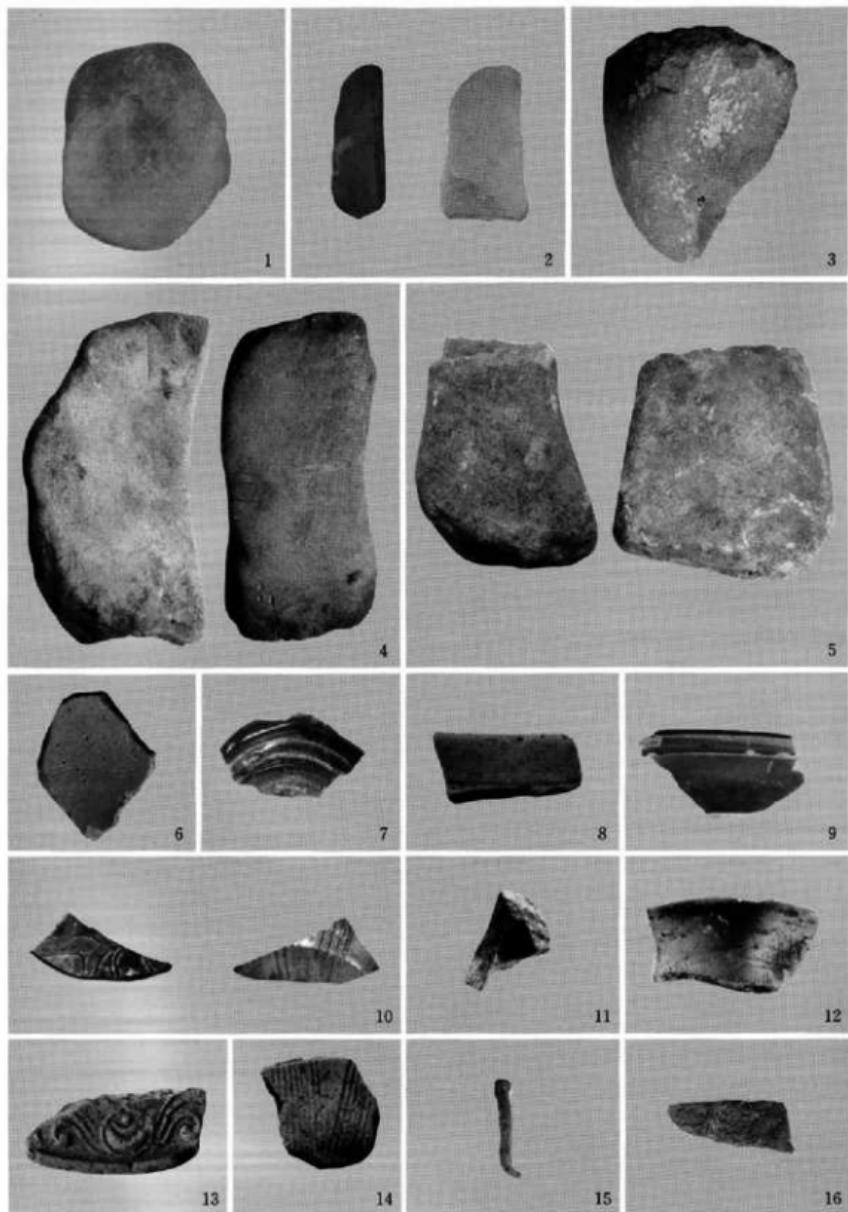
108



井戸出土遺物 (縮尺4分, 109, 110, 110, 115, 118は3分)



井戸出土遺物 (縮尺: 124は1/2、127は1/4、130は1/2)



出土遺物 (1~5は井戸、6~16は1号溝 比尺: 4, 5は $\frac{1}{4}$, 15, 16は $\frac{1}{2}$, 他は $\frac{1}{4}$)



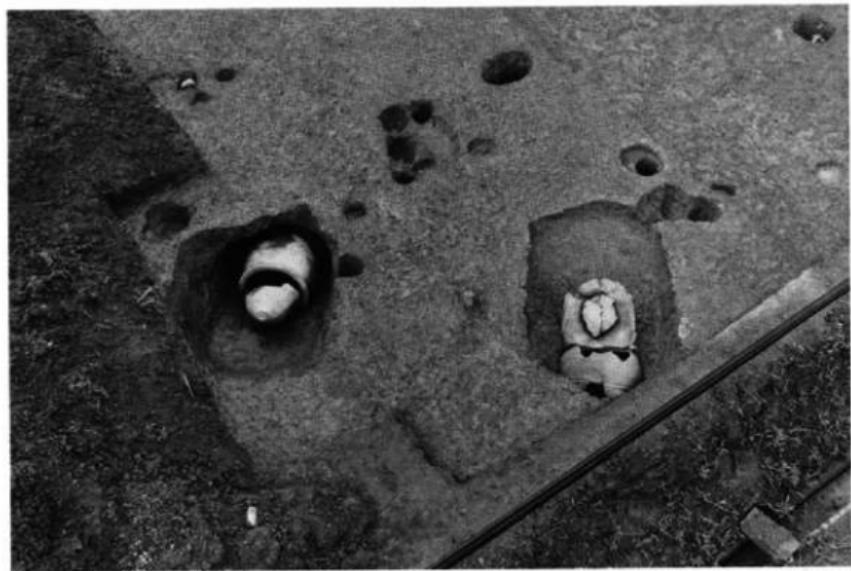
(1) 第36次調査 全景 (南から)



(2) 1, 2号柵列 (南から)



(1) 1号櫛列付属建物（東から）



(2) 1, 2号櫛箱（北から）



(1) 1号甕棺 (北から)



(2) 1号甕棺内板碑出土状態 (南から)



(1) 2号壺棺（北から）



(2) 2号壺棺埋置状態（西から）

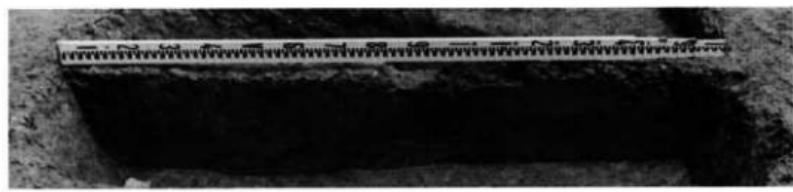
(1)
2号土壤（東から）

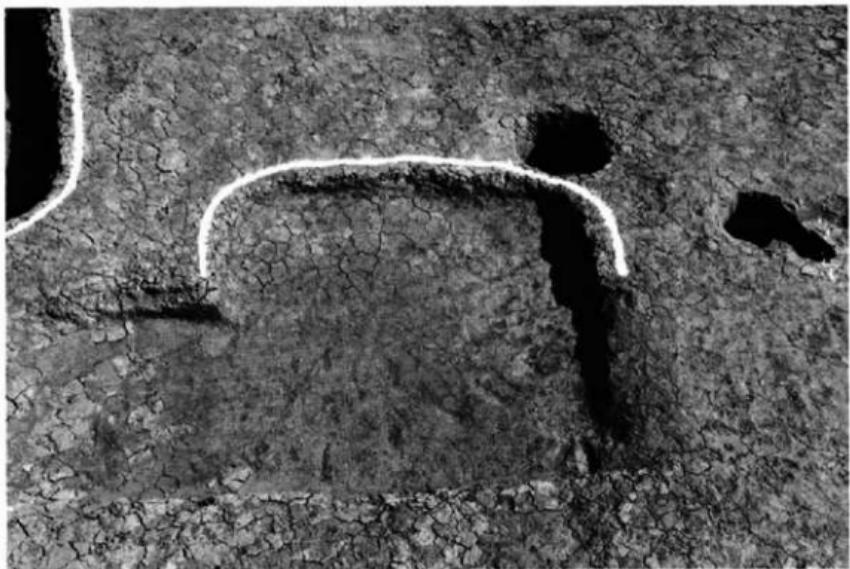


(2)
2号土壤遺物出土状態



(3)
土層状態（南北方向）





(1) 3号土壤（南から）



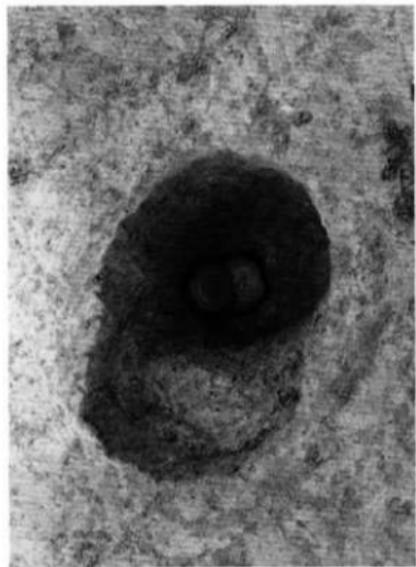
(2) 5号土壤（西から）



(1) P₆ の状態 (南から)



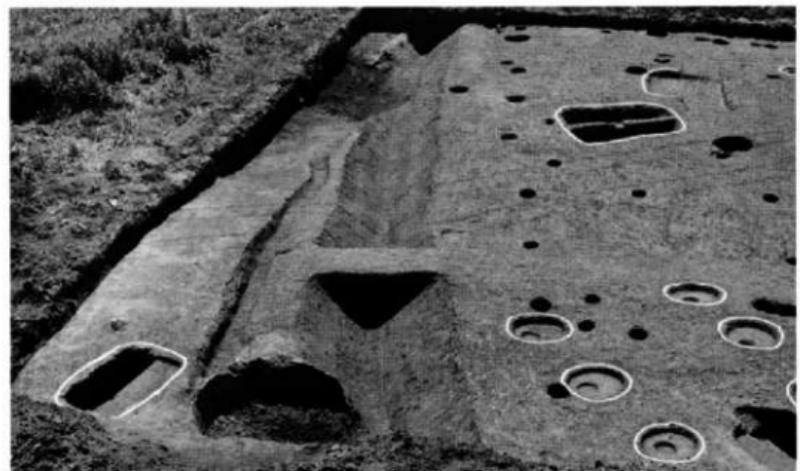
(2) P₃₁ の状態 (北から)



(3) P₁ の状態



(4) P₃₂ の状態 (西から)



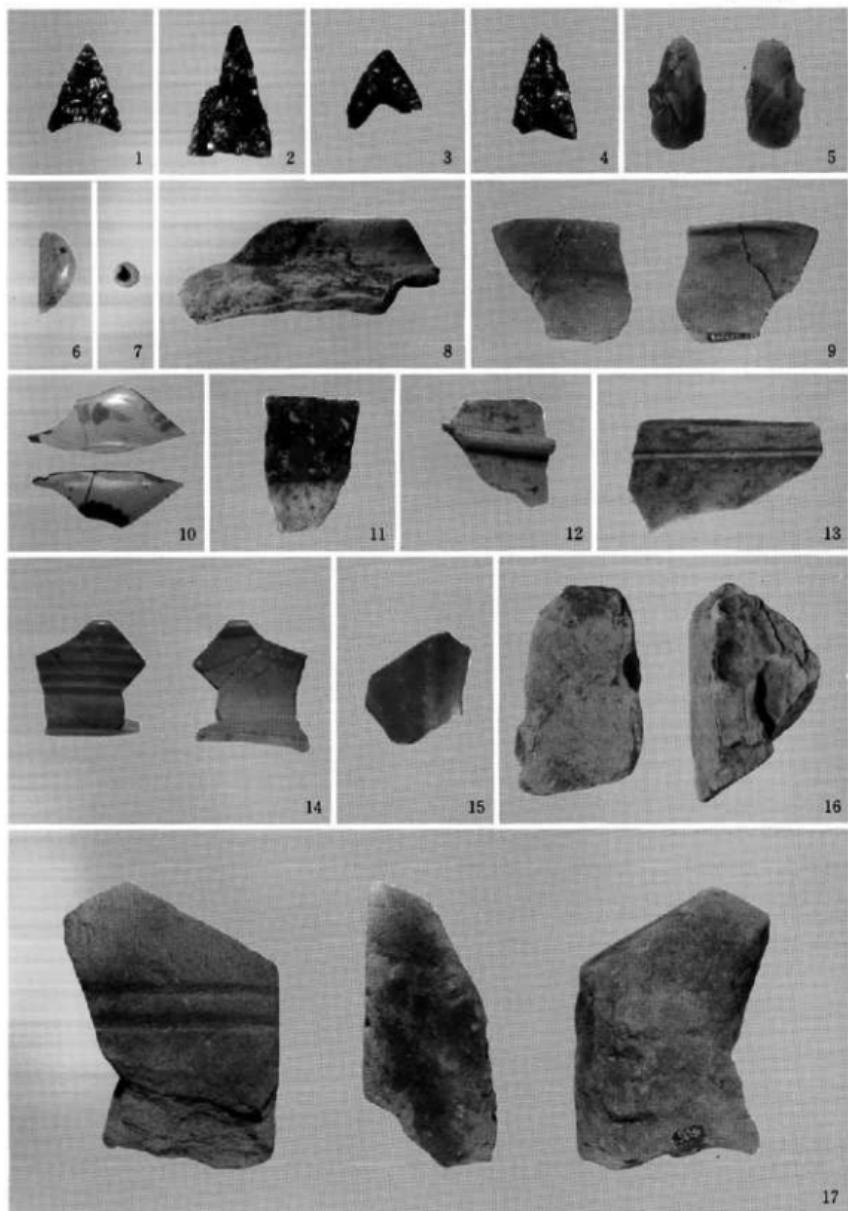
(1)
1・2号溝(東から)



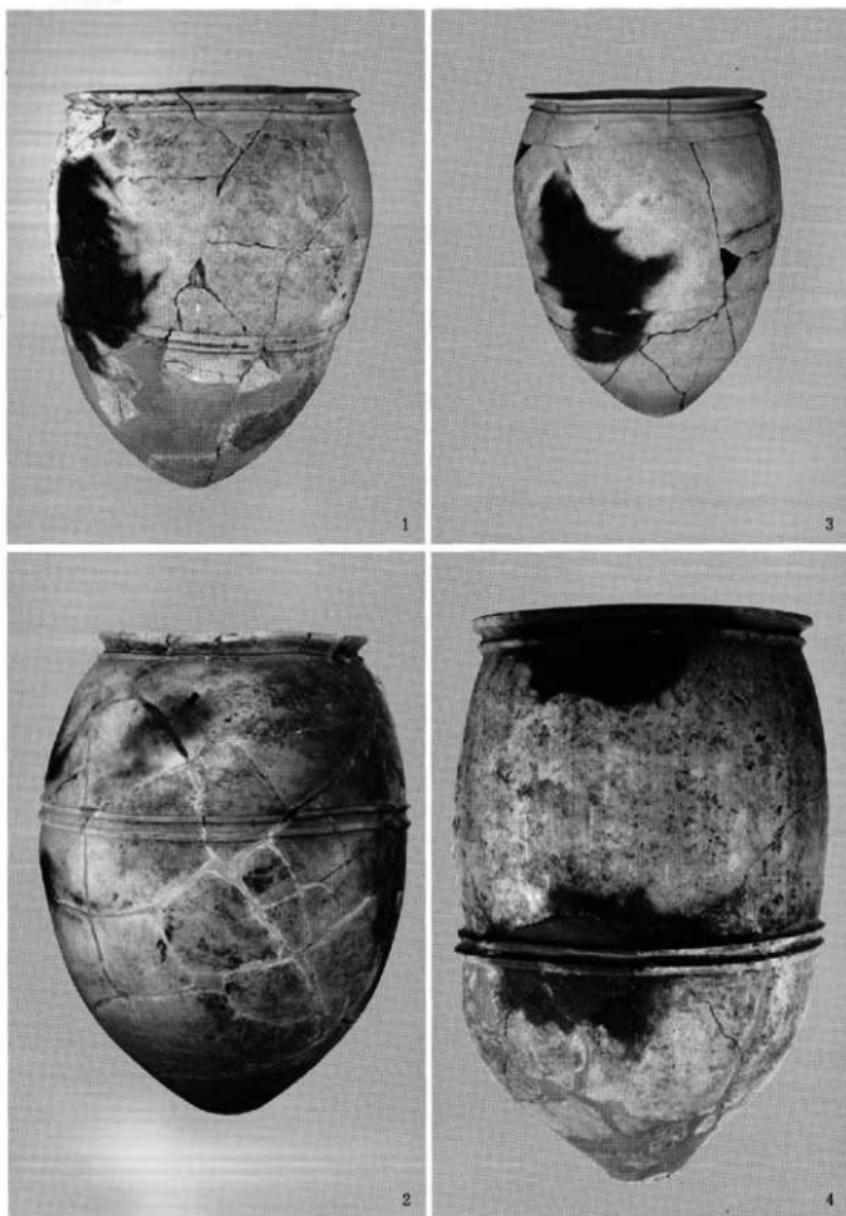
(2)
1号溝西側土層



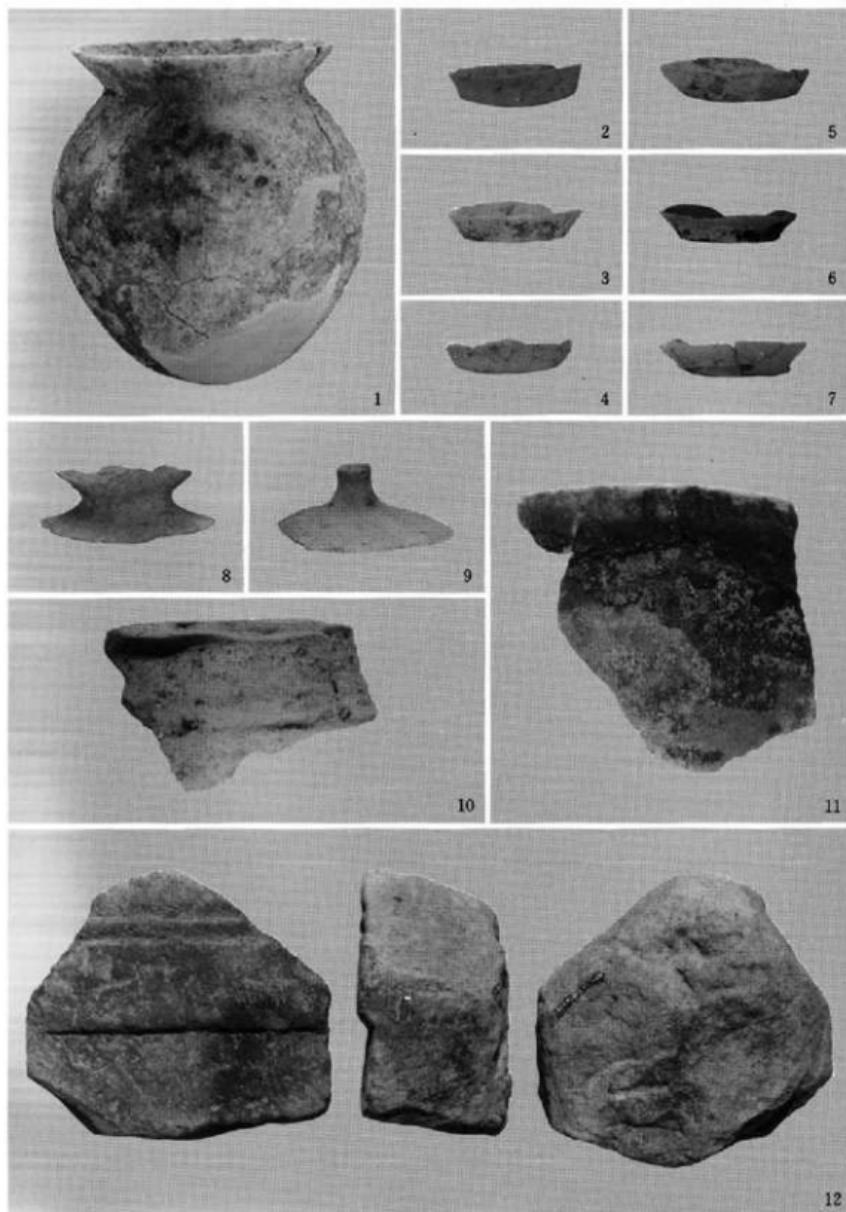
(3)
1号溝中央部土層



出土遺物 (1~5, 8, 9は表土, 7~13, 16は溝, 14, 15は2号土壤, 6, 17は堅棺)
 (縮尺: 1~5は1/4, 6, 7は1/4, 17は1/4. 他は1/2)



1号壺棺(1, 2), 2号壺棺(3, 4) (縮尺: 1/6)



Pit内出土遺物 (縮尺: 1~11は1/2, 12は1/4)



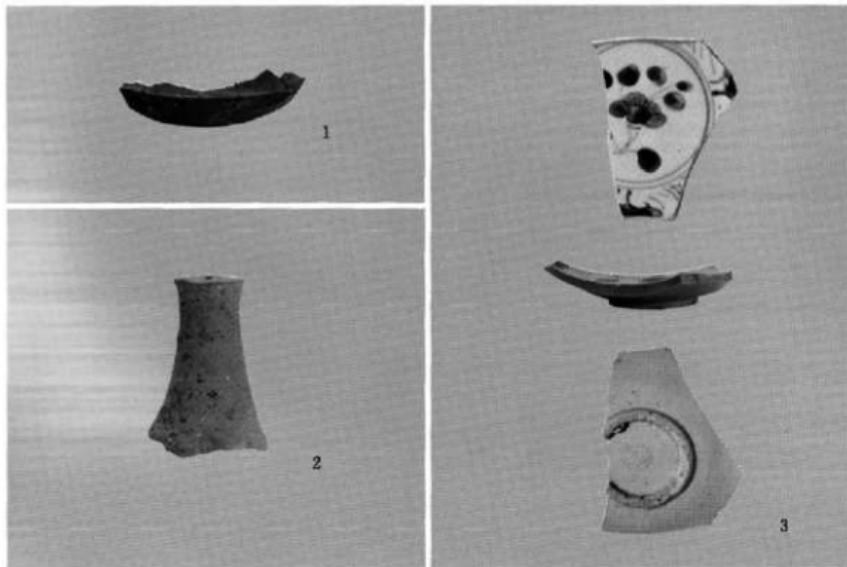
(1) 第37次調査 全景（東から）



(2) 造構面東側（東から）



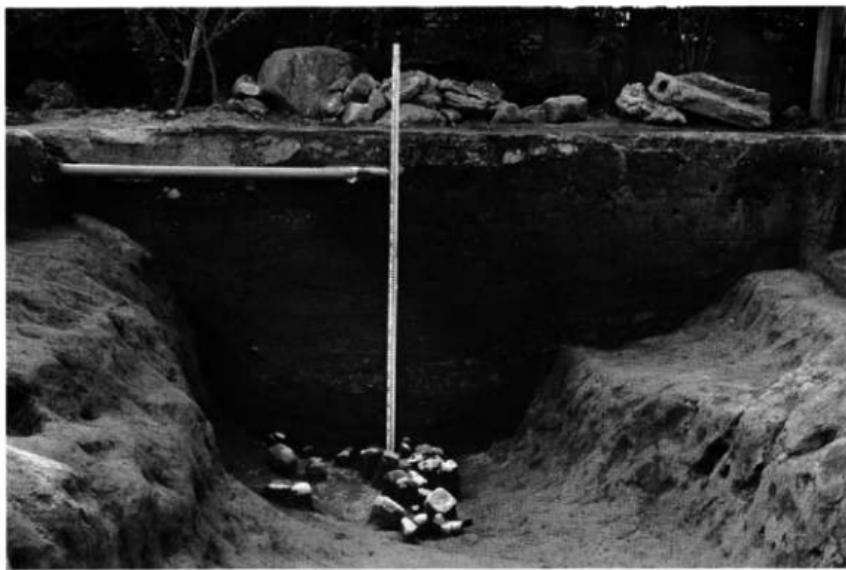
(1) 第38次調査全景（東から）



(2) 出土遺物（縮尺另）



(1) 第40次調査Ⅰ区全景（東から）



(2) 1号濠状遺構土層状態（東から）



(1) 1号溝状遺構（東から）



(2) 1号溝状遺構先端部（西から）



(3) 1号溝状遺構先端部遺物出土状態



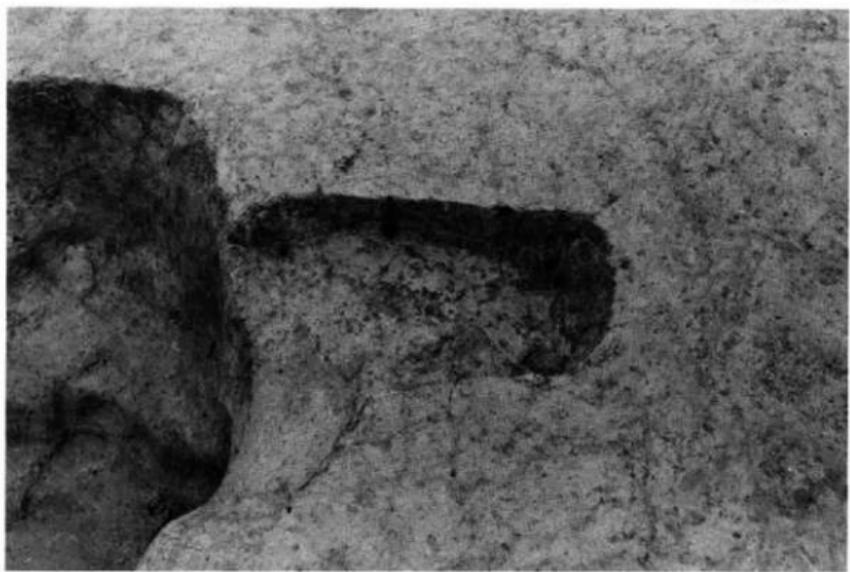
(4) (3)に同じ



(1) 1号土壙墓（東から）



(2) 1号土壙墓内小刀出土状態（東から）



(1) 2, 3号土壤墓（西から）



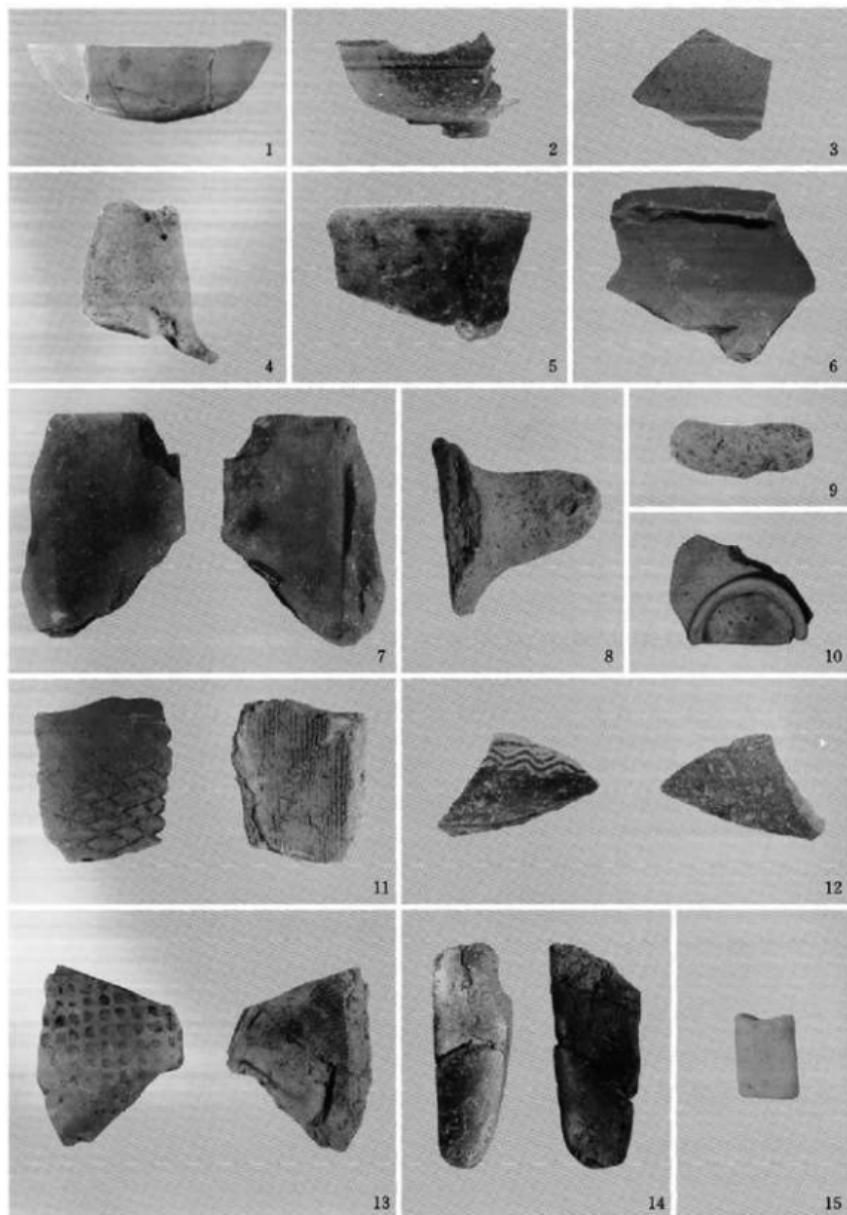
(2) 挖立柱建物（南から）



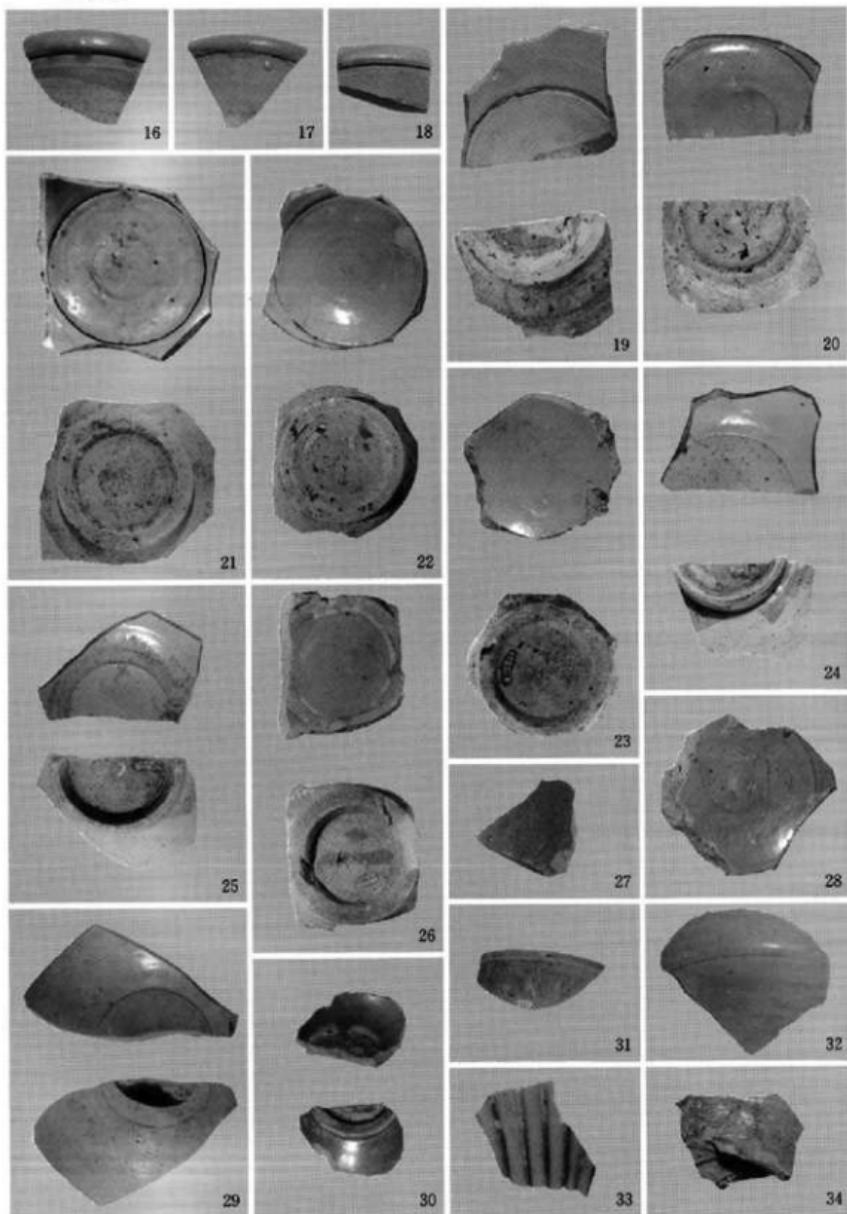
(1) 第40次調査 II区全景（西から）



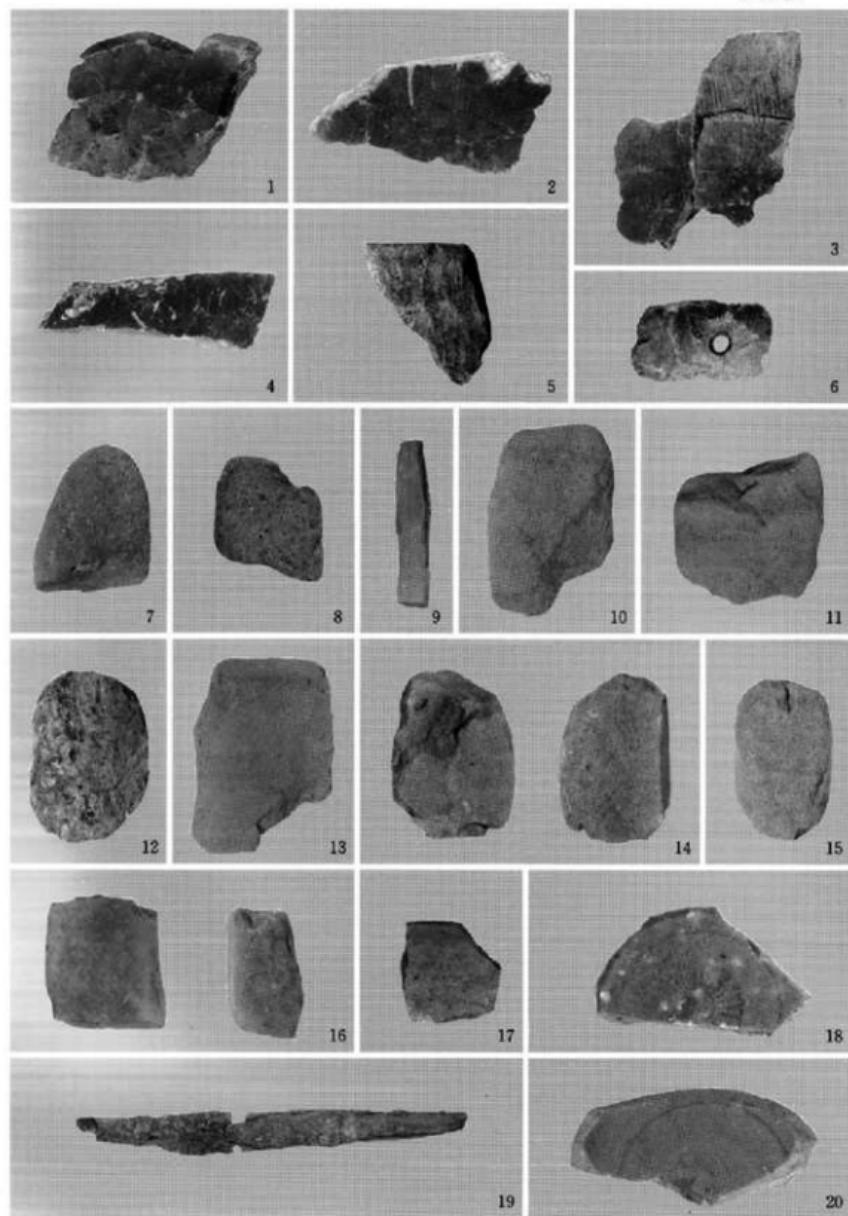
(2) 2号濠状遺構（南から）



1号濠出土遺物 (縮尺3)



1号出土物 (缩尺3)



出土遺物 (1-16は1号縄、17, 18, 20は2号縄、19は1号土梗、縮尺: 1/2, 19(1/3), 18, 20は1/4)



(1) 第41次調査 I区全景（北から）



(2) I区全景（西から）



(2) 1号橋南側隅角（西から）



(1) 1号橋南北方向（西から）



(1) 井戸状造構（西から）



(2) 1号土壤（北から）



(1) 第41次調査 II区全景（東から）



(2) 2号溝（西から）



(1) 1号溝土層 II



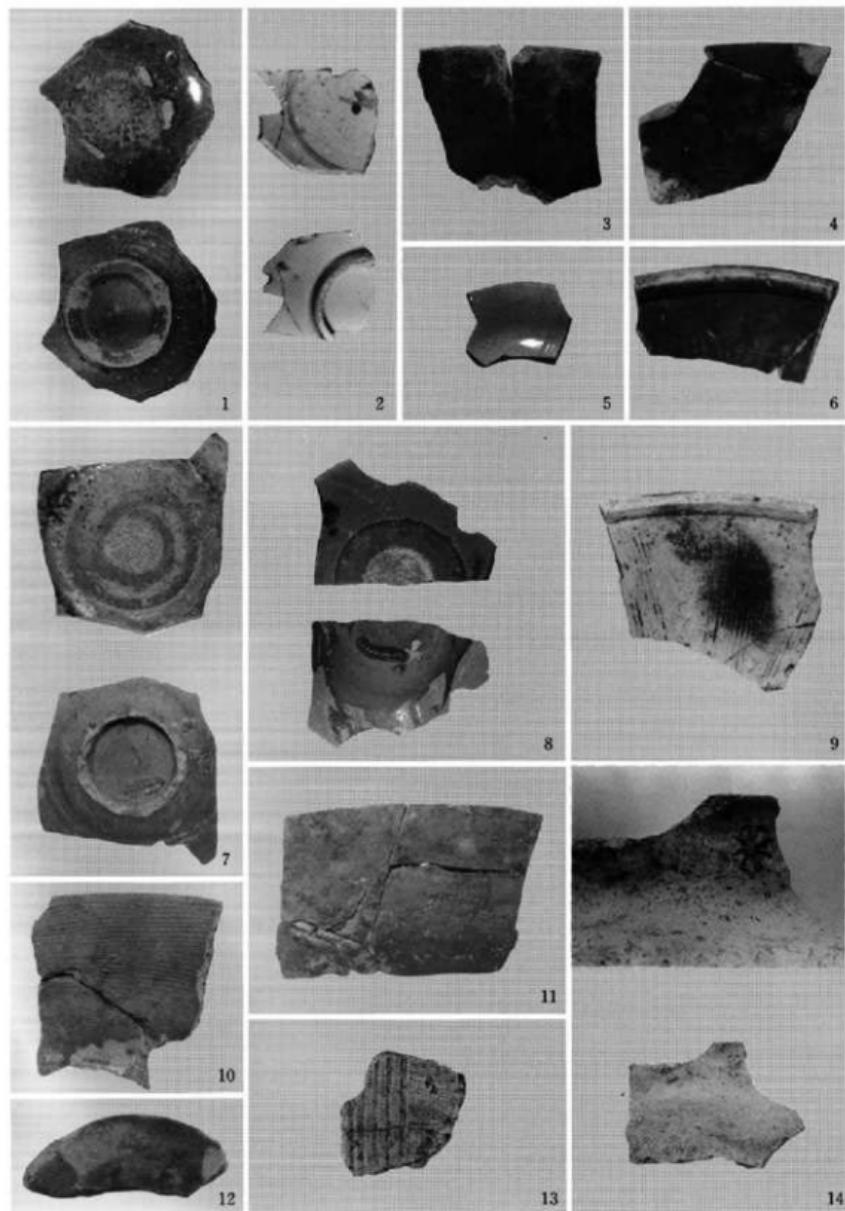
(2) 1号溝土層 III



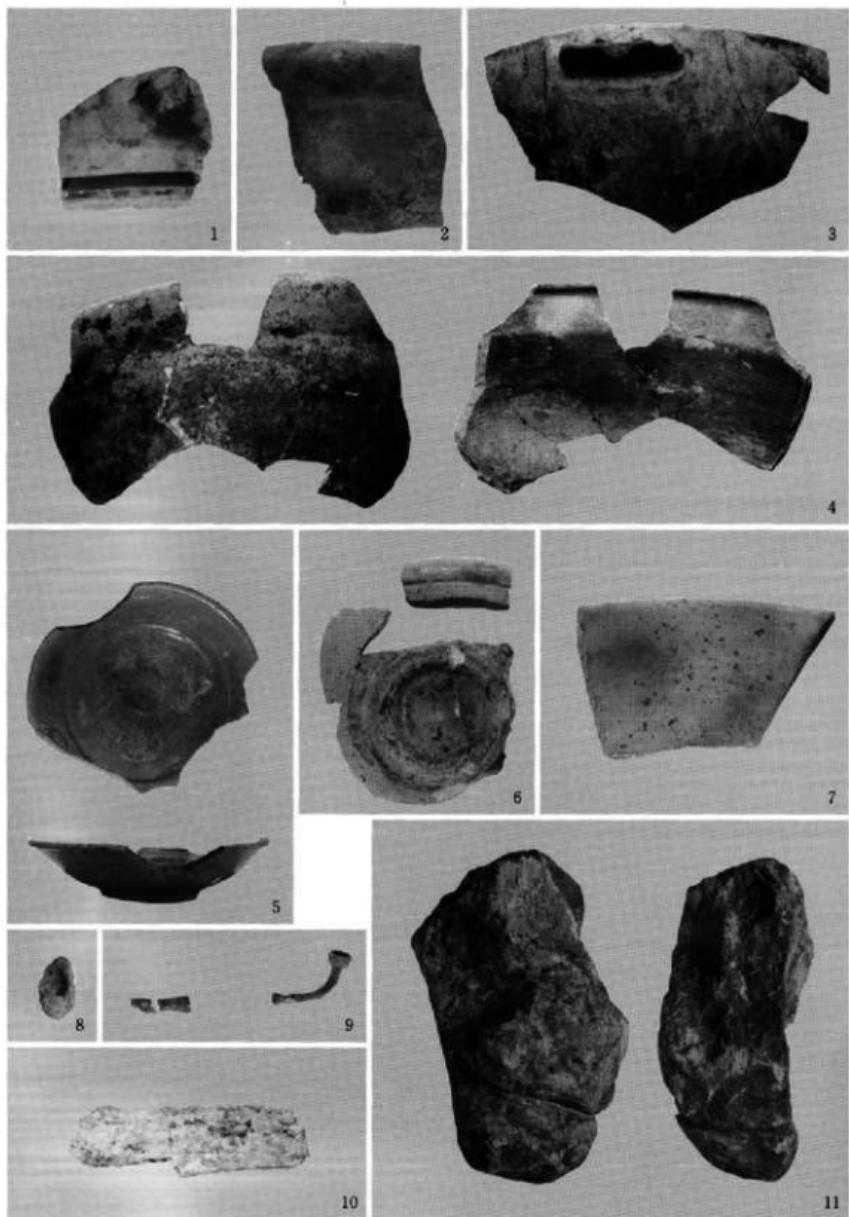
(3) 2号溝土層



(4) 3号溝土層



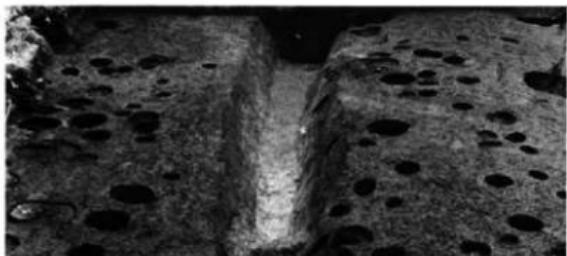
出土遺物（縮尺：1/2, 1～3は1号土壤, 4は2号土壤, 5～14は1号溝）



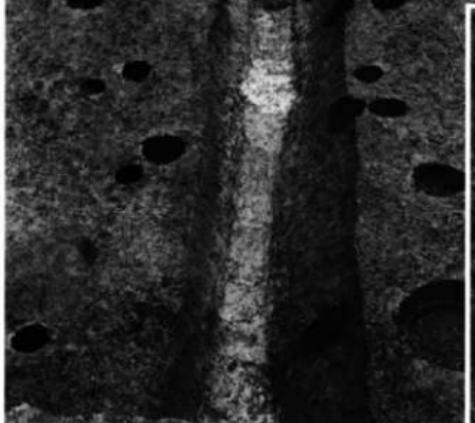
1号、2号溝出土遺物 (1~4は1号溝、5~11は2号溝、縮尺: 1/6)



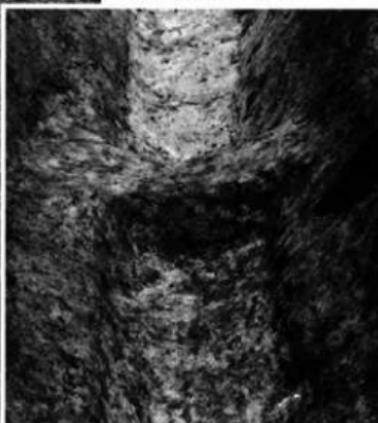
(1) 第42次調査 全景（南から）

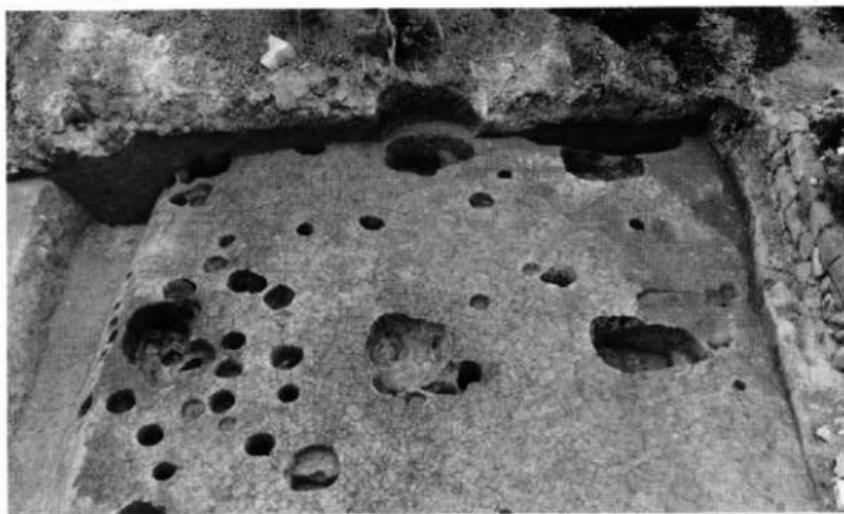


(2) 1号溝（南から）



(3) 1号溝 陸橋部分





(1) 1号掘立柱建物（北から）



(2)

2号溝試掘状態



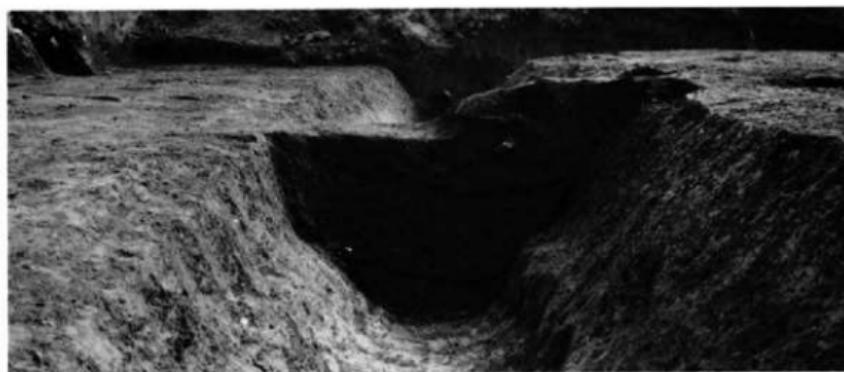
(1) Pit47 (西から)



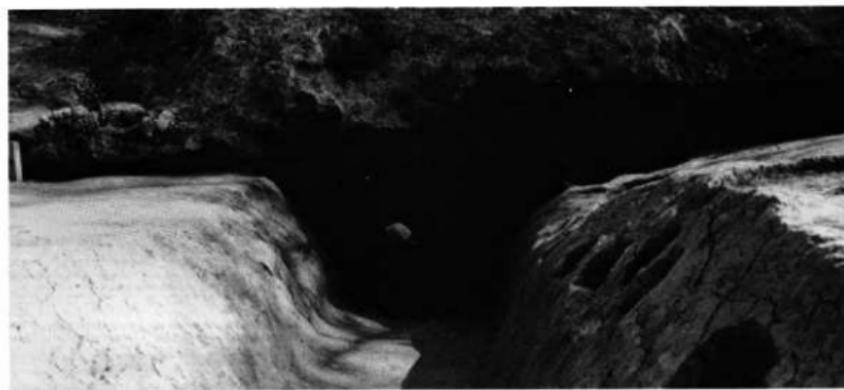
(2) Pit60 (西から)



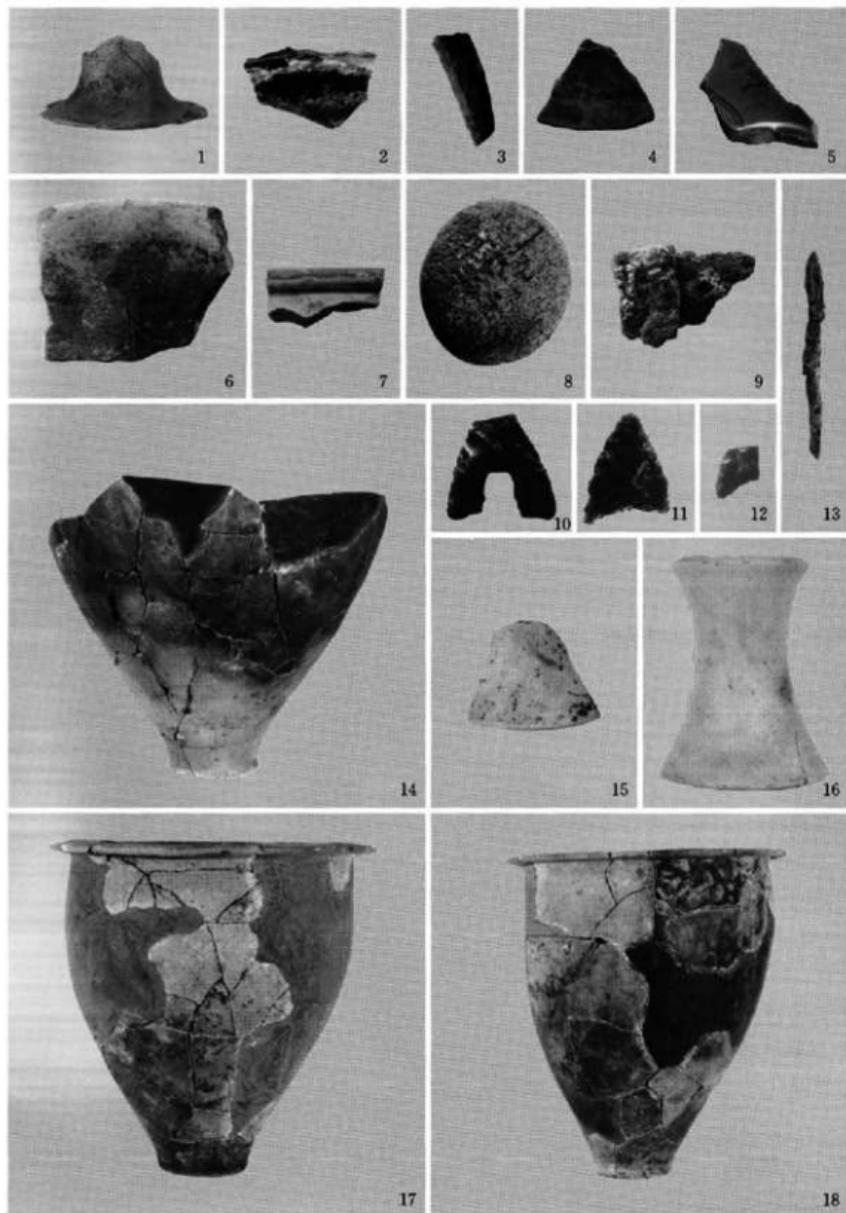
(1) 1号溝土層 I



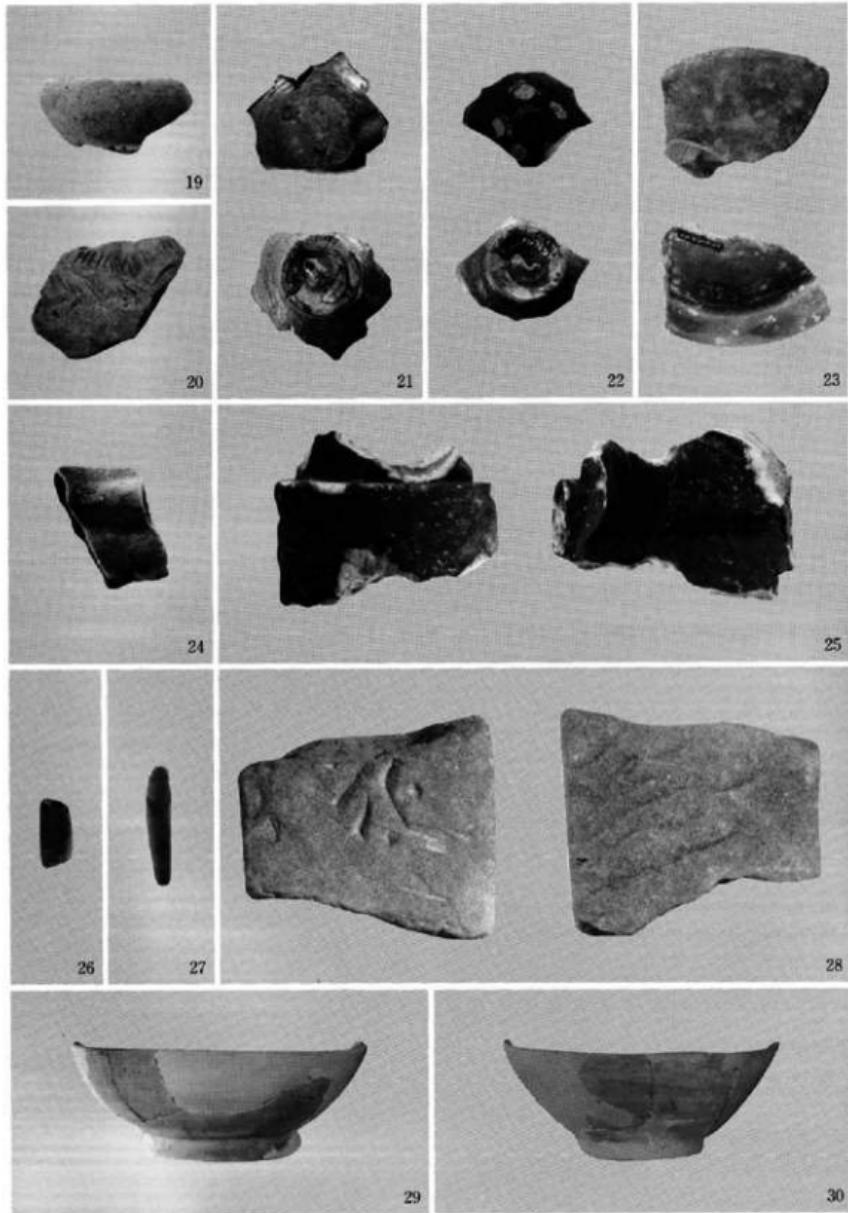
(2) 1号溝土層 II



(3) 1号溝土層 III



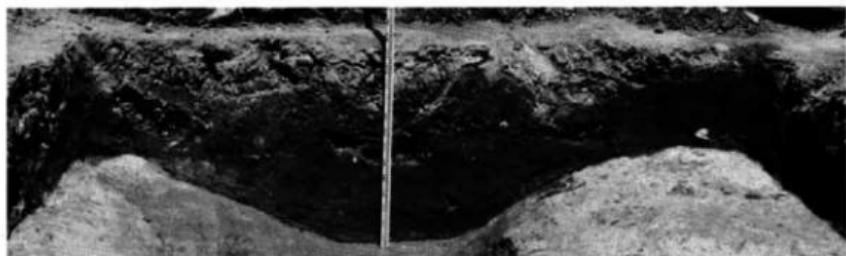
出土遺物 (1~3, 8~10は表土, 4~7, 11~18はPit
縮尺: 1~8は1/4, 9, 13は1/2, 10~12は1/4, 15, 16は1/2, 14, 17, 18は1/4)



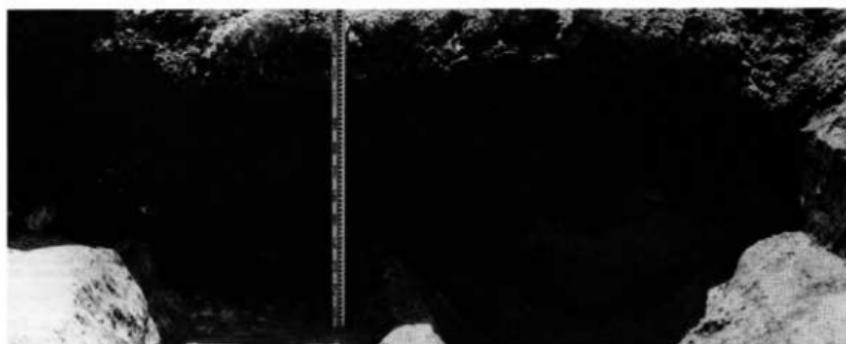
出土遺物 (19~28は1号溝, 29, 30は土壙, 縮尺: 20, 26, 27は1/2, 他は1/4)



(1) 第45次調査 全景（北から）



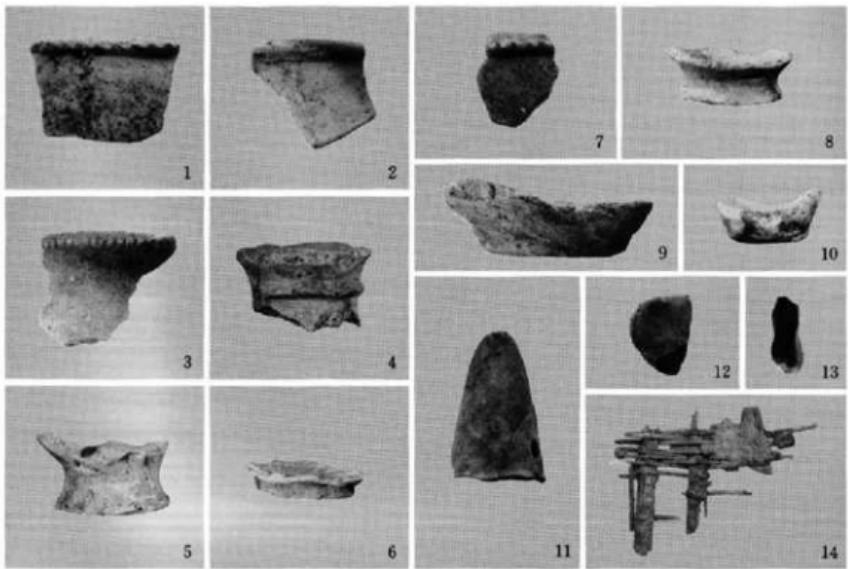
(2) 1号溝北側土層（南から）



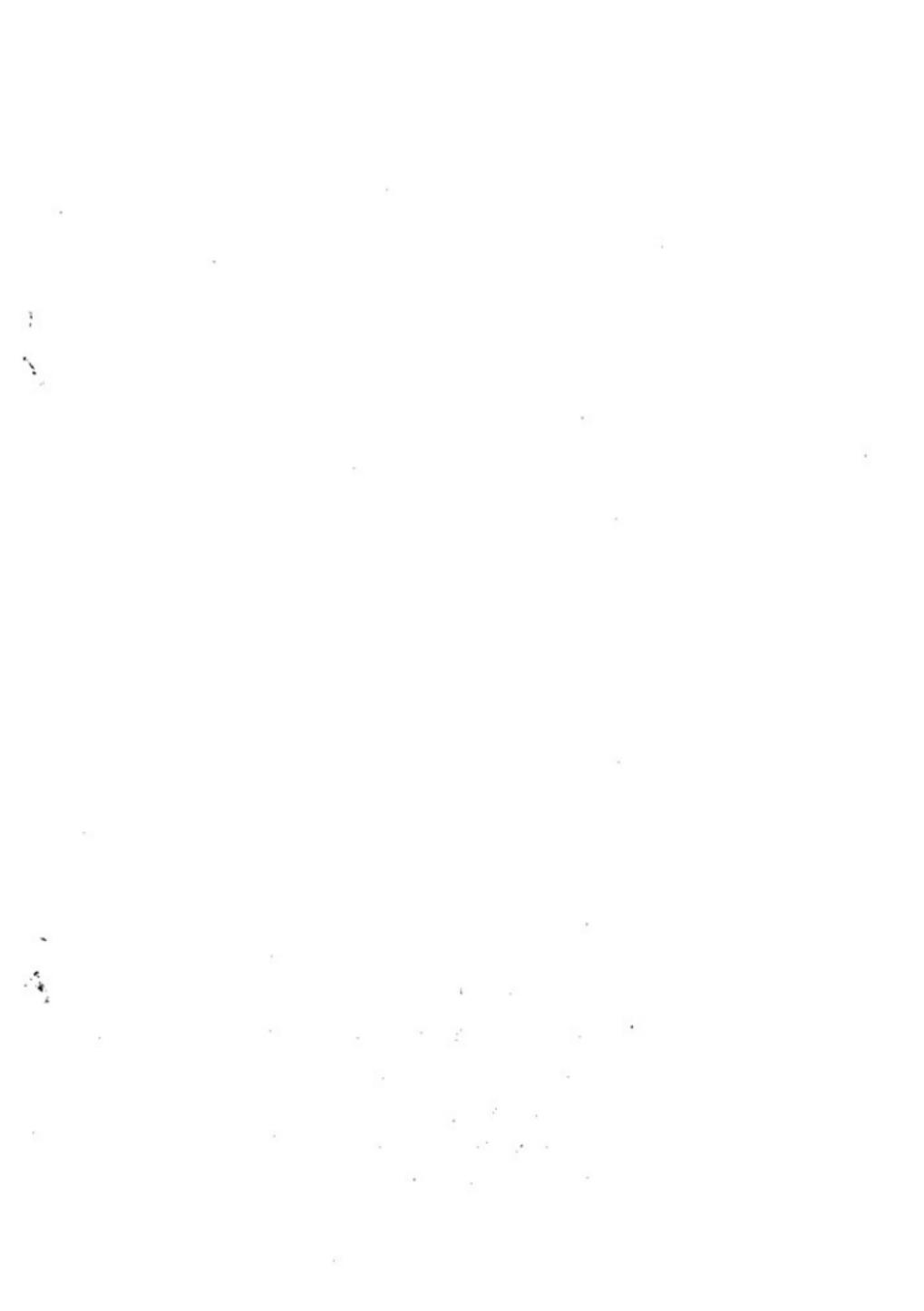
(3) 1, 2号溝南側土層（北から）



(1) 井戸跡（西から）

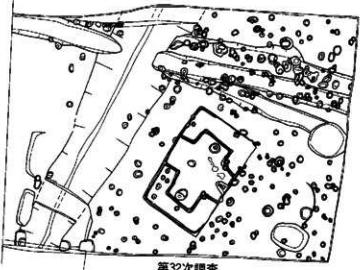
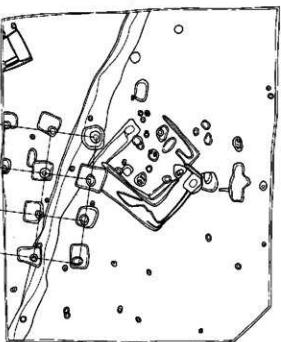
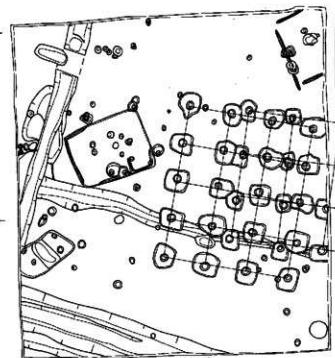


(2) 出土遺物 (縮尺 1/4, 1~6は2号溝, 7~15は井戸)





付図1 有田・小田部地区調査地点配置図 No.IV (1/1000)



0 10m

付図2 第18・29・32・55・56次調査地点遺構配置図(1/200)

有田・小田部 第4集

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第96集

1983年（昭和58年）3月31日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1-7-23

印刷 ダイヤモンド印刷株式会社

